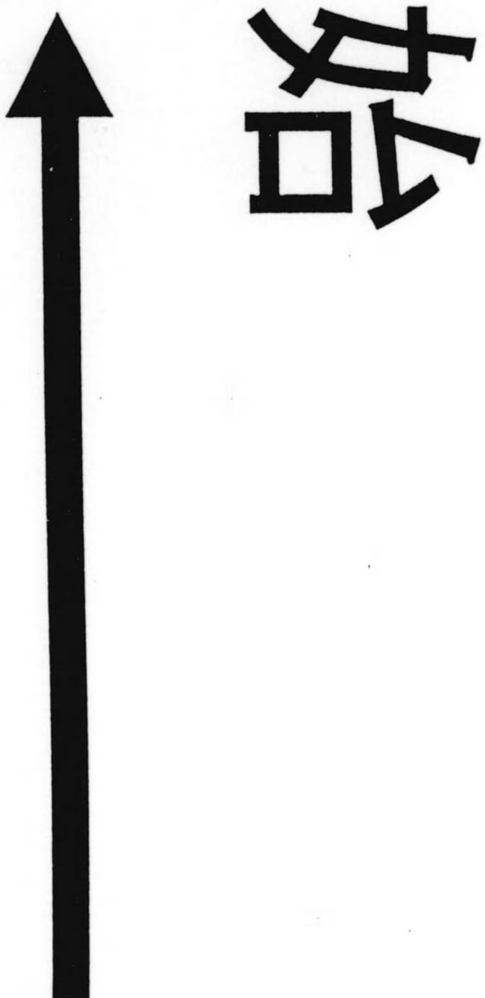

特231
324

帝國圖書館藏

醇正國語

教授參考書

東京高等師範學校教授 能勢朝次編

株式會社 文學社刊行

昭和十四年 帝國圖書館藏

緒　言

一

本書は「醇正國語」教授の參考に供するため、編述したものであります。編者の立場から、教授の進行を想定し、參考となる事柄は廣く網羅するやうに心がけました。併し様々な資料の雜纂になることを避け、組織的に叙述すると共に本質的な部分に特に力を入れました。各教材の研究を、「解題」・「解釋」・「備考」の三部に分ち、「解題」に於ては補足的研究を行ひました。

二

第一部「解題」は次のやうに組織されてゐます。

(1) 作　者

(2) 出　典

(3) 主眼及び採擇の趣旨

(1)に於ては作者に就いてなるべく詳細に記述し、單に履歴を掲げるのみでなく、教材の文學史的取扱の場合を考慮し、その作風にもふれておきました。履歴不明の點につき直接作者の教示を仰いで掲載したのも少くありません。(2)に於ては各教材の出典をなるべく詳細に記し、その典據を明らかにすると共に、原典を髣髴たらしめるやうに致しました。(3)に於ては各教材の主眼を簡單に述べてその陶冶的價値を明らかにすると共に、教材排列の用意に就いて述べました。

三

第二部「解釋」は次のやうに組織されてゐます。

(1) 語釋
(2) 文の構成
(3) 文意
(4) 鑑賞批評

解釋は教材の本質的研究でありまして、編者はこゝに最も力を注ぐやうに致しました。近時我が國に於ても國語教育や國文學の基礎學として解釋學が研究されてゐます。これは主としてドイツ解釋學の流を汲むもののやうに思はれますが、デイルタイ以後俄かに勃興したこの學問は、解釋の普遍妥當性への關心から生まれたもので、元來理論的な特性を有するものであります。從つてその理論的體系をそのまゝ解釋の實踐に適用しようとする場合には、樣々な困難の存在するのを免れません。蠡つて思ふに、幾多の優れた古典を有する東洋には東洋獨自の實踐的な解釋學が成立して居ります。本書の編述に當つては特にこの點に反省を加へました。「韋編三絶」「讀書百遍義自見」などといふ古聖賢の言行は別としましても、東洋の實踐的解釋學の根本的性格は、「解釋」乃至「理會」といふ術語の中に端的に示されてゐます。これは元來、支那古典學の發生と共に古典解釋の事象に反省が加へられた時、類推の結果工藝の術語が援用されたものであります。卽ち「解釋」は牛角を分析して盃(觚・觶・觴・觶等)を作る作用であり、「理會」は璞(あらたま)を分析綜合して種々の飾玉(玦・珌・珥・珩・珮・琚・瑞等)を作る作用であります。その中、「解」は牛角を分析する作用を示し、「釋」は字書に「捨也」とありまして、分析された牛角の中不純不用な部分を捨てること卽ち否定することを意味してゐます。又「理」は璞を分析研磨する作用を示し、會は字書に「合也」とありまして、分析研磨された玉を綜合することを意味してゐます。この分析及び否定(又は綜合)といふ二つの作用を經て解釋が成立し、理會が成立するとなすのが、東洋人の解釋學的思想であります。

これはもと支那に發生し、後日本にも移入せられた解釋學でありますが、日本人は又本來獨自の解釋學的思想をもつて居ります。日本的解釋の第一段の作用は「わけがわかる」といふやうな言ひ方の

中に示されてゐます。即ち「分けられる」と「分け」が「分り」、「分けられぬもの」は「分け」が「分らぬ」とするのであります。初め單純であつた言語は、相互に複合せられることによつて語彙の數を益し、次第に複雑な思想の表現に堪へられるやうになります。從つて複合せられた言語の具體的な意味は、その言語を個々の成分に「分け」、各成分の意味を明らかにすることによつてのみ把捉せられるのであります。日本語の「わけ」といふ言葉はこの間の消息を簡明的確に示して居ります。併し言語の單なる分析は訓詁註釋の域を脱しません。日本人の解釋學はこの「分ける」といふ境地を越えて更に「あきらめる」といふ點に到達してゐます。「あきらめる」といふことは「明瞭にすること」であり、同時に又「斷念し否定すること」であります。明らかにすることは斷念し否定することであり、斷念し否定することによつて始めて事物の眞相が明瞭になるとするのであります。即ちこの「あきらめ」といふ語は、分析された結果について檢討を加へ、不純なものを否定し、純粋にして本質的なものだけを把捉するといふ日本人本來の認識法を示すものでありまして、短歌や俳句といふやうな文藝はかゝる態度の最も典型的な表現であります。

本書に於ては以上のやうな東洋的解釋學に反省を加へつゝ教材の本質的研究を試みました。即ち「語釋」及び「文の構成」は「解」であり、「理」であり「わけ」であります。それに對して「文意」及び「鑑賞批評」は「釋」であり「會」であり、「あきらめ」であります。從來の國語教育はこの「わけ」と「あきらめ」との二つの極端の間に動搖を續け、一方に偏向しては他方を閑却してその弱點を暴露して來ました。當來の國語教育は綿密にして正確な「わけ」の上に、鋭い「あきらめ」を加へるといふ方向に發展せられなければなりません。それは又國語教育によつて陶冶せらるべき日本人の理想的な生活態度でもあらうと思ひます。

四

第三の「備考」は次のやうに組織されてゐます。

(1)　指導研究

(2)　參考

「指導研究」に於ては實際指導の方法に關し編者の立場から一つの試案を提出しました。併し指導そのものは元來指導者獨自の人格的背景をもつて始めてその生命ある機能を發揮するものであります。教材の十分な研究の上に自然にして妥當な指導案を各自に工夫することが絶對に必要であると思はれます。從つて本書に於ても全く一つの試案を描いて見たに過ぎません。(2)「參考」としては教材研究上乃至指導上參考となるべき各種の資料を輯錄いたしました。即ち或は教材と原文との比較をなし、或は補充教材を附錄し或は又挿繪について説明いたしました。

本書は概ね以上の組織と方法とによつて編述いたしましたが、何分短時日の間に完成する必要がありましたので、或は思はぬ所に不備な點がありはせぬかと懸念に堪へません。幸に各位の御叱正を仰ぐと共に益々研鑽をつみ、本書をして完璧たらしめたいと念じてゐる次第であります。

昭和十四年一月

著者識

醇正國語　教授參考書　卷五

目次

一　國語と日本精神……保科孝一……一
二　春の追憶……野口米次郎……三
三　吉野の奥……吉田絃二郎……二
四　村上義光……（太平記）……三六
五　正行の參内……（太平記）……四七
六　須我の荒野……筧田空穂—若山牧水—古泉千樫……五八
七　第三の眼……島崎藤村……七〇
八　長安の空……芳賀矢一……八九
九　非凡なる凡人……國木田獨歩……一二
一〇　子規居士……相馬御風……一二六
一一　松の嵐……香川景樹—大隈言道……一四七

目次

一三 水郷……北原白秋……一六〇
一三 山上の靈氣……松本亦太郎……一八四
一四 瓜盜人……（續狂言記）……二〇一
一五 青鷺……谷口蕪村……二一四
一六 鵜越……（源平盛衰記）……二三四
一七 扇の的……（平家物語）……二四八
一八 仁王……夏目漱石……二六七
一九 塔影……河井酔茗……二八一
二〇 一心……島木赤彦……二九四
二一 今……市島春城……三〇八
二二 昭和日本……鷲富蘇峯……三二七

一　國語と日本精神

保科孝一

一　解　題

1　作者

保科孝一　ホシナカウイチ　國語學者。東京文理科大學教授。明治五年山形縣に生れた。同三十年東京帝國大學文科國文科卒業、同三十五年以來東京高等師範學校教授となり、文部省國語調査會の幹事として國語假名遣及び漢字制限に就いて調査研究を進めてゐる。昭和四年四月東京文理科大學開設と共に同大學教授に任ぜられた。昭和六年六月召されて「國字改良」に就いて御進講申上げた。「國語學精義」「國語學史」等の著がある。

2　出典

「國語と日本精神」は著者が昭和十年に十五回に亙つて試みたラジオ放送の稿をまとめたものであつて、昭和十一年六月に、實業之日本社より發行せられたものである。本課にはその第二「國語に現はれた日本精神」の條の第三項を採用した。

3　主眼及び採擇の趣旨

作者は、この文章に於て日本精神の眞髓は國語の中に融けこんでゐると道破し、之を我が國の古典、古語に求めた結果、「日本精神の眞髓は君臣間のこまやかな情誼に在る。」と斷じてゐる。誠に日本精神の核心を捉へた立言である。本課の主眼はこの確實な根據の上に立つて說明せられた日本精神の眞髓を、最も具體的に實感的に感得せしめるに在る。

新學年の冒頭に當り、國民的自覺を促すと共に國語學習の意義を反省せしめる意味で卷頭に据ゑた。

二　解　釋

1　語　釋

【國語】　コクゴ　(一)廣義では、世界の國々に行はれてゐるそれ〴〵違つた言語。(二)狹義では、我が國固有の言語、卽ち日本語。こゝは(二)。

(二)の中でも、古事記・日本書紀・續日本紀・萬葉集・祝詞・宣命・風土記等の上代文學に現れた所謂大和言葉を指してゐる。

【日本精神】　ニホンセイシン・ニッポンセイシン　日本民族固有の精神、卽ち建國以來皇室と臣民との間に結ばれて來た深い情誼に根ざす忠君愛國の精神がその核心となり、之　我民族の天稟である尙武・平和愛等の精神が加はつて渾然一體の主體性を構成し、以て生々發展を目ざす建國の理想を實現せんとする能動的精神をいふ。大和魂。

【眞髓】　シンズキ　深奧の意義。まことのすがた。

〔髓〕　骨中の脂。轉じて物の中樞となるものをいふ。

【祖先傳來の言語】　祖先から代々傳へられて今日に於ても猶用ひられてゐる言葉。本文中にこの例があげられてゐるのを生徒に指摘せしめたい。

【歷代の文學】　こゝでは歷代の文學作品に表れた思想內容及び用語の兩方面を意味してゐる。

〔文學〕　ブンガク　思想・感情を言語又は文字によつて表現した藝術作品。詩歌・小說・戲曲・隨筆等をいふ。

【民族固有の精神はその固有の言語の中に融け込んでゐる】　元來人間の精神內容は言語として成立してゐるものである。精神內容の分野には言語によつて表し難い幽暗な一面も存在するが、それは言語的精神內容の陰翳乃至背景として之に包攝せられるのである。それ故言語は精神內容の表象に外ならないのである。

〔民族固有の精神〕　或民族に限つて有する精神。この精神はその民族の天稟及自然的環境等によつて形成馴致されたものであつて、互に獨自の樣式を持つものである。

【古代の言葉】　奈良朝以前の大和言葉。記紀・萬葉・祝詞・宣命等に表れてゐる。

【政】　マツリゴト「マツリ」は奉仕の義。政治的には臣民がその職を以て、天皇に仕へ奉る意で政となり、宗敎的には神に對する祭祀となる。太古では、政の大部分は祭であつたのが、漸次に分化して、祭は特に神職の司るところとなり、政は政治の意味となつた。

【祭事】　マツリゴト

〔祭〕　神を祭ること。初めは、各人隨意に隨所に隨時に神を祭つたのであり、神拜の態度としては、神に向つて、木綿を附けた榊の枝を手向け、酒を盛つた齊戶を供へ、竹玉を緒にぬき垂れ、淨服を着て、ぬかづき伏して祈つたのである。なほ、手を拍つこと、祝詞を讀むこともあつた。

公け樣の祭は一層複雜であつて、神を招する所としては、始めは神籬、後には社が造られ、神像を形どつた神體がおかれ、供物としては、榊に幣をつけた玉鏧、杖、弓、劔、鏡、鈴、笠等の器具、衣服の料の種々の布、初穗の稻、酒、野菜、獸魚介等火にあてない食物等で、特に神事を司どるものがあつて、祝詞を奏し、又神前に舞蹈を演じて、神がかりの狀態に入つたりした。而して、祭りに臨んでは祓をして身體を淸めるといふことが爲された。祭が國家的公事として發達した有樣は、大寶令から延喜式の頃までに、制定されたところによつて知られる。

卽ち一切の祭を分つて大祀（齋戒一箇月、大嘗會）、中祀（齋戒三日、祈年、月次、神嘗、新嘗等）、小祀（齋戒一日、大忌、風神、鎭花、相嘗、鎭魂、鎭火、道饗等）となし、以上を恒例祭として、別に臨時祭があつた。更に、之を內容上から分類すると、最も多きを占めたのは五穀豐穰を祈り、或は之を謝すといふ如き農業に關するもので（祈年、大忌、風神、月次、新嘗、神嘗、相嘗）、之につぐのは疫神や離魂や火神を鎭める鎭祭（鎭火、道饗、鎭魂、鎭火）である。新嘗祭や鎭魂祭等は民間にも行はれた。

祭の本旨が神を樂ませ和めて、福を招き禍を避ける現世的幸福にあつたこと、而して朝廷に於ては、特に國利民福を祈願するを目的としたことは明らかである。

【行事】　ギヤウジ　(一)事を取行ふこと。又、その人。(二)昔、朝廷の公事・儀式などに、主としてその事を掌つた職。(三)鎌倉時代に、社內の雜事を掌つた職。(四)山門の雜役。(五)昔、商人又は町內の組合で、輪番に其の組合の代表者となつて、公邊に關係したことなどを掌つた職。(六)執り行ふべき仕事。こゝは(六)。

【政治初】　マツリゴトハジメ　一月四日に行はれる朝廷の公事。主上其年の萬機を聞こしめす初めであつて、先づ伊勢の神宮の事を奏するのを定例とする。

【伊勢の神宮】　イセのジングウ　三重縣宇治山田市に鎭座し給ふ大社。皇大神宮（內宮）と豐受大神宮（外宮）とに分れる。皇大神宮は祭神天照大神、御靈代は八咫鏡。宇治にある。豐受大神宮は、祭神豐受大神で、山田にある。伊勢の大神宮。大神宮。

【渡らせられる】　おすごしになつて居られる。あらせられ

る。「渡る」の未然形に、崇敬の助動詞「す」の連用形がつき、更にその下に崇敬の助動詞「られる」の連體形がついたもの。深い崇敬の意を表す。

〔渡る〕（一）此岸より彼岸へ越え行く。（二）一方より一方へ續き行く。（三）遍く及ぶ。ひろく至る。（四）經過す。すぐ。（五）たまはる。さづかる。こゝは（四）。

【恒例】　コウレイ　つねの儀式。きまりの行事。

【祭政一致】　サイセイイッチ　我が國の上古に於ては祭事と政治とは共に「まつりごと」といつてその間に區別がなく、天皇は皇祖神に仕へ給ふ御態度を以て國家を統治し給うたことをいふ。

神を祭るといふ事は、神の御旨に服從し、神に奉仕することを意味する。その事はやがて神の至公至正な道に一如する所以で、至公至正は政道の根本であらねばならない。さうすると祭事は卽ち政事と一致する。それは二にして一である。祭る精神を神の御前に現すことが祭祀であり、祭る精神を國事の上に現すことが政道であるのである。

【國體】　コクタイ　くにがら。國家をその統治權の存在場所から見た名稱。世界の國家は大體、君主國體と民主國體の二つに分たれる。

【古往今來】　コワウコンライ　古より今まで。

【歐米に於ける政治云々】　西歐に於ける政治は所謂覇道であつて、それは武力を以て支配者の地位を得、又武力によつて國家を統治するものである。支配者自身の休戚が第一に置かれる。我が國の祭政一致の精神と根本的に相違する所以である。

【現御神】　アキツミカミ　天皇を稱へて申し奉る語。「アキツ」は「明之」の義。世に明かに現れます神の意。あきつかみ。あらひとかみ。明神。

【現人神】　アラヒトガミ　天皇を崇めて申し奉る語。神は隱身であるのに、人の體となつて世に現れて居られる神、の義。

【人格】　ジンカク　（一）人がら。（二）倫理學上で、道德行爲の主體。自覺的・統一的・理想的の特性を有する精神的存在。（三）神格に對して、人間たる地位。こゝは（三）。

【神格】　シンカク　神の地位。神の資格。

【詔勅】　セウチョク　天皇の御意志を發表公布したまふ文書。みことのり。詔書は皇室の大事、大權施行に關するものをいひ、勅書は比較的小事の皇室及び國務政務に關するみことのりをいふ。然し、後にはその區別がなくなつた。

【奏上文】　ソウジヤウブン　天子に申し上げる文書。

【君臨】　クンリン　君主として臣民に臨み給ふこと。

【續日本紀】　ショクニホンギ　歷史書。四十卷。六國史の一。光仁・桓武二天皇の勅によつて菅野眞道・秋篠安人・中科巨都雄の撰に成る。その內容は文武天皇の卽位より桓武天皇の延曆十年に至るまでの編年體の歷史である。その事件は天皇の御動靜を初として、恒例臨時の朝儀、中央地方の行政、天地の各祥、世上の異聞等社會萬般の方面に亙つてゐる。六國史の第二として最も信憑すべき正史であり、奈良朝の歷史の研究には如何なる場合にも本書を手放すことは出來ない。又處々に錄せられた多くの詔は、元のまゝの宣命體を保つてゐて、古語研究の貴重な資料である。

【宣命】　センミヤウ　平安朝に於て、漢文で書かれたみことのりを詔書・勅書といふに對して、純粹の國語を以て記されたものを宣命といふ。宣は宣布の義、命は勅命の義。

【第一詔】　ダイイツセウ　續紀に於て一番最初に出てゐる宣命をさす。卽ち續紀一文武天皇元年八月の詔である。

【現御神止大八島國所知天皇大命】（アキツミカミトオホヤシマグニシロシメススメラガオホミコト）　現神として日本國を統治し給ふ天皇の意。文體は所謂宣命書と稱するもので、漢字の正訓によつて國語を寫し、助詞や用言の語尾などは本文と區別して、特に一字一音式の漢字を小書にしてゐる。

〔止〕　指定の助詞「と」の借字である。小書にされてゐる。

〔大八島國〕　日本國の古稱。「大」は美稱の接頭語。古事記上に淡路島、伊豫之二名島、隱岐島、筑紫島、伊伎島、津島、佐渡島、大倭豐秋津島を大八島と云ふとある。一說に「八」は「多數」の義ともいふ。

〔所知〕（シロシメス）　統べ給ふ、の義。

「シロ」は「知ル」の未然形「シラ」の音轉。その下の「シ」は崇敬助動詞「ス」の連用形。「メス」はもと「食ふ」「飲む」「着る」等の敬語であるが、こゝでは崇敬の助動詞として用ひられてゐる。崇敬の助動詞を重ねたのは崇敬の意を重くする爲である。

「所」は漢文に於て、受身を表す言葉であるが、國語の受身助動詞の「ル」「ラル」が、崇敬助動詞の「ル」「ラル」と形が一致するところから、「所」を崇敬助動詞に轉用して「ル」「ラル」以外の崇敬助動詞をも表はすことになつたのである。こゝでは「（知ろ）しめす」といふ二語に當る。

〔天皇大命〕（スメラガオホミコト）　天皇の義。「すめらみこと」に同じ。「スメラ」は天祖、天皇の御上に係る物事に冠らせて、尊稱する語。又、直接、天皇を指す語。こゝは後の意。「ガ」は接續の助詞。

「大命（オホミコト）」「オホ」は美稱の接頭語。「ミコト」は上世、神、貴人、の稱呼に用ひられた尊稱。

【本居宣長】　モトヲリノリナガ　國學者。伊勢松坂の人。享保十五年（一七三〇）に生る。號舜庵。又鈴を愛して鈴の屋と號した。小津定利の第二子。後姓を本居と改めた。幼より才智秀れ、讀書を好み、記憶力が絶倫であつた。家は商家であつたが、宣長は商人には不適當であつた爲、母勝子は宣長を醫者にすべく京都に遊學せしめた。寶曆元年（廿二歲）より寶曆七年（廿八歲）まで六年間京都で醫學修業をしたが、その間に堀景山に就いて漢學を學び、また景山が國學に深かつた爲に國學をも學んだ。廿八歲醫業成り、松坂に歸つて醫者を開業した。在京中契沖の「百人一首改觀抄」「古今餘材抄」「勢語臆斷」等を見て初めて古學に志し、歸鄉の年賀茂眞淵の冠辭考を讀んで益々その志を固めた。三十二歲の時初めて眞淵に會ひ、その門に入つた。爾來頻りに雁書往來して尊ら國典を研め、遂に一家を成し、「萬葉集」「源氏物語」「祝詞」「古今集」「新古今集」等を門人に講じた。

その大著「古事記傳」は寶曆十三年（卅四歲）に稿を起し、寛政十年（六十九歲）に完成した。その間に語學其他各種の研究が成つた。さうして後年になるほど門人も增し、晩年には四百九十三人を敎へたといふ。その間寛政四年（六十三歲）加賀前田侯より招かれたが他國移住を好まず、中止になつた。續いて紀州家から招かれたが、松坂居住を許されたので之を受けた。享和元年九月廿九日歿。年七十二。世に荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の四人を以て國學四大人と稱する。明治十六年正四位を贈られ、三十八年更に從三位を贈られてゐる。著書數十種は「本居宣長全集」十二卷に收められてゐる。

【訓釋】　クンシヤク　語義をときあかすこと。

【人麿】　ヒトマロ　柿本人麿。歌人。持統・文武二天皇に仕へた。生年、歿年共に明かでない。人麿は本邦和歌史上、歌聖として崇拜されてゐる。彼の歌の優れた所は、其調べの大きく高く、悠々且堂々としてゐること、規模雄大、詞態壯麗な點にある。「大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも」等は其例である。人麿は深い敬虔の念を以て皇軍の尊嚴・國家の由來を歌つた。彼は又偉大な自然を歌つた。自然を生きた心のあるものと感じてゐた。そして測り難い心を持つた自然、自己の生命の一部とすべき嚴肅な存在たる自然を認識した。彼は近親の死の爲に幾度か悲嘆の涙にむせんだ。そして、哀韻極りない挽歌を詠じた。天地の悠久と人生の變り易さとが絶えず彼の心の中で對照をなしてゐた。又彼は妻や情人を對象として、豐潤な、流露しやまぬ抒情歌を作した。彼の歌は氣魄に滿ち、堂々たる風格のうちに圓滿具足の想を宿し、その聲調の豐かさは古今獨歩である。更に長歌に至つては、辭句の端正、格調の雄大、萬葉集中群を拔いてゐる。

【大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほりせるかも】　天皇は現人神（あらひとがみ）にましますから、今や天空に轟く雷の名を持つてゐる山のうへに行宮を御作りになつて入り給うた、の意。

〔天雲の〕　アマグモの　雷を導き出す語であつて、やゝ枕詞的傾向を帶びた表現である。

〔いかづち〕　雷岳をいふ。現在奈良縣高市郡飛鳥村大字雷村にある小丘。

〔いほりせるかも〕　行宮（かりみや）を作つて、御入りになつてゐることだの意。

この歌は持統天皇が雷丘に行幸になつた時、供奉した人麿が帝德を讃美して作り奉つた歌で萬葉集卷三に收められてゐるものである。雷岳といふ名より天雲翔る雷に聯想を馳せ、神なればこそと驚嘆したところに一首の重點が置かれてゐる。一首を貫く聲調が雄渾で、人麿の眞率熱烈な態度が躍如としてゐる。

【趣を異にして】　オモムキをコトにして　わけがちがつての意。

〔趣〕　(一)趣旨。ことわけ。(二)やうす。(三)おもむき。あぢはひ。こゝは(一)。

【ヤツコ】　家之子（ヤツコ）の義。(一)。君臣に仕ふる人。又、朝廷に仕へ奉る人。ヤツコラマ。(二)男女の、人に使はるゝ者。奴婢。(三)長上より其下を親しんでいふ語。(四)人を賤み罵りて呼ぶ語。(五)古へ、男女共に謙遜に用ひる自稱の代名詞。こゝでは(一)と(五)とを合せた意味。

【天下公民（あめのしたのおほみたから）】　天下の寶たる人民。

〔天下（あめのした）〕　こゝは國家の義。

〔公民（おほみたから）〕　「おほ」「み」共に美稱の接頭語。「たから」は、寶とすべき人民。

「公民」といふ語は近時盛んに用ひられてゐるがその濫觴は旣に宣命に見出されるのである。今日の語義とほゞ一致するのであらう。

【日本書紀】　ニホンショキ　歷史書。五十卷。元正天皇養老四年、舍人親王・太安萬呂等が勅命によつて撰修したもの。神代の初から持統天皇に至るまでの編年體の歷史書である。天皇の御系統及び其の御動靜を中心とし、それに關聯して外國との關係、臣民の系統、行動等も記されてゐる。

我が建國の歷史、國體の尊嚴は本書に於て最も詳細に物語られてあつて、不朽に生命を有すべき書である。歷史

書としても、我が國に於ける勅撰正史の嚆矢であつて、爾來平安朝の初まで次々に撰せられた所謂六國史の第一に位するものである。又、古事記と共に古代言語の貴重な研究資料であることはいふまでもない。

猶、本書の文章は「古事記」と異なつて、概して純粹な漢文である。

【黎民】　レイミン　書紀にて、之を「オホミタカラ」と訓む。天下の萬民、の意。「黎」は黑、民の頭が皆黑いからいふ。書經堯典の語。

【百姓】　ヒヤクセイ・ヒヤクシヤウ　(一)天が下の民の總稱。靑人草。蒼生。孝經、天子章、正義「百姓、謂ニ天下之民皆有ニ族姓一、言ニ百擧ニ其多一也。」(二)專ら農民の稱。こゝは(一)。

【皇太子殿下】　クワウタイシデンカ　皇位を繼承し給ふ御方と定まつてゐる皇子。ひつぎのみこ。まうけのきみ。こゝは繼宮明仁親王を指し奉る。今上天皇の第一皇子。昭和八年十二月廿三日御誕生。

【御降誕】　ゴコウタン　神佛又は高貴非凡な人の此世に生れ給ふこと。「御」は崇敬の意を表す接頭語。

【津々浦々】　ツツウラウラ　天下到る所の邊土・片田舍。

【慶祝】　ケイシユク　いはひよろこぶこと。

【我が國ならでは】　我が國でなければ。「ならでは」は「ならずては」の約。一種の、條件を表す語法である。

【古事記】　コジキ　神代から推古天皇の御代までの事を記した我が國最古の史書。三卷。太安萬侶が元明天皇の詔を奉じて和銅五年(一三七二)稗田安禮の舊事を誦した事實を基として撰した書。

上卷は天地開闢の時から鵜草葺不合命まで、中卷は神武天皇から應神天皇まで、下卷は仁德天皇から推古天皇までの記事を收め、皇室の御系譜を經とし、神話・傳說・說話を緯として、國土の起源、皇室の由來、諸氏族の出自を語り、全體に一貫した國家的精神を以て統一したものである。

一面、この書は古代國語の寶庫であり、同時に歷史的事實を多分に含有してゐるもので、實に古代に於ける國民生活を活寫したもので、上代の最も貴重な文獻の一つである。

【萬葉集】　マンエフシフ　我が國最古の歌集。二十卷。撰者及び成立年代に就いては明かでないが、恐らく幾人かの手により、數次にわたつて編纂し繼がれて成つたものであらう。時代は十六代仁德天皇の御代から四十七代淳仁天皇の天正寶字三年に至る約四百四、五十年に亙り、收められ作品は、長歌・短歌・施頭歌合せて約四千五百首。これが二十卷の中に、雜歌・相聞・譬喩歌・挽歌・

四季雜歌・四季相聞に分類して排列してある。その表記法は、當時まだ假名が發生してゐなかつた爲に、漢字の音訓を借りる、所謂、萬葉假名を以てしてゐる。作者は、上は天皇、皇族から、下は防人・役民・農民・乞食者に至るまで、あらゆる階級の人々を網羅してゐる。

萬葉集の歌は、感じ方も、言ひ表し方も、人間心理の自然に立脚して居り、眞情流露の趣がある。代表歌人としては、柿本人麿・山部赤人の外に、皇族では、天智・天武・持統・聖武の諸天皇、志貴・大津の二皇子、中皇命・額田王、臣下では、大伴旅人・同家持・山上憶良・高橋蟲麿・高市黑人・笠金村・大伴坂上郎女等がある。

【古典】　コテン　(一)古代の儀式又は法式。(二)古代の記錄又は書籍。こゝは(二)。

【情誼】　ジヤウギ　交遊の情愛。したしみ。よしみ。

2　文の構成

第一節　初―二頁五行　日本精神の眞髓は、祖先傳來の言語や歷代の文學を通して究明することが出來る。「政」といふ語の例。

第二節　二頁六行―五頁一行　それによると日本國民は古來、天皇を「現神」として崇敬し奉つてゐる。天皇も亦、「現神」としての御自覺にお立ちになつてゐる。

第三節　五頁二行―同一一行　天皇は、臣民を「天下公民」と仰せられて、深い御慈愛を垂れさせられてゐる。

第四節　五頁一一頁―終　君臣間に於けるかゝる美しい情誼は、世界にその類を見ざるものであつて、こゝに日本精神の眞髓がうかゞはれる。

3　文意

日本精神の眞髓は上世より變ることのない、君臣間のこまやかな情誼に存する。

4　鑑賞批評

文章が平明懇切でいかにも啓蒙的な筆の進め方である。諄々として人をさとす趣がある。そしてその中に掴むべきもの

が確實な根據の上に立つて的確に把握されてゐる。

日本精神の眞髓は君臣間の情誼に存するとは、正に核心を捉へた言葉であつて、忠君愛國も、犧牲的精神も、平和愛の精神も、生々發展の精神も、この源より發した展開の相に外ならない。

三　備　考

1　指導研究

本課は日本精神を取扱ふに當り、抽象的な立論を排して實際の文獻に立脚してゐる。こゝに把握の具象性があり、眞理性があるのである。故に本課の指導に當つては文中に取上げられた古語を語義の上で精細に解明するのみならずその語の背後にある意識乃至世界觀をも明かにすることが肝要であらう。

又、日本精神に觸れた其他の例を古典中から取出して補足することも有效であらう。

2　參　考

(一)我が國の古典中に「現御神」「明御神」の語の表れたものを左に掲げる。

出雲國造神賀詞「八十日日ハ在レドモ、今日ノ生日ノ足日ニ出雲國ノ國造姓名、恐ミ恐ミモ申シ賜ハク、挂マクモ畏キ明御神ト大八島國知ロシメス天皇命ノ大御世ヲ手長ノ大御世ト齊フトシテ、云々。」(岩波文庫「祝詞・壽詞」ニヨル)

中臣壽詞「現御神ト大八島國知ロシメス、大倭根子天皇ガ御前ニ、天神ノ壽詞ヲ稱辭定メ奉ラクト申ス。」

萬葉集　卷二、(一〇五〇)「明津神。吾皇之。天下。八島之內爾。國者霜。多雖有。云々。」

孝德天皇紀「詔ニ於高麗使一曰、明神御宇日本天皇詔旨云々。」

同「現爲明神御八島國天皇問ニ於臣一曰云々。」

天武天皇紀「詔曰、明神御大八洲日本根子天皇云々。」

八雲御抄、三、下、異名「帝王、あきつ神、君を申す也。」

萬葉集　卷二　(二〇五)　大君は神にしませば天雲の五百重が下にかくりたまひぬ。(新訓萬葉集ニヨル)

同　卷三　(二三五ノ或本)　大君は神にしませば雲がくる雷山に宮敷きいます。(同)

同　卷三　(二四一)　大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも。(同)

同　卷十九　(四二六〇)　大君は神にしませば赤駒のはらばふ田井を京師となしつ。(同)

同　卷十九　(四二六一)　大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を皇都となしつ。(同)

(二)宣命に「天下公民」の語の表れたものを次に掲げる。

續紀、文武天皇卽位宣命「現御神と大八島國知しめす天皇が大命らまと詔りたまふ大命を、集侍はれる皇子等・王たち・臣たち・百官の人等・天下公民、諸聞し食さへと詔る云々。」(岩波文庫本「續日本紀」書下シ文ニヨル)

續紀、元明天皇卽位宣命「現神と八州御宇しめす倭根子天皇が詔旨らまと勅りたまふ命を、親王たち・諸王・諸臣・百官の人等・天下公民、衆聞しめさへと宣る。(中略)是を以て先づ天下公民の上を慈び賜はく、天下に大赦して云々。」(同)

二　春の追憶

野口米次郎

一　解題

1　作者

野口米次郎　ノグチヨネジラウ　詩人。明治八年十二月愛知縣津島町に生まれた。慶應義塾に學び、後、渡米してカリフォルニアに到り、苦學力行、諸地方を流浪し、その間に彼はヨセミテ溪谷に入つた。機を得て詩人オーキン・ミラーに師事し、ボオに傾倒した。かくて英詩を作る技能を得、最初の英詩集'Seen and Unseen'を明治三十年桑港で出し、米詩壇の一隅に在つて注目を受けた。彼は Yone Noguchi の名によつて英米に知られてゐる。彼の詩名を高めたものは、彼が倫敦に渡つて一九〇二年（明治三十五年）「東海より」(From the Eas tern Sea)を出した時に始まる。彼はこの一詩集によつて、驚異すべき詩人の一人として彼地に認められた。明治三十七年歸朝、大正二年再び渡英し、オックスフォード大學で「日本詩歌論」の講演をした。又其他でも、日本の和歌・俳句等について講演し、其後歐大陸を廻つて歸朝した。明治三十八年散文詩集「夏雲」(Summer Clouds) を日本より出し、同三十九年英詩集「巡禮」(Pilgrimage) を倫敦より出し、一層圓熟した彼の詩技を示した。邦詩の最初の集は「二重國籍者の詩」(大正十年) であり、ついで「林檎一つ落つ」「山上に立つ」「沈默の血汐」「この手を見よ」等の邦語詩集が相次いで出版された。

彼は夙に日本文化の紹介者として、海外に日本の事物、日本の美術・文學等を知らしめた第一人者で、歐米に於てヨネ・ノグチの名は詩人として著名であると同時に、日本美術の紹介者として著名である。

目下謠曲、日本畫家傳等の研究に沒頭しつゝ、傍ら慶應義塾大學に英文學を講じてゐる。

2　出典

金星堂發行の現代隨筆全集（十二卷）の中、第五卷の野口米次郎氏の隨筆中から採つた。本課に收めた「春の追憶」は、同書第廿四頁以下にある。採擇に當つて、氏の文章の獨得の風韻をそこなはない程度に於て、生徒には難解と思はれるやうな象徵詩的表現を少々ばかり改めた部分がある。これは教科用としての顧慮によるものである。

3　主眼及び採擇の趣旨

新學期早々恰も爛漫たる櫻花の季節に、この野口氏の文に溢るゝ、春復る歡喜の情を傳へたい。野口氏は世界人であるから、この文章には、或は米國加州に於ける、或は倫敦に於ける、夫々異色ある春の眺めが描き出されてゐるが、就中氏の眼に祖國日本の春が最も素晴らしく映つてゐるのは、吾々日本人にとつて大いに嬉しいことであつて、祖國の自然美を改めて敎へられる氣持がする。この點も主眼の一部に加へたい。

本課は自然への鑑賞眼を養ふべき文藝的敎材である。又本課は、前課の內省的な緊張から一轉して、季節感の高揚を味はふやうにしたのである。

二　解釋

1　語釋

【冬が終つて春になると宇宙の現象が相互に交驩を始める】「宇宙の現象が相互に交驩を始める」とは、宇宙間のさま〴〵なものが春日の下に嬉々として、互に樂しい生活を開始するの意。

これは自然現象に人間感情を投入した言ひ方で、歐文の流れを引いた表現である。飛躍的な擬人法といへよう。

〔宇宙の現象〕　ウチユウのゲンシヤウ　こゝでは、右に述べた樣に、宇宙間のさま〴〵なもの、といふ位に解釋

してよいであらう。こゝでこの言葉が具體的には何々を指してゐるかは生徒に本文中から發見させたい。

〔現象〕　あらはれた姿。見ゆるかたち。ものゝ吾々の感覺に映するすがた。

〔交驩〕　カウクワン　ともゝ〳〵に樂しむこと。互に樂しむこと。「驩」は、よろこぶこと、たのしむこと、喜び、樂しみ。

【冬中、孤獨に閉ぢ籠つて無爲を自衛の方法としてゐた萬物】

冬の寒い間中、外界と交渉を絶つて獨りの生活の中にとぢこもつて、じつと何もしないで寒氣から自分を守つてゐたいろ〳〵な生物。

擬人法が適切に用ひられてゐて冬期に於ける生物逼塞のすがたをよく表してゐる。

特に草木凋落の姿に對してこの感が深い。

【空中の生産力に富んだ生命】

空中に充滿する、物を産み出す力を豐かに持つた作用、の意。

春の空に樹々の若葉の伸長するさまを見て、空中に物を産み出すはたらきがあるやうに感じ、このはたらきに向つて「生命」といふ言葉を適用したのである。主として指すものは太陽であらうが、それをかやうに表

現する所に面白味が出る。

【霧圍氣】　フンキキ　(一)地球を圍繞する空氣。大氣。(二)その場面の一般的な氣分。(三)個人のまはりの狀況。環境。こゝは(二)。

〔さうして宇宙の大合奏が始まる〕

世界中の生物が互に一陽來復の喜びを表現し合ふ意。前出の「宇宙の現象が相互に交驩を始める」と同じ意味のことを、言葉を替へて繰返したのである。

〔合奏〕　ガツソウ　音樂上の言葉で、二個以上の樂器で、互に調和させつゝ音樂を奏すること。

【如何に樹木の汁液が漲り始めるであらう。】

以下四つのセンテンスは、宇宙現象の交驩の實例であり、宇宙の大合奏を演ずる音樂の數種である。

如何にも英文脈さながらの文章である。これは作者が長く歐米に住み、英詩英文を巧みに操る人であることを思へば成程と合點が行くであらう。

【私達人間も、自分等の魂に生えてゐる細い根で地中の祕密に觸れるやうに感じ】

人間も春になると、その暗示の多い霧圍氣に誘はれて、感受性が鋭敏になり、纖細になつて、言葉に捉へ難い春の祕密を感得し得たやうに感じ、の意。

國語としては可なり奇警な譬喩が用ひられてゐる。この譬喩は何れかといへば理知的な工夫に成つたもので、「自分等の魂に生えてゐる細かい根で云々」といふ表現は、感じに乘るまでにかなりの距離があつてやゝ煩はしいやうに思はれる。

【一陽來復】　イチヨウライフク　易經復卦に關する語。(一)陰極まつて陽來り復する義。(二)陰曆十一月又は冬至の稱。(三)冬の寒さが極まつて次第に春暖に向ふこと。(四)悪いことばかりあつたのが漸く善い方に向いて來ること。こゝは(三)。

【ミラー】　オーキン・ミラー　Joaquin Miller (1841—1913) アメリカの詩人。太平洋岸オレゴン州で育つた。數奇の生活を經た後、ロンドンで出版した「太平洋詩集」(Pacific Poemes) により一躍名聲を得た。一八八三年歸米して桑港の對岸バークリーに住んだ。野口米次郎氏は彼に師事した。我が國に於ては既にその名は二十年前紹介されたが一般的には知られてゐない。

【山莊】　サンサウ　山の中にある別莊。

【體驗】　タイケン　自分が實際に經驗すること。

【生活難】　解題 1 作者の項參照。

【金門灣】　キンモンワン　(Golden Gate) 北米合衆國カリフォルニア州サンフランシスコ灣の入口。

【桑港】　サンフランシスコ　San Franicsco.

アメリカ合衆國西部の大都會で、サンフランシスコ灣の入口に位し、無雙の良港をなしてゐる。ロッキー山脈を横斷する數多の鐵道は皆この港に集中し來り、アジア大陸並びに濠洲への太平洋航路と連絡を取る。市は商業取引地としての堂々たる建築物が街路を壓するばかりに立並び、我が總領事館もこの中にある。市の附近には那人の居住する者が甚だ多い。人口七十五萬。

【ヨークランド】　Oakland 米國カリフォルニア州の一都市で、桑港灣を距て、桑港に對してゐる。人口三十二萬。

【居候】　キサフラフ　他人の家にゐて養はれる人。食客。

【加州罌粟】　カシウゲシ　Californian Poppy (カリフォルニアン・ポッピー) の譯語。

【金鳳花】　キンポウゲ　毛茛科の多年生草本。高さ六十糎位。莖葉共に毛茸が多く、葉は單葉で、掌狀に分裂し、夏日花莖を出し、枝を分ち黃色の光澤ある五瓣花を開く。果實は小球をなす。有毒植物。但し本文によると、この花はアメリカに於ては春咲くのである。

【花の盃】　ハナのサカヅキ　金鳳花の花の形が盃狀をなしてゐるからいふ。
これは言はうとする所を喩の中に籠めて言ふ方法であつて、修辭上、隱喩法と呼ばれる。

【花の褥】　ハナのシトネ　花に蔽はれた草原。之を草雲雀の寢床と見立て、花の褥といつたものである。

【草雲雀】　クサヒバリ　直翅類の昆蟲、體長一糎位、淡黃灰色で、頭上に體長の四倍程の觸角がある。八九月頃、黃昏に美聲を出して鳴く。蟋蟀の類。

【囀る】　サヘヅる　(一)鳥が聲をつゞけて鳴く。(二)節をつけて謠ふ。(三)よくしやべる。(四)さへぐ。こゝは(二)。
「さへづる」は元來鳥の聲をいふ語であるが、こゝでは實體は昆蟲ながら、草雲雀といふ名にふさはしいやうに「さへづる」を用ひたのであらう。

【馥郁】　フクイク　芳しい香の發するさま。

【暗香浮動月黃昏】　アンカウフドウシツキクヮウコン
どこともない香りがあたりに漂ひ、たそがれの空に月が懸つてゐる、の意。
これは宋の林逋の作「山園小梅」中の句である。次に擧げる。

衆芳搖落獨喧妍。　占盡風情向小園。
疎影橫斜水淸淺。　暗香浮動月黃昏。
霜禽欲下先偷眄。　粉蝶如知合斷魂。
幸有微吟可相狎。　不須檀板共金尊。

【東洋的情趣】　トウヤウテキジヤウシュ　東洋流の、淸楚淡泊な中に風韻を宿したおもむき。
生徒にはやゝ理解困難な言葉であらうが、本文に引かれた林逋の詩をよく讀み味ひ、その實景を想像させたならば相當の程度まで理解させ得るであらう。これは美的情趣の上で、西洋人の好む鮮明濃艶な趣と著しい對照をなすのであつて、本文中に擧げられた罌粟やチューリップは後者の代表的なものである。

〔情趣〕　おもむき。あぢはひ。

【エンゼル島】　桑港の北方約四粁にある小島。

【海軍軍樂隊】　カイグングンガクタイ
エンゼル島は米艦隊の一根據地である。從つて、其處より米國の海軍々樂隊の奏する音樂が聞えて來るのである。

【一種の情調を唆つたものだ】
しきりに一種の樂しい氣分をさそひ出されたものだ。

〔情調〕　ジヤウテウ　單純な感覺を伴ふ感じ。美しい色に伴ふ適意や、惡臭に伴ふ不快の類。きもち。氣分。

〔唆る〕　ソソる　ゆりうごかす。さそひ出す。

【詩の世界】　シノセカイ　簡明に言へば「詩人の住む美の世界」で斯の世界に於ては、自然界や人間界の現象が神祕、驚異、感激の念を以て見られるのである。換言すれば、詩人の主觀に染められた世界であり、美的角度から眺められた世界である。更に知情意の三方面からすると、詩の世界は情の展開であつて、知より發した學問の世界及び意より發した道德の世界と對立する。

【倫敦】　ロンドン　London 英國の首都。テームス河畔に位し、人口四百五十餘萬の大都會。此國の政治・交通・商業・金融・教育等各方面の大中心をなすと共に、交通・商業・金融に於ては世界の中心といふも過言でない。尙濃霧はロンドン名物の一である。

【黃金の太陽の光線がくすんだ倫敦の町へ復活の呼氣をかけ始めて】
「復活の呼氣をかけ始める」とは、春になり濃霧が霽れて、淸爽な光に復した太陽の光線がさわやかに射し始めることを擬人的にいつたのである。この場合、擬人法がよく利いてゐて、ロンドンの冬眠をよびさましてゐるかの感じがする。

【レゼント街】　ロンドン市の中心たるシチー　(City of London) に近く位し、政治の中心地たるウエストミンスター市（ロンドン市の中心地の一部をなす）に西北から通ずる街路。

【チューリップ】　土耳古原產の多年生草本で、庭園又は鉢植に栽培し觀賞に供する。莖の高さ一尺餘に達し、葉は廣披針形をなし、綠色、やゝ白色を帶びてゐる。春季、葉間に花莖を抽出し、大形の六瓣花を開く。花色は、赤色、黃色、白色等園藝變種が頗る多い。花容は濃艶鮮麗で西洋流の美的趣味を最もよく發揮する花卉である。

【キュウ公園】　kew Gardeu.　ロンドンの西郊にある。

【仙女】　センニヨ　世界の國々の說話の中に現れる、飛行自在の仙術を會得した女體の仙人で、困つてゐる人々を助けたり、人々に幸福を授けたり、又は輕い惡戲をして人を困らせたりする。

【沙翁】　サオウ　イギリスの劇作家シエクスピアーの稱。
William Shakespeare　一五六四年アヴオン河畔のストラットフォードに生れた。貧家に育ち、青年時代にロンドンに出て、最初は俳優となつたが、後劇作家となり、驚くべき天才を發揮して遂に世界の生んだ最大の詩人、最大の劇作家となつた。一六一六年故鄕に於て歿した。作品三十七篇悉く名篇で、殊に「ハムレツト」「リヤ王」「マクベス」「オセロ」は四大悲劇として最も著名である。その他「ヴェニスの商人」「テンペスト」「眞夏の夜の夢」「ロメオとジュリエット」等。

【眞夏の夜の夢】　マナツのヨノユメ　'A Mid-Summer Nig-

hts Dream'、五幕。シエクピスアー初期の喜劇。西暦一五九五作る。

梗概　アゼンスの市では親が定めた夫と結婚しない時には、娘を殺してもよいといふ法律があつた。ところがハーミヤはライサンダーに戀してゐて、父が定めた貴公子デメトリヤスと結婚するのを拒んだ。それといふのもデメトリヤスを彼女の親友のヘレナが死ぬ程戀してゐた爲である。併し父は怒つてアゼンスを治めてゐた公爵シシアスに訴へたので、二人はアゼンスを逃げてこの法律の行はれてゐない處へ行かうとする。この二人が落合はうと約束した森には、妖精の王樣と女王とが住んでゐたが、王樣は惡戯好きの妖精のパックを呼んで、二組の男女の戀の取持をさせ、戀の藥の間違から種々の葛藤の末、めでたく納まる、といふのである。（中央公論社刊「シェクスピヤ全集」に收められてゐる。）

【上野の山】　ウヘノのヤマ　東京市下谷區上野公園の地。往昔の忍岡で、一體に丘陵をなして樹木特に櫻が多い。その廣小路に面した所を櫻ケ岡といふ。山内には、西郷隆盛銅像、東照宮、寛永寺、東京府美術館、帝室博物館、帝國圖書館、動物園等がある。面積二五二、八二三坪。

【廣小路】　ヒロコウヂ　上野廣小路。上野公園前の大通。

【向島】　ムカウジマ　東京市本所區小梅から隅田町に至る隅田川沿岸一帶の總稱。隅田堤又は墨堤（ボクテイ）といふ。櫻の名所である。

【クライマックス】　Climax　頂天。極度。最高潮。

2　**文の構成**

第一節　初―八頁四行　一陽來復の歡喜。

第二節　八頁五行―終　忘れ得ぬ春の思出。

1　ミラーの山莊の春。（八頁九行―一一頁二行）

2　ロンドンの春。（一一頁三行―一三頁一行）

3　初めて米國から歸朝して經驗した日本の春。上野公園の櫻、向島の櫻。（一三頁二行―終）

3　**文意**

國際人である詩人野口米次郎氏が英・米及び故國日本で經驗した輝かしい春の思出を綴つた文。

4　**鑑賞批評**

一陽來復の喜悅が天眞爛漫な態度で語られてゐる。作者がアメリカやロンドンで經驗した春色は何れも興趣に富むものであるが、就中ミラーの山莊の眺めは印象的である。

又この文章は作者が英文をよくする人である丈けに、歐文脈の手法を取入れた特異なスタイルを持つてゐることが注意せられる。措辭が可なり飛躍的であつて、擬人や譬喩に富んでゐる。それがこの文に獨得の風格を與へてゐるのであるが、一面それら修辭の中には言葉がやゝ目立ち、譬喩が煩瑣に感ぜられる所もないではない。

三　備　考

1　**指導研究**

この文章指導上の問題は、その表現の特異性にあるであらう。卽ちこの文が著しく感覺的で飛躍的な修辭を持つことが生徒の理解を困難ならしめるであらう。この困難を乘越えて文意に達せしめるには如何なる工夫がなさるべきであらうか。

結局それはやはり先づ何度も讀ませることである。そして描かれた實況に向つて生徒の想像力を働かせ、生徒の胸中に內面的な理解を或程度成立させて再び表現の上にかへつて讀み直すのである。この方法を繰り返すことによつて、指導の目的は達せられるであらう。

2　**參考**

日本文學大辭典中から川路柳虹氏の野口氏批評を次に擧げよう。

彼は夙に日本文化の紹介者として海外に日本の事物、日本の美術・文學等を知らしめた第一人者で、歐米に於てヨネ・ノグチの名

は、詩人として著名であると同時に、日本美術の紹介者として著名である。その著「廣重」「北齋」「歌麿」「光琳」と共に「日本詩歌論」(The Spirit of Japanese Poetry) は、日本の詩歌の本質を明かにした著として知られてゐる。彼の詩は散文的な形式に於ける變譽褒貶はあるが、その思索的態度、現實批判的な詠嘆には彼獨特のものをもつてゐる。

補材

花の雲鐘は上野か淺草か　芭蕉

本課の最後の文節に日本の春の禮讃がある。それにちなんで、芭蕉の名句を補材とした。この句、貞享四年の作で、續虚栗（ゾクミナシグリ）集に收められてゐる。前書には「草庵」とある。

花の雲とは、櫻花が咲き續いて之を望むと恰も白雲のたなびける如き狀景をいふ。

江戸八百八町が花の雲につゝまれた駘蕩たる春日、鐘の音が餘韻をひゞかせつゝ聞えてくるのである。あの鐘は上野の鐘か淺草の鐘かと聞きわづらふあたり長閑な花曇りの氣分が感ぜられると共に、江戸の繁華が偲ばれるのである。前書によつて、この作は深川の芭蕉庵に於て、はるかにひゞいて來る鐘の音をきいて作つた作と考へられる。

因に上野山内には寛永寺があり、淺草には淺草傳法院があつて共に江戸の名所である。

三　吉野の奥

吉田絃二郎

一　解題

1　作者

吉田弦二郎　ヨシダゲンジラウ　本名源次郎。小說家。明治十九年十一月佐賀縣神崎郡西郷村に生まれた。同四十四年早稻田大學英文科卒業、大正五年から昭和三年まで母校で教鞭をとつた。小說・感想・戲曲の創作に從つて今日に至つてゐる。

作風は一般に客觀的諦視や把握よりも、その濃やかな抒情味をその特色とする。詠嘆と情緒への陶醉といふ點に於て一種他に見るべからざる風格がある。吉田弦二郎全集十八卷（新潮社發行）がある。

2　出典

「芳野紀行」から抄出した。「芳野紀行」は作者が吉野山に遊んだ時の紀行で全集第十五卷第五感想集に收められてゐる。

3　主眼及び採擇の趣旨

大和平野の一隅に聳えて、古來多くの歷史的事變の展開された吉野山、そこは又櫻の名所であり、すぐれた詩人達の足跡を印した山である。眺むるに興趣盡きず、思ふに感慨極りなきはこの山である。本文は作者が吉野山に遊んで足の向ふがまゝに古跡をさぐり、心の赴くまゝに感慨に耽つてゐる。作者と共にこの山に遊び、作者と共に古今の感懷に耽りたい。

本課は優美・高雅の情操を養ふべき文藝教材であると共に一面、國民性の陶冶に資すべき國民的教材として採擇した。

前課に於て「春の追憶」を讀んだが、春の日本に於て最も印象の深い吉野山を描いた本文をこゝに据ゑた。又この課は以下の「村上義光」「正行の參內」等吉野關係の古文學に接せしめる序曲たらしめる意義をも持つものである。

二　解釋

1　語釋

【吉野】ヨシノ　吉野山。奈良縣吉野郡吉野町一帶の山。古くは芳野とも書いた。吉野朝の古蹟として、又櫻の名所として著れてゐるがその他色々の史蹟に富んでゐる。文武天皇の朝、役の行者が吉野山の奥の大峯山に修驗道を開いてから、名僧・知識が相次いで之を繼承し、斯道の普及に勤めた結果、寺院が數多建立されて漸次吉野の基礎が成つた。櫻も亦この頃に植ゑられたものといはれてゐる。大海人皇子が一時遁れてこの山に入り給うたこと、持統・文武・元正・聖武の諸天皇が山水の清きを愛でて行幸し給うたこと等も名高い。文治年間、源義經は賴朝の疑を受けてこの山に匿れ、元弘の亂には大塔宮護良親王がこゝに城を築いて北條勢を迎へさせられ、村上義光父子が殉じた。ついで延元元年後醍醐天皇はこゝに行宮を定め給ひ、後村上天皇の正平三年賊將高師直の來犯によつて伽藍僧坊悉く燒失し、賀名生に遷らせ給ふまで凡そ十三年の間、吉野朝廷の所在地であつた。以後戰國時代には打續く戰亂に全く頽廢した。然し天正に至つて櫻一萬本が增植され、文祿三年には、豐太閤秀吉が觀櫻の宴を張り豪遊を極めた事等があつた。慶長十九年德川家康が僧天海に命じて當山の金輪王寺を日光に移させてからは往時の盛觀を見ることは出來なくなつた。明治維新に際して寺院は殆んど破棄されて、現存するものは僅となり、寺院の勢力の失墜と共に名勝舊蹟も頽廢したが近時は漸次復舊された。今大和アルプス・熊野川流域一帶と共に吉野熊野國立公園候補地に指定されてゐる。

【大和めぐりは廢墟の遍路である。滅びたものを弔ふ挽歌の旅である】冒頭のこの句は過ぎ去つたものに對する作者の追慕であると共に、又讀者の心を哀史の山に誘ふ序曲でもある。

【廢墟】ハイキヨ　荒れ果てたあと。建物・城郭・市街の荒れはてたあと。墟は、跡・古跡をいふ。

【遍路】ヘンロ　こゝでは名所古跡を巡り歩く意。元來は祈願の爲に弘法大師修行の遺跡たる四國八十八箇所の靈場を巡拜することをいつた。「巡覽」といふ語と語感語意の相違に注意。

【弔ふ】トムラフ　元來「トムラフ」は訪ねるの意であるが、轉じて亡魂の冥福を祈るの意。

【挽歌】バンカ　死者を哀悼する詩歌。挽は「引く」意。挽歌は柩車を引く際の哀歌をいつた。

【檜笠】ヒノキガサ　笠の一種。檜の薄板を網代に編んだ笠をいふ。古く大和大峯へ入る山伏などが被つたもので、晴雨兩用に用ひた。

【三輪】ミワ　奈良縣磯城郡三輪町。東方の三輪山（一名三諸山）に官幣大社大神神社（祭神大物主神）があり、大和朝廷の崇敬があつた。

【畝傍】ウネビ　奈良縣高市郡畝傍町。中央の畝傍山は大和三山（畝傍山、耳成山、香久山）の一で古來歌枕として著れてゐる。山の東北には神武天皇の御陵があり、東南には橿原神宮がある。

【三輪・畝傍、なつかしい山である】何れも萬葉集以來の文學や歷史で耳に馴れ、目になれた地名にめぐりあふなつかしさである。

【情趣】ジヤウシユ　おもむき。味ひ。面白味。

【電車】こゝでは大阪電氣軌道の吉野線（畝傍―吉野口―下市口―吉野神宮前―吉野）を指す。但し、此の文の草せられた時代の電車の終點は、下市口であつて、未だ神宮前や吉野までは延びてゐなかつたのである。

【碧珠】ヘキシユ　あをく美しい珠。

【吉野川】源を大臺ケ原及び高見山に發し、吉野山北を西に流れて和歌山縣に入り紀ノ川となる川。吉野川は山中屈曲に富み、飛泉が多く歌枕として萬葉集にその清流を讃へた歌が見えてゐる。この清流の畔に吉野離宮が營まれ、天武・持統兩天皇以後屢〻天皇の行宮が行はれた。

【上市】カミイチ　奈良縣吉野郡上市町。吉野山の入口に當り、吉野川に臨む。鮎の名產がある。

【落ちついた町の姿】新開の町でなく古い傳統の空氣を漂はせ、その山水にぴたりと合つてゐることをいつたもの。

【筏】イカダ　材木・板・竹等を並べ、繫ぎ合はせて舟の如く作つたものである。こゝは吉野材木を流す筏。川に浮べ、筏師が乘つて棹さし流して運漕する。

【櫻】吉野山の櫻は大方白山櫻である。白山櫻は日本に廣く分布するもので殊に本州の山地に多い。一般に吉野櫻と稱するのは、染井吉野又は大和櫻ともいひ、吉野山の櫻と別種である。吉野山は日本一の櫻の名所として有名であるが、起源は詳でない。役の行者が植ゑたといふのは傳說であらうが、大峯山に修驗道が開かれて吉野山に人が入る頃追々に植ゑられたといはれてゐる。古今集に吉野山の櫻を歌つた歌のある所から見れば、少くとも平

安朝の中葉には櫻の名所として一般に知られたものと思はれる。この櫻樹は藏王權現の神木として一切の伐採を禁じ、之を犯す者は神罰があるといひ、愛護栽培したものである。

【尾根】　ヲネ　峯から峯へ、又は峯から麓へつゞく山稜線。峯すぢ。山の背。

【一目千本】　ヒトメセンボン　吉野山驛近く、凡そ三十町に亙る一帶の櫻。山上山下一目皆花なのでこの名がある。吉野山中最も櫻の多い所である。その坂路は羊腸として、七曲り坂の名がある。

【中の千木】　如意輪寺近くの山腹一帶の櫻。

【赭土道】　アカツチミチ　あかつちの道。

【宿場】　シュクバ　「驛」又は「宿」ともいふ。

【村上義光の墓】　吉野山驛から行くと、吉野神宮の五町程手前の道の左側にある。この場所は義光が奮戰した、太平記の所謂「二の木戸」の舊址であると傳へられてゐる。墓は古い花崗岩の寶篋印塔に「村上義光之墓」と刻んである。もとは丘下の路傍に埋められてゐたが、天明三年舊高取藩の儒臣內藤景文の撰になる忠烈碑が建てられるや、これと共に丘上に移されて、始めて萬人の欽仰を受けるに至つた。村上義光については、第四課で說明する。

【歌書よりも、の句】　各務支考の作。支考は芭蕉の門人で享保十六年六十八才で歿した。和歌の書に載せられてゐる吉野山は名高いが、それよりも軍記に出て來る吉野山の方が、一層深く我々の心を動かすものがあるの意。「かなし」は「あはれ深し」又「感慨深し」の意。悲哀の意ばかりではない。

【人間哀史の山】　人間世界の悲しい出來事の數々を殘してゐる山。吉野山に關聯した幾多の哀史がある故にかくいふ。

【吉野朝五十年の御所跡】　作者吉田氏の使用した意は明かでないが、吉野朝の御所跡といふ意味にとるべきで、五十年間を通じての御所跡といふ意味にすると、事實と齟齬する。注意すべきである。延元元年（一九九六）十二月後醍醐天皇が神器を奉じて吉野に遷幸し給うてから元中九年（二〇五二）閏十月、後龜山天皇が京都に還幸あらせられ、神器を後小松天皇に讓らせられるまでの五十七年間を、皇居が吉野を中心とした地方に置かれたので、吉野朝五十年といふ。吉野山に皇居のあつたのは延元元年十二月から正平三年後村上天皇が賊將高師直の兵を避けて紀伊に幸し給うまで前後十三年間で、それ以後は皇居は多く賀名生に在つた。

【花は旅人の悲をこめて散りに散る】　作者の感傷を落花に移入して言つたもの。感傷に潤うた作者の瞳に、散りしきる落花の嵐が感深く映じてゐるさまが、見えるやうである。

【西行庵】　サイギヤウアン　西行法師庵住の址といはれる。吉野山の奥の院、卽ち金峯神社の奥四五丁の所に今も小庵がある。

〔西行〕　平安朝末期の歌僧。俗名佐藤義淸。法號圓位。西行と號した。元永元年生。鳥羽上皇に仕へたが保延六年二十三才の時出家した。爾來彼は自然を友として諸國を遍歷し、建久元年七十三才で入滅した。西行の歌は當時の纖細巧緻な歌壇の中にあつて、獨り天眞流露、自然人生一如の咏嘆を抒べてゐる。家集山家集がある。

【如意輪寺あたりの花】　寺の近くに中の千本がある。

〔如意輪寺〕　延喜年間日藏上人の開基と傳へられ、本堂には如意輪觀音を安置してある。現在は淨土宗。吉野朝の勅願寺で屢〻後醍醐天皇がこゝに行幸し給うた。正平年間兵火に罹つて以來長く荒廢してゐたが、維新後に復興せられた。楠木正行が辭世を題したといはれる如意輪堂の址は庫裏の北にある。但し正行が歌を彫りつけた扉と稱して保存されてゐるものは僞作である。

【櫻本坊】　サクラモトバウ　もと五寶院門跡の宿所で、明治八年今の地に移つた。山內廢寺の諸佛を本坊中の灌頂堂・高祖堂・聖天堂に集め祀り、諸佛堂の名がある。

【竹林院】　チクリンヰン　もと藏王堂の供僧坊であつた。弘仁九年、弘法大師大峯登山の折、來拜者の爲に精舍を營み、初め椿谷椿山寺と稱し、後、常樂山竹林院と改めた。

【天王橋】　テンワウバシ　大橋・丈の橋と共に吉野三橋の一。この附近一帶の櫻を上の千本といふ。

【宗信法印の輪塔】　ソウシンホフインのリンタフ　宗信法印の墓所。猿曳坂を登ること一町程の小丘上にある。

〔宗信法印〕　吉水院の住僧で吉野朝の勤王家。元弘元年護良親王が吉野に據り給うた時に助け參らせ、城の陷るに及んで親王に從ひ一度脫れ、亂が平いで又寺に歸つた。延元元年十二月宗信は吉野の衆徒を語らひ、天皇を迎へ奉つた。天皇崩御の後は意氣沮喪した衆徒を勵まして結束を固くし、遺勅を奉じて後村上天皇を御位に卽け奉り獻身吉野朝に仕へた。吉野朝五十餘年の間吉野の衆徒に變心なからしめたのは、宗信の力による所が多い。大正六年正五位追贈。

〔輪塔〕　五輪の塔。密敎の卒塔婆。大日如來の三摩耶形で地・水・火・風・空の五大（五輪）を標する。地輪は方形、水輪は圓形、火輪は三角形、風輪は半月形、空輪は團形で、次第の如く積み重ねて塔の形とする。

【杣人】　ソマビト　きこり。

【一間物・二間物】　イツケンモノ・ニケンモノ　仕上げて一間の長さになるものを一間物といひ、二間になるものを二間物といふ。一間物は七尺、二間物は十三尺位ある。

【柾】　マサ　柾目の略。眞直に通つた木理。

【高野山】　カウヤサン　和歌山縣伊都郡にある。山頂の金剛峯寺で名高い。金剛峯寺は空海の開基にかゝる眞言宗の靈場で、單に高野山といへばこの寺の通稱となつてゐる。こゝは山そのものを指す。

【花矢倉】　ハナヤグラ　文治元年佐藤忠信が主君源義經に代つて、吉野の衆徒を防矢した所と傳へられる。急峻な獅子尾坂を登りつめた小高い丘にある。

【峠の足溜り】　タウゲのアシダマり　峠路の急峻な坂の中途にあるやゝ平坦な所をいふ。「足だまり」は足をふみためる所の意。

【俯瞰】　フカン　高い所から見下すこと。

【山門】　サンモン　(一)寺院の總門。(二)寺院全體。こゝは(一)。寺院は昔時俗塵を避けて閑寂な山中に建てられたので多くは山號を稱し、その門を山門と呼んだ。

【佐藤忠信】　サトウタダノブ　義經の臣。陸奥の人。義經が藤原秀衡の許に在つた頃から之に仕へ、屢々軍功をたてて義經四天王の一人に數へられた。後義經の推擧によつて兵衞尉となつた。義經が賴朝の疑を蒙つてその追捕を受け、京都から吉野に匿れ、吉野の大衆の來襲を受けて既に危くなつた時、義經の身代りとして奮戰し、大衆を切拔けて京都に脫れたが、後、探知さるゝに及んで、文治二年遂に自殺した。享年二十六。

【吉野の僧兵】　吉野金峯山藏王堂の僧兵。吉野の大衆ともいふ。中世頗る勢力を有し、鎌倉幕府の末期から南北朝にかけて吉野朝の力と恃ませられたのは主としてこの吉野大衆であつた。

【防矢】　フセギヤ　攻め來る敵を阻止する爲に矢を射ること。又その矢。

【水分神社】　ミクマリジンシヤ　主神天水分神と外六神とを祀る。子守明神ともいひ、吉野水分山に在る。主神天水分神は本來流水の分配を司る神で、五穀を豐饒になし給ふのであるが、後之を美許毛理神といひ、更に訛つて子守神となり、安產の神となつた。創立は明らかでないが、既に文武天皇の大寶二年四月には祈雨の爲に神馬を獻じたことがあり、延喜の制には大社に列してゐる。又祈年・月次・新嘗の案上官幣及び祈雨の奉幣に與り、古くから朝廷の尊崇が厚かつた。現在の社は慶長五年豐臣秀賴の造營に係るもので、國寶となつてゐる。

【軒】　ノキ　屋根の下部の建物より外に突出た部分。檐・簷・宇とも書く。

【庇】　ヒサシ　(一)上古寢殿造で、母屋の四面にあつた稍低い細長い室。ひさしのま。(二)母屋から外側に差出した片流れの小屋根。窓・緣側・出入口等の上に設けて日や雨を防ぐもの。こゝは(二)。

【欄干】　ランカン　橋又は緣側などの邊に臨む所に、縱に木を渡して人の墜落を防ぎ、又は裝飾とするもの。てすり。おばしま。

【竝木】　ナミキ　道路の兩側に一列に植ゑつけた樹木。

【私は暫くの間、吉野の奧の滿月と落日とを、たゞひとり靜かに味はつた】　美しい詩的な狀景である。詩人たる作者の深い陶醉的な滿足感が窺はれる。

【蕪村】　ブソン　與謝蕪村。俳人、畫家。本姓谷口。享保元年攝津毛馬村に生れ、夙く江戸に出て、初め內田沽山に、後早野巴人に就いて俳諧を學んだ。寬保二年(二十七歲)巴人の歿後、同門の砂岡雁宕の故鄕結城に身を寄せ、各地に遊歷行脚しながら、句作の他に只管畫技を練つた。寶曆元年(五十六歲)京に歸り、四年丹後の與謝に遊び、七年以後再び京に住んで姓を與謝と改めた。明和年間に至つて畫名益々顯れると共に俳諧熱漸く嵩じ、太祇・召波その他と三菓社を結び、明和七年(五十五歲)には推されて巴人の統を繼ぎ、二世夜半亭を號した。爾來精進を重ね、遂に天明新調の巨匠として獨自の句境を拓くに至つた。又その畫は池大雅と共に南畫の双璧と稱せられる。天明三年十二月歿、享年六十八。

【菜の花や、の句】　陽春の一日も將に暮れようとしてゐる。地上には、菜の花が美しく咲き續いてゐる。仰げば、月は既に東の空に上り、日は將に西の空にその姿を沒しようとしてゐる光景で、春の一日が將に暮れようとしてゐる名殘の美しさを菜の花を焦點に描き、空にかゝつた月と、沈みゆく落日とを之に配して成つた句。「續明烏」に「春興廿六句」の發句として載せられてゐる。脇は「山もと還く驚かすみ行」で樗良がつけてゐる。

【ひたぶるに】　一心に。ひたすらに。

【私は西行庵を斷念して……薄闇の中の徑も尋かつた】　花の山を照らす滿月の中に佇む作者の深い感激が貫ぬき流れてゐる。そして作者の心に浮ぶものは「そこの一筋の道を、嘗ては西行が歩み、芭蕉が辿つたであらう」といふ切々たる追慕の情であり、「さう考へると薄闇の中の徑も尋かつた」といふ愛著の心である。

【西行が歩み】　西行が吉野山に入つたのは年代明かでないが山家集に「吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ」とあるによつて知られる。

【芭蕉が辿つた】　貞享元年芭蕉四十一才の九月登山、更に元祿元年芭蕉四十五才の三月、杜國を伴つて登山、三日

間を花の吉野に過した。

〔芭蕉〕　第一〇課、子規居士の中で說明した。

【奥の千本】　オクノセンボン　金峯神社近くの櫻樹の一群をいふ。吉野山の櫻樹中最も奥深い所にある。土地が高い爲に花期が遲く、麓の櫻が青葉になつてから開く。

【金峯神社】　キンブジンジヤ　藏王堂ともいふ。金山彦・金山姫の二神を祭り、吉野山の高峯金峯山の麓にある。この神は吉野山の地主神で藏王權現ともいふ。創立時代は詳でないが、延喜の制には明神大社に列し、祈年・月次・相嘗・新嘗の案上官幣に與つた。もと金峯山寺中に兩部に祀つてあつたが、明治に至つて神佛混淆を改めたものである。第四課、村上義光の項參照。

【役の行者】　エンのギヤウジヤ　修驗道の開祖。役の小角（エンノオヅノ）・役優婆塞（エンノウバソク）ともいふ。舒明天皇の六年、大和國葛城郡茅原に生れた。幼時から學問を好み、諸事に通じ、三寶を信仰した。年若くして大和の生駒山・紀伊の熊野山に入つて苦行した。三十二才の時葛城山に登り、岩窟中に修行すること三十年に及び、種々の靈驗・奇蹟を得、鬼神を驅役することが意のまゝであつた。大和の南部から紀伊に亙る高山は悉く蹈破し、吉野の金峯山・大峯山等は神呪を唱へて躋攀した所である。傳說に、役行者は葛城の神を使役して大峯山を開いたといふ。文武天皇の三年韓國連廣足といふ者が小角を以て妖妄人を惑はす者であると誣告した爲に伊豆國に流されたが、大寶元年赦された。その終に就いては詳でない。寛政十一年正月、神變大菩薩の諡號を賜はつた。

〔役の行者の道案内を勤めたといふ山神〕　前述の葛城山の山神。

【石磴】　セキトウ　石段。「磴」は石の坂道、又石段の意がある。

【中老】　チユウラウ　こゝでは、五十才位の人をいふ。四十才を初老といふのに對する語。

【宮守】　ミヤモリ　宮の番人。神社の番人。

【けさはひどい……來ましたよ】　宮守の挨拶。

【大峯詣り】　オホミネマヰり　修驗道の靈地大峯山に詣でること。吉野山は昔の所謂「峯入り」の道筋であつた。

【道者】　ダウジヤ　(一)佛道を修業する者。(二)神社・佛閣に詣でる爲に旅をする者。(三)道敎を修めた者。道士。道人。こゝは(二)の意。

【小鳥の聲が聞えて來た】　朗らかな小鳥の聲に作者の心はづんで來たであらう。

【大峯山】　オホミネザン　吉野山の南方に連る山脈で、往時の修驗道の靈場として名高い山。この山を始めて開いたのは役の行者で、山中に於て練行し、山上嶽（吉野山より六里）上に修驗道の靈場を開いた。以後道者は峯入りと名づけてこの山を躋攀し、練行を試みた。近時に至るまでその行は盛んに行はれたが、明治五年、修驗道停廢の政令が布かれて後、漸次衰へた。

【岐れて】　ワカれて　道が分れること。

【苔清水】　コケシミヅ　西行庵の傍にある清水。山家集に「淺くともよしや又くむ人もあらじ我にこと足る山の井の水」とあるのは、西行庵に住ひ、この苔清水を詠んだものといふ。芭蕉がこゝを訪れて雅懷を述べたことが「野晒紀行」に見えてゐる。

西上人の草の庵の跡はおくの院より右の方二丁ばかりわけ入るほど、柴人のかよふ道のみわづかにありて、さかしき谷を隔てたるいと尊し。かのとく〳〵の清水はむかしにかはらずと見えて、今もとく〳〵と雫落ちける。

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

【梅室】　バイシツ　櫻井梅室。俳人。明和六年、加賀國金澤に生れた。幼名次郎作、名は能允。俳號は初め雪雄、後素芯・素信と改め、別に梅室と號し、梅室を通稱とした。家は代々刀研師として前田侯に仕へたが、病を得てその職を弟子に讓つた。十六才の時俳諧の道に入り、初め槐庵馬來に學び、後闌更に就いた。文化四年遂に京に出で、梅室と稱して俳壇に馳驅した。その後十二、三年間は京を中心として江州・吉野等に遊んだ。また廣く東西諸州を遊歷し、江戸・大阪にも移り住んだ。當時、蒼虬・鳳朗・卓池と共に天保四老人と稱せられ、嘉永四年、二條家より花本宗匠の稱號を與へられた。嘉永五年歿。享年八十四。

作風は寧ろ卑俗に近く、いはゆる月並俳諧者流の傾向を多分に持つてゐた。「梅室家集」「梅室茶話」等の著がある。

【露とくとく、の句】　芭蕉が貞享元年（四十一才）の秋、ひとり吉野山に登つた時の吟で「野晒紀行」に出てゐる。句意は、この靜かな吉野の奥、西行の住居した跡に來て見ると、とくとくと落ちる清らかな水は、昔に變らず落ちてゐる。何といふ清らかな水であらう。この清水で、試みに浮世の塵に汚れた心身を洗ひたいものである。さうしたら、すつきりとした清涼な心持になることであらうといふ意である。

清水を露といつたのは、秋の季を用ひたのである。苔清水に對する深い感動が一句の上に響き出てゐる。

尙西行の苔清水の歌として傳へられてゐるものの一つに

とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな

といふ歌があるが、これは西行かどうか疑はしいといは

れてゐる。併し芭蕉が西行の歌として追懷してゐることはいふまでもない。

【句碑】　クヒ　俳句を彫りつけた石碑。

【何となく勿體ない心持もしたが云々】　尊いものに對するへりくだりの氣持である。西行や芭蕉によつて掬ばれた清水を掬ぶことは、自分を故人と同格におくことになるやうな氣がしたのであらう。作者の西行・芭蕉に對する渴仰の念が窺はれる。

【掬んで】　ムスんで　兩手で水をすくふこと。

【漱ぎ】　クチススぎ　うがひをすること。

【樅】　モミ　松科、もみ屬の常綠喬木。樹高三〇米に達する。材質が輕軟である爲に建築材の外に多く板材とし、その他器具・製紙原料・藥用・理化學用にも供せられる我が國では本州の中南部・四國・九州に分布する。

【眺むるに、佇むに、たゞ涙流るゝほどの尊さを覺える】　西行庵の前に立つての感懷である。そこに見出された西行庵の簡素さに今更故人の床しい心境が偲ばれて渴仰の念の切なるを覺えるのである。

【よしの山の、歌】　吉野山の花をたづねて來たのであるが、このまゝこの山に留まつて、もうこの山を出でまいと思ふ我身であるのに、それとは知らず、花が散つたら西行はまた歸つて來るであらうと人々は待つことであらうの意。新古今集雜歌中に出でゐる。「やがて」は「そのまゝに」「このまゝに」等の意。

【草も清水も歔欷してゐるやうな氣がする】　作者の感傷が少し目立つやうだ。自分の氣持で西行の氣持を解釋し、それに刺戟されて、作者は目を潤ませてゐるらしい。

〔歔欷〕　キョキ　すゝり泣き。むせびなき。

【六尺の大男西行が……旅人の腸にこたへて來る。】　作者の純情はさることながら「土にしがみついて」といひ「腸にこたへて來る」といふのは少し出し過ぎてゐる氣味がある。

〔旅人〕　作者自身を客觀化して言つたもの。

〔腸にこたへて〕　ハラワタにこたへて　心に深く感じ響いての意。

【何といふ偉大な二つの佗人の影が云々】　作者は今、草の上に投ぜられた自分の影の中に西行・芭蕉の影を描いて追慕の情に耽つてゐるのであらう。

〔佗人〕　ワビビト　(一)さびしく暮す人。(二)時を得ない人。失意の人。(三)おちぶれた人。こゝは(一)。いふまでもなく西行と芭蕉とを指す。

【馬醉木】　アシビ・アセビ・アセボ　石楠科(シャクナゲ)、あせび屬の常綠喬木。山野に自生し、高さ二米——四米許。花候は三月中旬。白色の花を開いて美しい。

【濡緣】　ヌレエン　雨戶の敷居の外に作つた緣側。雨露の濡らすに任せてあるのでかくいふ。

2　文の構成

第一節　一五頁一行—二一頁六行　吉野紀行第一日の行程。

1　大和めぐりの印象。(一五頁一行—一五頁五行)

2　畝傍から吉野までの電車。(一五頁六行—一五頁九行)

3　上市の眺め。(一五頁一〇行—一六頁一行)

4　山路を登つて一目千本へ。(一六頁二行—一六頁一一行)

5　花に埋れた吉野の宿場。(一六一二行—一七頁三行)

6　村上義光の墓、哀史の山に入る。(一七頁四行—一七頁終)

7　宿について再び出發。(一八頁一行—一八頁四行)

8　宗信法師の輪塔。(一八頁五行—一八頁八行)

9　柚人にあふ。(一八頁九行—一九頁四行)

10　山を埋むる櫻花の展望と暮れゆく吉野川の遠望。(一九頁五行—一九頁九行)

11　花矢倉、水分神社。(一九頁一〇行—二〇頁三行)

12　滿月の光に照された吉野の奧。(二〇頁三行—二一頁六行)

【そこには西行が人生の……今も漂うてゐた】　西行庵の馬醉木の花の白く寂しい姿を眺めて、在りしヨの西行を偲び、その日の靜けさを感得してゐるのである。

【冬枯】　フユガレ　冬になつて草木の葉の凋落すること。

第二節　二一頁七行―二四頁終　第二日の行程。

1　金峯神社。（二一頁七行―二二頁三行）

2　苔清水。（二二頁四行―二二頁終）

3　西行庵。（二三頁一行―二三頁終）

4　在りし日の西行、そこに咲いてゐる馬酔木の花の寂しさ。（二四頁一行―二四頁七行）

3　如意輪寺へ志して下山。（二四頁八行―二四頁終）

3　文意

花の吉野山、哀史の吉野山、西行・芭蕉の遺跡を止むる吉野山に旅した詠嘆の情を述べた文。

4　鑑賞批評

この文を讀んで感ぜられることは哀史の山に對する深い哀傷感と西行・芭蕉の遺跡に對する切々たる追懐思慕の念が渾然と融和して文の基調をなしてゐることである。この文の主流をなすものは飽くまでも作者の情緒である。花の吉野の描寫でもなければ、人間哀史の吉野山の敍述でもない。さればといつて西行・芭蕉に描かれた吉野山の嘆美でもない。唯さういふ吉野山に上つての詠嘆であり、陶酔である。

滿山を埋むる櫻花は作者の咏歎を助ける背景的な役割をなしてゐるにすぎない。文中にはやゝ感傷に走り過ぎたかと思はれる筆も殘されてゐるがこれは作者の詩人的な純情の一面を現すものであらう。この主情的な行き方は吉野山の如き對象を取扱ふには最も自然な行き方かと思はれる。作者の纖細な感受性と素直な情緒とは、直截な表現となつておかに讀者の胸にひゞく。この作者の持味のよく現れた作といふべきであらう。

三　備　考

1　指導研究

本文の中心をなすのは吉野朝に對する哀傷感と吉野山に足跡を殘す西行・芭蕉の二大詩人への抑へ難い思慕である。吉野朝への感慨に誘ふことは別に用意は要らないが、西行・芭蕉への思慕を理解させるには二詩人の風格やその吉野に關する事蹟を知らせることが必要になつてくる。同時に吉田弦二郎氏の風格を傳へて、この二人の自然詩人との精神的交流を想望せしめるも必要であらう。

又作者の眼に映つた地勢や風物が回顧的な情緒を助けてゐることに注意を要する。吉野山の風物は皆それ〴〵人間哀史と連繫しつゝ、見る人の心を傷ませる。いかに吉野の櫻といへばとて歴史の山に咲けばこそである點をも見逃してはならぬであらう。

2　參　考

一、挿繪説明。

筆者、菊池芳文（キクチホウブン）　名は常次郎、字は公紀。文久二年九月十七日三原三郎兵衛の次男として大阪に生れ、後菊池氏を繼いだ。十八歳の時滋野芳園の門に入り、明治十五六年頃京都四條派大家幸野楳嶺の塾に學び、後一家をなして京都繪畫專門學校教授となり、文展の日本畫部審査員となつた。畫は花鳥を得意とし、用筆輕妙、他の追隨を許さぬものがある。大正七年一月十八日洛西衣笠村に逝く、年五十六。代表作には京都の共進會出品の「木曾の秋景」文展第一回の「春秋花鳥屏風」第八回の「小雨降る吉野」第九回の「鶺鴒」等がある。

二、參考文獻。

(イ)西行法師の吉野山を詠じた歌を「山家集」より拔萃する。

何となく春になりぬと聞く日より心にかゝるみ吉野の山

雲にまがふ花のさかりを思はせてかつ〳〵かすむみ吉野の山

おしなべて花の盛になりにけり山の端ごとにかゝる白雲

吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき

木のもとの旅寢をすれば吉野山花のふすまを著する春風

ときはなる花もやあると吉野山おくなく入りてなほ尋ねみむ

吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ

吉野山さくらが枝に雪ふりて花おそげなる年にもあるかな

吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねむ

吉野山一むら見ゆる白雲は咲きおくれたる櫻なるべし

(ロ)芭蕉の吉野の旅は「野晒紀行」と「笈の小文」に記されてゐる。今兩書より拔萃する。

ひとり吉野のおくにたどりけるに、まことに山深く、白雪峯に重り、煙雨谷を埋て、山賤の家處々に小さく、西に木を伐る音東にひゞき、院々の鐘の聲は心の底にこたふ。昔よりこの山に入りて、世を忘れたる人の多くは、詩にのがれ、歌にかくる。いでや唐土の廬山といはんもまたむべならずや。ある坊に一夜をかりて、

砧打て我に聞かせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、おくの院より右の方二丁ばかりわけ入るほど、柴人のかよふ道のみわづかにありて、さかしき谷を隔てたるいと尊し。かのとく〳〵の清水はむかしにかはらずと見えて、今もとく〳〵と雫落ちける。

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば必ず口をすゝがん。もし是許由に告げば耳を洗はん。山をのぼり坂を下るに、秋の日既になめになれば、名ある處々見殘して先づ後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草　　櫻

(野晒紀行)

さくら狩きとくや日々に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならう

扇にて酒くむかげや散さくら

苔清水

春雨の木下につたふしみづかな

よし野の花に三日とゞまりて、明ぼのたそがれのけしきにむかひ、有明の月のあはれなるさまなど、心にせまり胸にみちて、或は攝政公の詠にうばはれ、西行の技折にまよひ、かの貞室がこれは〳〵と打なぐりたるに、我はいはんこと葉もなくて、いたづらに口を閉ぢたるいと口をし。思ひ立たる風流いかめしく侍れども、こゝに至りて無興のことなり。

(笈の小文)

註　(一)攝政公の詠。

あさぼらけ有明の月と見るまでによしのの里にふれる白雪

攝政公は攝政藤原良經をいふ。新古今集にある歌。

註　(二)西行の枝折　參考文獻の項西行の歌第九首目を見よ。

四　村上義光

一　解　題

1　出典

本課は太平記卷七「吉野の城軍の事」から抄出したものである。元弘三年正月賊將二階堂出羽入道道蘊は六萬餘騎を率ゐて大塔宮の籠らせ給ふ吉野の城へ押寄せたが村上彦四郎義光父子の壯烈な戰死によつて大塔宮は危く虎口を脱して高野に落ちさせ給ふ事を得たのであつた。

太平記四十卷は九十五代花園天皇文保二年（皇紀一九七八年）から九十七代後村上天皇正平二十二年（皇紀二〇二七年）に至る吉野朝五十餘年にわたる動亂の始末を敍したものであつて、戰記物語の代表作の一つに數へられる。文章は所謂和漢混淆文で、絢爛の修辭を用ひて遒勁華麗である。その上内容には大義名分の精神が含まれてゐるので讀者をして感奮興起せしめずにはおかない。

2　作　者

作者は「洞院公定日次記」應安七年五月三日の條に「傳聞去廿八九日之間、小島法師圓寂云々。是近日翫三天下一太平記作者也。」とあるのに依つて、小島法師といはれてゐるが、傳記は不明である。たゞ吉野朝に緣故のあつた人であるらしいことは推定せられる。

3　主眼及び採擇の趣旨

吉野の戰に於ける村上義光の犧牲的行爲は眞に壯烈であり、崇高な日本精神の高揚である。本課では讀者に原文の秀れた表現を通してこの壯烈な討死の有樣を目のあたりに描き出させ、讀む者を感奮興起せしめたい。猶この間に於ける君臣間の情誼の美しさは深い感銘を與へずにはゐない。この關係こそ國史を貫く我が君臣關係を如實に示すものである。この點も心して取扱はれたいと思ふ。

猶又本課は前課の紀行文の中に見出された村上義光の墓表によつて呼起された懷古の情を更に發展せしめて、往時吉野山の戰に於ける村上義光の壯烈な最期を眼前に展開せしめようといふ意圖の下にこゝに配置したのである。

二　解　釋

1　語　釋

【村上義光】　ムラカミヨシテル　吉野朝の忠臣。通稱彦四郎。信濃の人。元弘亂に子義隆及び赤松則祐・平賀三郎等と護良親王に從ひ、十津川に脱れた。所が熊野別當定遍の探索が甚だ急であつたので、親王はこゝを去つて吉野山に落ち給うた。途中、親王と從臣は土人芋瀨莊司の兵に圍まれ、親王は之に錦旗を與へて僅かに過ぎ給うた。遙かに後れた義光は、偶〻莊司が錦旗を持ち歸るに出逢ひ、進んで錦旗を奪還し、之を親王に返し奉つた。吉野に至り城を築いて守つたが、敵の大軍來り攻むるに及んで城は陷り、親王と從臣とは藏王堂の大庭に最期の酒宴を張り給うた。義光は親王の御鎧直垂と御物具とを賜はり、親王を落し參らせて後、自ら親王と名乘つて自刄した。明治四十一年十月從三位を追贈せられた。

【さる程に】　しかある程に。前を承けて次をいふ詞。

護良親王は初め比叡山に據つて賊兵の笠置に向ふのを牽制されたが、結果利あらず、それより南都を經、十津川に入り、元弘二年遂に吉野に城いて之に據り、又諸國に令旨を下して王事に勤めしめ給うた。同三年正月十六日、賊將二階堂貞藤が六萬餘騎を率ゐて來り攻め、激戰數日に亙つたが、要害堅固で容易に陷らない。貞藤は搦手の防禦が屆いてゐないと見て、一隊百五十人をして夜に乘じて私かに金峯山方面に迂回せしめ、時を約して本軍は大手より攻め、搦手の軍は愛染寶塔より下つて城に入り、

火を放ち喊聲を揚げたので、さしもの城兵も狼狽混亂を極めた。本課に記する所はその際の出來事である。

【搦手】　カラメテ　敵の背後。正面を追手（大手）といふに對する語。後には專ら城塞の裏門の名となつた。

【勝手の明神】　カツテのミヤウジン　吉野の町を出はづれた處、坂路の西側にある。祭神不祥。

【藏王堂】　ザワウダウ　金峯山寺の本堂。金峯山寺は今天台宗であるが、往時は天台・眞言兩宗に屬し、もと吉野大峯の山上山下なる伽藍・僧坊の總稱で、役行者の開創と傳へられる。中古以後僧徒が漸く强大になり、僧坊百ケ院を有し、吉野大衆として、神輿を舁ぎ屢〻京師に强訴した。護良親王は此の大衆の援を得、本堂卽ち藏王堂を城として賊を迎へられたのである。本堂前の四本櫻のある所は親王最後の御酒宴場で南門址は、村上義光の戰死した所だといふ。後醍醐天皇が後年吉野に移り給うた時も、行在を寺中に置かれたが、正平三年正月、賊將高師直・師泰が來り襲うたので、寺中悉く兵火に罹つた。今の本堂は康正元年の再建、天正十九年豐臣氏の修造に係る。

【大塔宮】　オホタフノミヤ　近時ダイタフノミヤとも訓んでゐるが、古い稱呼に從ひたい。護良親王の事。後醍醐天皇の第三皇子。初め兵部卿、次いで薙髮して延曆寺の座主となり大塔に居らせられたので世に大塔宮と稱し奉る。元弘元年後醍醐天皇の北條氏討伐の擧を助け、延曆寺に據り給うたが利あらず、吉野に敗るゝに及んで、高野山に隱れ給うた。建武中興成るや、征夷大將軍に任ぜられ給うたが幾許もなく尊氏の讒にあつて鎌倉に幽せられ、二年遂に足利の臣淵邊義博に弑せられ給うた。

【赤地の錦】　アカヂのニシキ　赤色の織地の錦。錦とは精良な絹絲を用ひ、地を綾織とし、金箔又は金絲と畫綽とを用ひて繪模樣を織出した厚く美麗な織物。

【鎧直垂】　ヨロヒヒタタレ　大將などが鎧の下に着る直垂錦・練絹・生絹等で作り、袖と裾との端を括緒で括る。普通の直垂とは作り方がちがつてゐる。「錦の鎧直垂」は大將などの着するもので、身分の卑い者は着用を許されなかつた。平家物語に、齋藤實盛が討死を覺悟の出陣に、錦の直垂着用を乞うた話は有名である。

【緋縅】　ヒヲドシ　紅花で緋色に染めた革又は緋色の絹組紐で鎧を縅したものをいふ。「縅す」とは鎧の札（鐵又は革で作つた小板で、鱗の如く並べて鎧を作るもの）を絲又は革緒で綴ることで、「緒通し」の約といふ。緋縅の鎧は通例大將などの身分の者が着用する例である。

【巳の刻】　ミのコク　其の品の猶新しい事をいふ。巳の刻（午前十時）は、一日の中央の午の刻（正午）に比してまだ早いから、物の製せられてより廢滅に到るまでを一日の長さに比べて、まだ中古にもならない程度のものを「巳の刻なるもの」といつたのである。

【透間もなく召され】　ひし〳〵と召され。いかめしく召され。等の意。嚴重に武裝をとゝのへるのである。

【龍頭の兜】　タツガラのカブト　冑の眞向より八幡座にかけて龍の形をした前立をつけた兜をいふ。

【小長刀】　コナギナタ　長刀の長大なるを大長刀といふに對し、普通なるを小長刀といふ。長刀とは刄の長く廣くて反つたのに柄をつけた武器。「三尺五寸」は刀身の長さをいふ。時代によつて大さに差はあるが、江戸時代に入つて後は普通二尺前後となり、柄を長くした。戰國時代は、刀身と柄とが大てい同じ長さのものが多かつたらしい。

【東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し、黑煙を立て、斬つて廻らせ給ふに】

大塔宮の勇猛果敢な御奮戰ぶりが簡潔な表現の上に響き出てゐる。「東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し」といふ對句も感じに乘つてくるやうに思ふ。「黑煙を立て」といふ描寫も戰鬪の猛烈さを髣髴せしめるものがある。

【木の葉の風に散るが如く】　巧妙な譬喩である。下の「四方の谷へさつとひく」と互に響き合つてゐる。但し幾分勢に乘りすぎてゐるといふ感じも伴ふかと思ふ。

【なみゐる】　並び居。「宮はなみゐさせ給ひ」とあるが、宮御一人であるから「宮は兵どもと並み居させ給ひ」の意に取るべきである。

【大幕】　外幕の別名。布帛を横に縫ひ合せた陣幕。之に對して布帛を竪に縫ひ合せたのを內幕又は小幕といふ。

「打揚げて」は、大幕を高々としぼり上げることをいふ。

【宮の御鎧に立つ所の矢七筋……敷皮の上に立ちながら大盃を三度傾けさせ給へば】

金枝玉葉高貴の御身をかういふ境にさらし給ひ、かゝる危險を冒し給ふかと思ふと誠に恐れ多い極みである。それにしても宮の御勇猛さはたゞ驚嘆し奉るの外はない。「血の流るゝこと瀧の如し」といふ誇張法もこの場の情景に調和して、よく据つてゐると思ふ。

【二の御腕】　ニのオンウデ　肩と肘との間を二の腕といふ。

【敷皮】　シキガハ　陣中で將士が地上又は床几上に敷いて坐した獸皮製の敷物。

【木寺相模】　コデラサガミ　大塔宮の近臣。傳未詳。

【戈鋋劍戟を降らすこと云々】　當時行はれた佛教的な譬物——多分、阿修羅と帝釋の爭鬪をうたつたものであらう——の文句であらうと思はれるが、出典はよく分らぬ。

この二句對句法をなして居る。「戈鋋等を降らし磐石を飛ばす」は修羅の狀態。「彼がために破らる」の「彼」は、戈鋋等をさす。自らの武器で自らが破られるのである。

【戈鋋】　クワセン　ほこ。戈・戟・劍、何れも國訓は「ほこ」であるが、「戈」は双刃の劔身で柄が長く、「鋋」は同じ劔身であるが、鐵の柄で短い。「戟」は、刃に上に向つた兩枝があり、兩鎌槍の如きものをいふ。「戈鋋劍戟」とは「ほこ」や「つるぎ」の意。

【磐石】　バンジヤク　大なる岩。「磐石岩」とは磐石や岩やの意。

【天帝】　テンテイ　梵語 Sakradvendra の譯。帝釋天に同じ。須彌山の頂上・忉利天の中央なる喜見城に住し、四天王及び他の三十三天を領して、佛法歸依の人間を守り、阿修羅の軍を征する天王。印度神話に出づ。

【修羅】　シユラ　梵語 Asura 阿修羅の略。惡鬼のこと。楞嚴經によれば阿修羅に四種ある。こゝのは其の第三種に屬し、天帝と權力を爭ふものとしてある。

【はやし】　元來は拍子の意。「はやしをあげる」といふ時には、「歌謠を大聲にうたひあげる」ことをいつて、單に拍子をとる意には用ひない。平家物語の「殿上闇討」の條に「伊勢の瓶子はすがめなりとぞはやされける」とか「人々拍子をかへてあな黑々、黑き頭かな……とはやされける」等のはやすも、歌謠をうたひあげる意である。

【漢・楚の鴻門に會せし時】　劉邦と項羽とが共に楚の懷王を奉じて秦を伐つた時、邦は先づ秦に入つて秦王を降し、函谷關を守つてゐると、羽は後れ來つて入ることが出來ない。激怒の餘り、邦を伐たうと企てる。邦は張良等を隨へ鴻門（陝西省西安府臨潼縣）に至つて羽に陳謝した。羽の謀臣范增の謀で、酒間に項莊が立つて劍を以て舞ひ、隙を得て邦を殺さうとしたが、邦に好意を有する項伯も亦劍を拔いて舞ひ、身を以て邦をかばうた。邦の臣樊噲が、主の身邊危しと聞いて、楯を擁して軍門に入り、目を嗔らして羽を睨んだ。其の時頭髮は上指し目眥は盡く裂けたといふ。かくて間を見て邦は無事にそこを脫出した。

【帷幕】　キバク　まく。たれぬの。周禮、註「在レ旁曰レ帷、在レ上曰レ幕。」

【合戰急なり】　「急」は危急の意。こゝは激甚の意をも含めて解すべきである。

【鬨】　トキ　多人數のものが一同に聲をあげること。開戰の合圖に昔時は鬨をあげた。こゝは合戰中の喚聲を鬨の聲といつてゐる。

【鎧に立つところの矢十六筋】　夥しく矢の立つてゐること。

「十六筋」といひ切つたのは感じを鮮明に表し得てゐると思ふ。

【枯野に殘る冬草の……折りかけて】　極めて自然な、詩的な譬喩。律動的な速度が感ぜられる。

【折りかけて】　敵に射られた矢が折れて鎧にかゝつてゐることを勇ましく言つたもの。かういふ言ひ方を武者言葉と稱する。

【追手】　大手に同じ。

【一の城戸】　イチのキド　一番外の城門をいふ。それより、本陣に近くなるにつれて、二の城戸、三の城戸といふ。但し、城門でなくても、防禦用の柵などの門口をもキドと呼ぶ例が多い。こゝは、むしろ後者の意である。

【いふがひなく】　ふがひなく。

【すさまじく聞え候】　「すさまじ」に流布本は「冷じ」の文字を宛ててゐるが、こゝは、「興ざめる」意ではなく、「闌にはげしく」の意に解すべきである。

【此の城にて功を立てんこと】　これも武者言葉の一例。「この城を保つこと」の意であるが、それを勇ましく積極的にいつたものである。

【御所】　もと天皇・上皇・三后等の御住所、轉じては其の人を指していふ語であつたが、後世は轉じて、こゝにいつてあるやうに（一）親王及びその人を指し、又（二）大臣以上。（三）將軍。（四）關東公方。（五）諸大名中の重なるものを指して言つた。此等は多く家臣の僭稱から起つたのであらう。

【かさに取上げて】　勢に乘じて。「かさ」はもと重つたもの　高さ及び大さをいひ、轉じて、高き處、上の方の意となり、更に轉じて優勢の意となつた。「かさにかゝる」「かさにのる」「かさにまはる」などともいふ。

【恐あること】　恐多いこと。

【御鎧直垂】　御鎧と御直垂の意ではない。鎧の下に着用する直垂卽ち鎧直垂のことである。前の「赤地の錦の鎧直垂に」とある語に應ずる。

【物具】　モノノグ　元來は、一般に道具調度をいつたが、後には武具の意となり特に甲冑の意に用ひられるに到つた。こゝは甲冑をさす。

【諱】　イミナ　實名。（一）臣子が君父の死後その生前の名を憚つて言はぬといふ、支那の風習から、生前の實名を死後より「イミナ」と稱し、（二）轉じて、單に實名の意に用ひ、（三）又諡の意にも用ひる。こゝは（二）の意。いみ憚るべき名といふ意。

【冒して】　ヲカして　「諱を冒す」は敢て尊名を名乘るの意。臣として君の名を詐稱する如きことは恐多いことであるが、危急の場合なれば、なし難きを敢てするといふ意。

【進らせ】　マヰらせ。
【ともかくもならめ】　いかやうにもならう。「め」は上の「こそ」に對する結びで、助動詞「む」の已然形。
【義光詞を荒らかにして】　危急の間に宮の御心を勵まし奉り、大局に眼を轉じ奉らしめる爲の非常手段である。宮の御高恩に對する感泣の現れに外ならぬ。
【淺ましき】「淺まし」は驚き呆れる意を表す形容詞。ここでは、「けしからぬ」又は「情ない」「ぐうたらな」などの意。
【漢の高祖云々】　項羽が劉邦を滎陽（河南省開封府滎澤縣の西南十七里）に圍んで、劉邦が危かつた時、その臣紀信が劉邦に建言して、「事急なり、請ふ、楚を誑かん」と申出で、漢王の車に乘り、東門から出て、「食盡きて、漢王出で降る」といつたので、楚人は皆城東に行つて之を觀た。漢王はその間に乘じて西門より逃れ出ることが出來た。項羽は誑れたのを知り、怒つて紀信を燒殺したといふ。右は修辭上一種の引用法である。戰記物語の作者の好んで用ひたものである。
【いふがひなき御所存】　腑甲斐ないお考へ。
【天下の大事】　北條氏を誅し幕府を亡して、天皇親政の御代とせんとせられた大事業をさす。
【うたてけれ】　笑止千萬である。上の「こそ」に對する結びで「うたてし」の已然形である。
【上帶】　ウハオビ　鎧を着して後、胴と草擢との接合點――腰の上に當る所――の上に卷く太い帶である。前方で結ぶ。これに小太刀を差し、大太刀の緒を結びつける。
【後世】　ゴセ　來世。「後世を弔ふ」は來世の冥福を祈ること。
【冥途】　メイド　あの世。冥は暗。くらき道の意からこの意となる。佛說で死者の魂の行く處としてある。
【岐】　チマタ　道又（ちまた）の意といふ。（一）道の分岐點。（二）道筋。（三）場所。こゝは（二）の意。
【高櫓】　タカヤグラ　櫓とは展望又は矢・石發射の場所として城門又は城壁等の上に設けた高樓。
【今はかう】　もうこれでよい。「かう」は「かく」の音便。
【狹間】　サマ　城の櫓・塀等にあけて、展望又は矢・石發射の爲に設けた小間隙。
【狹間の板を切落し】　狹間を作つてあつた部分の板を切り落して、敵前に全身を露出するのである。
【大音聲】　ダイオンジヤウ。
【一品】　イツポン　親王に賜はる位階の最上級。大寶令に親王四階（一品より四品に至る）の制を定められた。明治二十二年憲法制定の際この制度は廢せられた。
【恨を泉下に報ぜん爲】　恨を冥途から報いんが爲に。泉下は黃泉の下であつて死者の行くといふ處。
【鎧直垂の袴ばかりに】　鎧直垂の上着をも脫ぎ捨て、袴だけになつたことをいふ。
【練貫】　ネリヌキ　經（タテ）を生絲、緯（ヨコ）を練絲で織つた絹。
【二小袖】　フタツコソデ　二重（フタヘ）の小袖。小袖は綿の入つた絹布の衣服をいふ。それを二重かさねて着用するを「二つ小袖」といふ。
【押膚脫ぐ】　オシハダヌぐ　「押」は强めの意を加へる接頭語、膚脫ぎになる意。
【そば腹】　側腹（ソバラ）の意。脇腹をいふ。

2　文の構成

第一節　二五頁一行―九行　敵の不意打と大塔宮の御奮戰。
第二節　二五頁九行―二六頁一〇行　最後の御酒宴。
第三節　二六頁一一行―三〇頁三行　義光の獻策とその壯烈な最後。
第四節　三〇頁四行―終　義光の謀圖に當つて大塔宮虎口を脫し給ふこと。

3　文意

村上義光が吉野山の戰に於て官軍の危機迫るや、自ら進んで大塔宮の御身代りに立たんことを乞ひ奉り、賊を欺き自刄して首尾よく宮を落し奉つた壯烈な犧牲的行爲を述べた文。

4　鑑賞批評

華麗暢達な筆致の中に決戰の有樣及び義光の最後が鮮かに描き出されてゐる。冒頭より既に引入れられた緊張感は義光

【太刀を口に銜へて】　自ら刺す方法である。口に銜へて、うつぶせに倒れゝば、自然と刀は頸部を貫通するのである。自刺の力の弱つた時に用ひる自殺法の一。
【すはや】　そりや。事の意外に驚く時發する感嘆詞。
【御自害あるは】「は」は感嘆詞。
【御首】　オンシルシ　但し、流布本には、オンクビと訓じてある。
【天の川】　テンのカハ　大和吉野郡吉野の奧にある。十津川の上流の土地。今はテンカハと呼んでゐる。此の川に沿うて下れば熊野に出られる。

の最期の場面に至つてその最高潮に達する。そして高まり極まつた感激にひたりつゝ漸く安堵の胸を撫下して、虎口を脱し給ふ親王の御後姿を見送り奉るのである。以下順を逐うて鑑賞を進めよう。

「さる程に……打つて懸りける間」といふ冒頭の二行はいかにも切迫感を表してゐる。宮の御血戰の勇猛果敢さ、鬼神も面を向くべくもない。敵の退却に間を得て最後の御酒宴を行はせ給ふ宮の御胸中には生死に動ぜぬ從容たる武人の態度が拜察されて床しい限りである。御負傷を物ともし給はぬ宮の御剛膽さよ。席上立つて舞ふ木寺相模の振舞の床しさ、雄雄しさ、この君にしてこの臣ありの感じが深く胸に迫る。

かゝる場面に村上義光が登場して起死回生の策を宮に獻ずる。この策たるや我が身を殺すことを前提とする悲壯な謀である。義光は必ず平常より今日あるを豫想し之に處すべき道を胸中ひそかに固めてゐたに相違ない。その深謀遠慮と忠勇義烈の精神は宮への言上の中にさながらに表れてゐる。「義光詞を荒らかにして」言上する有樣は何といふ忠節に徹した態度であらう。之に對する宮の御言葉の忝けなさ、これこそ我が國三千年の歴史を貫く君臣間の關係を如實に示すものでなくて何であらう。

宮を落し奉つて今は思殘すことなしと櫓に上り敵軍の前に身を露し、從容として自害する義光の最後の壯烈さ、息も止るばかりの感じに襲はれる。「四方の圍を解きて一所に集る」といふ歴史的現在の手法はこゝではよく效果をあげて集中の感を出してゐると思ふ。

三　備　考

1　指導研究

太平記の文體に習熟させ、又軍記物語の特性を把握させる爲に「正行の參內」と二篇を列次した。かういふ文體は特に音讀を必要とする。華麗暢達の文、朗々誦すべく、讀誦の間に自らその意味內容が把握せられるであらう。

2　參　考

(一)挿　繪。

村上義光が芋瀨莊司の手より錦旗を奪取してゐる圖。繪詞に曰、「村上義光錦の御旗を奪返し芋瀨が從卒を抛打怪力を顯す圖。」

(二)參考文獻拔萃。

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎の勢にて、大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押寄せ、同十八日の卯の尅より兩陣互に矢合して、入替へ〳〵攻め戰ふ。夜晝七日が間、息もつかず相戰へども、城の體少しもよわられば寄手の兵多くは退屈してぞ見えたりける。爰に此山の案內者とて一方へ向けられたりける吉野の執行岩菊丸の下知により、案內知りたる兵百五十人をすぐつて、其日の暮程より金峯山に廻して、岩を傳ひ、谷を上るに、案の如く山の峻しきを憑みけるにや、防ぐべき兵一人もなし。やがて夜も明け合圖の頃にもなりげれば　大手五萬餘騎、三方より攻寄せて攻上る。吉野の大衆五百餘人、攻口におり合つて防ぎ戰ふ。斯る處に金峯山より廻りたる搦手の兵百五十人、愛染寶塔より下り下つて、在々所々に火をかけて、鬨の聲をぞ揚げたりける。吉野の大衆前後の敵を防ぎかねて、或は自ら腹を搔切つて猛火の中へ走入つて死ぬるもあり、或は向ふ敵に引組んで、さしちがへて共に死ぬるもあり。思ひ〳〵に討死をしける程に、大手の堀一重は死人に埋りて平地になる。さる程に搦手の兵思ひもよらず……。（太平記卷七、吉野の城軍の事）

補　材

「事しあらば」の歌。

大意　一旦君國の大事が起つたならば、我が大君の御爲に人々も、この櫻のいさぎよく散る如く、身命を捧ぐべきである。

この歌は櫻花を詠じた作であるが、「かくこそ」を、「村上義光の如く」と解して教授するも良からう。

作者　佐久良東雄

幕末勤王の志士。文化八年に茨城縣新治郡浦須村に生れた。父を飯島平藏といふ。九歳佛門に入り僧となる。國學を研究し、藤田東湖等水戸勤王の志士との交り厚く、平田篤胤の門に入つた。三十三歳の時、佛門を脱して還俗し、姓名を佐久良靱負と改めた。東雄（アヅマヲ）はその雅號であり、佐久良は櫻に因んだものである。それより勤王志士との交は益々深く、三十五歳京都に上り、又大坂の座摩神社の神官と交り、又京都に上り妙法院宮にも仕へた。萬延元年櫻田門外の變あり、水戸浪士の大坂に來る者あり、東雄これを庇護した。爲に同年三月二十三日幕吏に捕へられ江戸に護送せられて傳馬町の獄に投ぜられたが、六月二十七日、自ら食を絶つて獄死した。明治三十一年其の功を嘉せられて從四位を追贈せられた。

「散るもよし」の歌。

大意　吉野山の山櫻が散る有樣はいかにも潔いが、櫻花に比せられた武士の身が、大君の御爲に忠誠を勵み、時あつては我身を捨てることも固より本望とする所である。

作者　山田公章。

この二首は何れも憂國の至誠を吐露したものである。芳賀博士の「月雪花」の花の部より採つた。

五　正行の參內

一　解　題

1　出　典

太平記卷二十六「正行吉野へ參る事」の全文である。

後醍醐天皇が延元四年（一九九九）八月吉野の行宮で崩御遊ばされたので、後村上天皇が御卽位になつた。脇屋義助は諸方に轉戰し、伊豫に赴いて病の爲に歿した。楠木正行ひとり皇事に勤め、屢〻敵を破つたけれども、高師直と四條縄手に戰つて戰死を遂げた。師直は勢に乘じて吉野の行在を犯し奉つたので、主上は賀名生（あなふ）に遷幸遊ばされた。さういふ事變の際、決死の首途に吉野へ參內した正行の上を敍したのが本文である。

2　作　者

前課作者參照。

3　主眼及び採擇の趣旨

楠公父子の事蹟は日本精神の精華として永遠に我が國民を感奮興起せしめずにはゐない。本課は小楠公の忠誠を最も如實に表現した文章である。この精神を傳へて國民的陶冶に供へたい。又正行公の至誠溢れた言上と、それに對する綸言の忝きは、やがて我が國史を貫く君臣の關係をさながらに示す具體的事例である。この點をも明確に把握させたい。

猶本課は前課に打添へて軍書に悲しい吉野山の內容をなす今一つの感銘深い物語を擧げたのである。

二　解　釋

1　語　釋

【正行】　マサツラ　楠木正行。正成の長子。正時・正儀の兄。父正成戰死の時、年十一歳であつたが、その遺訓を守つて賊軍を討伐するを自己の任とし、嬉戯する間にも之を忘れなかつた。後醍醐天皇の花山院を逃れて賀名生に幸し給ふや和田正朝等と來り謁し、聖駕を擁して吉野に入り、官軍の勢が再び振つた。天皇は正成の功を思召され、正行を正四位下に敍し、帶刀となし、父の官をついで檢非違使左衞門尉に任じ、河内守を兼ねしめられた。天皇崩御に及び、群臣意氣沮喪して逃散しようとしたが、正行が兵二千を率ゐて來衞したので衆情大いに安んじた。正平二年八月足利尊氏の將細川顯氏を河内池尻に破り、九月同じく顯氏の軍を同國藤井寺に破り十一月には更に細川・山名の軍を大いに安部野に破つた。是に於て尊氏は高師直・師泰兄弟を將とし大擧吉野に向はせた。正行は行宮に詣つて天皇に拜謁し、正平三年(二〇〇八)正月師直兄弟と四條縄手に戰ひ利あらずして弟正時と刺違へて死んだ。年二十三。別格官幣社四條畷神宮に祀られ、明治三十年從二位を贈られた。世に小楠公と稱せられる。

【安部野の合戰】　アベノのカツセン　藤井寺の戰（四九頁「兩度の合戰」の項參照）の後、正行の勢が日に盛になつたので、尊氏は細川顯氏　山名時氏をして安部野に出陣せしめ、正平二年十一月、時氏は住吉に顯氏は天王寺に陣した。二十六日の曉天正行は五百餘騎を率ゐ、先づ住吉の敵を追ひ出さうと、石津の在家に火を懸けて、瓜生野の北より押寄せた。かくて戰は安部・瓜生兩野の間に行はれたが、時氏先づ創を被り、顯氏の陣も亦從つて亂れ、先を爭つて渡邊橋を渡らうとし、溺れる者が多數であつた。安部野は又安倍野に作る。天王寺・住吉附近一帶の砂丘地で今、大阪市西成區及び住吉區に屬する。

【霜月】　シモツキ　舊曆十一月の異稱。新曆の略十二月に當る。

【渡邊の橋】　ワタナベのハシ　今の大阪市東區天滿橋と天神橋との間にあつたといふ。淀川に架した橋。

【せき落されて】　通路をふさがれ河の中に落されて。

【かひなき命】　助けられて詮のない命。武人的な立場からの言葉であることに注意。華々しく討死をもせず、をめ〳〵と敵に救はれた腑甲斐なさの心持を含む。

【秋の霜……】　寒氣の酷烈なことを、美文的對句を以て示したのである。霜は冬のものであるが、漢文では「秋霜」と熟合させて用ひる例が多いから、それに從つた用法である。

【小袖】　コソデ　衣服の一種。廣袖に對して稱する名。もと平安中期頃から、朝服の下著として著用された筒袖のことである。鎌倉時代頃からは、直垂、素袍の大袖に比して、袖の小さい下著として著用され、江戸時代以後表著として著用されることゝなつた。絹布の綿入である。江戸時代は布子（木綿の綿入）に對して、上等のものとして、禮服に用ひた。こゝでは、鎧直垂の下に著用したものをさしてゐる。

【馬を引き】　馬を引出物として與へて。

【物の具】　モノのグ　(一)調度　道具。(二)鎧、具足。こゝは(二)の意。

【色代】　シキダイ　挨拶すること。會釋すること。

【敵ながら】　敵とはいふものゝ。

【心を通ぜんことを思ひ】　好意を寄せて内通しようと思ひ。

【やがて彼の手に屬して】　「やがて」は「そのまゝ」の意。

【四條縄手の合戰】　「正行」の項を見よ。

四條畷は今の大阪府河内郡縄手村四條のあたり一帶の田野。戰はこの田野から北方飯盛山にかけて行はれ、正行は飯盛山麓で戰死したので、今同山の西腹に正行を祀る四條畷神社がある。畷（縄手）とは「あぜみち」をいふ。

【兩度の合戰】　藤井寺の戰及び安部野の戰。

藤井寺の戰とは正平二年九月十七日細川顯氏が正行を討たうとして、兵三千を率ゐて河内國南河内郡の藤井寺に到着したところを、正行が七百餘騎を以て譽田八幡宮の後から打つて出で大いに之を破つた戰。

藤井寺は現大阪府南河内郡藤井寺町藤井寺で東南約一粁を隔てゝ譽田八幡宮がある。

【無下】　ムゲ　一向に。全く。

【將軍】　こゝでは足利尊氏のこと。延元三年尊氏は光明院によつて征夷大將軍に任ぜられた。但し尊氏を將軍とすることは大義名分上からは無論否定さるべきであるが太平記の作者はたゞ當時のいひ習はしに從つたのである。

「將軍」は(一)一軍を統率指揮する官。又その人。大將。(二)勅命を奉じて軍隊を率ゐ、叛徒を討伐し、又は外夷を征服する職名。初めは臨時に派遣され、四道將軍陸奥鎮東將軍などの如く、その職掌を冠稱したが、源頼朝が征夷大將軍に任ぜられてから、將軍は征夷大將軍の專稱となり、幕府主宰者の常職となつた。こゝは(二)の意。

【左兵衞督】　サヒヤウエノカミ　こゝでは足利直義。延元三年左兵衞督征夷副將軍となつた。

「左兵衞督」は左兵衞府の長官。「兵衞府」は左右あつて

宣陽門・陰明門以外を警衛し、行幸に供奉して前後の警衛に當るのを任務とした。

【熱湯にて手を洗ふが如し】　巧妙な譬喩である。狼狽して熱湯を水とまちがへて手を洗はうとし、火傷を負うて更に一層甚しく狼狽する意である。恐らく、太平記作者の創造した譬喩であらう。

【末々の源氏】　足利氏は源氏である。それでかくいつたものと思はれる。「末々」とは、源氏であり足利氏の命のまゝに動くものであつても、微力少兵のもの等をいつたものと思ふ。

【催し勢】　モヨホしゼイ　驅り催して集めた新付の軍勢。

【叶ふべしとも覺えず】　「叶ふ」は、うまくゆく、成就する等の意。到底成功しさうには思はれないといふのである。

【執事】　シツジ　こゝでは足利將軍の頃、執政の職。後に管領といふ。尙、この他に（一）高官・貴人の家にあつて事務を執行するもの。（二）嵯峨天皇の時に置かれた官職で内豎所の別當の次。（三）院司・攝關家で事務をとつたもの。（四）鎌倉時代政所・問注所等の職名。（五）鎌倉時代執權の異稱。（六）若年寄の異稱。等をもいふことがある。

【高武藏守師直】　カウノムサシノカミモロナホ　足利氏の世臣。尊氏の執事となり、元弘中尊氏に從つて北條氏を滅し、功を以て武藏守となつた。延元元年また尊氏に從つて闕を犯し、同三年には北畠顯家を安部野に殺した。正平三年には楠木正行を四條畷に破り、進んで吉野を犯し行宮に火を放つた。かく戰功が著しかつたので權威比なく驕を極めた結果、直義と隙を生じ、尊氏に迫つて直義を除かせた。直義は吉野朝に降つて、尊氏を攻めたが、後兄弟和睦し、師直兄弟を殺した。時に正平六年であつた。師直は功を恃んで權を專らにし、且つ性淫逸で放恣度なく、衆人怨嗟の的となつてゐた。

【越後守師泰】　エチゴノカミモロヤス　師直の弟。越後守となり尊氏の侍所となつた。延元元年新田義貞を越前國金崎城に圍んで之を陷れ、三年北畠顯家と美濃に戰ひ、正平三年四條畷役後楠木正儀と河内・和泉に戰つた。功を恃んで倨傲、兄に從つて直義と戰つたが尊氏・直義の和成つて後、師直と共に殺された。

【……を向けられる】　尊氏等の行動に敬語の助動詞「られ」を附けたのは、作者が大義名分の明確な意識の上に立つた筆づかひではなく尊氏を「將軍」と稱した立場から世俗に從つて附けたのである。

【淀】　現京都府綴喜郡淀町。淀川の北岸に位し、古來京都南方の要地。

【八幡】　現京都府綴喜郡八幡町。木津川に沿ひ、中央に男山が聳え、山上には岩清水八幡宮がある。

【帶刀】　タテハキ　「たちはき」の音便。中古東宮坊の侍衛の士で、舍人の中の武術に優れたものを任じた。

【舍弟】　家の弟。人に對して己の弟の稱。こゝは「弟」といふに同じい。

【正時】　正成の第二子。四條畷の戰に奮戰して身に數矢を受け遂に兄正行と刺し違へて死んだ。大正三年十一月贈正四位。

【吉野の皇居】　延元元年十二月、後醍醐天皇皇居を吉野に移し給ふや、初め吉水院に入らせられ、後實城院に移り給うた。四年天皇崩御、後村上天皇御踐祚。この地に皇居を定められたのは前後十三年間で、正平三年後村上天皇が高師直の兵を避けて紀伊に幸し給うてからは多く賀名生に在したが、この地も吉野の奥である所から、併せて吉野の行宮と呼んでゐる。

【四條中納言隆資】　シデウチユウナゴンタカスケ　藤原隆資。權中納言に任じ、檢非違使別當となる。正中二年後醍醐天皇が北條氏討伐を圖り給うた時には、日野資朝等と共にその主謀者であつた。元弘元年の變にもこれに參畫し、天皇の笠置山に行幸せられた時にも供奉し奉り、笠置陷落後僧となつたが元弘三年還俗して職に復し、建武中興の政にも與つた。延元元年尊氏が京都を侵した時、新田義貞と共に之を防いだが利あらず、紀伊に走つた。後吉野朝廷に奉仕し、後醍醐天皇の崩後、後村上天皇を輔佐し奉つて政務を司り、正平二年楠正行戰死し、高師直吉野を犯すや、天皇を奉じて賀名生に逃れた。後、大納言に任ぜられた。同七年足利義詮が後村上天皇の八幡の行宮を犯した時、兵三百を率ゐ、天皇を奉じて圍を破つて南進したが追擊し來る敵兵と奮戰して斃れた。詔して左大臣を贈られた。

【隆資を以て申しけるは】　隆資卿を傳奏として申しけるはの意。正行は直接言上出來得る身分の者でないから、隆資卿の傳奏で申し上げるのである。

【尪弱】　ワウジヤク　かよわいこと。但し、ここは「微力」といふ程の意。

〔尪〕　尤・尪の俗字。（一）まがつたすね。（二）せむし。（三）よわい。こゝは（三）の意。

【宸襟】　シンキン　天皇の御心。

〔宸〕　（一）のき。（二）奥深い室。（三）後世帝王の居所の專稱。轉じて天子の事に冠する語。「宸慮」「宸筆」。

〔襟〕　えり。轉じてえりの當る所、卽ちむね、更に心を指す。「胸襟」「襟度」。

【危きを見て命を致す】　アヤフきをミてメイをイタす　國家の危急に當つて、身命を抛つて力を盡す。

【かねて思ひ定め候ひけるかに依つて】　かく「候ひけるによつて」といつてもいゝ所に、疑問の助詞「か」を入れたのは、斷定を避けることによつて語調に丁寧さを加へたもので、長上の方に申上げる場合などに用ひられた。

【討死仕り候ひをはんぬ】　討死致してしまひました。「をはんぬ」は「をはりぬ」の音便。

【罷り成り】　マカリナリ　こゝの「罷り」は或る語の上に添へて、謙遜又は強めを表すはたらきをする接頭語である。「十一歳に成り候を」といふに等しい。

【扶持】　フヂ　たすけ支へること。「フチ」と讀めば、昔、米で給與した士大夫の祿。

【君を御代に卽け參らせよ】　「御代に卽ける」は普通には御位に卽けるといふ意であるが、こゝでは、その意味では通らない。「君の御代を安泰の御代になし奉れ」の意でなくてはならない。

【我と】　自分で。自ら。

【手を碎き】　「種々苦心をこらし」「手だてをめぐらし」等の意。

【且は……且は】　一方では……又一方では。

【武略】　軍事上のはかりごと。轉じて軍事的な才能、才幹をいふ。

【武略のいふかひなき謗に落つ】　武略に於て言ひがひなき者よとの世の謗を蒙る。

【有待の身】　ウダイのミ　「有待」は、互に他と相待つて存在する有差別無常の世界をいふ佛語である。「有待の身」は、生滅無常の娑婆世界にある身。卽ち現世の凡夫の身をいふ。

【たゞ】　こゝの「たゞ」は語調を強めるために置かれた語である。

【かけあひ】　駈け合ひ。對戰して。

【雌雄】　シユウ　こゝでは勝負の意。

【龍顏】　リヨウガン・リユウガン　天子の御顏。

〔龍〕　(一)たつ。想像上の神靈な動物。(二)轉じて、天子に關する物事をいふ。「龍駕」「龍體」。

【申しも敢へず】　申しも上げおほせず。奏上し終らぬうちにはや。

【義心】　忠義の心。

【傳奏】　デンソウ・テンソウ　親王・攝家及び武家などの奏請を天皇又は上皇に取次ぎ奉ることを掌る職。こゝでは隆資をさす。

【まづ直衣の袖をぞ云々】　主語は傳奏隆資である。

〔直衣〕　ノオシ　中古以來貴族の平服。三位以上の人に限り、勅許を得て、直衣にて參内を許されることがある。

【主上】　シユジヤウ　天皇を尊んで呼び奉る語。こゝでは第九十七代後村上天皇。御諱は義良。後醍醐天皇第八皇子（一說第七）。御母は新待賢門院廉子。嘉曆三年御降誕。元弘三年六歳の御時、陸奥守北畠顯家に奉ぜられ、東北を鎭めさせられた。延元四足三月皇太子に立たせられ、八月十五日後醍醐天皇の禪を受け給ひ、同十月吉野行宮に於て御卽位。先帝の御志をついで吉野朝の興隆に御心を注がせられ、正平二十三年（二〇二八）三月十一日攝津住吉行宮に崩御し給うた。寶算四十一。御在位二十九年。天皇は兵馬倥偬の間にもなほ文事に御心を寄せ給ひ、源氏物語の御考說もあり、御製の新葉和歌集に收められたものも多い。

【南殿】　ナデン　紫宸殿の別稱。平安京内裏の正殿。内裏の中央より少し南にある。但しこゝは假の皇居の南殿であることはいふまでもない。

【御簾】　ミス　「すだれ」の敬語。細く削つた竹で編み、綾・緞子などで緣を取つたもの。

【照臨】　セウリン　元來は、月が上からてらしのぞむことをいふ語であるが、轉じて「神佛又は君主がみそなはすこと。」こゝは、後者の意。

【叡慮】　エイリヨ　天子のみこゝろ。

〔叡〕　深くあきらか、さとしの意で、「聖」と同じく天子のことを申す。「叡聞」「叡覽」。

【氣を屈せしむ】　意氣を挫折せしめる。

【憤を慰する】　イキドホリを平する　天子が御憤をお慰めになつたこと。

【累代】　ルキダイ　代々。〔累〕かさねる。「累代の武功」は、父正成及び子正行等の武功。

【神妙】　シンメウ　こゝは健氣な所法を褒める語。天晴なり。

【勢を盡くして】　ゼイをツくして　勢をゼイと訓ずる時は軍勢の意。

【進退度に當り、變化機に應ずる事】　ほどよく進退懸引をし、時機を見て巧に變化の妙をつくすこと。

【勇士の心とする所】　勇士が最も大切として心得てゐる事。

【手を下すべきに非ずといへども】　流布本及び、水戸光圀が異本九本を以て校異を行はしめた參考太平記にも、この本文の如くであるが、神田本には「今度命を下すべきにあらずといへども」となつて居る。神田本によつてのみ、本文の意味が解き得る。卽ち、「今度の合戰について、わざ〳〵自分（天皇）が命を下す（命を全うすべしとの命令）べき必要はないのであるが」の意である。「進退度に當り、變化機に應ずる」といふ要領は、勇士たるものは充分に心得てゐる筈だから、わざ〳〵朕が差出がましくいふ必要はないのであるが、といふ心持である。

從つて、此の教課書の本文の「手を下す」の「手」を、「合戰の手に關すする命令」の意として、生徒に教授せられ度い。

【股肱】　ココウ　最も賴みとする臣。

【兎角の勅答に及ばず】　何等勅答を申し上げず。

【和田新發意】　ワダシンボチ　名は賢秀。楠木氏の一族。幼くて剃髪し新發意と稱した。四條畷の戰に奮戰して死す。大正八年十一月特に從四位を贈られた。〔新發意〕　發心して新に佛門に入つた人。今道心。

【舍弟新兵衞】　和田正朝。賢秀の弟。兵衞尉となり新兵衞と稱した。正行に從つて四條畷に戰死す。大正八年十一月贈從四位。

【難儀】　難戰難軍の意。

【名字】　ミヤウジ　こゝでは氏名といふ程の意。

【過去帳】　寺院で、壇家の死者の法名・死亡年月日などを記しおく帳簿。靈簿・鬼籍。

「過去帳に書き連ね」　過去帳として書き連ねの意。板壁は本來の過去帳ではないが、それを過去帳として書き連ねるのである。

【かへらじとの歌】　豫め死を覺悟して生還を期しない身であるから、死者の列に入るべき名前を書き留めて置くといふ意。

「かへらじ」　自分の生還しないのを射た矢の返らないことにかけた。

「じ」まい。「じ」を第一稱の動作につける時は、否定の意志を示す意となる。

「梓弓」　アヅサユミ　(一)梓の木で製した弓。(二)こゝは下の「いる」にかゝる枕詞。上の「かへらじ」の「かへる」といふ語とも緣語となつてゐる。

「いる」「入る」に「射る」をかけ、弓の緣語とした。

【逆修】　ギヤクシュ　現代は多くギヤクシウと訓んでゐる。ギヤクジュとするのは誤。(一)生前に逆め我が死後の佛事を修すること。「豫修」。(二)俗に誤つて、少者が先に死んで、老者がその後世を弔ふこと。こゝは(一)の意である。

【髻髮を切つて】　自ら髻髮を切ることが何故に逆修の意味を持つかといふに、これは剃髪出家の形式を模した爲である。此世に於て出家すれば、後世に善所に生れる功德を得るのみでなく、「九族天に生ず」といふ功德あるものと佛敎ではいはれてゐる。

第二節　三二頁一行―同頁十一行　高師直兄弟を大將とする賊の大軍が大擧襲來したこと。

第三節　三二頁十二行―三五頁七行　賊軍を迎ふるに當つて、正行吉野皇居に御暇乞に參內したこと。

第四節　三五頁八行―終　更に先帝の御廟を拜し、如意輪堂の壁板に辭世を遺し、敵陣へ向つたこと。

3　文意

死を決して賊の大軍を迎へ擊たうとした正行が、吉野の皇居に御暇乞に參內して厚い勅言を蒙り、感涙に咽んで退出し辭世の歌を如意輪堂の壁に書きつけて敵陣に向つたこと。

4　鑑賞批評

この文には太平記一般に通ずる文章の華麗さが殆んど影を潛めてどことなく沈痛の氣が漂うてゐる。それはこの文が正行の悲壯な心境をよく寫し得てゐる爲であると思ふ。正行の誠忠と決心とを聞し召されて、賴母しくもあはれにみそなはしたであらう主上の御胸中が偲ばれる。〔「朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、兎角の勅答に及ばず、たゞこれを最後の參內なりと思ひ定めて退出す。〕讀み來つてこゝに至れば何人も涙なきを得ない。御叡慮も、正行の胸中も、一語一語の上に響き出てゐる。

三　備考

1　指導研究

本課の主眼はいふまでもなく正行の忠節にある。湊川の戰に父正成に殉ぜんことを願うた正行が、生き殘つて吉野朝を守護し奉れといふ父の遺命に從つて、大義の爲め去難きを忍んで故鄕河內に歸つた物語は永く國民の胸に感銘新たなるものがある。河內に歸つた正行は嬉戲の間にも朝敵討伐を念とし、長ずるに及んで同志を糾合して兵を養ひ武を練つて吉野朝

の再興に肝膽を碎いたのであつた。正行の武威は次第に振ひ既に兩度の合戰に賊軍を打破つたが此度襲ひ來つたのは高師直兄弟を大將とする賊軍の精鋭數萬である。父の遺命を果し天子の御期待に答へ奉るべき機會は遂に到來した。正行の責任は重大といはねばならぬ。而も此度は雲霞の如き賊の大軍に比較すべくもない寡勢を以て當らんとする捨身の戰である。正行此度の出陣は誠に悲壯といふべきである。この正行の心境を偲ばせつゝ指導を進めたい。最後の參內に於ける正行の言上にはこの悲壯な胸中が言々句々に吐露されてゐる。又之に對する綸言の忝けなさは誠に恐多い極みである。これはやがて我が國史を貫く君臣關係の本質を如實に示すものであつてこの點をも明確に把握せしめたい。

2　參　考

(一)挿繪。

阿部野合戰、渡邊橋に於て、敵兵を救ひいたはる所を描いたもので明治四十二年文部省第三回美術展覽會出品の圖である。この畫は「鞆音遺響」より採つた。

小堀鞆音　コボリトモネ　弦廼舍と號す。元治元年二月栃木縣安蘇郡旗川村に生る。川崎千虎に就いて古土佐を學び、東京美術學校助教授となつたが明治三十一年岡倉覺三と共に辭し、日本美術院幹部となつたが四十年再び奉職東京美術學校教授となる。文展第一回以來日本畫部審査員となり故實に長じ有職に明かに古土佐の筆意を會得せる點に於て當代第一とす。文展へは第三回に「旅路」第四回に「雄圖」等あり。帝國美術院會員、帝室技藝員、古社寺保存會委員であつた。昭和六年十月歿、年六十八。

(二)**參考事項**

本文中、正行が安部野の戰に於て渡邊橋からせき落されて溺れさうになつた賊兵五百餘人を救助し、衣服・藥餌を給し、禮をつくして勞つた話は、我が國史に現れた赤十字的精神の發露として、我が國が萬國赤十字社加盟に際し、有力な理由となつたといふ。

補　材

一、詞書。

【朝臣】　アソン　こゝでは四位以上の爵位ある人の敬稱。もと天武天皇の朝に定めされた八色の姓の中の第二位の稱。

【髻髮塔】　ケイハツタフ　もとゞりを收めた塔。

二、「見る人の」の歌。

大意　その昔楠正行公が如意輪堂の壁板に書き止められた征矢の跡を見るにつけても、あはれは胸に迫つて見る者の涙はとめどもなく流れるよ。

【征箭】　ソヤ　戰場に用ひた矢。

【見侍る】　ミハベる　「侍る」は自分の動作に付けて謙遜の意を表す助動詞。

【いとあはれにて】　深く心を動かされて。

【福田行誠】　フクダギヤウカイ　行誠は明治二十一年四月、八十三歳を以て寂した淨土宗の傑僧で、學德共にすぐれ、增上寺大教正、淨土宗管長等になつた人である。和歌は餘技ではあるが、一種の風格を備へて、高崎正風の激賞する所であつた。和歌は、景樹の門に學んだ一蓮といふ友人によつて指導せられた由が彼の著「をかしき話」の中に見える。生國は武藏の豐島（現東京市）で、文化三年に生れ、幼時小石川の無量山に入寺し、京都及び東叡山等に學んだ人で、江戸兒らしい狂歌なども詠じた僧である。福田行誠の家集「於知葉集」（國歌大系第二十卷所收）より採つた。

六　須我の荒野

一　解　題

1　作　者

窪田空穗　クボタウツボ　名は通治。歌人。國文學者。明治十六年長野縣東筑摩郡和田村に農家の次男として生まれた。明治專門學校（早稲田大學の前身）文學部出身。現早稲田大學文學部教授。明治三十二年初めて和歌に志し、新詩社に入つたが、幾何もなく去つて雜誌「國民文學」を創刊し、之を主宰して後進を導きつゝ今日に至つた。その作風は初めから現實的な傾向を有し、その調子も萬葉調に近く、年と共に平明枯淡に進んでゐる。又氏は現代稀有な長歌作家でもある。

著作としては、「まひる野」「明暗」「黎明」等、十二冊の歌集の外に、古今和歌集評釋上下二冊、新古今和歌集評釋上下二冊、其他文集、小說集等がある。

若山牧水　ワカヤマボクスヰ　名は繁。歌人。明治十八年宮崎縣東臼杵郡東郷村に生まれ、昭和三年沼津で病歿した。享年四十四。早稲田大學出身。二十才頃より作歌に專心し、尾上柴舟の門に入つて前田夕暮等と歌壇に進出し、浪漫的な聲調に青年の心を捉へた。明治四十四年短歌雜誌「創作」を創刊し之を主宰して、後進の誘導に努めた。天性自然を愛して飄然旅に上ることが多くその間に生れた秀れた和歌、紀行文が夥しい數に上つてゐる。頗る酒を愛し、醉へば朗々詩歌を吟咏して夜を徹することが多かつた。その作風は純眞豐潤で自然流露の趣がある。

著作は「海の聲」「獨り歌へる」「別離」等十五冊の歌集の外に紀行文歌話等が多い。牧水全集十二卷（改造社）に收められてゐる。

古泉千樫　コイヅミチカシ　名は幾太郎。歌人。明治十九年千葉縣安房郡吉尾村に生まれた。十三四才の頃から作歌を始め、明治三十七年伊藤左千夫の門に入つた。明治四十一年郷里の小學校教員の職を辭して上京、帝國水難救濟會に奉職した。「アララギ」創刊と共にその同人となり、大正十三年「日光」創刊と共に之に加盟した。この年病を得、十五年青垣會を起した。昭和二年八月歿、年四十二。その作は抒情味に富み、穩健で無理のない歌風のうちに、日々の生活から來る眞劍さを宿して居り、特に晩年病中詠の如きは寂寥の情、切々として迫るものがある。

著作には歌集「川のほとり」「屋上の土」「青牛集」の外に歌論隨筆集、編著三種がある。

2　出　典

窪田空穗の歌　「ここにして」は氏の第五歌集「濁れる川」より、「雲よむかし」は處女歌集「まひる野」より、「黑木もて」は第三歌集「黎明」より採つた。尙、同氏には近時「新選窪田空穗集」（新潮文庫）があつて、右の三首を收めてゐる。

若山牧水の歌　牧水全集に收められたその第十五歌集「黑松」中の「鮎つりの思ひ出」と題する一聯作中より採つた。

古泉千樫の歌　自選歌集「川のほとり」（大正十四年改造社刊行）から採つた。千樫初期の作である。

3　主眼及び採擇の趣旨

本課は現代に於ける代表歌人三氏の作歌を各三首宛採錄した。それらの作に流露する故郷思慕の眞情に觸れると共に、更に進んでは短歌といふ自己表現の一つの道を生徒の生活の中に開いてやりたい。本課はかういふ意味で情操陶冶に資すべき文藝的教材である。前課とは時代及び樣式に於て變化を與へたのであるが、何れも日本人のつきつめた姿である點に於ては渝る所がない。

二　解　釋

ここにして住みけむ程も知らずてふ我が家の悲し須我の荒野に

1　語　釋

【ここにして】此處で。此土地にあつて。「して」は、て、ありて、の意を表す助詞。

【住みけむ程】住んだであらうあひだ。

〔けむ〕過去の推量を表す助動詞。

〔程〕ホド　(一)ころあひ。ほどあひ。(二)かぎり。きまり。(三)みぶん。分際。(四)へだたり。あひだ。(五)ころ。をり。(六)やうす。調子。こゝは(四)。

【知らずてふ】知らずといふの略。分らないといふ、の意。

「てふ」は連體形で、次の「我が家」にかゝる。

【我が家の悲し】我が家のことが感慨に堪へない、の意。

「悲し」は、深く心に感ずるさまをいふ語で、こゝは、萬葉集に歌はれた須我の荒野に幾代を經て來た我が家に對する切なる懷古の情を吐露したものである。

【須我の荒野に】スガのアラヌに　この句に、我が家の位置が示されると共に、土地に對する無限の思ひがこめられてゐる。

〔須我の荒野〕長野縣筑摩郡芋賀(モガ)郷の野。萬葉集卷十四(東歌)に「信濃なる須我の荒野に郭公鳴く聲聞けば時過ぎにけり」とあるがこの地であるといふ。今日「芋賀(ッガ)」と稱するのは「スガ」の母音轉訛であらう。

2　大　意

この土地に遠い祖先の時から住みついて、今日までに幾代を經たか分らないといふ我が家のことが感慨に堪へなく思はれる。萬葉集の歌に詠まれたこの須我の荒野に。の意。

3　鑑賞批評

この歌は「濁れる川」の中の「故里」と題する一聯（參考の條を見よ）中の一首で、「わが故郷は、萬葉集にいふ『須我の荒野』のあたりならむと聞きて」といふ詞書が明快にその作歌衝動を物語つてゐる。東歌によつて誘ひ出された作者の懷古の情は油然として止るところを知らず、想像の翼は遠く萬葉集時代に飛び、更にそれ以前に溯る。

一首、沈潛された感懷が緊密な句々の上に流露してゐる。「ここにして」も的確な把握であり、「我が家の悲し」といふ四句切れは、感動の波動を虔げてゐるやうに感ぜられ、「須我の荒野に」は「ここにして」とひゞき合ひつゝ重厚に据つて、一首にゆるぎなき姿勢を保たしめてゐる。佳作であらう。

雲よむかし初めてここの野に立ちて草刈りし人にかくも照りしか

1　語　釋

【雲よ】荒野の上に浮ぶ雲に呼びかける言葉である。

【草刈りし人】作者の祖先の或人をこめて言つてゐるのであらう。

2　大　意

野の上に耀く雲よ、その昔、初めてこの野に立ち出でて草を刈つた人の上に今のやうに照つたのか。の意。

3　鑑賞批評

この歌は「まひる野」の中の一首であつて前歌より時代的には溯るが內容に於て作歌の時代を超えて連作的意義を持つてゐるものである。

野の上空には耀く雲が浮び、野の上には草刈りの姿がある。この目前の光景を通して作者は幾代の昔に於けるこの野の上の光景を、又祖先の人々の生活を幻に描いてゐるのであつて、懷舊の念が沈潛の堤を切つて溢れ出たかの感がある。雲に對する擬人法的な態度もこの場合實に自然であり、聲調も一すぢに透つてゐる。

黑木もて家は作りつそのゆうべ野に一つなる灯やともしけむ

1　語　釋

【黑木】　クロキ　(一)皮を削らぬ材木。皮つきの丸太。(二)木を一尺許りに切り、釜に入れて黑く蒸して薪としたもの。山城國八瀨・大原の婦女などが頭に載せて京都市中に賣り歩く。(三)(い)齊墩科の常綠喬木。九州地方に產する。高さ一丈許、樹皮は平滑で、葉は互生して短柄を具へ、楕圓形であつて鈍頂である。夏日開花する。花は小花であつて腋生し、數箇攢簇する。(ろ)こくたん(烏木)。こゝは(一)。

2　大　意

遠い昔この野に初めて住みついた祖先の人達は、丸太を組合せて住家を造つたことであらう。そしてその夕に野の上にたゞ一つの灯をともしたことであらうか。の意。

3　鑑賞批評

この歌は「黎明」中、「故里」と題する一聯の中の一首であつて、前の二首と內容上緊密な連關を有する。一首、極めて印象的である。「黑木」とは如何にも適切な着想であり、「野に一つなる灯」は畫龍點睛の感があつて古昔無人の境であつたこの野の狀景と、そこに初められた人間の營みとがさながら眼前に浮び出るやうに思はれる。悠久感乃至寂寥感を宿して澄み冴えた歌である。

故郷の日向の山の荒溪の流淸うして鮎多く棲みき

1　語　釋

【故郷の日向】　フルサトのヒフガ　牧水の故郷は宮崎縣東臼杵郡東郷村である。

【荒溪】　アラダニ　流が早く、川床に尖つた岩石が群つてゐる溪をいふ。參考の條を見よ。

2　大　意

故郷の日向の山の荒溪を流れが淸冽で鮎が澤山棲んでゐたのを思ひ出す。

3　鑑賞批評

これらの歌は作者が晩年沼津に在る時、故郷日向の地に於ける少年時代を回想して詠んだもので歌集「黑松」の中に「鮎つりの思ひ出」と題して收められてゐる。

平淡自在な詠みぶりの中に淸らかな、なつかしい追憶の情が流露してゐる。「荒溪の流淸うして」は單純化の行き屆いた句であり、「鮎多く棲みき」もすつきりした結び方である。助動詞「き」がよく利いてゐると思ふ。

おもほへば父も鮎をばよく釣りき我も釣りにきその下つ瀨に

1　語　釋

【おもほへば】「おもへば」の延言。考へてみると。思ひ起せば、等の意。

【その下つ瀨に】　そのシモツセに　この聯作中に「上つ瀨と下つ瀨に居りてをり〳〵に呼び交しつゝ父と釣りにき」とあるのによると、父子は同一の瀨の上手と下手に位置して釣つたのである。「その」とは「父が釣つてゐる瀨の」といふ意味である。

2　鑑賞批評

父子睦み合ひつゝ鮎を釣つてゐる平和な氣持が素直に歌はれてゐる。

山の陰日暮早かる谷の瀨に鮎子よく釣れ釣り飽かざりき

1　語　釋

【日暮早かる】　ヒグレハヤかる　夕早く暗くなる。日暮の早い、の意。山陰であるから日がかげると川べが早く薄暗くなるのである。

【よく釣れ】　非常に多く釣れて、の意。

2　大　意

日暮の早い山陰の瀬に鮎子が非常によく釣れて、飽きずにいつまでも釣つたものだ。

3　鑑賞批評

この一首も平淡な中に氣持がにじみ出てゐる。

ふるさとに歸れるその夜わが庭の椎の若葉に月おし照れり

1　語　釋

【ふるさと】千樫の故郷は千葉縣安房郡吉尾村である。

【月おし照れり】月がさやかに照つた、の意。「おし」は「押し」であつて、月光の投射を動的に表す言葉である。

2　大　意

東京を立つて故郷に歸つて來たその夜、庭の椎の若葉に月光がさやかにさした。

3　鑑賞批評

旅先から歸郷した人が我が家の自然に向き合つた時の感慨が「椎の若葉に月おし照れり」といふ把握の中に、具象的に表れてゐる。景情融合した渾然たる作であらう。

草山の奥の澤べにひとり來てなはしろ茱萸をわが食みにけり

1　語　釋

【なはしろ茱萸】なはしろグミ　胡頽子。胡頽子科の常綠灌木、山野に自生し、又庭園に培養せられる。莖の高さ七八尺で枝多く、秋冬の際帶白色の花を開く。果實は長楕圓形で、翌年苗代の頃に熟して食はれる。

【食みにけり】ハみにけり　食べた、の意。「食む」(一)食ふ。(二)知行を受く。こゝは(一)。

2　大　意

草山の奥にある澤べにひとりやつて來て、逝く春を惜しみつゝ、そこに熟れてゐたなはしろ茱萸を食べた。

3　鑑賞批評

この歌、逝く春を惜しむ歌であるが、心に思ふことがあつて、孤獨に居たく思ふ少年の氣持が一首の背景をなしてゐるやうに感ぜられる。可なり感傷的な歌であるが、その感傷がつゝましく素直に歌はれてゐる爲に表面に目立たずに端正な姿を失はない。抒情味の豐かな作。

月夜よみ藁を束ねてひとりゐる秋の野面のこほろぎの聲

1　語　釋

【月夜よみ】ツキヨよみ　月のよさに、の意。「み」は形容詞の語根に添うて「の故に」「さに」の意を表す接尾語。

【藁を束ねて】ワラをタバねて　刈稻を田の中で束ねてゐることである。

【野面】ノヅラ　(一)野のおもて。野原。(二)石の自然の肌。(三)厚顏。鐵面皮。こゝは(一)。

2　大　意

月のよさに一人藁を束ねてゐる田圃のおもてにはこほろぎの聲が一面に聞えてくる。

3　鑑賞批評

作者の生活の中から生れた寫生の妙境である。「藁を束ねてひとりゐる」といふ、作者の生活を點出した句がこの歌の眼目であらう。「秋の野面のこほろぎの聲」といふ體言止めの句法が甚だ適切であつて、脚下に果しなく廣がるこほろぎの聲をひゞかせてゐる。清爽の氣に滿ち、汲めども盡きぬ滋味をたゝへた歌である。

三　備　考

1　指導研究

空穗の歌、この三首は前述の如く夫々時を異にして作られた作であるがこゝではその內面的必然に從つて連作として取扱ひ度い。これが指導に當つては先づ作者の感慨の由つて來る所を理解させることが必要であらう。卽ち、この土地は昔萬葉集に詠まれてゐる所であり、作者の祖先達が初めてこの野に移り住んで墾いた土地であるといふことをこの三首から歸納させれば讀者の想像は自然に働いて作者のあとを追ふであらう。猶その地方が何か古文學に出てゐたらそれを紹介してやることは大いに有效であらう。

牧水の歌、一讀直ちに歌の懷に入つて行かれる作である。讀者にはかゝる經驗を有する者が多いことと思はれる。この經驗を回想せしめることが出來ればこれらの歌には一さうの親しみが加はるであらう。

千樫の歌、「ふるさとに」の歌、旅から歸つて我が家の庭に立つ作者の姿を腦裡に描かせ、その胸中に思ひ及ばせたい。「椎の若葉に月おし照れり」にこもる感慨はそこから解かれるであらう。

「草山の」歌、「ひとり來て」のあたりから指導を進めて行つたら一首の氣持に達せしめることが出來るであらう。

「月夜よみ」の歌、低聲微吟、自ら歌の中の人となつてしまふであらう。

2　參　考

本文の歌と連作をなす歌を三氏の作の中から拔く。

（一）空穗の歌より

故　里

――わが鄕里は、萬葉集にいふ「須我の荒野」のあたりならむと聞きて――

夕されば寺々の鐘鳴り出でつこや古への須我の荒野か
鋤きかへし鋤きかへしたる田の土の打續くのみ千年は過ぎぬ
溝掘るとゆくりなくしも得しといふ古へ人が持ちにける壺
近くまで野に殘りける窯より持て來しといふこれの庭石
こゝにして住みけむ程も知らずてふ我家の悲し須我の荒野に
古への須我の荒野にわれ生れ田作るわざを親に習ひき

（歌集　濁れる川）

○

ふるき嘆き忘られかねて幽囚の身に似るわれぞ雲よ照れかし
憧れつ新しき得ぬわが胸のおぞきに似ぬや天飛ぶ雲よ
雲よむかし初めてこゝの野に立ちて草刈りし人にかくも照りしか

（まひる野）

故　鄕

雪の日や歸り來りて野の上に見たる我が家の忘られかねつ
五月の日抱きて青き香を吐ける落葉松林行けど盡きなく
面影も描くよし無く忘られてこの家にいます代々の親達
黑木もて家は造りつその夕べ野に一つなる灯やともしけむ

六　須我の荒野

(二)　牧水の歌

鮎つりの思ひ出

故郷の日向の山の荒溪の流清うして鮎多く棲みき
故郷の溪荒くして砂あらず岩を飛び飛び鮎は釣りにき
われいまだ十歳ならざりき山溪のたぎつ瀬に立ち鮎は釣りにき
上つ瀬と下つ瀬に居りてをり〳〵に呼び交しつつ父と釣りにき
水打ちて躍れる鮎を手には持ち鼻に絲とほし囮とはしき
淵の魚は釣りにくかりき水澄みて影の見ゆるをくちをしみ見き
山の蔭日暮早かる谷の瀬に鮎子よく釣れ釣り飽かざりき
おもほへば父も鮎をばよく釣りき我も釣りにきその下つ瀬に
ひと日釣りし鮎の籠持ち歸り來れば背戸に蚊の多き夕闇なりき
釣り暮し歸れば母に叱られき叱れる母に渡しき鮎を

(黎　明)

(三)　千樫の歌

折にふれて

みんなみの嶺岡山の燒くる火のこよひも赤く見えにけるかも
隣家に風呂によばれてかへるみち薄月ながら雪ちらつきぬ
砂畑のしき藁のうへにうすみどり西瓜の蔓の延びのすがしさ

(黒　松)

行く春

山行くとくぬぎの若葉萩若葉扱きつつもとな人わすらえず
まがなしみ人に戀ひつつこの春も暮れてすべなし村を出でがてに
草山の奥の澤べにひとり來てなはしろ茱萸をわが食みにけり

椎の若葉

わが家はいまだは見えれいちじろく裏の椎森若葉せる見ゆ
ふるさとに歸れるその夜わが庭の椎の若葉に月おし照れり

蟲　聲

月夜よみ藁をたばれてひとり居る秋の野面のこほろぎのこゑ
露しろく夕月てりて新藁のにほひややかにこほろぎ鳴くも
蟲の音はいやすみにつつ藁束ね手もと小暗く月かたぶきぬ
馬の背山山の裾べを霜けぶりさ夜くだちつつこほろぎのこゑ

(川のほとり)

七　第三の眼

島崎藤村

一　解題

1　作者

島崎藤村　シマザキトウソン　詩人・小說家。本名は春樹。明治五年二月長野縣西筑摩郡神坂村舊馬籠に生まれた。明治十三年東京に出で、三田英學校・神田共立學校を經て、二十四年明治學院卒業。學院時代、基督教の洗禮を受け、また文學書に親しんだ。二十五年明治女學校に教へ、雜誌「文學界」の創刊に與つたが、翌年約一箇年を旅に送り、旅先から「文學界」に寄稿した。二十九年東北學院の教師となり、仙臺に在ること約一年、翌年東京に歸り、三十二年には長野縣北佐久郡小諸義塾に赴任し、三十八年まで約七年間をこゝに送つた。この間、三十年には處女詩集「若葉集」を出版し、清新な浪曼的詩風を以て青春の情を歌ひ、ついで「一葉舟」「夏草」「落梅集」を刊行し、明治浪曼主義の高い記念塔たらしめた。その後次第に自然及び人間生活を現實的に眺めようとする傾向が著しくなり、三十五年頃、詩から散文に移る決意を抱くに至つた。この頃の傾向を示すものに「千曲川のスケッチ」がある。かくて三十七年に最初の長編小說「破戒」を起稿し、三十八年脫稿、三十九年之を上梓して文壇に於ける新機運の先蹤をなし、本格的に小說家として立つに至つた。この浪曼的傾向から現實的傾向への發展は、また明治文學史の時代的發展に相應じてゐる。大正二年フランスの旅に上り、五年歸朝。七年以來、東京市麻布區飯倉片町に住み、一時重患を煩ひ病褥に親しんだが、不斷に創作に精進し、近來は長篇小說「夜明け前」の制作に全力を傾倒し、昭和四年四月以來之を雜誌「中央公論」に發表してゐたが、十年十月完結した。昭和十二年藝術院開設と共に會員に推薦されたが受けなかつた。

著作には、詩集に「若菜集」「一葉集」「夏草」「落梅集」及びそれらを合した「藤村詩集」があり、小說に「破戒」「春」「家」「櫻の實の熟する時」「新生」「嵐」「夜明け前」等があり、紀行・隨筆集に「千曲川のスケッチ」「海へ」「佛蘭西だより」「飯倉だより」「春を待ちつつ」「市井にありて」「桃の雫」等があり、童話集に「幼きものへ」「ふるさと」「をさなものがたり」等があり、尙、「藤村讀本」（全六卷）、「藤村全集」（全十二卷）等も刊行されてゐる。

2　出典

（一）　藤村讀本。

（二）　桃の雫。

昭和十一年六月五日、岩波書店發行、菊判二三〇頁。畢生の大作「夜明け前」の筆を執りつゝ、興のゆくまゝ時に應じて書き綴られた感想集であつて、「六十歲を迎へて」以下五十八篇を收めてゐる。境地は漸く閑寂にして芭蕉のそれに通ひ、書名もかねて著者の愛誦する「我が袖に伏見の桃の雫せよ」から取られたものであらう。「第三の目」は卅六・七の二頁に亙つて居り、本課にはすべて原文のまゝ採用した。

3　主眼及び採擇の趣旨

藤村氏の含蓄豐かな隨筆を通して文藝上の大道たる「寫生」の眞意義を闡明し、「心眼を開いて物の眞を徹見する」といふ意義を理會させたい。

これは單に作文の心構へを養ふだけに止らず、精神生活の全般に亙つて新しい眼を開かせるに足るものであらう。文藝的教材であると共に人間的教材である。

「寫生」は既に前課の和歌の中に實行されてゐる（前課丈けに限らない）。藤村氏の寫生の經驗を通して更に具體的に

把握させたいといふ意味でこゝに本課を配した。

後半「第三の眼」に於ては、芭蕉への入門に資すると共に、鑑眞の生涯を思はせ、更に次課「長安の空」と相俟つて、上代に於ける日支文化の關係を考へさせたい。

二　解　釋

1　語　釋

【第三の眼】　ダイサンのメ　物の本質を見拔く活眼。心眼。人間が生まれながら有する二つの肉眼の外に、その精神を磨き鍛へることによつて心の內部に開かれる所のもう一つの眼、卽ち心眼に對して冠せられた寓意的な命題である。

【寫生】　シヤセイ　自然を寫しその生動の趣を傳へること。もと東洋畫論上の用語。卽ち初めは（一）多くは草花、鳥魚等の圖で、餘り墨色を現はさずに輕く色彩を施した描き方、といふ意味であつたが、語義が深められて（二）自然を寫して氣韻生動の趣を傳へる、といふ意味に用ひられるやうになつた。

右の如く東洋畫論の用語であつた「寫生」の語を移して我が國の文藝上の用語となした有力者の一人は正岡子規である。子規は文藝創作上に於て理想を排して現實に卽くべき事を力說したのであつて、子規の說く寫生とは（三）天然に卽いて實際を有りのまゝに寫す、といふ意味であつた。子規のこの考はその時代、我が國の洋畫家の間に、西洋畫の用語である「スケッチ」(Sketch)の譯語に「寫生」をあてゝ、「粉本や空想に據らず、直接實物に就いて描く」といふ意味に解したのに基くといはれる。大正時代に入つて「寫生」の語義は子規の流を汲むアララギ派の歌人達によつて、東洋畫論（二）の說に基いて、（四）「物及び現象の中核に潛み入つて、直ちにその性命を捉へんとするにある。」（島木赤彥氏「萬葉の鑑賞及び其批評」三六二頁）。「實相に觀入して自然　人生一元の生を寫す。これが短歌上の寫生である。」（齋藤茂吉氏「短歌寫生の說」六一頁）と說かれるに至つた。

藤村氏はこの文章に於て「寫生」と文章道上、「物を觀る方法」として採り、（三）の淺い所から出發して（二）乃至（四）の窮極境への到達を意圖して居るやうである。

【觀た物をよく記憶しようとするには、第一わかるやうに觀る稽古をしなければならん。物を觀るには眼を開いただけでは足りない。心の働きが無くてはならん。】

「觀た物をよく記憶」するといふことは、物の眞を靈臺方寸のカメラに寫し止めることであつて、それが創作の契機となるのである。次に「わかるやうに觀る」とは、物の眞、卽ち物の生動の姿が我が心に生き〳〵と映ずるやうに觀る、といふ意味である。それならば、「わかるやうに觀る」にはどうしたらいゝのか。ミレーの答に曰「物を觀るには眼を開いただけでは足りない。心の働きが無くてはならん。」と。この意味は、單に肉眼を開いた丈けでは、そこには無意味な物質の堆積羅列があるのみである。對象の眞意義と共鳴する心のはたらきがはたらかねば物の眞意義を把握することは出來ない、といふのであらう。

平凡な言葉ながら、動かせぬ眞理を摑んでゐるとおもふ。

【藝苑雜稿】　ゲイエンザツカウ　上田敏主宰の雜誌「藝苑」に載せられた海外文學の紹介、飜譯の中のものかとも思はれるが、確たるところは未詳である。

【ミレー】　ジヤン－フランソア－ミレー　Jean François Millet　佛蘭西の畫家。西曆一八一四年に生れ、一八七五年歿。享年六十二。その生涯の大半をバルビゾンの森に送り、農民生活の描寫に獻身した。彼が描いたのは、都會人の憧憬に入り來る對象としての田園でもなく、又藝術家によつて修飾された農民でもなく、あるがまゝの田園と、目の前に立ち働く農民とを描いて、そこに溢れるやうな詩的創造を果し、遂に歐洲十九世紀繪畫史上の獨自の且つ劃期的な業蹟を殘したのである。その代表的傑作に「種蒔く人」「アンヂェラスの鐘」「落穗拾ひ」「麥刈る人」等がある。

【文學に於てもやはりその通りだらうと思ふ】

心眼を開いて物の眞を觀ることの樞要な事は、繪畫に於ても文學に於ても何ら渝る所がない、の意。

こゝにいふ文學とは文學創作の場合を指すのであらうが、同時に文學解釋の場合にも當て嵌まること論を俟たない。

〔文學〕　ブンガク　（一）文化現象を攻究する學問。（二）文藝。（三）文藝を對象とする學問。こゝは（二）、卽ち、言語・文字によつて表現された藝術作品で、詩歌・小說・戲曲・隨筆等がこれである。

【物を觀るといふことは左樣たやすくは出來ない】

冒頭に引かれたミレーの言葉「物を觀るには眼を開いただけでは足りない」に應ずる言葉である。現象の表面を見る丈けなら肉眼を開けば足りる、然し物の眞を觀るには心の深さが用意されなければならぬ。そこが作者の言はうとしてゐる點である。

【例へば、深山に炭燒の煙の立ちのぼるのを眺めるにしても、其處に生死する人があると心づくまでには、多少物を

觀る稽古が要る】

こゝに擧げられた例は、啓蒙的な例として適切であらう。

猶綱島梁川の「病間錄」の中に引かれた一美術家の語（參考欄に揭げる）はこの好適例であらう。

【この「物を觀る稽古」として自分は寫生の方法を採つた】

前述の〔寫生〕の項參照。

「物を觀る稽古」に「　」をかけたのは、ミレーの言葉を借りたのと、この語に注意を向けるやうにとの意圖からである。

【大家】　タイカ　(一)大いなる家。(二)富める家、又、貴き家。(三)或道にすぐれ秀でた人。こゝは(三)。

【生物】　セイブツ　生活するもの、卽ち動物・植物の總稱いきもの。但しこゝは、實物といふ位の意味に用ひられたものであらう。

【局部】　キョクブ　全體中の或部分。「局」は、かぎる、區切る、の意。

【―始から物の大體を觀るといふことは無理だから―】

觀入の深さと心の深さとは一枚であるから、初心者の淺い心には全體の意義は荷が勝ちすぎる、といふ意味である。

【物の「眞」】　モノのシン　物の眞意義。主客間に生起する生命の共感に通して現象の中に見出される或る力。

【寫生帖】　シヤセイデフ　自然を寫生する帳面。一般的には畫の方で使はれる語であるが、こゝは文章の方に用ひられてゐる。

【日記風につけて見た】　毎日、自然を觀察した結果を丹念に書き記してみた。

〔風〕　フウ　有樣。體裁、形。

【自分は果して物の自然を寫してゐるだらうか】

自分の道を眞摯に步まうとする者の常に遭遇する反省の聲である。自分は日々克明に自然を觀察し描寫してゐるのであるが自分の作業が果して自分の意圖する如く、自然の眞を把握し得てゐるであらうか、の意。

この反省の結果悟り得たことは、次につゞく「ある時はあまりに云々」の三行である。

〔物の自然〕　物の眞、に同じ。主觀によつて歪曲されない、物のありのまゝのまことのすがた。

【ある時はあまりに解剖的に成りすぎて、活きた物を死物のやうに扱つてゐたやうな場合もあつた】

初心者の誰もが陷る失敗であらう。心眼が磨かれない間は物の見方が部分的で、その部分も全體との有機的關聯に於て見られず、切離された個々の斷片を空しく穿鑿するといふことになり易いのである。之を例へれば人間に宿る生命を把握せんとして五體を切離しその各々を如何に探索しても生命の影は何處にも發見されないのと一般である。

〔解剖的〕　カイバウテキ　部分々々に分けてみようとするかたむき。

【思ふに、こちらに生氣のある時でなければ、眞に生を寫すことは出來ない】

對象の眞意義と共鳴すべき生氣がこちらに流動してゐる時でなければ物の眞を感得し、寫すことは不可能であるの意。玩味すべき言葉である。

【物事は常にその根本から觀ねばならん、こゝが唯一眞正の地盤である】

藝術家が物事を觀るにはその皮相を突き拔けてその深奧の意義に觀入しなければならぬ。この眞意義を觀破するといふ所が創作にとつて唯一の眞の土臺である、といふ意味であらう。

例へば野の上に種を蒔く百姓の姿を見て、「あゝ百姓がゐる……」と感じたのでは駄目である。種を蒔くといふことがいかに深い象徵的意義を有するものであるか、又百姓の姿がいかに自然と融合して自然の一部となつてほしいまゝに生動してゐるか等といふことにまで思ひ及ばねばならぬといふ意味であらうと思はれる。

【物を根本から觀て、それから自由にその枝葉に涉ることが出來るやうになれば、それが寫生の極致だらう。】

「物を根本から觀て、それから自由にその枝葉に涉る」といふのは、物を根本から觀てその眞意義を了會し、それから自在無礙にその枝葉を、物の眞意義の顯現された姿として認める、といふ意味である。

「寫生の極致」とは、寫生の至り極まつた所、の意。

蓋し、藝術創作に當つては、物の根本を直觀することは第一の契機であるが之で能事畢れりとするわけにはゆかない。直觀された內容は觀念的であり抽象的であつて未だそのものとしての必然性、個性が明確でない。そこで次に來るものはその眞意義のあらはれたすがたとしての「枝葉」を的確に把握することであつてこれが第二の契機となる。直觀された內容は第二の契機を經て初めて藝術作品としての個性、具象性を帶び來るのである。

要するにこゝに揭げた文は藤村氏がミレーの言葉を解說して、これが寫生の極致であらうと推論されたものである。そしてその言外には、凡人にとつてはなかなかミレーの言ふやうに實行することは困難であるといふ語氣が看取される。

【寫生の方法が次第に進んで來れば、無駄骨折をすることが少くなる】

自然の見方がだん〳〵進んでくると無駄骨折が少くなる。といふのは初心の間は現象の枝葉末節の盡くが彼の眼前に立ちふさがるので彼はそれらを把へる爲に大骨折をする。そしてその結果はその骨折に反してたゞ平面的

な擴がり丈けしか把へてゐないといふことになる。然るに眼が開いてくるとその現象の中にあるものが段々見えてくる。その結果現象の個々に對して取捨選擇が行はれるやうになる。卽ち中にあるものをそこに浮彫にするに缺くべからざるもののみをとりあげて、その他の無用のものを捨て去るやうになるのである。これを單純化と稱する。

名人の作に於て吾々はその一線一劃、或は一語一句が物の眞を鮮やかに浮彫にしてゐるのを見る、そしてそこに見出されるものは客觀の眞と之と共感する主觀の躍動とが一枚となつた姿である。

【私が信州に居る頃は】明治三十二年（二十八才）長野縣北佐久郡小諸義塾に赴任し、同三十八年（三十四才）まで約七年間をこゝで送つてゐた時代を指す。

【雲の日記なぞをつけて見たが】雲を觀察してその結果を日記に記してみた、といふのであつて雲を通して自然の眞に近づかうとする意圖に出でたのであらう。（備考參照）

【多少「自然」といふ大きなものに近づくことが出來るやうになつたかと思ふ】

自然といふ大いなるもののほんたうの意味がいくらか分るやうになつたかと思ふ、といふ意味で、作者の進境が謙虛に語られてゐる。

【驚異の念に乏しいときの寫生は、死んだ記錄のやうなものが出來上る】

前出の「思ふに、こちらに生氣のある時でなければ、眞に生を寫すことは出來ない」といふ言葉と一致する。かかる場合にいかに細密に克明に物を寫しても、出來上つた作物には人の心を動かすべき力が缺けてゐるのであつてこの意味でいはゆる「死んだ記錄」たるを免れない。

【正しいかも知れないが無意味だ】

無感動な氣持で成された寫生には主觀が入つてゐない、卽ち對象が主觀化されてゐないといふことになるから機械的には正しいといへるかも知れないが藝術作品としては零だ、の意。

【「自然界の物は如何なる微細なものでも性格を持つてゐる」】

藝術家の犀利な感受性を遺憾なく發揮した觀察である。「性格」とはもと、人の特有の性質、といふ意味であるがこゝでは自然界のあらゆるものについて適用されてゐる。

【ルウブル美術館】Musée national Palais du Louvre 佛蘭西巴里のセーヌ右岸に在る世界最大の博物館の一。現在の建物は十六世紀半フランシス一世に創り、十七世紀ルイ十四世に興り、十九世紀初にナポレオンが大陸征略の副產物として外國の夥しい藝術的名寶を持ち來り、始めてルーヴルを世界の最も完備した美術館たらしめた。ミリョー島發見のヴイナス像、レオナルドーダーヴインチのモナーリザ等第一流の世界的名作は多くこゝにある。

【ホルバイン】Hans Holbein（一四九七　—　一五四三）獨逸の畫家。最も肖像畫に勝れ、版畫をも巧みにした。アウグスブルグに生まれ、後、英國に赴き、ヘンリー八世の宮廷畫家として終つた。ドイツ文藝復興期繪畫の代表的名匠の一。北歐畫家の堅實な寫實的手法にイタリー畫派の理想美を加へたといはれる。

主要な作品に「ゾロツルン寺院のマドンナ」「市長の家族を伴なふマドンナ」がある。

肖像畫では「エラスムス」「ヘンリー八世」「トマスーモア」「鷹匠」「ノーフォーク公」等があり、木版畫では「死の舞蹈」が名高い。

猶、「ホルバインの天文學者ニコラスークラツエルの肖像畫」といふ句はやゝ表現不足の嫌ひがあるがいふまでもなく

「ホルバインの描いた天文學者ニコラスークラツエルの肖像畫」

といふ意味である。

【天文學者】テンモンガクシヤ　天文學に通じた學者。

〔天文學〕天體の現象、卽ち、天體の本質・運行・大いさ・距離・他天體に及ぼす影響等、天體に關する事項を研究する學問。

【ニコラスークラツエル】傳未詳。

【肖像畫】セウザウグワ　現在の人たると過去の人たるとを問はず、或人物の容貌、風采、氣質等の人格的描寫によつて描いた一つの畫像。其畫面にテーブル、椅子、花等の配置があつても作意が肖像としてのものであれば肖像畫と見なすべきである。

【傍に描き添へてある數學機械が、畫の最も大切な部分であつて、實に驚くべき宏大嚴肅の性格をもつてゐる】

「傍に描き添へてゐる數學機械」といふのは天文學者ニコラスークラツエルが天體觀測に用ひたものであつて、それは彼の學者としての生命を象徵するものであり、同時に大宇宙を暗示するものである。この意味でこの數學機械が「畫の最も大切な部分」といはれるのであり、「實に驚くべき宏大嚴肅の性格をもつてゐる」といはれる所以であらう。

【森を描く時には、あの光る葉や暗い影が、人の心を動かし、喜ばせる、その力を實現したいと思ふ】

藝術の主題を明快に指摘した言葉である。「人の心を動かし、喜ばせる、その力」こそ藝術の主題であつて、その力を把へるには先づ把へんとする者の心が動くことが前提となる。卽ち驚異の念が動き、感動が起らねばならな

い。そしてそれにはその人の心に對象にこもる力に共感すべき生氣が流れてゐなければならぬのである。

【稽古としての寫生に研究はもとより大切だ。しかし研究といふことを忘れた時でなければ眞のよい寫生は出來ない】

自然を觀る稽古として寫生を實行するに當つては、いろいろ研究してどうしたら物の眞に達することが出來ようかと工夫することは初心者にとつても道に進んだ人にとつても無論大切なことである。然しながら物の眞を目ざして意識的に工夫研究してゐる間はその作品はまだ窮屈で流動を缺く。修練を重ね〳〵て今までの意識的な工夫が無意識裡に成されるやうになつて初めて眞の自在無礙の寫生が行はれる、の意。

「研究といふことを忘れた時でなければ」といふのは妙味豐かな言葉である。それは單に工夫を捨てるといふことと取違へられてはならない。「意圖せずして自ら至る」の意味であつて工夫をし拔いた後におのづから開かれる境地である。芭蕉の「格に入つて格を出でざる時はせばく、格に入らざる時は邪路にはしる。格に入り、格を出でて、初めて自在を得べし。」（岩波書店「芭蕉全集」）といふ言葉と期せずして一致するではないか。

2　文の構成

第一節　初―四一頁四行　作者が自然を觀る稽古として寫生の方法を採つたこと。

第二節　四一頁五行―四三頁七行　寫生實行の途上に於て起つた疑問・反省・理會等のこと。

第三節　四三頁八行―終　作者が到達した寫生の究極境。

3　文意

作者が自然を觀る稽古として寫生を採り、之を實行して行つた過程に於て遭遇した疑問・反省・悟達等の事を述べ、終りにその到達した寫生の究極境を述べた文。その眼目とする所は

（イ）藝術家（必ずしも藝術家に限らない）は心眼を開いて物の眞を觀なければならぬ。

（ロ）觀る者に生氣を缺く時は物の生動の姿を寫すことは出來ない。

（ハ）寫生が進んで來ると自ら單純化が行はれて無駄骨折が少くなる。

（ニ）眞の寫生は寫生意識が止揚された時初めて自在に行はれる。

4　鑑賞批評

物の見方に於て、ミレーの言葉に深く共鳴し、そこに指導精神を見出しつゝ作者自身の歩いた寫生道が語られてゐる。文中數多く引用されたミレーの語は流石に眞に徹して傾聽すべきものである。就中「自然界の物は如何なる微細なものでも性格を持つてゐる。云々」及び「森を描く時には、あの光る葉や暗い影が、人の心を動かし、喜ばせる、その力を實現したいと思ふ。」といふ言葉を讀むと、視界を蔽ふ雲霧が眼前にひらかれたやうな感じがする。藤村氏はかういふミレーの言葉を寫生の內容として之を眉間に仰ぎつゝその實行を進めてゐる。氏がその途中で幾度となく遭遇したといふ「自分は果して物の自然を寫してゐるだらうか」といふ疑問は實に意味深く思はれる。この反省を經て作者は「思ふに、こちらに生氣のある時でなければ眞に生を寫すことは出來ない」といふ結論に到達したのであつて、この言葉こそ、寫生の眞諦を的確に把握したものといふべきである。

そして最後の言葉「稽古としての寫生に研究はもとより大切だ。しかし研究といふことを忘れた時でなければ、眞のよい寫生は出來ない。」といふ言葉を讀むと、自然、芭蕉の言葉などが思ひ出され、達人の到達した境地が歸を一にすることが思ひ合せられて深い感銘を覺える。文章は氏の重厚にして透徹した持味がよく表れてゐると思ふ。

三　備考

1　指導研究

この文の主眼とする所は、「寫生」といふこと、「心眼を開いて物の眞を觀る」といふことを讀者に理會せしめるにある。

これは精神生活に經驗の淺い十五六才の少年にとつてかなり困難な作業であるとも思はれる。然し十五六才といへば少年時代から一飛躍して新しい世界に目覺め初めようとする時である。かういふ時機にこの文に見るやうな深い物の見方を學ぶことは少年の精神生活の上に劃期的な意義を持つものであらうと思はれる。指導の手がかりとならうと思ふことを次に述べよう。

第一、物の眞とは何か。これを理解させるには

(イ)生徒各自が自然に對して驚異感激を覺えた經驗を想起せしめ、自然の中に吾々を動かす或るはたらきがあることに思ひ及ばしめる。

(ロ)次に右の作業を補ふ意味で、本文の終りに引かれてゐるミレーの言葉「森を描く時には、あの光る葉や暗い影が、人の心を動かし、喜ばせる、その力を實現したいと思ふ」の中の「光る葉や暗い影が、人の心を動かし、喜ばせるその力」を感得せしめたい。

第二、心眼とは何か。心眼の開かれた例として

(イ)「光る葉や暗い影が、人の心を動かし、喜ばせるその力」と、自然の中に或る微妙な力を見出してゐるミレーの眼。

(ロ)參考欄に引用した一美術家の眼。

を指摘し理解させたい。

第三、右は說明の便宜の爲に、心眼と物の眞とを別個に扱つたのであるがこの兩者は常に一如の姿に於て存在する。この狀態が卽ち寫生である。その例として

(イ)ミレーの作「アンヂエラスの鐘」「種蒔き」「落穗拾ひ」。

(ロ)「第三の眼」に引用された芭蕉の「若葉して」の句。

(ハ)「須我の荒野」の空穗の歌。

等に思ひをひそめしめたい。それらの作品の中に深く見開かれた藝術家の眼とその眼に生き〳〵と働きかけてゐる客觀の姿とを見出さしめ、それが全體として心眼と客觀とが共感して一枚となつた融合の姿であることを會得せしめたい。

猶四一頁に於て作者が「かうして物を觀る稽古をするうちに云々。ある時はあまりに解剖的になりすぎて云々」の言葉を實感的に理解させるには教室内の先生の姿なり級友の姿なりを試みに寫生せしめてみればよい。

2　參考

物の眞を觀た一つの例として綱島梁川の「病間錄」中の一節を擧げる。

中にも秋の力を最も強く瞻かに言出づるものは黃柿なり、赤柿なり。一美術家語りて曰く「吾嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會〻夕空鮮かに生り出でたる赤き柿の實の累々たるを見て、始めて秋ここにありと叫びき」と。げにも秋の姿をさながらに具象にして描き出せるものありとせば、そは碧落の空に躍如として生り出でたる赤柿を措きてはまたとあらじ。

なほ藤村が小諸にゐた頃實行したといふ「雲の寫生」の一例として、「千曲川のスケッチ」の中に次の如き文がある。

春の先驅

一雨ごとに溫暖さを增して行く二月の下旬から三月のはじめへかけて櫻、梅の蕾も次第にふくらみ、北向きの雪も漸く溶け、灰色な地には黃色を增して來た。樂しい春雨の降つた後では、濕つた梅の枝が新しい紅味を帶びて見える。長い間雪の下に成つてゐた草屋根の青苔も急に活き返る。心地のよい風が吹いて來る。青空の色も次第に濃くなる。あの羊の群でも見るやうな、さまざまの形した白い黃ばんだ雲が、あたかも春の先驅をするやうに微かな風に送られる。

私は春らしい光を含んだ西南の空に、斯の雲を注意して望んだことがあつた。ポツと雲の形があらはれたかと思ふと、それが次第に大きく、長く、明らかに見えて南へ動くに從つて消えて行く。すると復た、第二の雲の形が同一の位置にあらはれる。そして同じ

やうに展開する。柔かな乳青の色の空に、すこし灰色の影を帶びた白い雲が遠く浮んだのは美しい。

第三の眼

一　解釋

1　語釋

【第三の眼】　既に解釋した。

【古い佛像に、眼を三つ具へた相好のものがある】

三眼の佛像を探してみると

降三世明王像　高野山金剛峯寺舊藏、昭和元年十二月燒失。平安朝初期の作。傳弘法大師作。

（世界美術全集第十卷一〇四圖）

愛染明王像　東京小泉策太郎氏藏、傳運慶作。

（岩波書店圖說日本美術史一五〇頁）

等があり、佛畫としては

金剛吼（五大力吼像の一）平安朝初期作。高野山大圓院外十九箇院藏。（世界美術全集第十卷八四圖）

十力吼（同右）同右　（圖說日本美術史八五頁）

無量力吼（同右）同右　（同　右）

○

千手觀音圖　燉煌作。五代晉天福八年、皇紀一六〇三年（西紀九四三）に成る。巴里ギメー、博物館藏。

（世界美術全集第十一卷八四圖）

等が見出される。

【佛像】　ブツザウ　佛・菩薩等佛敎の聖者の色身の模型で布敎の方便とし、信仰の對象とするもの。彫刻・繪畫共にあるが、特に彫刻を佛像といひ、繪畫は多く圖像・繪像といふ。木彫・石像・塑造・乾漆・夾紵・鑄造・繡造等種々ある。

我國で佛像の渡來した初は、繼體天皇十六年に、南梁の人司馬達等が、大和高市郡坂田原にその奉ずる佛像を安置したのが、歷史に見える初である。欽明天皇十三年、百濟の聖明王が經論・幡蓋等と共に釋迦銅像を獻じたのが我國に於ける公然たる佛敎渡來の初である。其後佛敎の隆盛と共に佛像の製作大いに行はれ、推古天皇時代には鞍部鳥（止利佛師と稱せられる）あり、藤原氏全盛の頃には定朝あり、鎌倉に入つては運慶・快慶の名手が出でて、美術史上不朽の傑作を遺してゐる。

その主なものは、法隆寺釋迦三尊（金銅、止利作）、中宮寺如意輪觀音（木彫、傳聖德太子作）、法隆寺夢殿祕佛救世觀音（木彫、白鳳時代）、藥師寺金堂藥師如來（金銅、白鳳時代）、藥師寺東院堂聖觀音（金銅、白鳳時代）東大寺盧舍那佛（俗に奈良大佛と稱する。金銅、天平時代）、東大寺戒壇院四天王像（塑像、天平時代）、東大寺法華堂不空羂索觀世音（夾紵、天平時代）、聖林寺十一面觀音（木乾漆、天平時代）、山城法界寺阿彌陀如來（木彫、傳定朝作）、東大寺南大門二王像（運慶・快慶作）等である。

〔相好〕　サウガウ　かほつき。容貌。人相。

【怪物の異相】　クワイブツのイサウ　ばけものの異樣な面相。

【あの眼こそ第三の眼といふものであらう。それを形にあらはしたものであらう】

物の眞に徹した觀察である。かく觀る作者自身が既に第三の眼を持つた人であることを語つてゐるではなからうか。

【あの眼は一體何を見る眼か】

問ひかけて相手の內省を誘ふ言ひ方で、修辭上疑問法と呼ばれる。この場合恐ろしいまで利いてゐると思ふ。

この問ひは藝術上の「物の眞を徹見する眼」といふよりもつと廣く、「善惡も虛僞もあらゆる人間の現實を見拔かずにはゐない底氣味惡い眼」といふ答へを要求してゐるものと思はれる。

【若葉して御眼の雫ぬぐはばや】

自分は今日この寺を訪れてさやわかな若葉に包まれた堂內に鑑眞和尙の御像を拜するのであるが、我國に御渡航の途上、潮風の爲に盲ひ給うた和尙の御眼はかなしく閉ぢられてゐる。自分は若葉のさわやかなやうにさつぱりとこの御目の雫をぬぐうてさし上げたい、の意。

目のさめるやうに萌えてゐる若葉のさわやかさに芭蕉の感じが動いて、その感じで像に向つて言つた句である。「若葉して」は下の氣持を誘ひ出す一の契機をなすもので、若葉に動いたさわやかな感じをそこに言ひさした氣味であらうか。この邊のところ實に微妙で言葉が及ばない。「御眼の雫ぬぐはばや」には尊くいたはしく思ふ芭蕉の濃やかな情がゆらいでゐる。「雫」といふ語はこの場合綺麗な語感を與へる反面に何か神經を刺戟する語で、そこに又痛々しい感じを表し得てゐるやうに思ふ。像を通して鑑眞の實體に迫つてゐる。寫生の極致といはれよう。

【芭蕉】　一〇、「子規居士」の語釋參照。

【唐招提寺】　トウセウダイジ　律宗の總本山。南都七大寺の一。大和國生駒郡都路村大字五條にある。略して招提寺ともいふ。藥師寺の北五町。天平寶字三年（昭和十三年より一一七八年前）、唐僧鑑眞の創立に成る。聖武天皇の勅願に依るものである。開創以來伽藍燒失に歸したこ

とがなく天平時代の建築佛像の今日國寶指定のものが數多現存してゐる。中にも金堂は天平寶字三年建立にかゝり、現存する天平建築中最大であり最も完美優秀なものである。

【吟】　ギン　(一)うたふこと。くちずさみ。吟詠。(二)漢詩の一體。「梁甫吟」。(三)能樂に於て、謠ふ强弱の度。「强吟」「弱吟」こゝは(一)。

【高野山】　カウヤサン　和歌山縣の東北隅にある紀伊山脈中の名山。金剛峯寺は山頂に位し、眞言宗高野派の總本山である。弘仁七年(一四七六)僧空海の開基にかゝる。北の比叡山延曆寺と並んで平安朝佛教の二大靈地。山上には金剛峯寺を中心として、金堂、灌頂堂、根本大塔、御影堂、大會堂、孔雀堂等があり、奥の院に達する道の兩側には、豐臣秀吉、明智光秀、曾我兄弟、親鸞、敦盛、芭蕉、其角等の遺髮・齒・爪を埋めた墓が立並び、奥の院には常夜の法燈が瞬いて居る。

芭蕉は高野山に於て

ちゝはゝのしきりにこひし雉の聲

と詠じてゐる。

【和歌の浦】　ワカノウラ　和歌山縣海草郡の灣入海濱。東西凡そ二十町。古來歌枕として名高い。

萬葉集(卷六、九一九)に「和歌の浦に汐滿ちくれば潟をなみ蘆邊をさして鶴鳴きわたる」山部赤人。

芭蕉はこゝで

行春に和歌の浦にて追付たり

と詠じてゐる。

【鑑眞和尙の像】　唐招提寺開山堂に藏めてある。鑑眞入寂(天平寶字七年)に先立つて、弟子思託に命じて彫ませた紙張漆着色像である。吾々はこの像に於てその崇高な人格がまざ〳〵と反映されてゐることを感ずる。その靜かに閉された眼が盲ひてゐることを思ふ時感慨の更に切なるものを覺える。輕く結んだ脣の如きも、極めて自然で法悅の妙相を表してゐる。これほど精神の表現に成功した肖像彫刻は他に類を見ない。天平の寫實主義の極致とするを憚らない。此像は他に類を見ない紙塑を用ひてゐるが、手法としては乾漆のそれに近い。袈裟は遠山模樣を畫き、鼻下には胡粉を以て髭の僅かに伸びた狀を描いてゐる。

【鑑眞】　ガンジン　(六八八―七六三)日本戒律宗の祖。俗姓淳于。唐の揚州江陽縣の人。十四才の時、大雲寺智滿に就いて出家し、戒律天台の敎義に通ずることが深かつた。偶々日本より聖武天皇の勅を奉じて入唐した留學僧榮叡・普照等が高宗の天寶元年に鑑眞に謁して東航を請うた。鑑眞はその請を容れて渡日を試みたが、難破・障碍等種々な事情の爲に五回は失敗に歸し、六回目に漸く日本に着くことを得た。時にわが孝謙天皇の天平勝寶六

年(一四一四)であつて、初めて戒律宗を我國に齎し、且つ多くの天台宗その他の佛書を傳へ、翌年東大寺に移り、こゝに戒壇を創設して聖武天皇(時に位を孝謙天皇に讓つて太上皇と稱し給うた)以下四百餘人に授戒した。天平寶字三年唐招提寺を開創した。この寺は聖武・孝謙二天皇が鑑眞の爲に施入し給うた所である。天平寶字六年戒壇を唐招提寺に置いて戒律を說いた。天平寶字七年(一七六三)五月入寂。年七十七。世に過海大師と呼ぶ。鑑眞は日本渡來の際眼に潮風が入つて盲者となつたと傳へられてゐる。

【笈の小文】　オヒのヲブミ　俳諧紀行。一冊。芭蕉作。笈に收め歩く小冊といふ義であらう。別に「大和紀行」「吉野紀行」とも言はれる。

貞享四年十月、芭蕉(時に四十四才)は鄕里伊賀へ赴かうとして廿五日出立。尾張に入り熱田に於て尾張・美濃の同好者と會合指導し、十二月伊賀に入つた。

貞享五年(元錄元年)二月伊勢神宮參拜、三月再び伊賀に歸り、同月半過ぎ杜國と共に吉野に向つた。初瀨に詣で葛城山に一言主神を偲び、大和の名所々々を廻り、吉野の花にあこがれ、高野山へ登り、和歌浦へ行き、四月八日奈良に至る。それより大阪へ赴き、須磨・明石を遊覽した。紀行はこゝで終つてゐる。

芭蕉の殆んど圓熟の境に近い俳句を見得る紀行文として

ての價値の外に芭蕉の人生觀と同時に、風雅觀卽ち俳諧觀が明確に述べられてゐる點に大きな價値が存する。「旅人と我名呼ばれん」といひ、自ら風羅坊といひ、「乾坤無住」といつてゐる所に、芭蕉が自ら人生の一旅人と悟つた人生觀が見られ、同時に「風雅に於けるもの造化に從ひて四時を友とす」といひ、「造化に從ひ造化に還れ」といつてゐる所に、四季の形象を通じて自然の生命に觸れようとする芭蕉の風雅觀が窺はれる。

【紀行】　キカウ　旅行中に見聞した感想を記した文。紀行文。

【鑑眞和尙來朝の時、船中七十餘度の難を凌ぎ給ひ、御眼の中潮風吹き入りて、遂に御眼盲ひさせ給ふ】

原文「招提寺鑑眞和尙來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎたまひ、御眼のうち潮風吹入て、終に御眼盲させ給ふ尊像を拜して」とあるのを拔いたのである。

この詞書の中に流露する感激が高く統一されて、「若葉して御眼のしづくぬぐはゞや」となつて現れたのである。

芭蕉のこの感激は直接には鑑眞が渡航の船中幾多の苦難を凌ぎ、潮風に侵された爲に失明したといふ當時一般に信じられてゐた事實に基いてゐる。

然るに鑑眞和尙傳記によると鑑眞は旣に渡航以前に盲目の人であつたといふことである。

この傳記を得て、人或はこの芭蕉の作（詞書及俳句を一體とした意味に於ける）に動搖を感ずるかも知れない。然しながら、事實と眞實とは別の世界であつて、事實が何れであらうと、この眞實に立つ芭蕉の作は儼として微動だにするものではない。

鑑眞傳記を紹介した藤村氏にも事實は事實として、別に眞實の世界を認めてゐる態度が感ぜられると思ふ。

【恐らくその瞼の濡れない時のなかつたほど涙の多い生涯を送つた人とも思はれる】

人生の不安災厄に戰く衆生に寄する同情の涙の乾くひまもない慈悲の一生を送つた人とも思はれる、の意。

失明の原因に關聯して鑑眞の精神生活を偲んだ言葉である。

【一方にはその盲目が反つて物を明かに見る別の眼を見開かせたであらう】

「一方には」といふ言葉には、言外に、失明したことは氣の毒であるが、といふ位の意をこめてゐる。盲人は勘がよいといはれるやうに視覺を斷つと他の感覺が著しく鋭敏となり、又精神が統一され澄んで來ることは常人に於ても經驗される事である。鑑眞も明を失つたことが一方に於て彼の心眼に更に一層の輝きを加へしめるに至つたであらうといふ推論は深く首肯されると思ふ。

2　文の構成

第一節　初―四五頁二行　心眼の開かれた姿が佛像の異相の中に見出されること。

(1)　佛像の額に光る異樣な眼は心眼を形象化したものであらう。（初―四四頁十行）

(2)　心眼の開けるのは天性の智愚に關らず、人生の經驗を重ねてゐるうちに自ら開かれるものである。（四四頁十一行―四五頁二行）

第二節　四五頁三行―終　心眼の開かれた姿が盲ひた鑑眞の眼に感ぜられること。

(1)　芭蕉が鑑眞の像を拜して深く感動したことが彼の紀行文に見えるが、その盲ひた鑑眞の眼がたゞの眼とは思はれない。（四五頁三行―四六頁一行）

(2)　鑑眞の盲目となつた時期は兎も角として、盲目となつたことが一面彼に幸して一さう明らかに物を見る眼を開かせたであらう。（四六頁二行―終）

3　文意

心眼の開かれた姿が佛像と鑑眞像とに見出されることを述べた文。

4　鑑賞批評

「寫生」に於て心眼を開くことの樞要を語つた作者は、この「第三の眼」に於て、その心眼の開かれた姿が、古美術の中に見出されることを語つてゐる。

佛像の異相に對する解釋の如きは確かに的を貫いたものであつて何人をも首肯せしめるであらう。鑑眞像解釋についても同樣であつて、氏の心の深さと冴えた洞察力とを示してゐる。

三　備考

1　指導研究

第一節の佛像解釋に於ては生徒に三眼の佛顏を描かせてみるのも面白いであらう。その上で教授者側で美術全集か何かでその實例を用意して示してやりたい。そして「この眼は何を見る眼か」と質問を發し、それに對する生徒自身の答の中から文意を歸納したいと思ふ。

第二節の鑑眞像の解釋に於ては、彼が一身の利害を眼中に置かず、度重る障碍を敢然と排してその志を貫いた壯烈な行爲を頭に置いて挿繪の鑑眞像を熟視せしめたならば、脫俗的な而も人間味溢るゝ表情を通して、弱小人間の上に注がれる心眼を、換言すれば、廣やかな人間愛の精神を感得させることが出來るであらう。

2　參考

イ　挿繪說明。

既に本文中の「鑑眞和尙像」の項で取扱つた。

ロ　參考文獻。

芭蕉の「笈の小文」の中から本文に關する一節を揭げよう。

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を產むを見て、此日に於てをかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

招提寺鑑眞和尙來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎ給ひ、御目のうち潮風吹入て、終に御目盲させ給ふ尊像を拜して、

若葉して御目の雫ぬぐはばや

舊友に奈良にて別る、

鹿の角先一節のわかれかな

（笈の小文）

八　長安の空

一　解題

1　作者

芳賀矢一　ハガヤイチ　芳麗生・龍江と號す。國文學者。慶應三年五月福井に生まる。父眞咲は福井藩士。明治二十五年七月東京帝國大學文科大學國文科卒業。明治二十七年九月一高教授兼高師教授に任ぜられ、同三十二年五月帝國大學助教授となつた。同年六月、文學史攻究法研究の爲、獨逸に留學を命ぜられ、同三十五年八月歸朝。帝大教授に任ぜられた。同三十六年四月文學博士を授けられた。大正四年三月帝國學士院會員となる。大正五年六月歐米各國へ出張を命ぜられ、翌年五月歸朝。同七年十二月國學院大學長就任。同十年九月東宮職御用掛を仰付けられた。大正十一年三月帝大辭任。在職二十五年。同年四月從三位に敍せられ、同年七月名譽教授の稱號を賜はつた。昭和元年十二月宮內省御用掛を仰付けられた。喘息・腎臟炎に罹る。昭和二年一月願に依り御用掛を免ぜられ、同年二月六日心臟病の爲逝去した。享年六十一。同時に勳一等に敍し、瑞寶章を賜はつた。

博士は寬厚仁慈、玲瓏玉の如き人格者であつた。一度博士の溫容に接すれば、春風吹き渡るの感があつた。博士はよく門人の面倒を見た。なほ博士について特筆すべきことは忠君愛國の念の深かつたことである。

博士の學風は實際的であつた。常に智識の活用を重んじ、社會教育、國民修養の點に着眼してゐた。從つて國定教科書や中等學校の教科書の編纂にも力を盡し、「日本家庭百科辭彙」「國民性十論」等の一般的讀物にも筆を執つた。博士は詞

藻の豐かなる上に非常な達筆であつた。和歌も作れば、漢文・漢詩も作つた。稀には俳句も作り、其他狂歌・狂詩にも巧みであつた。博士は後進に研究と創作とを兼ねることを奬めた。これは博士の單に學究的でないことを暗示するものである。

次に博士の業績について一言する。明治初年以來歐洲の學術・思想の輸入により、やゝもすれば我が國傳統の美が失はれようとし、國文學の研究も振はなかつた時代に當り、博士は熱烈な國家愛を基礎とし、歐洲科學の知識を取入れて、國文學研究に新生面を開き、特に歐洲文獻學に倣つて新たな國學を建設せんとした。博士は又、明治三十年頃、上田萬年・井上哲次郎・高山林次郎・木村鷹太郎の諸氏と共に「日本主義」といふ雜誌を起し、日本精神の發揮に努めた。博士は又國語教育に偉大な業績を遺した。明治二十八年頃、未だ送假名や句讀點などが實際問題として世の學者から顧みられなかつた時代に、博士は既に之を整理して國語教科書に改良を加へた。その他大學の講義の傍ら、辭書や中等學校の國語教科書・文法教科書を編纂して國民教育に多大の貢献をなした。

著作に、「國文學史十講」・「日本家庭百科辭彙四冊」（下田氏と共著）・「國民性十論」・「雪月花」・「新式辭典」・「日本人名辭典」・「筆のまにまに」・「口譯大鏡」・「國民道德教科書五冊」・「國語と國民性・日本漢文學」・「日本文獻學・文法論・歴史物語」・「國文學歴代選」二冊、「帝國讀本」十冊等がある。

2　出典

帝國讀本。

文學博士芳賀矢一の編纂した中學校國語漢文科用教科書。全十卷。富山房發行。大正十四年二月十八日初版發行、後、上田萬年・長谷川福平これに訂補を加へ數版を重ねてゐる。本課は昭和九年十月三十日發行の新制第二版訂正版の卷五第十七課から一部訂正の上採用した。

3　主眼及び採擇の趣旨

我が國史上、重大な文化的意義を有する遣唐使の意義を明らかにし、航海術の幼稚であつた當時に、恐しい風波の難を凌いで唐土に渡つて國家的使命を果した使節達の輝かしい業績を偲ばせたい。

本課はかやうに祖國の文化の源を尋ねると共に當時に於ける我が國の國際的地位を明らかにする國民的教材である。

前課に現れた鑑眞和尚は丁度この時代に來朝した人である。

二　解　釋

1　語　釋

【長安の空】　チヤウアンのソラ　長安のかなた。

〔長安〕　今の陝西省西安。周の武王が初めて都を營み、鎬京と名づけて以來屢〻帝王の居城となり、西漢及び唐もこゝに都した。長安の名は唐に初まる。

〔空〕　こゝでは、方向・場所の意。

【大ふねにまかぢ繁貫きこの吾子を　からくにへやるいはへ神たち】　光明皇后

大船に櫂を數多とりつけ船艤してこの吾が甥の清河を唐土に遣唐使として遣はします。途中風波の難のなく一路平安に彼地に着きますやう、神々よ、どうか清河を御守護下さい、の意。

〔まかぢ〕　「ま」は「全手」の「ま」と同趣にて、「かぢ」は舟を漕ぐ櫂。「まかぢ」卽ち「まかい」とも言ひ、舟の櫂の左右兩舷に備はりたるものを言ふ。

〔繁貫き〕　シジヌき　數多とりつけること。

「しゞ」は「しゞに」（しげく）の略。副詞。

「貫く」　舷に櫂をかけること。「貫く」は「つらぬく」意で昔は大船の舷側に孔を穿ちそこから櫂を出した趣であらう。四八頁挿繪參照。

〔この吾子〕　このアコ　こゝでは甥の清河を親しんで仰せられた語。

〔いはへ〕　齋へ。守れ、の意。

「いはふ」（齋）（一）けがれを忌みつゝしんで神を奉祀する。（二）守護する。かしづく。守る。こゝは（二）。

【神たち】　今日春日に於て祭り給ふ天つ神國つ神をさす。この歌は、春日に於て遣唐使藤原清河等の航海安全を祈願の爲に天神地祇を祭り給うた時、光明皇后の詠まれた

御歌である。當時遣唐使として赴くことの航路上の危險は實に言語に絶するものがあつた。一族知己の心配は言ふまでもない。たゞ神に祈るより外はない。この御歌には肉親に對する濃やかな御愛情が溢れ、旅路の平安を祈り給ふ御心がひゞいてゐる。

【光明皇后】　クワウミヤウクワウゴウ　御名は安宿媛（やすかひひめ）。藤原不比等の第二女。聖武天皇の皇后。天平寶字四年崩。御年六十。皇后は體貌が殊麗で、光耀があつたのでかく申されたといふ。資性慈仁、敦く佛教を信じ、天皇に勸めて東大寺を建て、且つ諸國に國分寺を創め、悲田・施藥の兩院を置いて天下の飢病を療養せしめられた。

【藤原清河】　フヂハラキヨカハ　光明皇后の兄房前の第四子。續日本紀の記事によれば、天平勝寶五年遣唐大使となつて渡唐したが、歸途逆風に遭ひ、唐土の南邊に漂着した。その時土人の反に遇ひ、同船者は大部分殺害せられ、清河は僅かに身を以て免れ、唐國に留つて歸朝することが出來ず、唐に居ること前後十餘年、遂に彼地に歿したといふ。

【遣唐使】　ケンタウシ　古昔、支那の唐朝に我が國から派遣せられた朝使。遣隋使に引續いて舒明天皇二年（一二九〇）犬上御田鍬が始めて唐に遣はされて以來、仁明天皇承和五年（一四九八）藤原常嗣が入唐するに至るまで十數回に及んでゐる。遣唐使の目的は兩國間の修交を圖るのみでなく、唐の輝かしい文化を我が國に輸入するにあつた。

猶宇多天皇寛平六年（一五五四）菅原道眞を遣唐使とされたが、道眞は唐の國内擾亂の故を以て渡唐中止を奏請し遂にこゝに遣唐使は廢止されることとなつた。

【かすが野にいつく三諸の梅の花榮えてあり待てかへり來んまで】

春日野に神樣を祀つてある齋場に咲いてゐる梅の花は、私が歸つて來るまで榮えて待つてゐて下さい。皇后樣は私が唐から歸つて參りますまで御無事でおいで下さい、の意。

〔三諸〕　ミモロ　御室、卽ち、神を祭るところ。今の春日神社はまだなかつた樣だから、これは春日野に臨時に設けた齋場であらう。

上三句は眼前に見える風景を以てした譬喩で、梅花を以て皇后に喩へ奉つたのである。

【鹿島立】　カシマダチ　旅行に出で立つこと。かどで。たびだち。神代、鹿島神、卽ち武甕槌神が、天孫降臨に先だつて降り、國土を平定し給うた吉例を遠く傳へた語かと云はれる。

【奈良朝】　ナラチヤウ　元明天皇和銅三年（一三七〇）三月奈良に遷都し給うてから、桓武天皇延曆三年（一四四四）十一月山城遷都に至るまで七代（桓武天皇を除く）七十五年間をいふ。

但し、こゝはこれより時代を溯つて舒明天皇の朝（一二八九――一三〇一）からこのかたを含めて言つてゐるのであらう。

猶穿鑿すれば、遣唐使と同性質の遣隋使の派遣された推古天皇朝まで溯り得るであらう。遣隋使は推古天皇十五年（一二六七）小野妹子が隋に遣はされたのに初まる。

【平安朝】　ヘイアンチヤウ　桓武天皇延曆三年（一四四四）長岡京都以來、後鳥羽天皇建久三年（一八五二）源頼朝が鎌倉幕府を開くまで約四百年間をいふ。

但し遣唐使の遣はされたのはその初期までであつたこと〔遣唐使〕の項に述べた如くである。

【廷臣】　テイシン　朝廷に仕へる臣。朝臣。

【交驩】　カウクワン　交歡とも書く。よろこびを交へること。共々にたのしむこと。親善。

〔驩〕　（一）馬の名。（二）馬和ぎ樂む貌。歡と通ず。よろこぶ。よろこび。

【文化】　ブンクワ　（一）世の中がひらけ進むこと。（二）人類がその本來所有する理想を實現して行く活動の過程に於て產出した、學問・藝術・宗教・道德・法律・政治・經濟等をいふ。「文明」が一般に物質的發達を意味するに對し、「文化」は內面的・精神的のものを意味する。こゝは（二）。

【媒介】　バイカイ　兩者の間に立つてとりもつこと。なかだち。

【意義】　イギ　深い根據に基く意味。

【使命】　シメイ　使者として負はされたつとめ。

【孝謙天皇】　カウケンテンワウ　御名は阿閉。重祚の後、稱德天皇と謚す。聖武天皇の皇女、御母は光明皇后。第四十六代の天皇。天平二十一年七月卽位し給ひ御在位十年。改元し給ふこと二回、天平勝寶、天平寶字といふ。寶字二年位を淳仁天皇に讓り薙髮して尼となり給うた。淳仁天皇御在位六年。孝謙上皇また位に卽き給ひ、稱德天皇と稱する。在位五年、改元二回、天平神護、神護景雲といふ。神護景雲四年八月四日崩御。寶算五十三。

【遣唐大使】　ケンタウタイシ　遣唐使の主席をいふ。遣唐使の組織については本文五〇頁九行――十二行に說明がある。

【玄宗皇帝】　ゲンソウクワウテイ　支那、唐の第六代皇帝。名は隆基。睿宗の第三子。卽位後は宗璟・姚崇・張說等を用ひて國政を輔けしめ、いはゆる「開元の治」をなした。然し晩年は意漸く倦み、奢侈を極め、奸相李林甫を用ひ、楊貴妃を寵愛して、唐の紀綱再び亂れ、爲に天寶十四年には安祿山の亂が起り、一人勤王の士あつて起つ者なく、帝は蜀に奔るに至つた。次いで太子は靈武に卽

位し、玄宗を尊んで太上皇帝とした。亂後長安に還り、寶應元年歿。在位四十五年。改元二回、開元・天寶。

【謁見】　エツケン　目上の人にまみえること。

【貴顯の出】　貴族の出身。

【閑雅な儀容】　みやびやかな立派な容子。

〔閑雅〕　カンガ　みやびやか。しとやか。教養あるさまをいふ。

〔儀容〕　ギヨウ　とりつくろひたるかたち。

【驕傲一世に鳴つた玄宗皇帝】　おごりたかぶつた態度が當代に鳴りひゞいてゐた玄宗皇帝。

〔一世〕　イツセイ　こゝは當時・當代の意を強めていふ語。

【擧止】　キヨシ　ものごし、たちゐふるまい。

【有義禮儀君子之國】　ユウギレイギクンシノクニ　正しい道あり、禮儀ある君子の國。

〔君子〕　クンシ　(一)成德の人。(二)官職・地位ある人。(三)妻の夫を指していふ稱。(四)竹又は蓮の異稱。こゝは(一)。

【大伴古麻呂】　オホトモノコマロ　胡麿とも書く。旅人の甥。一說に旅人の孫。天平勝寶元年八月左少辨となり、同二年九月遣唐副使となり、同四年入唐。同六年歸朝。此年唐僧鑑眞が來朝した。左大辨となる。天平寶字元年兼陸奥鎭守府將軍となり同日陸奥按察使となつた。

【正月の賀を受けるに當つて】　唐朝を主語とした書き方である。本文の文脈から行けば「正月の賀を述べるに當つて」とある方が順當であらう。

【列位】　レツキ　列んだ位置。

【新羅】　シラギ　古昔、朝鮮半島の南部に在つた國の名稱。我が崇神天皇四十一年（六〇四）に朴赫居世といふ者が建國したといふ。以後、朴・昔・金の三氏が王種として交々統治權を握り、幾多の消長があつて、およそ五十六王九百九十二年の後、我が朱雀天皇承平五年（一五九五）に滅亡した。始祖赫居世から眞德女王に至る二十八代は新羅興起時代であり上代と稱へられる。次に武烈王から八代は中代と稱へられ、新羅全盛時代である。次の宣德王以後はいはゆる下代で、次第に衰勢に向ひ、終に敬順王の時、高麗に降つた。

新羅は半島に於ては、百濟・高勾麗と相對峙してゐたが、南方の海を距てた日本とは、日本が半島の經營に從つてゐた關係上、種々の交涉を重ねた。神功皇后の御討征以後も歸叛常なく、繼體天皇の朝、任那の一部を割いて百濟に與へたが、新羅はいつしか任那を蠶食し、又筑紫國造磐井は新羅と結んで叛き、磐井は物部麁鹿火に鎭定されたが、新羅討伐に向つた近江毛野は利あらず、欽明天皇の御代（一二二二）任那は新羅に征略され、以後半島に於ける日本の勢力減退し、百濟が急を告げた時に

も日本は援兵を送つたが利を失ひ、終に天智天皇二年（一三二三）新羅が唐兵と力を併せて日本・百濟の聯合軍を破つて後は、日本は半島經營を斷念するに至つた。時恰も新羅に於ては武烈・文武二王の時代で、新羅の黃金時代に入らんとするのである。この後、新羅は漸次四隣を壓して、その利害が唐と相背馳し、屢〻唐の壓迫を受けたけれども屈せず、巧みに唐を操縱し、天智天皇七年（一三二八）に至り、百濟の全土と大同江以南の高勾麗の地とを併せ、半島の大半を統一したが形式上では大唐國新羅と稱して唐の封冊を受けた。この前後は新羅のいはゆる中代で全盛の極に達し、盛唐の文化を輸入して我が奈良朝文化と相對した。

尙、我が遣唐使藤原淸河等が入唐した孝謙天皇天平勝寶四年（一四一二）は、新羅三十五代景德王の十一年、唐玄宗天寶十一年に當つてゐる。景德王は武烈王より六代後に當る。

【宣揚】　センヤウ　のべあらはすこと。しきおよぼすこと。

【國賓】　コクヒン　國家の賓客として、帝室及び政府より特別な優待をなす外來の人。

【體面】　タイメン　世上に對する體裁。めんもく。

【祖國】　ソコク　(一)自己の祖先以來臣籍の屬する國。(二)國民の分れ出たもとの國。ここは(一)。

【面目】　メンボク　(一)かほつき。かほかたち。(二)ありさま。やうす。(三)世の中に立つて相當の地歩を占むるさま。他人に對してはづかしからぬさま。こゝは(三)。

【舒明天皇】　ジヨメイテンワウ　御諱は田村。敏達天皇の皇孫。押坂彥人大兄皇子の御子。第三十四代の天皇。推古天皇元年御降誕、一二八九年正月卽位。都を大和の飛鳥岡本宮に遷し給うた。在位十三年にして一三〇一年十月崩御。寶算四十九。萬葉集中に御製二首を遺し給う。

【犬上御田鍬】　イヌガミノミタスキ　上古の朝臣。推古天皇二十二年朝命に依つて隋に使し、歸朝後大仁に進んだ。舒明天皇二年更に唐に使した。これが遣唐使の始である。

【仁明天皇】　ニンミヤウテンワウ　御名は正良（まさら）。嵯峨天皇第三皇子。第五十四代の天皇。弘仁元年御降誕。天長十年三月卽位。承和三年初めて檢非違使廳をおき彈正臺の任を之に委ね給うた。同九年、春宮帶刀伴健岑、但馬權守橘逸勢等、皇太子恒貞親王を奉じ、東國に奔つて亂を企てるといふ風聞があり、詔して健岑・逸勢等を捕へて配流し、太子を廢し給うた。これは蓋し、恒貞親王が藤原氏の出でない爲に起つた、藤氏と大伴氏橘氏等との政權爭奪の結果に過ぎない。在位十七年。嘉祥三年三月崩御。寶算四十一。天皇は叡哲聰明にましまし、諸藝を包ね、經史百家の書に通じ給うた。又文藻を愛し、漢晉の淸濁を精辨し、射に巧に、書を善くし給うた。

【當時支那は漢族の勢威が四方に張つて、東西兩文明の融合

も圖られ、唐都長安は正に世界的文明の中心たるの觀があつた。】

唐は二代太宗、三代高宗の時、突厥を伐つて之を亡し、その領有してゐた内外蒙古・新疆・中央亞細亞等を收めた。西藏は太宗の時唐に降り、その南隣のネパール及び印度も唐に來聘し、南洋諸島も亦唐の威風を望んで來朝するものが多かつた。又東方に於ては新羅を援けて百濟・高勾麗を滅し、その威は半島を壓した。漢族の隆盛はこの時を以て頂點に達した。唐はこの廣汎な領土に六都護府を置いて統治した。

唐の文化　(一)藝術。歷代中最も藝術隆盛の時代であつて詩は特に發達した。中にも玄宗の頃は盛唐時代と稱せられ、李白と杜甫の二大詩人が出た。又、書道に、唐太宗・張旭・顏眞卿あり、畫には李思訓・王維あり、李思調は北宗畫の開祖であり、王維は南宗畫の開祖である。吳道玄は佛畫に長じてゐた。又玄宗の代には雅俗の音樂共に流行して、奈良朝より平安朝にかけて我が國に傳來したものが多い。猶、玄宗より數十年を經て、韓愈と柳宗元の二大文章家あり、又古來我が國人に愛讀せられた白氏文集の作者たる白居易（號樂天）も其頃に出た。

(二)宗教。佛教は南北朝流行の餘勢をうけ、唐に至つて更に盛で、當時流行した佛教の諸派には、三論・法相・華嚴・律・成實・俱舍・天台・眞言の八大流派があつた。

これらの宗派は奈良朝より平安朝にかけて概ね我が國にも傳はつた。

唐太宗の時玄奘は天山南路・中亞を經て天竺に入り、往復十七年間に百三十餘國を遊歷し、經論六百五十餘部を得て還り、之を飜譯して支那佛教史上に一新紀元をなした。

道教も唐に至つて頗る盛んとなり、唐の皇室は之を以て國教となし、老子を以て國祖となすに至つた。

(三)制度。唐の制度は大體その最盛時たる太宗・高宗の世に成つた。

中央政府は三省・六部より成る。三省は尙書・中書・門下である。六部は尙書省に屬し、政務を分擔するものであつて、吏・戸・禮・兵・刑・工の六部である。地方制度は全國を十道に分ち、道の下に州あり、州の下に縣あり、州に刺史、縣に令を置いて民政を掌らしめ、各道に巡察使があつて、州・縣を監督した。

稅法に於ては、財源の大本は租・庸・調の三つである。租は田地に課するもの、庸は丁男が毎歲二十日間公役に就くこと、調は鄕土の產物を上納することである。兵制に於ては、全國に六百三十四府を置き、各千人內外の兵を備へ、地方を鎭し、且つ番上して宮城護衞の任にも服した。

刑罰には笞・杖・徒・流・死の五刑があつた。

唐の制度は支那後世の模範となつたのみでなく、我が國古代の制度も唐制に則る所が多い。之と同じく唐代前後の風俗も亦我が國に入つた。例へば、正月元旦の屠蘇酒の祝杯、三月三日の曲水流觴の遊、四月八日の灌佛の式、五月五日の菖蒲湯、七月七日の七夕祭、同十五日の中元盂蘭盆の供養、歲の終りの追儺の穰ひ等。

又種々の舞樂が唐と朝鮮より我が國に傳はり、我が國に於ては支那樂を左方とし、高麗樂を右方とした。

唐に入つた外國文化　(一)景教。唐代には、其版圖の西方に擴まつた影響として當時中亞地方に流行してゐた諸宗教は漸次支那に傳つた。中にも景教及び回教は最も注意すべきものである。景教は卽ち基督教の一派たるネストル教である。景教の初めて支那に入つたのは唐太宗の時シリア人阿羅本が長安に來つて、太宗の尊信を受けたのに始まり、玄宗等も之を信仰した。其寺を太秦寺といふ。當時歐洲には東羅馬帝國（太秦）が、波斯に起つた新興サラセン王國の侵略を受け、國運日に衰頹の途にあつた。

(二)回教。皇紀一二七〇、推古十八年亞剌比亞人マホメットの創めたイスラム教である。マホメットは自ら神の使徒を以て任じ、その宗教と武力とを以てアラビヤの大半を征服してサラセン王國を建設し、その教を弘めた。その歿後も、繼承者カリフによつて征伐と布教とが行はれ、東はペルシヤを滅し、北は東ローマ帝國を侵し、西はアフリカの北岸を略し、進んでイスパニアを略した。この回教が中央亞細亞を經て唐に入つたのであつて、この時代に建立された回教寺の廣東に現存するもののあることによつて明かである。

(三)阿剌比亞（サラセン王國）の文物。唐とアラビアとの間に通商盛んに行はれ、アラビア人は、支那南海の廣州（廣東）・泉州（福建）に來航して貿易を營んだ。當時唐よりの輸出品は絹帛・穀類　金屬・陶器等であり、輸入品は芳香・藥品・象牙・犀角・玻璃・珠玉等であつた。

〔漢族〕　カンゾク　支那人の中樞を占めてゐる民族で西曆前二千年、黃河の流域に部落社會を形成し、次第に他種族を征服して支那全土に擴がり、獨特な漢文化の華を咲かせた。その歷史上最も國運の隆盛であつたのは漢及び唐である。

〔東西兩文明の融合も圖られ〕　唐の文明と、サラセン、東ローマの文明との融合もはかられ、の意。こゝでは「文明」を「文化」と同義に用ひてゐる。

〔世界的文明〕　世界の文明。「的」は、體言に副へて之を形容詞化、又は副詞化する語。こゝは前者である。

【國際的の使節】　國と國との間の公の使ひ。

〔使節〕　シセツ　使者。「節」は、使者のしるしとして天

子より賜るは刀、又は杖のこと。熟語として使者の意を表す。

【都度】　ツド　（副）度毎に。「都」は「すべて」の意。

【留學生】　リウガクセイ　外國に在留して修學する學生。

【學問僧】　ガクモンソウ　佛教の教理を學問的に究明しようとする僧侶。

【琴】　コト　絃樂器の一種、長い桐の板を張り合せて中空にし、上面に弦を張り、彈いて鳴らすもの。種類が多いが、こゝは奈良朝時代であるから六弦の倭琴（ヤマトゴト・ワゴン）を指すのであらう。

【琵琶】　ビハ　彈奏樂器の一種、胴面は楕圓形で扁く、弦の左右部に半月形の共鳴を助くる孔がある。其上部は狹まつて掉となり、全體が恰も杓子の如くである。これに四弦を張り四柱を設ける。抱き持つて、銀杏葉形の撥で彈く。

もと印度の古樂器で、中央アジアを經て支那に傳はり、唐代に我が國に傳來したものといふ。よつのを。

【一藝一能】　イチゲイイチノウ　何か一かどの藝能。

〔藝〕　わざ。たくみ。材能。伎術。遊藝の特稱。

〔能〕　はたらき。わざ。技藝。技倆。

【先人】　センジン　亡夫又は亡父を、其妻子のさしていふ稱。こゝは意味を轉じて「先進」と同義に用ひられてゐる。

〔先進〕　先輩。先覺。後進の對。

【大化の改新】　タイクワのカイシン　第三十六代孝德天皇の御代、中大兄皇子（後の天智天皇）が藤原鎌足と共に天皇を助けて、斷行せられた政治上の大改革である。我が上古時代は所謂族制制度であつて、臣・連・伴造・國造等の豪族が土地・人民を私有してゐた爲に、その勢力が次第に强大となり、朝廷の威令が漸く行はれなくなつた。當時隋唐の文化は既に我が國に東漸し早く之に倣はうとする先覺の士が少くなかつた。蘇我氏の誅滅（一三〇五）を機として、中大兄皇子は中臣鎌足と共に、孝德天皇を擁立し、同年六月新政の第一歩として年號を建てて大化と稱し、大いに制度を改革せしめられた。その主眼を約言すれば、族制分權を改めて朝廷集權と爲すにあつた。

先づ朝廷には八省百官を置き、從來行はれてゐた官職の世襲を廢して交代遷任とし、才能ある者は家柄に拘らず任官することとし、地方に於ては、從來豪族の私有してゐた土地・人民を回收して公地・公民とし、國・郡の境を明らかにして國司・郡司を設け、戶籍を作り、班田收授の法を立てて人每にその生存中一定の口分田を班ち、また從來の貢物をやめて租・庸・調三種の稅法を立てられた。これらは多く唐の制度に倣つて作られたもので、政治並びに社會の狀態はこれ以後全く改まるに至つた。

【南淵清安】　ミナミブチノシヤウアン　推古天皇十六年、再度小野妹子を隋に遣はされた時同伴して行つた學問僧四人中の一人で日本書紀に「南淵漢人請安」と記してゐるのによると、歸化支那人であつたと思はれる。後、三十三年を經て、舒明天皇十二年、學生高向漢人玄理と共に歸朝し、いづれも爵一級を賜はつた。皇極天皇の代、蘇我氏專橫を極め、國家を危くするに及んで、中大兄皇子、中臣鎌足と謀つて蘇我氏を追滅せんと企て、謀の洩れるのを慮つて、皇子、鎌足と、周孔の教を南淵先生に學ぶと稱して、その往復の途中、潛に密謀を廻らされたがこの南淵先生は、卽ち請安のことであらうといはれる。

【高向玄理】　タカムコノクロマロ　（——六五四）大化新政前後の學者。武內宿禰の後裔で、後、高向の姓を賜はつた。初め高向漢人といひ、また黑麻呂と稱した。推古天皇十六年、遣隋使小野妹子に從つて隋に留學を命ぜられ止ること三十三年、舒明十二年に唐から還つた。大化元年國博士となり、小德冠に任ぜられた。翌年新羅に使し、五年僧旻と勅命を奉じて八省百官の制を議した。後大錦上となり、白雉五年遣唐押使となつて大使河邊麻呂と共に唐に赴き、高宗に謁し、同地にあつてその博學を稱揚されたが、白雉五年客地に歿した。

【僧旻】　ソウミン　（——六五三）入唐學問僧。推古天皇の晩年に入唐し、舒明天皇四年歸朝した。大化の初め、高向玄理と共に初めて國博士となつた。同五年勅を拜して玄理と共に唐制を參配して八省百官の制を立てた。白雉四年五月病を獲るや、孝德天皇親く旻の房に行幸して慰問し給うた。その六月示寂。天皇は大いに之を悼惜し給ひ、特使を派して賻を賜はり、且つ名工に命じて多數の佛像を造らしめ、川原寺に安置せしめられた。

【小野妹子】　ヲノノイモコ　天帶彥國押人命六世孫。推古天皇の朝に仕へ、十五年遣隋使となつた。在隋歲餘で歸朝。煬帝、裴世淸を俱に來つて報聘せしめた。裴世淸の歸るに及んで、妹子再び選ばれて大使となり隋に赴き、（推古天皇十六年、一二六八）明年歸國した。位大德冠に至る。第二回の入隋の時、高向玄理・僧旻等八人が之に從つた。

【吉備眞備】　キノビマキビ・キビノマビ・キビノマミ　養老元年（一三七七）遣唐留學生となり阿倍仲麿と共に入唐し、天平七年（一三九五）歸朝。在唐の間經史を研修し、博く衆藝に涉つた。孝謙天皇が東宮であらせられた時、其學士となり恩寵が甚だ渥かつた。天平勝寶の初從四位上に進んだ。四年遣唐副使となり、六年歸朝して太宰大貳となり、後西海道節度使となつた。惠美押勝の亂に功あり、從三位に敍せられ參議に拜し中衞大將を兼ねた。天平神護元年正三位となり、翌年中納言より大納言となり、尋いで右大臣に拜し、正二位に敍せられた。四

年稱德天皇崩御し給ひ、皇嗣未だ定まらず、眞備等文室淨三を立てんことを圖つたが、左大臣藤原永手等が急に策を定めて光仁天皇を擁立するに及び、大いに不平を抱き、上表して職を辭した。寶龜六年（一四三五）薨ず。年八十二。

【清新の新宗派】　新しい宗教の一派。最澄の天台宗と空海の眞言宗とを指す。

【唱導】　シャウダウ　さきだちとなつて他をさそひ導くこと。となへ導くこと。

【最澄】　サイチヤウ　日本天台宗の開祖。諡號を傳教大師といふ。俗姓は三津氏。百枝の子。近江滋賀の人。神護景雲元年（一四二七）誕生。弘仁十三年（一四八二）比叡山に入寂。年五十六。十二歳の時行表に就いて出家し鑑眞の弟子から天台の章疏を學び、延曆四年、十九歳、日枝山（後に比叡山と改む）に登り、次で根本中堂を建てた。延曆十六年內供奉に列せられ、同二十一年入唐求法の表を上つて勅許せられ、同二十三年（三十八歳）遂に入唐渡航の志を遂げ、唐に留ること約一年、天台・一乘圓頓戒・密教・禪圓密禪戒の四宗の相承を得て歸朝した。二十五年天台宗獨立の公認を蒙り、大乘戒壇を比叡山に開かうとして勅許を請うたが南都の强い反對に遭ひ、生前遂に其志を達することが出來なかつた。蓋し叡山に此戒壇の建てられることは、佛教の中心地が奈良から叡山に移ることであつたからである。併し歿後初七日に勅許が下つて門下の義眞が天長四年に戒壇を建てた。最澄の唱導する所は天台圓教を中心とするもので、「法華經」を根柢とする一乘の思想を以て國民を教化し、且つ國家を鎭護せんとするに在つた。殊に注意すべきは「學生式」を作つて十二年を一紀とする籠山の制度をたて、又修學の規定を設け、其他細密な生活の軌範を垂れて研學修行の永續を圖つた事である。之によつて叡山は年を逐うて隆盛に赴き、平安朝に於ける佛教の中心地として輝くに至り、鎌倉時代に及んで淨土宗、曹洞宗、眞宗、日蓮宗等を出す淵叢となつた。

著書に「守護國界章」「註仁王經」「註無量義經」「法華秀句」等があつて悉く「傳教大師全集」に收められてゐる。

【空海】　クウカイ　我が國眞言宗の開祖。諡號を弘法大師と稱する。讃岐國多度郡屛風浦の人。姓は佐伯氏。父は田公（たきみ）。寶龜五年（一四三四）六月生誕、承和二年（一四九五）三月寂。年六十二。幼名を眞魚（まを）といつた。十二歳の時外舅大足に從つて儒を學び、後、平城京に出て勤操（ごんそう）に從つて佛法を受け、延曆十四年東大寺戒壇に登つて、具足戒を受けたが、同二十三年、年三十一の時、入唐留學の命を受け、最澄と共に、遣唐使藤原葛野麿に從つて入唐し、京城靑龍寺慧果和尙に學び、眞言密教兩部の祕奧を相承し、大同元年歸朝した。弘仁七年（一四七六）、高野山を開いて金剛峯寺を建てた。同十四年、朝廷より鎭護國家の道場として東寺を賜ひ、後、仁王山教王護國寺の勅號を賜うた。その威儀悉く長安靑龍寺の制に倣つた。高野山開基後、諸方を遊歷して土木・工藝の指導をなし、堤を築き池を開いて產業開發に盡した。又天長五年には東寺の東に綜藝種智院を設けて一般庶民の子弟の爲に教育の道を開いた。

空海は始めて組織ある教理として密教の一大體系を傳へた人で顯密二教判を整へ、別に十住心教判を創說して佛教史上に一新見地を拓いた。空海は博學能文、書法に妙を得、又兩部神道に基礎を與へた。著作頗る多く、「十住心論」十卷、「祕藏寶鑰」三卷等二百餘部があり、「弘法大師全集」に收められてゐる。

【判官】　ハングワン　遣唐使の第三等官。

【錄子】　ロクジ　遣唐使の第四等官。

【飜譯掛】　ホンヤクガカリ　外國語（こゝは支那語）を國語に譯することを受持つ職、又はその人。

【譯語】　ヲサ　通譯。

【水手】　カコ　舟を操縱する者。船頭・舟子・揖取。

【便乘】　ビンジヤウ　便宜を得て車馬船舶などに乘ること。

【堅牢】　ケンラウ　堅固にして丈夫なこと。「牢」は「固」。

【藤原當嗣】　フヂハラノツネツグ（七九六——八四〇）中納言葛野麻呂の六男。少時大學に學んで「文選」を暗誦し、又文章を好み、隷書を能くし、資性明幹、威儀の稱すべきものがあつた。弘仁十一年右京少進に任ぜられてから次第に累進して天長八年には參議に任ぜられ、仁明天皇の承和元年に遣唐大使となり、同三年に唐へ出發したが、風浪の爲に果さず、再び艤裝して四年に入唐し六年に歸朝して從三位を授けられた。翌七年四十五歳を以て歿した。

【小野篁】　ヲノノタカムラ　野相公と稱する。參議岑守の子。弘仁十三年文章生の試驗に及第し、天長九年累進して從五位太宰小貳となる。十年三月東宮學士彈正少弼となる。承和元年正月遣唐副使となり、同三年發して颶風に遭ひ、船が破れて還つた。四年再び唐に赴かんとし、大使藤原常嗣と船を爭ひ、病と稱して乘船しなかつた。嵯峨天皇罪を論じ、同五年十二月隱岐に流し給うた。七年四月召還し、次いで本官に復された。九年陸奧守東京學士兼式部少輔となり、十四年參議兼彈正大弼となつた。文德天皇卽位し給ふや、正四位下近江守を授けられ、明年左大辨となつた。幾何ならずして病に罹つた。天皇之を愍み、屢〻人を遣して物を賜ひ、從三位を授け給うた。仁壽二年十二月薨。年五十一。人となり不羈直言を好んだので世に容れられなかつた。母に事へて至孝であつた。家もと貧しかつたが俸入は皆親友に施したといふ。文章

は當世に冠絶し、草隷は二王の迹といはれ、詩は世に唐の白樂天に比せられたといふ。

【諷した】　フウした。

〔諷する〕　ほのめかしいふ。遠まはしにいふ。それとなくいふ。

【嵯峨上皇】　サガジヤウクワウ　嵯峨天皇が弘仁十四年（一四八三）位を淳和天皇に讓り給うてより稱し奉る。

〔嵯峨天皇〕　御名は神野。桓武天皇の第二皇子。第五十二代の天皇。延曆五年九月御降誕、大同四年四月卽位。御在位十四年。弘仁十四年四月御讓位。承和九年七月崩御。寶算五十七。天皇幼より聰敏、讀書を好ませ給ひ、長ずるに及んで博く經史に通じ、詩文を善くし、書道に秀れさせ給うた。橘逸勢、僧空海と共に世に三筆と稱する。

【逆鱗に觸れて】　ゲキリンにフれて　お怒りを蒙つて。

〔逆鱗〕　天子の御いきどほり。宸怒。

【隱岐】　オキ　太古大八洲の一。島根縣の正北に位し、日本海に浮ぶ島。四島嶼より成る。今島根縣に屬する。承久亂に後鳥羽上皇が、元弘亂に後醍醐天皇が此島に遷されさせ給うたことで有名である。

【當時造船術が幼稚で、且航海術もまだ頗る進歩しなかつたので】

當時の船については正確なことは分らないが、大體に於て刳舟（くりぶね）（我が國の古語で棚無小舟といふ）の發達した程度のもので、航海力としては、專ら人力により、水手等が櫓櫂を操縱して舟を推進せしめたものであつたことが推察される。

【光仁天皇】　クワウニンテンワウ　御名は白壁。天智天皇の御孫で、施基皇子の第六皇子。第四十九代の天皇。和銅二年十月御降誕。神護景雲四年八月稱德天皇崩御し給ふや、藤原永手、同百川等遺詔と稱して天皇を擁立し、十月朔卽位し給うた。在位十二年、天應元年四月位を桓武天皇に讓り、同十二月崩御。寶算七十三。

【小野石根】　ヲノノイハネ　太宰大貳老の子。遣唐副使。

【蘇州】　ソシユウ　支那本部江蘇省の都會。太湖より流れ出る蘇州河に面し、景色がよく、名所舊蹟に富んでゐる。農產・工產の物資の集散地。又製絲業、絹織物の中心地として有名である。

【趙寶英】　テウホウエイ　傳記未詳。

【愛別離苦】　アイベツリク　佛語。八苦の一。愛する人と別るゝ苦。

【かこつ】　思ひ佗びて歎きいふ。ぐちをいふ。

【から國にゆきたらはしてかへり來んますらたけをにみきたてまつる】

唐土の地に無事に行き着き、任を果して恙なく歸朝なされる筈のますらをに祝盃を獻上致します、の意。

〔ゆきたらはして〕　行き滿足（たら）して、の意。無事に行き着いて。

【饗餞】　キヤウセン　旅に出る人を送る別れのさかもり。

【御衣・黃金】　オンゾ・コガネ

【桓武天皇】　クワンムテンワウ　御名は山部。光仁天皇の庶長子。第五十代の天皇。天平九年御降誕。寶龜三年皇太子となり、天應元年四月禪を受けて卽位し給うた。天皇深く東夷の叛伏常なきを憂ひ給ひ、延曆四年紀古佐美を、更に十六年坂上田村麿を征夷大將軍として之を討伐せしめ給うた。田村麿は驍勇で智略があり、能く其任を完うし、蝦夷の地は悉く王化に服し、東陲の地はこれから靜なることを得た。天皇は又平城の地が規模小で大帝都に適しないので遷都を思召し立たれ、一時山城國乙訓郡長岡に都を定め給うたが、延曆十二年に至り、同國葛野郡太村の地を相して新都を經營し翌年都をこゝに移し給うた。之を平安京といふ。爾來一千有餘年の帝都であつた今の京都が之である。在位二十五年、延曆二十五年三月崩御。寶算七十。

【藤原葛野麻呂】　フヂハラノカドノマロ　（七六五——八一八）大納言小黑麻呂の長子。延曆四年に從五位下に敍せられてから、陸奧介、少納言、伊豫守、太宰大貳等を經、延曆二十年遣唐大使に任ぜられ、二十三年に唐に赴き德宗に謁見した。二十四年歸朝して從三位に敍せられた。平城天皇の大同元年權參議に任ぜられ、次いで東海道觀察使、中納言、皇太弟傅となつて天皇の御信任が篤く、大同五年仲成藥子の事變に際しては諫め奉つたが容れられず、事終つて後、藥子と姻戚の關係を以て重罪に擬せられたが遂に罪を赦され、弘仁三年民部卿を兼ね同九年六十四才を以て歿した。

【漢法】　カンパフ　支那式。支那流。

【このみきはおほにはあらずたひらかにかへりきませといはひたるみき】

この神酒はなみ〳〵のものではない、お前が無事任を果して一路平安に歸り來ますやうにと神樣を祀つてお願ひ申上げた神酒であるぞ。恙なく歸つて來なさい、の意。

【靑丹よし】　アヲニよし　「奈良」にかゝる枕詞。「靑丹」は靑色の土、「よし」は「吉し」の意。奈良地方は「靑丹」を產するよりいふといはれる。

【燦然】　サンゼン　きらびやかなさま。輝かしいさま。

【王朝】　ワウチヤウ　鎌倉時代に對して、奈良朝・平安朝を通稱していふ。

【近世日本】　キンセイニホン　我が國の織・豐・德川時代を指す。

【文化的躍進】　ブンクワテキヤクシン　文化の目ざましい進步。

【轉生的發展】　テンセイテキハツテン　生れ替つたやうな

急激な發展。「的」はここは上に接續する名詞を形容詞化すると共に、その性質・傾向を帶びた意味を表す。

【獻身的努力】　ケンシンテキドリョク　身命を捧げてつくした努力。

【晴れの使節】　榮譽ある使者。

【異域】　イキキ　外國。異國。

【阿倍仲麻呂】　アベノナカマロ　中務大輔船守の子。幼少より聰名で讀書を好んだ。靈龜二年遣唐留學生に選ばれた。時に年十六。唐に留まること數年にして唐朝玄宗に仕へ祕書監を兼ね衛尉卿となつた。又、姓名を改めて朝衡と稱した。天平勝寶中藤原清河が大使となつて唐に使した。玄宗は仲麻呂に命じて接待せしめた。清河の歸國に際し、仲麻呂に歸國の志があつたので玄宗は命じて送使となした。然るに海上颶風に遭ひ安南に漂流し、再び唐に赴き、肅宗に仕へて光祿大夫となり、御史中丞北海郡開國公を兼ね、三千戸を食んだ。寶龜元年正月唐で歿した。年七十。唐に在ること前後五十餘年、常に鄕親を思ひ、書を新羅王に託して送つた。承和三年遣唐使正二位を贈られた。

【玄昉】　ゲンバウ　俗姓阿刀氏。出家の後、義淵に從つて唯識を學び、靈龜二年八月入唐の命を拜し、養老元年遣唐使多治比縣守に隨つて入唐し、樸陽の智周法師に謁して、法相の蘊奧を極めた。在唐十八年、玄宗召見してその學才を愛し三品に敍し、紫袈裟を賜うた。天平七年歸朝し、傳來した經論・佛像等を獻じた。興福寺に居る九年僧正に任じ、紫袈裟を賜うた。之より朝廷の寵眷を擅にし、その學才を恃んで政治に參與し、世の惡む所となつた。後藤原廣嗣と隙を生じ、廣嗣の叛するや、玄昉と吉備眞備とを除くを名とした。天平十七年十一月太宰府に逐はれ、翌年太宰府で寂した。年不詳。

【元正天皇】　ゲンシヤウテンワウ　御名は飯高、後氷高と改め給ふ。天武天皇の皇孫。草壁皇子の皇女、御母は元明天皇。文武天皇の御姉。第四十四代の天皇。白鳳十年御降誕、和銅八年九月元明天皇の禪を受けて卽位し給うた。是より先文武天皇の時制定された大寶律令は尙修正を要したので、養老二年、藤原不二等等に勅して刊修せしめ、律十卷十二篇、令十卷三十篇となされた。これを養老刊修の律令といふ。在位九年、位を聖武天皇に讓り天平二十年四月崩御。寶算六十八。

【多治比縣守】　タヂヒノアガタモリ　（六六八——七三七）左大臣島の子。靈龜の初年從四位下に進む。儒學の造詣深く、且つ政治の識見才幹もあつたので遣唐押使に拔擢せられ、養老元年、副使安倍仲麻呂及び吉備眞備等と渡唐して唐宗皇帝に謁し、同二年歸朝した。後諸官を歷任し、天平四年中納言に任ぜられ、山陽道節度使となり、正三位に進み、同九年歿した。年七十。

【王維】　ワウヰ　支那盛唐の詩人・畫家。字は摩詰。太原、祁の人。九歲よく文辭を屬したといはれる。玄宗の時進士に擢でられ、尙書右丞に進み、王右丞の異名がある。開元天寶の盛時を飾る名家の一人として李白・杜甫と名を等しくし、草隸の書に巧みに、山水の畫と自然詠の詩とに淸新な境地を拓いた。詩中に畫があり、畫中に詩があるといはれ、所謂南宗文人畫の祖となつた。（皇紀一三五九——一四一九）

【李白】　リハク　支那盛唐の詩人。蜀或は山東の人といふ。字は太白。性飄逸曠放、任俠に富み、慷慨の士や隱逸の士と交を結んだ。天寶の初、會稽に行遊し、道士吳筠と相知り、筠の爲に玄宗に推薦せられ、又賀知章はその文章を見て、謫仙人なりといつて玄宗に推稱したので、翰林供奉となつた。常に飮中八仙と共に昏冥醉中に居り、或は楊貴妃を激し、宦官高力士に靴を脫がせるなど豪放にして細瑾を顧ぬ振舞が多かつた爲、居ること三年で流浪した。安祿山の亂に際し、江陵の都督永王璘の僚佐となり、王璘が破れて獄中に下されると、白も誅せられることになつたが、嘗て白が救つた郭子儀がその大功に代へて命乞ひをしたので漸く誅を免れ、夜郎（四川省）に流された。間もなく赦に遭ひ、江山の間に悠々自適し、寶應元年病歿。年六十四。一說に六十一。その詩は淸逸高妙、雄渾洒脫、杜甫と並稱される。「李太白集」三十卷がある。

【名を文墨の間に馳せた】　名を詩壇に稱せられた。

〔文墨〕　ブンボク　文と墨と、卽ち詩文を作り書畫を書くなどのわざ。

【明州】　メイシユウ　今の浙江省寧波。

【望鄕】　バウキヤウ　故鄕を思慕すること。

【あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも】

大空を遠く仰いでみると明月が皎として天の一方にかゝつてゐるがあの月は自分が昔故鄕に在つた時、春日の三笠山の上に現れた月と同一の月であつたわい、の意。

〔春日〕　カスガ　奈良市春日神社一帶の稱。春日神社を中に、西には春日野があり、東には春日山がある。春日野には淺茅原・雪消澤等があり、古は若菜摘の名所であつた。

〔三笠の山〕　奈良市春日神社の背面にある山。この山につゞいて春日山がある。今は嫩草山を三笠山ともいふが本來は別のものである。こゝに歌はれたのは本來の三笠山であることはいふまでもない。

御蓋山とも書き、山容が笠に似てゐるところから名づけたもので、古來神域として禁獵・禁伐を嚴守せられたので老樹鬱蒼、晝猶ほ闇いまでに繁茂してゐる。山上には天兒屋根命を祀つた本宮神社がある。

【故山】　コザン　故郷の山。故郷。
【風懐】　フウクワイ　心のうち。おもひ。胸中。
【絶唱】　ゼツシヤウ　秀れてよい詩歌。
【餘情】　ヨジヤウ　なごりの風情。餘韻。つきせぬひゞき。言外の風情。
【颶風】　グフウ　つむじかぜ。螺旋狀に施轉する急激な風。廻轉が甚だ急激な爲、其中心に一時眞空を生じ、その爲に其附近にある物體を捲き上げて、災害を及ぼすことがある。
【第二・第三・第四船は辛うじて我が國に歸つたが】　本文四十九頁に見える、副使大伴麻呂は第二船にあつて歸朝し得たのであつた。
【安南】　アンナン　印度支那半島中の一王國。時代によつて瓶駱・南越・大南・大越等、境域と名稱に種々の變遷があつた。唐代、この地方は支那の勢力範圍に屬してゐた。
【相共に】　誰と誰とであるかを指摘せしめたい。
【宇多天皇】　ウダテンワウ　御名は定省。亭子院と號し奉る。光孝天皇第七皇子。第五十九代の天皇。貞觀九年五月御降誕。仁和三年八月卽位。御在位十年。寛平九年位を敦仁親王に讓り給ふ。昌泰二年仁和寺に出家し給ふ。承平元年七月仁和寺に於て崩御。寶算六十五。
【菅原道眞】　スガハラミチザネ　野見宿彌の裔。是善(これよし)の子。詩文に長じ、元慶元年文章博士となる。寛平三年藏人頭となり、宇多天皇の侍讀として信任を得、類聚國史を撰した。宇多天皇は藤原氏の勢力を殺ぐために道眞の才を見て頻りに官位を進められ、參議となり、六年遣唐使となつたが唐の擾亂によつて上奏して止め、遣唐使はこれより廢絶した。九年醍醐天皇に御讓位。天皇御年十三。道眞は右大臣、藤原時平は左大臣として輔佐に任じたが、衆望道眞に歸した。昌泰三年關白の內諭があつたが辭して受けなかつた。時平はその殊寵を嫉み、藤原菅根等と謀つて、道眞は皇弟齊世親王擁立を謀ると讒奏し、爲に天皇之を信じ、翌延喜元年正月道眞を太宰權帥に貶せられ、その二十三子も各所に左遷された。太宰府にあつては門を閉ぢて出でず、窮乏のうちに延喜三年病歿。年五十九。道眞は德行を以て世に聞え、詩文の外、儒・老莊の學に通じ、又佛敎を信じ、書も亦三聖に數へられた。延長元年本官に復し、正二位を贈り、次いで太政大臣を贈られた。民間北野に祀り天滿天神として貴賤の尊崇を受けて來てゐる。著書に、類聚國史・菅家文草・菅家後草・新撰萬葉集・菅家詩集等がある。
【唐の國內擾亂云々】　道眞の遣唐使任命は宇多天皇寛平六年（一五五四）であるが、是より先唐は安史の亂後、國勢衰へ、外國人も唐を侮つて入寇し、內には節度使の專橫、宦官の橫暴相つ

いで起り唐末の天下は漸く亂れて、賊徒は四方に起るに至つた。道眞遣唐使任命は玄宗歿後、一三九年を經た昭宗の乾寧元年の事であつて、唐はこれより十三年後に滅亡するに至つた。
【平和の使節交換正に二百年】　舒明天皇二年（一二九〇）犬上御田鍬が初めて入唐してから、仁明天皇承和五年（一四九八）藤原常嗣が最後に入唐するまでの年月を概算して言つたのである。

2　文の構成

第一節　初―四八頁三行　遣唐使派遣の意義。
(1)　光明皇后と遣唐使藤原淸河との送別贈答歌。（四七頁二行―同九行）
(2)　遣唐使の意義。（四七頁十行―四八頁三行）
第二節　四八頁四行―四九頁六行　遣唐使藤原淸河等が唐都に於て祖國の面目を發揚したこと。
第三節　四九頁七行―五〇頁一行　遣唐使派遣の歷史・意義・隨行者。
第四節　五〇頁二行―五〇頁八行　王朝文化に寄與する所の多かつた人は殆んど皆遣唐留學生であつたこと。
第五節　五〇頁九行―五一頁十行　遣唐使團の組織と之に伴ふ一挿話。
第六節　五一頁十一行―五四頁二行　遣唐使の航路上の危險とその獻身的努力。
第七節　五四頁三行―五六頁一行　遣唐使に關する哀話。
第八節　五六頁二行―同四行　遣唐使廢止の事。
第九節　五六頁五行―終　遣唐使が我が國文化史上に殘した功績と努力に對する感謝。

〔使節交換〕　嚴密にいへば「交換」ではなく、日本側が主で唐からは稀に儀禮的に使節を送つたに過ぎない。
【坐ろに】　ソゾろに　何故ともなく心の進むさまにいふ語何とはなしに。
【業蹟】　ゲフセキ　仕事のあと。
【覺えるではないか】　この「か」は反語の一種で、對者を促して同意を求める意味を表す。

3　**文　意**

我が國の文化史上に劃期的の業蹟を殘した遣唐使についてその意義・歴史・挿話等を述べ、之に對する回想追慕の情を吐露した文。

4　**鑑賞批評**

遣唐使の業蹟に對する深い感激の念が全篇を貫いてゐてこの文を單なる説明文に終らせてゐない。古人の和歌が數多く引用されてゐるのは文に生彩を加へるものであつて、その人達の面影もそこに浮び出るやうに感ぜられる。唐都長安に於ける各使節達の活躍を偲ぶにつけても我が奈良朝平安朝の文化がいかに唐に負ふ所が多かつたが痛感せられうたた今昔の感に堪へなく思はれる。平明懇篤な筆致である。

三　備　考

1　**指導研究**

懇切に説明の行き屆いた文であるから取扱上特別の困難はないと思はれるが當時に於ける彼我の國力並文化の比較、及遣唐使によつて齎された制度・文物等に就いて更に具體的な説明が與へられたら一層本課の主題が明確になるであらう。猶本文は説明の便宜上事柄が時代的に入混つて取上げられてゐるから生徒の方で幾分時代的の混亂を感ずるかも知れない。板書其他の方法によつて各事項の時代的關聯をはつきりさせて頂き度く思ふ。

2　**參　考**

(一)挿繪説明。

遣唐使歸航之圖、本圖は「國史大圖鑑」より採つた。左に同書の説明を借用する。

「遣明使策彥歸朝圖」策彥、名は周良、別號を謙齋といふ。俗姓は井上氏、文龜元年京都に生る。天文八年幕府の遣明副使となり渡航し、同十六年再び遣明正使となりて渡航し、北京に入り、世宗皇帝に優遇された。且文墨を以て彼地の諸名士の間に知られた。この畫は四明の處士方梅崖等四人が、埠頭に立ちて、策彥の東歸を送るの圖である。此の圖は前記四人の特に贈つたもので、縱二尺六寸五分、横二尺二寸、之れに序を書いて委細を悉してゐる。(下略)

(二)參考資料。

我が國から遣唐使の派遣されたのは次の如くである。

第一回　舒明天皇の二年(玄宗貞觀四年)。大使は犬上御田鍬、藥師惠日。八月出發し四年八月歸朝。歸朝に際し唐使高表仁が來朝した。

第二回　孝德天皇白雉四年(高宗永徽四年)出發。大使吉士長丹、副使吉士駒。學問僧、學生等百二十一人を隨伴。五年七月歸朝し、唐から多くの文書、寶物を齎した。

第三回　孝德天皇白雉五年(高宗永徽五年)二月派遣。遣唐押使高向玄理、大使下河邊麻呂、副使藥師惠日。高向玄理は遂に客死し、副使等は齊明天皇の元年八月に歸朝。

第四回　齊明天皇の五年(高宗顯慶四年)七月派遣。坂合部石布、津守吉祥が使となつた。一行は陸奥の蝦夷男女二人を從へて唐帝に謁し、日本天皇の威光の盛んなこと、日本には強勢な蝦夷人が服從してゐることを告げて大いに國威を輝すことに努めた。

第五回　天智天皇の四年(高宗麟德二年)十二月派遣。使、守君大石。

第六回　天智天皇の八年(高宗總章二年)派遣。使河内鯨。

第七回　文武天皇大寶二年(中宗嗣聖十九年)六月派遣。執節使粟田眞人、大使高橋笠間、副使坂合部大分。前年正月に任命せられて進發したが、風浪險惡の爲渡航を延引したのである。この使節は學德の高い人であつた爲、大いに賞讃され、海東に大倭國あり、君主國と呼ばれ、人民豐樂禮儀敦行なりと聞いてをつたが今初めてその然るを知つたと稱揚せられた。眞人は慶雲元年七

月歸朝。

第八回　元正天皇の養老元年（玄宗開元五年）差遣。押使多治比縣守、大使阿倍仲麻呂、副使藤原馬養等が前年八月に任命せられ、後大伴山守が大使に代つた。この時は僧玄昉が隨伴し、一行五百五十七人四船に分乘した。養老二年十月歸朝。

第九回　聖武天皇の天平五年（玄宗開元二十一年）四月差遣。大使多治廣成、副使中臣名代等は前年八月に任命せられた。天平六年十月、蘇州を發し歸途に就いたが暴風の爲に離散し、廣成等百五十人の搭乘船は昆崙國に漂著し賊の爲に多く殺掠され、廣成等四人は、昆崙王より食糧を與へられ辛うじて唐に戻り、渤海路を經て歸國せんとし、天平十年五月渤海王の使節と同行して出發したが、海上風浪の爲に渤海使の乘船は轉覆し、廣成等は漸く出羽國に漂著した。

第十回　孝謙天皇の天平勝寶四年（玄宗天寶十一年）派遣。大使藤原清河、副使大伴古麻呂等は二年九月に任命され、三月十一月に吉備眞備が副使に任ぜられた。この一行は五年元旦の唐朝新年式に臨んだがこの時新羅の使と席次の上下を爭ひ、終に諸外國使臣の最上位に列して、國威が辱かしめなかつた。清河は客死し、大伴古麻呂は天平勝寶六年正月歸朝し、唐僧鑑眞等を同伴した。

第十一回　淳仁天皇の天平寶字六年（肅宗上元三年）發遣。大使伸石伴、副使石上宅嗣は前年十月に拜命し、六年三月に副使を藤原田麻呂に改められた。この時は唐は安祿山の兵變があり、爲に入唐に至らずして止んだ。

第十二回　光仁天皇の寶龜八年（代宗太曆十二年）發遣。大使佐伯今毛人、副使大伴益立。後副使を小野石根、犬神末足に改め、八年に大使病によつて任を辭したので副使のみを出發させた。この一行は九年に歸朝の途に就いたが風浪の爲、副使の乘船は覆沒し、判官の船だけが肥前松浦郡橘浦に漂著した。

第十三回　桓武天皇の延曆二十三年（宗德貞元二十年）發遣。大使藤原葛野麻呂、副使石川道益は二十年に任命せられ、二十二年四月難波を出發したが、風雨の爲隨員の溺死する者があり、一時節刀を奉還したが、二十三年七月、肥前田浦を出帆し、死生の間を唐に著き十一月長安で德宗に謁し、明年最澄等と共に歸朝して唐の衰亂の狀を奏した。橘逸勢、僧空海等はこの時大使と共に入唐した。

第十四回　仁明天皇の承和五年（文宗開成三年）發遣。天皇漢學に熱心なる叡慮よりこの遣使があつた。大使藤原常嗣、副使小野篁等は元年に任命せられた。三年七月、四船太宰府を發すると風浪の難に遭ひ、船舶大破し、辛うじて引き返した。この後常嗣は、篁の乘船の堅牢なるを知り、乘船を交換したので、篁は憤激し、病と稱して出發を肯んぜず、その罪によつて隱岐に配流せられた。大使一行は、六年に文宗に謁し、八月歸著した。

第十五回　宇多天皇の寛平六年（昭宗乾寧元年）に菅原道眞を大使、紀長谷雄を副使に任ぜられたが、唐が衰亂してゐるとの理由で翌年五月出發を停止せられた。

九　非凡なる凡人

國木田獨歩

一　解　題

1　作　者

國木田獨歩　クニキダドツポ　詩人・小說家。本名は哲夫。明治四年七月千葉縣銚子に生まれた。父專人は舊播州龍野の藩士。明治七年（四歲）一家上京、下谷に住んだが、同九年父が岩國裁判所（山口縣玖珂郡岩國町）に職を奉じたので同地に轉住した。同十八年（十五歲）山口中學校に入つたが同二十年上京し、東京專門學校（早稻田大學の前身）英語專修科に入學した。同二十二年（十九歲）植村正久から洗禮を受け、熱心な基督教徒となつた。翌二十三年退學して山口縣に歸り、私塾を開いたが、同二十五年再び上京し、雜誌「青年文學」を發行し、その翌二十六年二月には金森通倫經營の自由新聞社に入り、九月には德富蘇峯の紹介、矢野龍溪の周旋で、大分縣佐伯町鶴谷學館教頭に聘せられた。同二十七年（二十四歲）三度上京し、國民新聞社に入社。明治二十七八年戰役には從軍記者として軍艦千代田に搭乘し、同紙上に「愛弟通信」を送つた。同二十八年歸京。九月には開拓地を求めて北海道空知川邊に赴いたが、目的を果すことが出來なかつた。十一月周圍の反對を押切つて佐々城信子と結婚し、逗子に住んだ。翌二十九年妻信子が失綜し、焦慮煩悶の末米國渡航を企てたが成らなかつた。翌三十年四月（二十七歲）田山花袋と日光照尊院に寄寓し、處女作「源をぢ」を書いた。翌年報知新聞社に入り同三十二年治子と結婚し、翌三十三年民聲新聞社の記者となつた。衆議院議員たらんと運動したのはこの頃であつた。同三十五年（三十二歲）矢野龍溪の近事畫報社に入り、同三十九年八月にはその跡を受けて獨歩社を組織したが、翌年四月には破產して了つた。同四十一年（三十八歲）六月神奈川縣茅ヶ崎南湖院で歿した。年三十八。

創作方面では詩集一卷、短篇七八十篇があるが、中でも「牛肉と馬鈴薯」「酒中日記」「惡魔」「第三者」「泣き笑ひ」「號外」等はその代表作とされてゐる。改造社版國木田獨歩全集がある。

2　出　典

「非凡なる凡人」の大部分を抄出したものである。「非凡なる凡人」は明治三十六年三月の「中學世界」に掲載せられた作品である。恰も作者が近事畫報社の經營に力を盡してゐた當時の作であるから、作者の內に動いてゐた西國立志編的熱情がこの篇を成さしめたものであらう。

3　主眼及び採擇の趣旨

本篇の主人公たる桂正作の生活態度には社會生活に於ける人間の理想境が實現せられてゐる。特に、その中には天才的な要素が加はつてゐず、努力によつて凡人の到達し得る世界である點に深い意義がある。短篇小說としての文藝的教材であることはいふまでもないが、素材が平凡で健實で、しかもどこかに新しみに富んだ立志談である點に於て國民性の陶冶に資することが出來るであらう。

二　解　釋

1　語　釋

【非凡なる凡人】　ヒボンなるボンジン　凡人ならぬ凡人。普通の人間に見えて、實は普通の人間が眞似ることの出來ない、勝れた點のある人。逆說的な命題である。

【桂正作】　カツラシヤウサク　實在の人物ではあるまいがこの年齡の生徒の心理を考慮して、この點には觸れないがよいであらう。

作者は「予が作品と事實」の中に彼の書いた人物を大體四つに分類して第一、全く空想から人物も事件も出來上れるもの。第二、實際の人物若しくは事件にヒントを得

たもの。第三、事實の人物と事件が其小說の主要部をなせるもの。第四、實際の人物及び事件を其儘描寫したもの、とし第一、第四に屬するものは極めて少いといひ、實在の人物又は作者自身を素材とした作品の名を擧げてゐるが、その中に「非凡なる凡人」は擧げてゐない。

【横濱】ヨコハマ　横濱市。東京灣に面し帝都の門戸をなす港市。もと邊鄙な一漁村に過ぎなかつたが、安政六年の開港以來、維新の劇變に際會して、一躍東洋屈指の大貿易港となり、西の神戸と並稱されるに至つた。大正十二年の震災に大慘害を蒙つたが漸次復興し、昭和二年隣接九箇町村を合併して一三四方粁の大横濱市を實現した昭和十年現在の數字に據れば人口約七二〇、〇〇〇（外に居留外人五萬餘）、貿易總額一、二四二、六〇五、〇〇〇圓。我が國六大都市（東京、大阪、京都、神戸、名古屋、横濱）の一で、神奈川縣々廳の所在地である。

【會社】クワイシヤ　營利事業の經營を目的とする複數人の集合體で、共同企業の最も主要な形態の一。法律的には、商行爲その他の營利的行爲を業とする社團法人。

會社は近世機械工業の發達に伴ひ、大規模な企業組織による經營が必要となつた結果生じたもので、個人の經營に比し、勞力の補充、資金の蒐集、損失の分擔等の上から見て著しく有利である。その目的の上から商事會社・民事會社、その組織の上から合名會社・合資

會社・株式會社・株式合資會社等に分類せられる。

【技手】ギシユ（發音が技師と紛れ易いので一般に「ぎて」といふ）（一）技術官の一。官廳で、技師の下に屬して技術を掌る判任官又は判任官待遇の者。（二）會社等で技師の下に屬して技術を掌る者。こゝは（二）。

【電氣事業】デンキジゲフ　本文七四頁六行に「電氣部の技手云々」とあるからこゝの電氣事業は「電氣を取扱ふ仕事」といふ程の意味に解すべきであらう。

一般に電氣事業とは廣義には電力供給事業の外、電信・電話の事業、電燈供給事業、電氣鐵道事業等を總括した稱。狹義には電力供給事業、卽ち、一般の需要に應する爲に電氣エネルギーを製造して之を供給する事業をさす。

【非凡人ではない。けれども凡人でもない】

頭腦才幹の點では別に人に卓越してゐるわけではないがその生活態度の眞摯さに於て衆人と全く違つてゐるといふ意味であることが全文から歸納される。

【偏物】ヘンブツ　かはりもの。偏人。性癖・趣味・所作等が普通人と異つて一方にかたよつてゐる人。

【奇人】キジン　風がはりな人。性癖・趣味・所作等が常人とかけ離れてゐる人。

【適評】テキヘウ　ぴつたりあてはまる批評。

【秀吉】ヒデヨシ　豐臣秀吉（二一九六——二二五八）。天文五年尾張國中村に於て出生。父は織田信秀の足輕木下彌右衞門。幼名日吉丸。十六歳、遠江に流浪し、今川氏の臣松下之綱に仕へたが志を得ず、去つて尾張の織田信長に仕へ、木下藤吉郎と名乘つた。爾來次第に才幹を認められ、遂に信長幕府の謀將として重きをなすに至り、頻りに戰功を累ねて、天正五年中國征伐の主將に任ぜられた。この間羽柴筑前守秀吉と改稱。同十年本能寺の變に逢ふや直ちに毛利氏と和し、長驅軍を旋して明智光秀を斃し、翌十一年には柴田勝家・織田信孝の一黨を越前及び岐阜に討滅、大阪城を修めて天下に號令した。十二年織田信雄・德川家康と兵を構へたが不利を知つて之と和し、轉じて北國を略し又紀伊を伐ち中國を定めた。十三年關白となり十四年太政大臣に昇つて豐臣の姓を賜つた。十五年九州に島津を降し、十八年小田原に北條氏を滅し、更に奥羽を平定して、賴朝以來の日本統一の業は玆に全く成つた。翌年關白職を甥秀次に讓つて太閤となつた。文祿元年（二二五二）以來二回に亙つて朝鮮征伐の軍を起し、戰績大いに上つたが功成らぬうちに、不幸戰中病を發し慶長三年八月十三日伏見に薨じた。時に歳六十三。阿彌陀岳に葬り正一位を贈られた。又勅して豐國大明神の號を賜はつた。秀吉は氣象濶達剛毅で我が國不世出の大政治家、名將軍であつた上に又和歌・茶湯・能樂の嗜深く、安土桃山時代の文化を隆昌ならしむる原動力であつた。

【ナポレオン】Napoléon Bonaparte（一七六九——一八二一）。西暦一七六九年地中海のコルシカ島に生まれた。佛蘭西の兵學校に學び、大革命後四隣を攻略して赫々たる武名を擧げた。一八〇四年遂に佛蘭西皇帝の位に卽き、ナポレオン一世と稱した。爾來歐洲同盟の普・墺・露等の諸國を攻略して捷たざるなく、歐洲大陸を自家の庭園の如く扱つたが、一八一二年のロシヤ遠征に失敗して、地中海のエルバ島に流され、後一八一五年同島を脫出して再び佛蘭西に歸り各國の聯合軍とワーテルローに戰つて敗れ、セントヘレナ島に流され一八二一年（文政四年）その地で歿した。

【天才】テンサイ　天賦の秀れた才能。又、その才能ある人。こゝは後の意味である。

【千百歳】百年千年。非常に長い年月をいふ。

【平凡なる社會】つねなみの世の中。

大偉人の出現を必要とするやうな非常な社會狀態に對していふ。

【桂正作の如きは、平凡なる社會が常に產出する人物である。また平凡なる社會が常に要求する人物である】

作者が桂正作なる人物に對して推重おかざる點はこの數言に盡くされてゐる。社會的名聲を博するやうな英雄ぶりでもなければ、また反社會的な詩人氣取でもない。如

何なる時代にも必要であり、如何なる社會にも可能である平凡道に徹した點に對して、非凡と推稱せざるを得なかつたのである。かういふ人物こそ、水や空氣のやうに社會に缺くべからざる存在であることは古今・東西に於て變る所がない。

【義經】ヨシツネ　源義經。源義朝の第九子。母は九條院雜仕常磐。幼名を牛若といふ。誕生の平治元年に平治亂起り、父義朝等一族多く敗死したが大和に逃れ、後捕へられたが母常磐の命乞ひによつて助かつた。七歳鞍馬寺に入つた。長じて復仇に志し、日夜武技を修め、承安四年遂に山を脱して陸奥に赴き藤原秀衡によつた。途中元服して九郎義經と名乘つた。治承四年（一八四〇）兄賴朝の擧兵を聞き、馳せてその軍に富士川に於て加はつた。爾來範賴と並んで軍を統べ、壽永三年一月義仲の軍を宇治川に破り、二月平軍を一谷に攻めて偉功を立てた。八月功により左衞門尉に任じ檢非違使別當に補せられ、次いで從五位下に敍して昇殿を許された。翌四年二月平軍を屋島に破り、三月之を壇の浦に滅した。神器を奉じて、京都に入り、更に宗盛以下の俘虜を伴なつて東下し、腰越驛に至つたが、かねて義經の聲名及びその擧措に快からず、且その妾りに平時忠の女を娶つたのを惡んだ賴朝は、俘虜のみを納めて義經の鎌倉入りを禁じた。よつて誓書（腰越狀）を以て情を陳じたが許されず、歸洛後賴朝の刺客に襲はれて遂に叛き、追求を受けつゝ吉野・京都・奈良等を流浪して再び陸奥の秀衡に身を寄せた。秀衡の死後、その子泰衡の爲に居城衣川館を襲はれ、文治五年（一八四九）自殺した。享年三十一。首級は鎌倉に移され後藤澤に葬られた。義經は用兵神速で果敢な將軍として日本合戰史上の一大名將であつた。

【腕白を働いて】手にあまるほどのいたづらをして。

〔腕白〕ワンパク　子供が無理をいひ、又は烈しくいたづらをすること。又、その子供。

【どや〳〵と】多人數が一時に入り來るさま。

【われがちに】われ先にと。互に先を爭つて。

【眞面目くさつた】マジメくさつた　眞面目ぶつた。眞面目なふりをした。

【してのける】やりとげる。

【テーブル】Table 卓子。この時代は明治の中期で未だ現在のやうに流行してゐなかつたことに注意。

【足繼】アシツギ　踏臺。身の丈の屆かぬ高い所へ手の屆くやうに足の下に置く臺。

【學校の先生が、日本流の机は衞生に惡いといつた言葉をなる程と感心して、すぐこれだけのことを實行したのである】何でもない事のやうでさうではない。こゝに既に桂正作の人物と一生の運命とが暗示せられてゐる。かういふ瑣末なことを、よいとなれば卽座に實行する人が眞に自己の運命を開拓し得る人であり、人格を鍛成し得る人間である。しようと「思つてゐる」人は、遂に何事をも成し得ない人である。

〔衞生〕エイセイ　衣・食・住などに注意して身體を大切にまもること。

【脇目もふらず】專心に事をするさま。

【洋綴】ヤウトヂ　西洋綴ぢ。針金又は絲で各頁を綴り合せ、皮布や厚紙で表紙を作つて背面をも被ふのである。和綴、和裝の對。和綴は綴絲を表紙の上からかける。洋綴には本綴（又は絲綴）と針金綴とあり、本綴にも上製（表紙に厚紙を入れるもの）と假綴とがある。又表紙の材料から低裝・布裝・クロース裝・革裝等の種類がある。針金綴といふのは普通雜誌などのがそれである。

【「西國立志編だ」と答へて顏を上げ、僕を見た眼ざしはまだ夢の醒めない人のやうで、心はなほ書籍の中にあるらしい】

少年桂正作が夢中に讀みふけつてゐた樣子が眼前に浮んで來る。先に「來ないか」と誘つても、「彼はいつにない眞面目くさつた顏つきをして、頭を横に振つた」その樣子が思ひ合される。この二箇所に見る熱中ぶりを見落してはならぬ。しかも桂のこの熱心は一時的興奮ではなかつた。彼の生涯を根柢づけた熱心さであることを思はなくてはならぬ。

〔西國立志編〕サイコクリツシヘン　英人サミュエル・スマイルズの自助論（Self Help）を中村敬宇の譯述したもの。明治四年四月刊行。十三篇三百二十四章から成り內容はその題名の示すが如く、自助の意義・實例から發明・勤勉・努力・剛毅・金錢・自修・儀範・眞君子等の德について論じ、古今の歷史上から三百有餘の活きた人物を拉し來つて、具にその成功の來歷を說き、これに訓言を附載してゐる。この內容と精練された典雅な名文と相俟つて、福澤諭吉の譯譯と並んで、當時の青年に空前の影響・感化を與へ、我が國に於ける西洋文學紹介の先驅をなした。

スマイルズ（Samuel Smiles）はイギリスの著作家・社會改良家。西曆一八一二年ハゥディングトンに生まれた。一八五七年以來 "Life of George Stephenson", "Self Help", "Character", "Thrift", "Duty" 等の諸著を公にして勤勉・力行を說いた。

〔眼ざし〕マナざし　眼つき。眼色。「ざし」（接尾語）は或語に添へて、その氣色（けはひ）・樣子を表す。「面ざし」「息ざし」「技ざし」。

【日本外史】ニホングワイシ　賴山陽の著。二十二卷。我國武家の歷史で源平二氏より德川氏に至る武家の興亡を各家別に記し、根本は帝系年號で一貫し大義名分を明かにしてゐる。その體裁・敍述の法に於てすべて史記を範

とした。主に大日本史を根據とし外に引用書二百數十種に及ぶ。二十年の歲月を經て漸く脫稿した。本書を一貫して流れてゐるものは尊皇・賤覇の精神で、史實的には古來幾多の非難があるが、彼の君國に對する熱情と文章の妙は讀者を魅了し、卷をおく能はざらしめるものがある。この書は初め家に祕して世に出さなかつたが文政十年松平樂翁に請はれて初めて公にされ、大いに天下に流行するに至つた。

賴山陽は名は襄（のぼる）、字は子成、通稱久太郎。安永九年（一四四〇）大阪に生れた。夙に經世・濟民の實學に志し、十二歲すでに「立志論」を著したが、後力を專ら修史の事業に用ひ、文政十年「日本外史」を公にして大いに一世を警醒する所があつた。天保三年「日本政記」の稿本整理半ばにして歿した。享年五十三。

【物が違ふ】　そのものの價値や本質が全然違つて比較にならぬ。

【代物】　シロモノ　（一）價に代へるべき商品。（二）錢。だいもつ。（三）人又は物を卑しめていふ語。こゝは（三）。

【座右】　ザイウ　（一）座席のかたはら。手もと。（二）その人を直接にさすのを憚つていふ敬語。こゝは（一）。

【周旋】　シウセン　世話をすること。とりもちをすること。

【銀行】　ギンカウ　信用の授受を業務とする金融機關。銀行の業務は種類によつて異なるが、受信業務としては預金の受入・銀行券・債券の發行等があり、授信業務としては手形割引、貸付等がある。これを資金の運用法の上から發券銀行・商業銀行・不動產銀行・動產銀行・貯蓄銀行等に分ち、又金融界に於ける地位により中央銀行・市中銀行・地方銀行に區別する。我が國では法律上大別して普通銀行・貯蓄銀行及び特殊銀行に分類される。

【僕は歸省の途に就いた】　この「僕」は作者の分身ともいふべき人物であり、「歸省の途に就いた」といふのは作者の山口中學校在學中の事を背景としたものであらう。

【古ぼけた】　古くなつて色のはつきりしなくなつた。

【とんび】　二重廻し。インバネス。「とんび合羽（がつぱ）」の略。羅紗製の合羽で袖が長く廣く、鷲の翅に似てゐる所からいふ。和服用の外套として廣く着用され我が國獨特の型も生じたが元來英國蘇格蘭のインバネスで出來たもので原語のまゝもいはれる。明治初年我が國に輸入された。

【破顏一笑】　ハガンイッセウ　顏を和げてにつこり笑ふこと。

【工業】　コウゲフ　天然から採收したものを材料として又は栽培・飼養した動植物を材料として、我々の欲望を滿足させるやうな財貨を生產する事業。採鑛・冶金業、土石採取業、窯業、金屬工業、機械器具製造業、化學工業、纖維工業、紙工業、皮革・骨・角・甲・羽毛品類製造業、木竹類に關する製造業、飲食料品・嗜好品製造業、被服・身の廻り品製造業、土木建築業、製版・印刷・製本業、學藝・娛樂・裝飾品製造業、瓦斯・電氣・天然力利用に關する業等がある。

【發明】　ハツメイ　自然力又は自然法則を利用して、社會的價値のあるものを新たに案出すること。

【ワット】　James Watt（一七三六――一八一九）。イギリスの機械技術者、蒸氣機關の改良者。蘇格蘭クリーノックに生れた。病身の爲、學校より多く家に在つて工具を玩び、模型等の製作に熱中した。十八歲の時、グラスゴーで機械器具商を始め、後グラスゴー大學の數學機械師となつた。一七五九年蒸氣機關の研究に着手し、一七六五年蒸氣機關の改良製作に成功した。彼はなほ遠心力利用の調速器や水量計、氣壓計等幾多の發明改良に成功してゐる。

【スティヴンソン】　George Stephenson（一七八一――一八四八）英國の機械技術者。蒸氣機關車の發明者。ニューカッスルに生れた。初め火夫制動手に從事して機械の知識を修得し、一八一四年進退自在の機關車を發明し改良を加へ、一八二五年にストックトン　ダーリングトン鐵道を完成した。これが機關車で貨物乘客を運搬した世界の嚆矢である。此後鐵道界の權威として新たに開通する鐵道には何れも主任技師乃至顧問技師として盡力した。

【エヂソン】　Thomas Alva Edlison 米國の大發明家。一八四七年オハイオ州ミランに生る。十三歲の頃列車の新聞賣子となり、傍ら車內新聞を發刊した。一八六二年以來電信技手として各地を渡り、一八六八年ボストンの電信局に入り票決計算機を發明して最初の特許を得た。次いでニューヨークに出て、株式表示機の改良に成功し、一八七〇年獨立の研究所を起して實用的印字機、自働電信機をはじめ各種の發明に沒頭した。一八七六年グラハム・ベルが理論的に發明した電話機を遂に實用のものたらしめ、翌年蓄音機を發明し、一八八二年にはその最大業績といはれる電燈の發明を完成した。一八九一年活動寫眞の發明に再び世を驚かし、次いで鑛山業に投じて採鑛上に新時期を劃したが、事業失敗のため人造モメント業に轉じ、流注式混凝土（コンクリート）建築を創始、更に新式蓄電池、圓盤蓄音機・發聲映畫・電話自働記錄機其他相次ぐ重要な發明に特許一千餘種を算へた。晩年には歐洲大戰に遭遇し海軍に聘せられて軍事上の發明に携り、又ゴム代用植物の研究に從つた。一九二九年電燈發明五十年が世界的に記念された。一九三一年（昭和六年）十月全世界の愛惜の裡に溘然と逝いた。享年八十五。

【理想の英雄】　人間の可能性が到達し得ると考へられる窮極の完全さを實現したる英雄。

【聖書】　セイショ　（一）聖人の著述された書、又はその言

行を記錄した書。聖典。(二)バイブル　(Bible) の譯語で、基督敎の聖典。(三)、(二)から轉じてバイブルが神を信ずる人々にとつてさうであるやうに、或人に對してその全存在の根柢となり、その全生活を規定するやうな根本原理を記してある書。こゝは (三) で歐文から來た言ひ方。最も神聖貴重な書。

【筆法】　ヒツパフ　(一)運筆の法則。かきかた。(二)文の書き方。(三)物事のやり方。やりくち。こゝは(三)。

【空想】　クウサウ　現實からかけ離れた思想。事實及び法則等に關係なく、その目的を達する手段も漠然として確かでない。

【著々】　チヤクチヤク　物事の順序を追うてはかどりゆくさま。

【眞書太閤記】　シンショタイカフキ　栗原柳庵作。十二編三百六十卷。安永年中大阪の講釋師が作つた太閤眞顯記一編を三十卷づつにしたもので、實錄體の小說としては質・量共に最大なものである。名は眞書であるが必ずしも史實によつたものではなく、史料的價値には乏しいが、諸種の太閤記の集大成ともいふべく繪本太閤記と並んで最もよく當時の民間に讀まれた大衆的な豐公一代記であり、讀物として最も優れた特長を持つてゐる。江戸時代の演劇や小說には本書に取材したものが多い。寶錄全書・帝國文庫等に收められてゐる。

【氣根】　キコン　物事をなすに當りよく久しきに耐へ得る精神力。根氣。根。

【築地】　ツキヂ　東京市京橋區中部の一區劃。築理の新地の意で、萬治年中木挽町海岸の低地を埋立てた地なのでこの名がある。現在は一丁目から四丁目までに分れ、西本願寺や中央卸賣市場の築地本場がある。

【住家】　スミカ　すまひ。

【九尺間口】　クシヤクマグチ　間口が九尺の意で、狹い家の形容。

【「活ける西國立志編」君】　西國立志編の精神が凝つて出來上つたやうな人物の意で、桂正作君といふべき所を、ユーモラスに褒めていつた言ひ方。

【巢】　ス　こゝは人の住む家の意。

【書生】　ショセイ　(一)學業を勉强する時期にある者。學生。(二)他家に住込んで家事を手傳ひつゝ學問をする者。こゝは(一)。

【みしみし】　階段・廊下等を歩く時の音を表す擬聲語。

【一別以來】　別れてからこのかた。

【足も立てられない】　足も踏み立てられない。

【さまで】　それほどまで。

【處を得て】　トコロをエて　適當な處を得て。置くべき處に置かれて。

【室が粗末で黑く暗澹としてゐるのを憂ふる勿れ】　桂の部屋や疊の汚さに黯然となつた「僕」がそこに整然と整頓されてゐる書籍其他の品を見、桂の志に感じ、今まで憂つてゐた心が晴れて自ら我に言ひきかせる言葉であらう。

〔暗澹〕　アンタン　薄暗いさま。

〔憂ふる勿れ〕　心配するな。心配はいらない。

【主義】　シユギ　執り守つて變らない一定の主張　方針。

【性情】　セイジヤウ　こゝろだて。きだて。

【純潔】　ジユンケツ　(一)雜りものがなくてきよいこと。(二)私欲・邪心がなくて心の潔白なこと。こゝは(一)。

【高貴】　カウキ　(一)身分の高く貴いこと。(二)價の高いこと。(三)品位の高いこと。こゝは(三)。

【胸臆】　キヨウオク　(一)胸。胸部。(二)心。心中。こゝは(二)。

〔臆〕　(一)胸。胸の肉。(二)心。心中。

【率直】　ソツチヨク　つゝみかくしのないありのまゝのこと。

【虛榮心】　キヨエイシン　みえを張る心。その實に過ぎた外見上の榮華を貪り願ふ心。

【運命】　ウンメイ　めぐりあはせ。まはりあはせ。

【糧】　カテ　食料。生活費。

【坐してこれを食ふ】　勞働しないで徒食する。ゐぐひをする。あそびぐひをする。

【何がな】「何をがな」の略。何かあつたらよい。「がな」は願望の意を表す助詞。

【日淸の間】　ニツシンのアヒダ　日本と淸國との國交。

〔淸〕　支那の國號の一。滿洲族の愛親覺羅氏が近隣諸部を併呑して明の邊境を犯し、皇紀二二七六年(元和二年)皇帝の位に卽き、國を後金と號し、二二九六年(寬永十三年)その子太宗が國號を淸と稱したのに始まる。二五七一年(明治四十四年)革命が勃發し、翌年二月宣統帝(現滿洲國皇帝)の退位によつて十二世二百九十七年で滅びた。

【切迫】　セツパク　さしせまること。

【號外】　ガウグユイ　新聞紙・雜誌等定期刊行物の定刊以外に臨時に發行するもの。新聞紙の號外は事件の急報を目的とするものである。號外といふ語は明治十年代に初めて用ひられ、古くは「別段新聞」と稱せられてゐた。猶江戸時代までは瓦版と稱するものがあつて號外に相當した。

【工手學校】　コウシユガツカウ　年少子弟を收容して勞務技術者卽ち熟練勞務者を養成する學校。徒弟學校と同義。明治十九年に東京商業學校附屬徒弟講習所に職工科の設置されたのがこの種學校の最初で二十三年に東京職工學校附屬となり、職工徒弟學校と改稱。これが機緣となつて徒弟學校規程が發布された結果、各地に徒弟

學校又は工手學校の施設されるもの二十七年から三十年の間に公立五十二校、私立二十一校の多きに及んだが三十二年該規程が廢止されて實業學校令が發布せられると共に、すべて工業學校中に含まれることになつた。

本文には桂正作が二十八年に工手學校に入つたとあるから、丁度この種の學校の全盛時代であつたわけである。そして、桂は築地に住んでゐたとしてあるから當時築地にあつた有名な私立の工手學校（現在は工學院と改稱し淀橋區角筈にある）を念頭に置いて書いたものであらう。

【且問ひ且聞いて】　一方では問ひ一方では聞いて。問うたり聞いたりして。

〔且〕　カツ　一方に。此事と彼事と二つにわたつた時にいふ語。

【抽斗】　ヒキダシ

【飯屋へさ】　「さ」は相手の言葉などを受けて輕くいひ放すに用ひる感動の助詞。

【繩暖簾】　ナハノレン　（一）繩を幾條も垂れて暖簾としたもの。なはすだれ。（二）居酒屋又は一膳飯屋の稱。こゝは（一）。

〔暖簾〕　商家の店先に張つて日除けにする帳（とばり）で、大抵紺地に白く屋號・記號などを染め抜いたものを用ひる。

「のうれん」の約。「のうれん」は「なうれん」の轉で、「なうれん」は暖簾の宋音「なんれん」の音便であるといひ、又元・明代の音であるともいふ。

【僕は喫驚して暫くためらつてゐると】

一膳飯屋へなど行つたことのない「坊ちやん」の態度が表れてゐる。下の「しかたがないから入ると」も同樣である。

〔喫驚〕　ビツクリ　物事の意外なのにおどろくこと。

【陣取つて】　座を占めて。

【符牒】　フテフ　（一）商品につける値段の隱語。（二）合圖の隱語。あひことば。こゝは（二）。

【刺身】　サシミ　生（なま）の魚肉等を細く薄く切つて醬油などをつけて食ふもの。

【煮肴】　ニザカナ　魚肉を醬油や味醂やだしで淡く煮たもの。

【煮染】　ニシメ　種々の魚菜を醬油・煮出汁（だし）等で煮染めたもの。

【香の物】　カウのモノ　「香の漬物」の意。食後湯を飲む前に食ふ漬物の稱で、蔬菜・瓜類等を味噌・酒粕・糠味噌・鹽等に漬けた物。つけもの。香々（かう）。

〔香〕　味噌の異名。慶長見聞集八「凡そ味噌といふ事を香といふ。みそは一切の物に染みて匂ひよく味よき故に香と名付けたり。さればかうのものとは味噌漬の名なり

しなり」

今關西では「かうこ」といふのは澤庵漬のことで、その他は漬物といふ。

【こみ上げて】　「こみ上げる」下からつき上げる。

【有爲】　イウヰ　役に立つこと。

【それを何ぞや、不味さうに食ふとは】

友の好意に對して相濟まぬと自ら自分を責める反省の言葉。倒置法。

【竹馬の友】　チクバのトモ　共に竹馬に乘つて遊んだ幼友達。

【涙を呑んだ】　涙が出さうになるのをぐつとこらへて呑み下すやうにした。

【すがすが】　清々。氣がせいせいするさま。

【豆ランプ】　石油ランプの最も小型のもので、細い心を用ひ、火の小さくともるもの。

〔豆〕　俗に小さい意を表す語。

【覺束ない】　オボつかない　（一）分明でない。おぼろである。（二）心もとない。不安である。（三）もどかしい。待遠しい。（四）たしかでない。疑はしい。こゝは（一）。

【彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて】

三十圓の金は文字通り彼が二年間奮闘して得た尊い汗の結晶である。その三分の二を故郷の父母兄弟親戚の爲に喜んで擲つたのである。そこに桂正作の打算を超越した人間味が躍如としてゐる。これあるが爲桂正作の人物に一段の貴さと床しさとが加はる。

【擲つて】　ナゲウつて　惜みなく差出すの意。

【錦繪】　ニシキエ　浮世繪の色刷版畫の最も進歩したもの江戸時代の中期（明和以後）から末期にかけて、江戸を中心として流行し、江戸繪又は東錦繪ともいはれて、江戸名物の一とされた。その特長は色彩の絢爛であつて、錦のやうに美しい繪の意で名づけられたのであらう。

「母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく」とある所から見るとこの錦繪は錦繪中の歌舞伎役者繪・武者繪乃至明治に入つてからの時局ものなどであらう。

浮世繪は江戸時代に於て特殊な發達を遂げた日本風俗畫で、これに肉筆畫と版畫とがあり、版畫は黑摺・丹繪・紅繪・紅摺と發達して、最後に錦繪を生んだ。鈴木春信がその開祖とされ、極盛期は明和の初から寛政の末に至る約二十年。鈴木春信・鳥居清長・喜多川歌麿・東洲齋寫樂・葛飾北齋・安藤廣重等は特に秀れた名手とされてゐる。明治に入つて小林清親・月岡芳年等があつて、當時の都會情調や市井の出來事などを畫がき、又憲法發布・日清戰爭などの時局を畫がいたものも行はれたが、後次第に廢れた。

【欣々然】　キンキンゼン　喜び勇んで。

【新橋】　シンバシ　こゝでは舊新橋驛をさす。現東京市芝

區汐留一丁目、芝區・京橋區間の汐留川に懸る新橋に近く、現新橋驛の東方數町の所に在る。もと東海道線の起點。大正三年十二月東京驛落成と共に汐留驛と改稱されて貨物驛となつた。

【職分】　ショクブン　(一)職務上の本分。やくめ。(二)自分のなすべき本分。つとめ。こゝは(一)。

【手に合はない】　もてあます。手に餘る。取扱ふに困却する。始末に終へない。

【突飛者】　トツピモノ　並外れて奇拔な行爲をする者。

【芝區】　シバク　舊東京市十五區の一。大東京三十五區の一。新橋以南品川に至る間を占め、德川氏入國前には芝原郡に屬した地。商工業地域を多分に含み、工場の數に於ても舊市内での第五位であるが、人口の密度は比較的小である。芝公園・濱離宮・愛宕山放送局・增上寺・泉岳寺・赤十字社等がある。

【其の足で】　出直さないで、そのまゝすぐに。

【擁して】　ヨウして　とりかこんで。

2　文の構成

第一節　初―五八頁五行　非凡なる凡人桂正作。

第二節　五八頁六行―六二頁四行　桂正作と西國立志編。

第三節　六二頁五行―六五頁終　桂正作の上京準備。

【狂】　クルヒ　こゝは異狀の生じたこと。

【檢分】　ケンブン　とりしらべること。檢め見ること。

【彼は無人の境にゐて、我を忘れ、世界を忘れ、身も魂も、今其の爲しつゝある仕事に打込んでゐる】

忘我境にある桂正作の姿の莊嚴さに打たれて發した聲である。かゝる莊嚴は背景によらず、形貌によらず、唯一心の集中によつて、何時如何なる所にも成立する。こゝに至つて桂正作は單なる成功立志傳中の一人物たるのみではない。その一擧手・一投足が目に見えぬ光輝を放つ眞人たる境に至つてゐる。

〔無人の境〕　ムジンのキヤウ　その事に專念して、人あれども無きが如しといふ境地。三昧境。無我の境。

「境」はこゝでは心の位置。

【眞摯】　シンシ　眞面目。實直で事に當つて撓まぬこと。

〔摯〕　至り極める。轉じて、まこと、ねんごろ。

【莊嚴】　サウゴン　おごそかにかうごうしいこと。

第四節　六六頁一行―七四頁五行　上京した桂正作の苦學ぶり。

第五節　七四頁六行―終　電氣部技手になつた桂正作。

3　文意

凡人の道に徹することによつて非凡人たり得た桂正作。

4　鑑賞批評

夢想家で、熱情家で、ワーヅワースに憧憬の心を寄せてゐた國木田獨歩の半面にかうした實際的で、建設的で、西國立志編的な一面が存してゐたことは興味が深い。殊にさういふ性質の作である「非凡なる凡人」と「日の出」とが何れも同年の作である所に、また當年の生活から考へなくてはならぬものが存するであらう。

更に考へるべきは作者がかういふ桂正作を描きつゝ、作者の分身ともいふべき「僕」なる人物を、お坊ちやんらしく描きたがつてゐることである。坊ちやんとして描き、それと對照させるなら別であるが、氣分的に、無批判にその坊ちやんらしさを持ちたがつてゐることである。又桂正作の描き方もやゝ典型に入りすぎたかの感もなくはない。これらの點に問題が含まれてゐるけれども、それらは時代的なものであるから玆には分析する必要はないであらう。

三　備考

1　指導研究

本篇は語釋〔桂正作〕の項で述べたやうに、作者が桂正作なる架空の人物を假りて自己の理想を具體化した小說である。效果を狙ふ上からは之を事實談として取扱つたらといふ考も自然湧くのであるが、餘り事實に牽きつけ過ぎることは慎むべき功利的な態度であらう。それかといつて初めから之を架空の小說であると言ひきることも如何かと思はれる。

結局、根本的には一の創作を取扱ふ態度を以て臨み、不卽不離の立場から、虛實の境を超えて、そこに描き出された桂正作なる人物の生活を理解させるといふ態度に出たがよいと思はれる。

2　參考

(イ)芥川龍之介氏の獨歩論（「文藝的な餘りに文藝的な」所收）を「芥川龍之介全集」第六卷から左に引用する。

獨歩は鋭い頭腦を持つて居た。同時に又柔い心臟を持つてゐた。しかもそれらは獨歩の中に不幸にも調和を失つてゐた。……彼は鋭い頭腦のために地上を見ずにはゐられないながら、やはり柔い心臟の爲に天上を見ずにもゐられなかつた。前者は彼の作品の中に「正直者」「竹の木戸」等の短篇を生じ、後者は「非凡なる凡人」「少年の悲哀」「畫の悲しみ」等の短篇を生じた。自然主義者も人道主義者も獨歩を愛したのは偶然ではない。

柔い心臟を持つてゐた獨歩は勿論おのづから詩人だつた。（といふ意味は必ずしも詩を書いてゐたと云ふことではない。）しかも島崎藤村氏や田山花袋氏と異る詩人だつた。大河に近い田山氏の詩は彼の中に求められない。同時に又お花畠に似た島崎氏の詩も彼の中に求められない。彼の詩はもつと切迫してゐる。獨歩は彼の詩の一篇の通り、いつも「高嶺の雲よ」と呼びかけてゐた。年少時代の獨歩の愛讀書の一つはカアライルの「英雄論」だつたといふことである。カアライルの歷史觀も或は彼を動かしたかも知れない。が、更に自然なのはカアライルの詩的精神に觸れたことである。

(ロ)吉江喬松氏の「國木田獨歩研究」（新潮社、日本文學講座）を左に引用する。

彼の作品に一見不思議と思はれる二篇の作がある。その一は「日の出」であり、他は「非凡なる凡人」である。何故に不思議と思はるゝかといへば、獨歩の大方の作中の人物は、殆ど皆一種の不遇な、矛盾に充ちた、時としては不具者の如く、時には奇狂とも思はるゝまでの人物等であるのに、「日の出」の大島小學校長、及び「非凡なる凡人」の桂正作の二人の如きは、彼の作中人物としては際立つた相異を見せてゐる。一人は「人間といふものは何時でも此初日出の光を忘れさへ爲なければ可い」と、これまた極めて平凡なことを眞劍に體現して行つてゐる人物である。この平凡な哲理を說く老人大島仁藏なる人物は、ジャン・クリストンに强く生きて行く途を、地平線上に浮び上る太陽を見ながら說いてゐるジャンの伯父、放浪の老人をさながらに思はせるものであり、その敎を受けて自殺の覺悟から鬱然思ひを轉じた池上權藏は、クリストフその人の如き生き方をしてゐる。も一人の桂正作は「活ける西國立志編」である。獨歩の所謂虛榮の巷に於て、著實健實に小さきながらに、生きるべき途を最も正確に、數學的に築いて行く人である。一人は自然の無限の生育力を體現して、幾多の少年にその力を鼓吹し、他は社會生存の中に於て、小さきながらに强固な生くる途を開いて行く人間である。

そして此等の非凡なる凡人が作者獨歩の意識の一隅に存續してゐて、現實觀を構成してゐて、無窮な時の流れ、廣大な自然の開展との對照の標準にならずにはゐられなかつた。そしてこれこそは、封建組織の破壞の後に、その崩落の廢址の上に芽を伸ばしだした春草の萌え出る力であり、當年の青年の抱いたブティト・ブルジョワジィの生きんが爲の必然の姿であつたのである。しかもこれだけが詩人獨歩の意識の全部を占領するものではなく、それ等の必然に生きる姿をも包括して、寧ろそれを對照の基準として、空ゆく雲の自在を求め、無窮を追究し、封建城郭からの解放、同時に自己の解放を享樂せずにはゐられなかつた。

この矛盾、この對照、この自由の追窮、信仰と戀愛、仕事と理想、それがいづこの國にでも見らるるロマンティクの特色である。

一〇 子規居士

一　解　題

1　作　者

相馬御風　サウマギヨフウ　名は昌治。明治十六年七月新潟縣糸魚川町に生る。明治三十九年早田稲大學英文科卒業。最初短歌より出發し、「明星」の同人であつたが、後岩野泡鳴等と共に雜誌「白百合」を創刊して詩の發達に盡した。三十九年學業を終へると、近松秋江等と「早稲田文學」の編輯に當り、後、早稲田大學の講師となつた。四十年、三木露風・野口雨情等と「早稲田詩社」を起し、自然主義の立場から詩の革新を唱へ、「御風詩集」を著した。大正元年に至り、「黎明期の文學」、「自我生活と文學」等を出して、評論家としての特色を發揮すると共に、生活の藝術化を提唱した。同五年感ずる所あつて郷里に引退し、その記念として「還元錄」を刊行した。その後郷里にあつて主として歌僧良寛の事蹟を研究し、「大愚良寛」、「良寛和尚詩歌集」等、良寛に關する論文・隨筆の類を多く公にした。その評論の傾向は極めて敏感な溫い鑑賞的なものである。

著書として右の外、「歐洲近代文藝思潮」「我等如何に生くべきか」「凡人淨土」「砂上漫筆」「樹かげ」「對山雜記」「靜と動との間」「良寛坊物語」等がある。

2　出　典

本課は昭和十二年五月出版の相馬御風隨筆全集第二卷「雜草の如く」から採つた。本書に採つた部分は、その中「緣蔭閑話」と題した中の一節である。途中及び最後の方は、頁數の關係等よりして、省略した部分があるが、子規の面目を傳へる點は失つて居ないつもりである。

3　主眼及び採擇の趣旨

正岡子規は晩年約八年に亙る病床生活に於て、實に言語に絶する苦痛に呻吟しつゝも、その痛苦を超えて驚嘆すべき精神生活を展開し、日本文學史上に巨大な足跡を殘したのであつた。彼の大悟徹底の心境は、宗教的に悟入したものでなく、飽くまで子規一流の强靱な意力と現實性に根ざすものであつて、その旺盛なる氣魄が彼をこの心境に達せしめたと考へられる。

本課はこの子規の心境と生活態度を青少年の胸中に再生させたいといふ意味で採つた。前課に於て生徒は「非凡なる凡人」を學んだ。子規も凡人である。決して神祕的な宗教的人物でもなければ、英雄豪傑でもない。しかし、凡人ではあるが、非凡なる凡人であり偉大なる凡人である。所謂英雄豪傑以上の偉大性をも持つ凡人である。この點、誠に現實的であり、我々に手近い非凡人的凡人である。非凡なる凡人こそ、我々の最も敬愛し親しみ得る人物であるが故に、こゝに子規居士を配列したのである。

二　解　釋

1　語　釋

【子規居士】シキコジ　正岡子規。俳人。歌人。本名は常（ツネ）規。別號獺祭書屋（ダツサイショオク）主人・竹の里人等がある。慶應三年九月、伊豫松山新玉町に生れ、明治三十五年九月十九日、東京下谷根岸子規庵に歿した。享年三十六。父は隼太、母は八重。六歳の時父を失ひ、幼時から外祖父大原觀山について漢學を學び、又十一二歳で既に詩・文を草した。明治十六年松山中學を中途退學して上京、須田漢學塾に

入つたが、幾何もなく神田共立學校に入り、十八年大學豫備門（後の第一高等學校）に入つた。夏休歸省中に井手眞棹に和歌を問ひ、二十年夏歸省して大原其戒に俳句を學んだ。二十一年には隨筆集「七草集」を著した。翌年五月始めて咯血し、それ以來子規と號した。この頃から俳句の研究に熱中した。二十三年第一高等學校の業を卒へて帝國大學文科大學に入つた。二十五年九月大學を退學して十一年日本新聞社に入社した。二十七年二月新聞「小日本」創刊の際編輯主任となつたが、七月廢刊と同時に再び「日本新聞」に歸つた。この年二月下谷上根岸に居を移した。二十八年日清役の從軍記者として派遣され、四月滿洲に上陸したが、實戰に臨む機會もなくて病に冒され、五月中旬歸途についた。船中咯血甚しく、神戸・須磨に病を養ひ、八月歸省、當時松山中學に教鞭をとつてゐた夏目漱石の家に寄寓し、松山に大いに俳風を興した。秋歸京。この頃から子規の俳句が漸く認められるに至つた。歸京頃から腰部に疼痛を感じ後次第に歩行の自由を奪はれるに至つた。而も子規の氣魄は更に衰へることなく、「日本」紙上にその執筆を見ぬ日はなかつた。三十年病日を追うて重くなつて行つた。この年一月雜誌「ホトトギス」が松山に創刊され、翌年その發行所を東京に移し、之を主宰した。三十一年二月「歌よみに與ふる書」を發表して和歌革新の狼火を揚げ、寫生に基づく清新な作を次々に發表して歌壇に大衝動を與へた。之と前後して寫生文を提唱して盛んに實作を試み、文章革新に乘出した。三十四年には殆ど病床を出づること能はず、時折畫筆を執つて娯んだ。一月から「墨汁一滴」を執筆。八月二十六日より私記「仰臥漫錄」執筆。三十五年五月四日より「病牀六尺」を執筆し、歿前二日の九月十七日に至つた。「墨汁一滴」「病牀六尺」は共に「日本」紙上に掲載された。

子規の業蹟として擧ぐべきは俳句・和歌の革新であり、寫生文の創始である。彼が傳統的陳腐に墮落してゐた俳句・和歌の革新に志し、寫生說を唱へ、自然・天眞に就くべきを示したのは、當時としては實に劃時代的の卓見であり、その作亦之を生かして餘ある秀作に充ちてゐる。彼の著作は俳句・和歌・寫生文・隨筆・小說等多方面に亙つてゐるが、擧げて子規全集に收められてゐる。

猶又彼が晩年五六年間高熱と疼痛とに呻吟しつゝも、肉體の苦痛を超えて活潑々地の活動をなした勇敢な生活態度は、彼が世に遺した最も大きな業蹟がなければならぬ。

【所產】　ショサン　元來は哲學用語として用ひられた natura naturata（所產的自然）からの譯語であつたが、近時一般的に用ひられて、「つくり出したもの」の意に用ひゐる。

【居士】　コジ　（一）學問ありて仕官せざる人。（二）男子の法名の下に附くる稱號。又俗人にして佛門に歸依する男子の稱號。こゝは（一）。

【懊惱】　アウナウ　心の惱み。もだえ。懊はなやむ、うらむ。惱はなやむ。

【稿】　カウ　したがき。「稿をつゞける」は、文章を書きつづけること。

【病牀六尺】　ビヤウシヤウロクシヤク　子規の晩年病臥中に於ける最後の日記的隨筆で、明治二十五年五月五日に始まつて九月十七日に至るまで、一日一文を新聞「日本」に掲載、永眠二日前まで百二十七回に至つたものである。九月九日までは、病狀に仰臥しながら自ら筆を執つたが、その後は令妹その他が筆記したのである。記されてゐる事項は病狀に關する事の外に、多種多樣の事項に亙り、病苦の中にも餘裕を持ち、精神力の如何に强靱であつたかを想はせるものがある。その中には畫家に對する評論や、寫生についての說があると共に、病牀の慰みに、日日寫生した菓物・草花・絲瓜棚等の畫があり、隨時の作歌・句作や身邊の事、看病の事、食物の事等廣範圍に亙る事が記されてゐる。

【身動きの出來る間は、敢て病氣を辛しと思はず平氣で寢轉んでをつたが】

子規の病氣に對する平然とした覺悟が偲ばれる。不治の病氣と宣告されただけでも、常人ならば、煩悶懊惱して到底平氣でなど居られるものでない。然るに子規は、病床に寢たきりといふ重態になつても、身動きの出來る間は、未だ平然たるものであるのである。

【精神の煩悶】　後に、生理的煩悶といつて居る條を參照。普通の煩悶とは違つて、生理的な原因で腦が冒されて、氣違のやうな苦惱を味はふのである。これは所謂、精神力を以てしては抑へ難い苦悶である。

【こらへにこらへた袋の緖はきれて】　所謂勘忍袋の緖が切れるのである。精神的力の抑制の極限以上の場合に陷るのである。

【若し死ぬ事が出來れば、それは何よりも望む所である】

普通の病人は死を恐れ、死の恐怖から煩悶する。子規は死の恐怖などは全然感じない。むしろ歡迎さへしてゐる。如何に肉體的苦痛が痛烈であるかを如實に示してゐる。

【併し死ぬことも出來ねば殺して呉れるものもない】

眞に絕望的な境地といふべきであらう。作者御風氏が「この一節に到る毎に戰慄を禁じ得ない」と述べてゐるのは、如何にも同感である。想像するだけでも戰慄を禁じ得な

い痛苦に、號泣しながらも堪へて行つた子規の苦を味はふべきであらう。

【終焉】　シユウエン　いまは。最期。臨終。

【如實に】　ニヨジツに　さながらに。そのままに。

【宗教問題】　シユウケウモンダイ　こゝでは、如何にして安心立命の境に達して、現世の生活を安穩ならしむべきかといふ問題。

【宗教家】　シユウケウカ　宗教々育の事業に當る人。僧侶牧師等の類。

【宗教】　シユウケウ　人が、人生を超越して宇宙間の諸現象を攝理する崇高偉大な或客體卽ち神佛の存在を信じ、之を崇拜し信仰して、之によつて現世の生活に安心立命を得んとする事實をいふ。從つて一面には禮拜の儀式を生じ、他面には命令の權威を生じ、遂に同一の信仰を奉ずる者を統括する一定の組織が起つた。其の信仰・行事・教義乃至組織の相違によつて自ら幾多の種類に分れる。今日最も勢力あるは佛教・キリスト教・マホメツト教等である。

【基督教】　キリストケウ　今から約二千年前ユダヤ人イエスーキリストの創始した宗教。キリストの人格と教訓とを中心として組織せられ、全智全能唯一絶對なる神により靈魂の救濟を得んことを主眼とせるもの。世界各國に盛んに行はれ教派が多い。

【佛教】　ブツケウ　西曆前五世紀の初、中印度カビラ城主の太子釋迦牟尼の創始した宗教。一切の煩悶を解脫して宗教的自覺者卽ち佛陀たらんとする教。現在信者はあらゆる宗教中最も多く、世界殊に東洋の文化に偉大なる影響を及ぼした。之も多くの教派に分れてゐる。

【南無阿彌陀佛】　ナムアミダブツ　佛教の宗派の中淨土宗及び淨土眞宗に於て、阿彌陀佛に專心歸依する意を表して唱へる文句。「南無」は梵語 Namas 或は Nano. 歸命と譯す。身命を捧げて縋る意。

【阿彌陀佛】　梵語 Amitābha 無量光明と譯す。西方淨土にありといふ佛。眞宗・淨土宗の本尊。

【苦しいといふより外に仕方もなき凡夫の病苦談】　病牀六尺の六月廿一日の條に見える語である。參考欄(1)に揭げてあるから參照されたい。猶病牀六尺の文章は連日「日本新聞」に揭載されたのであつて「病苦談」とは同新聞の讀者を對象とするものである。

【號泣】　ガウキフ　大聲を立てて泣くこと。號は叫ぶこと。

【人間一匹】　ニンゲンイツピキ　子規自身を指す。蟲けら同然の弱小な人間といふ意味で、自分自身を自嘲的に戲れていつた語。ユ！モアを含めて言ひ現したものである。參考欄(2)參照。

【右返上申候】　地水火風が集つて人間を作つたのだから、地水火風に向つて返上申すといふのである。

【以二特別一御取計可レ被レ下候】　古體の書簡文の體裁であるから、說明を加へて教授せられたい。

【出られ得るやう】　「れ」と「得る」とは可能の意味が重複するが、現代文には往々かうした用法が用ひられ、默認されてゐる。

【何がし】　子規自身の事を戲れていつたものである。

【地水火風】　チスキクワフウ　造物者といふほどの意に用ひてゐる。

佛教では地・水・火・風を以て宇宙の元素とし、すべてはこの四大元素（四大）の假合によつて成るものと考へ、その物が滅する時には、この四元素に還元すると考へた。人間もこの四大の假りに合作したものであるから、死すれば元の元素にかへるわけである。但し、佛說によつては地・水・火・風に更に空を加へて、五大と稱し、萬法はこの五大より成り、滅すれば五大に還元すると說く場合もある。

【絕望的自棄】　ゼツバウテキジキ　痛烈な病苦を逃れる望が絕無となつて捨鉢的な氣持になつて居る狀態をさす。「自棄」は所謂捨鉢的になることであるが、前の戲れ書の自嘲氣分を、御風氏は「自棄」と感じたのである。しかし、これを絕望的自棄と見る見方には、反對の說もあらう。

【藝術】　ゲイジユツ　ここでは俳句・和歌・寫生文等を指す。

藝術とは文化の一領域をなすもので、色彩・音響・言語・形態等の形象によつて人間の美的感情を表現する創作活動。繪畫・彫刻・工藝・建築・音樂・詩・小說・戲曲・演劇・映畫・舞踊等に分れる。

【面目】　メンボク　姿・樣子等の意。こゝでは精神的面目をさしてゐる。

【全體としての自己】　靈肉一元の姿に於ける自己。結局この句の意味は、子規の病苦は肉體的には彼を傷け破つたが、然しその被害は肉體上に止り、より高い彼の精神生活をまで破壞することは出來なかつたの意。

【生死出離】　シヤウジシユツリ　「出離生死」の意に見るべきか、「生死・出離」の意に見るべきかについて、意見が分れるであらうが、私は、「生死を出離する」といふ意に見たい。一切の煩悶心を斷滅して、生死の苦しみを解脫すること所謂人生に對する精神的煩悶から、この出離生死の問題に進むのが宗教入信の常道である。

【脊髓系】　セキズキケイ　脊椎の管內に充盈してゐる神經系統。子規は結核性脊髓炎を病み、その爲に起居の自由を失ひ、晩年は病牀に橫たはつたまゝ殆ど身動きも出來

なかつた。そして彼の脊髓には二ケ所も穴があいて、膿が漏れ、その苦痛は言語に絶した。

【生理的に精神の煩悶を來す】身體の機能の上に起つた原因の爲に精神の苦惱が起る。普通の精神煩悶は精神的原因がもととなるのであるが、子規のは、生理的な變化から精神の變調があらはれるのであつて、全く不可避的な苦惱であつた。參考欄(3)參照。

【煩悶を免れる手段は、固より『現狀の進行に任せる』より外は無いのである。號泣し煩悶して死に到るより外に仕方がないのである】

自己の痛苦を、極めて冷澄な心と强烈な意志を以て眺めてゐる。所謂、讀んで戰慄を禁じ得ない所である。

【たましひの靜けさ】肉體の苦痛を超えて靜かに澄みたゝへた精神。

【「あきらめ」に「以上」と「以下」とのある事】

「あきらめ以上」とは、諦念の深まつた狀態で、己の境遇を天命に任せて、之に安んじ、何事かに生存の意義を見出して生活してゐる狀態であり、「あきらめ以下」とは精神上の苦悶を感じつゝ無理々々に我慢してゐる狀態である。

【兆民居士】テウミンコジ　中江兆民。本名篤介。思想家・評論家。弘化四年高知市に生れ、明治三十四年十二月東京小石川の自邸に歿した。享年五十五。十九歳、土佐藩留學生として長崎に赴いて佛語を學んだ。廿一歳江戸に出で村上英俊について佛語を學んだ。明治四年司法省出仕となり、佛蘭西留學を命ぜられた。當時恰もナポレオン三世の帝政瓦解の後で、民主々義的自由主義思想の深い感化を受けた。明治七年歸朝、元老院書記官に補せられ、次いで外國語學校長に任ぜられたが、幾許もなく辭し、麴町に佛學塾を開いた。時恰も自由民權熱の勃興に當り、西園寺公望、松田正久等と結んで東洋自由新聞を創立し、また雜誌「教理叢談」を創刊、ルソーの民約論を譯載し、盛に佛蘭西流の自由平等の政治論を主張して政府を攻擊した。二十三年國會開設に際し、推されて代議士に當選したが間もなく辭職した。三十三年秋、每夕新聞の主筆となり、次いで國民同盟會成るや自ら投じて大いに奔走したが、紀洲遊說中喉頭癌にかゝり、翌年泉州堺に寓居して病を養つた。醫者より餘命一年半と宣告され、生前の遺稿として「一年有半」の筆を執る。九月歸京、小石川の自邸に入り、「續一年有半」を執筆。十月刊行。十一月病愈〻重く翌十二月長逝した。

【養ひのため】養生のための意。

【灸】キウ　漢方の療治法の一。もぐさを肌につけ之に火を點じて灼き、其の熱氣を由つて病氣を治すること。

【灸の痛さ】「灸のあつさ」とあるべきやうに生徒は疑問を起すかもしれない。しかし、灸の體驗のある者は「痛さ」の方が適切である事を知つてゐる。「あつい」といふやうな、やさしいものではないからである。

【病氣の境涯に處しては、病氣を樂しむ】「樂しむ」は普通の意味の樂しむではない。病氣を靜かに味はふのである。痛苦をも、嚙みしめ味はふのである。子規の場合でいへば、子規は自分の病苦を素材として俳句を作り和歌を詠んだ。病は彼にとつて苦痛ではあつたが、彼はそれを味はふことによつて一面それを創作上の切實な素材としたのであつた。子規は己れの病苦に適切な表現を與へることに深い感興を覺えたに違ひない。「病氣を樂しむ云々」の感想はこゝから生れたものと思はれる。

【境地】キヤウチ　こゝでは、人生觀乃至價値觀の展開途上に於ける心の一位置。心境。氣持。

【芭蕉】バセヲ　松尾芭蕉。本名宗房。蕉風俳諧の祖。別に桃青とも號した。正保元年伊賀柘植村に生れ、上野城代藤堂氏に仕へたが、主君蟬吟の死後、家を出で、京都に赴いて北村季吟に師事し、寛文十二年江戸に下つた。延寶八年の頃杉風の深川の別墅に居を定めて之を芭蕉庵と稱し、貞享元年以來各地に大行脚をなすこと前後四回、元錄七年十月大阪に客死した。享年五十一。蕉風を開いたのは四十一歳頃で、從來單なる消閑の慰に過ぎなかつた俳諧を眞の文學として新生せしめ、偉大な足跡を文藝史上に遺した。

【糸瓜咲いて、の句】

庭先の糸瓜棚には殘りの花が咲いてゐる。痰のつまつた新しい佛がこゝに寢てゐるの意。

「佛」とはこゝでは死人の意味であつて、子規自ら自分の死期の迫つたのを感じて自分を「佛」と扱つたのである。

糸瓜の水は痰を去る藥とされてゐるが、その糸瓜の水のとり得られる頃——花咲き、實もなつてゐる九月の頃——に、痰がつまつてこの佛は往生してゐるといふと、輕い皮肉的な味を持つ表現のやうに感じるが、こゝが大悟の境から生れた洒脫の境なのである。危篤に陷つた病人の感情としては一見甚だ冷淡なやうに見えるが、子規の大悟徹底した心境はこの一句に明快に表現されてゐる。子規は既に己れの病苦を超えて、恐ろしいまで冷靜な態度で冴えた觀照の眼を客觀に向け、己れ自身に向けてゐるのである。當時の有樣を偲びつゝこの句を讀むと胸迫つて來るやうな感じがする。これ程まで鍛錬された嚴肅な句は古今にその比を見ることが出來ない。以下二句はこの句と同一心理の展開である。

【痰一斗、の句】

痰が夥しく出るので糸瓜の水も現下の必要を充すに足りないの意。糸瓜の水は痰切りの薬とされてゐる。「痰一斗」は誇張した表現ではあるが、病勢險惡切迫の感を現し得て、千鈞の重味があり、「糸瓜の水も間にあはず」といふ切迫した七五の持つ感じと、いみじき力のつり合を見せてゐる。

【をととひの、の句】

一昨日の糸瓜の水も取らずにしまつた。何故とらずにしまつたのか。もう糸瓜の水をとる必要もないといふ氣持である。澄んだ心で自己の死を見つめてゐる感がある。「をとゝひ」は卽ち九月十五日であつて、この日は糸瓜の水を取るのによい日とされてゐる。この句にも子規の澄み徹つた心境が窺はれる。前の二句に比し調べが伸びやかで抒情味が漂うてゐる。回顧的な感懷がのべられてゐる爲であらう。

【絶筆】　ゼツピツ　死際に書いた筆蹟。

【子規隨筆】　シキズヰヒツ　編者は、小谷保太郎。明治三十五年十月に日本新聞より刊行された。子規晩年の病苦中の隨筆「墨汁一滴」「病牀六尺」の二編に、「春色秋光」一篇を加へたものである。

【石版刷】　セキバンズリ　石版を以て印刷した印刷物。石版とは石版石の面に文字又は模様を描寫し若しくは彫刻して製作した印刷版である。

【複製】　フクセイ　(一)原物と同じものを二つ以上製作すること。又そのもの。(二)普通には著作物・繪畫等について、原作と同樣なものを製作すること。又、そのものをいふ。ここは(二)。

【暢達】　チヤウタツ　いかにも伸び〳〵として澁滯の氣味のないこと。

【寫生】　シヤセイ　こゝでは「スケツチ」位の輕い意味に用ひられてゐる。

【呼吸を引取る】　イキをヒキトる。

【辭世】　ジセイ　死ぬる時に遺す詩歌。

【名乘つたので無いけれど】　居士が自分で、これが辭世だと明言したのではないが。普通の「名乘る」――名を告る――意味ではない。「言ふ」「明言する」といふほどの意。

【敬虔】　ケイケン　つゝしみうやまふこと。虔は、つゝしむこと。

1　言語に絶する生理的の苦痛の有樣。(七九頁七行まで)

2　子規が宗教の圈外にあつた爲、病苦に對する宗教的慰安の與へられなかつた事。(八〇頁六行まで)

3　白嘲的な戯れ書。(八一頁二行まで)

第二節　(八一頁三行―八五頁終まで)　病苦を超えた子規の精神生活。

第三節　(八六頁初―八八頁三行まで)　子規の精神生活を反映する絶筆及びその書かれた當時の模樣。

第四節　(八八頁四行―最後まで)　絶筆を中心とする子規讃歎。

3　文　意

子規が晩年の數年間不治の病の床に呻吟しながら、言語に絶する病苦に打克つて精神生活を展開させて行つた大悟徹底の心境を、その隨筆及び絶筆を通して偲ぶと共に、之に對する讃歎の情をのべたものである。

4　鑑賞批評

相馬御風氏一流の溫い味のある筆致で子規の大悟の心境と之に對する讃歎の情がのべられてゐる。御風氏のこの文章は夥しく子規自身の言を引用し、子規自身をして子規を語らしめるといふ態度をとつてゐる。其の敍述態度の中に、生徒に働きかける感銘は子規自身の言葉よりの感銘と御風氏のこれに對する感激とによつて、二重に高め得られると思ふ。

以下各節に就いて順を逐うて鑑賞を進めよう。

第一に於ては子規の病苦が彼の手記によつて語られてゐる。手記の第一は絶對絶命の苦痛に堪へかねた號泣の聲である。之を讀んでは評者御風氏の言ふ如く眞に戰慄を禁じ得ない。

手記の第二は常人ならばかういふ際には取縋つて救を求める宗教を子規自身は否定してゐる爲にその救の得られぬことを言つてゐる。少しも常人を羨む語氣は感ぜられず、淡々として事實を述べてゐる感じである。こゝにも子規の現實的傾

向や意力といふものが感ぜられる。

第三の手記は子規自身自分の身體を持て餘して、造物主宛てに、自嘲的に戯れ書いた手紙であつて、彼の洒脫な一面を發揮してゐると思ふ。

第二節に於ける手記には、その苦痛より免れるべき「あきらめ」乃至「さとり」の心境に到達したことが語られてゐる。この「詮め」の氣持は子規にあつては素質的なものであつたらしく、之についての參考(4)の(八)を參照せられたい。

子規の詮めは他力に縋つて現實を廻避することではなかつた。苦痛を滿喫しつゝ之を客觀視し、之を味ははんとする行き方であつた。「病氣の境涯に處しては病氣を樂しむといふことにならなければ、生きてゐても何の面白味もない。」といふ彼の言葉はこの間の消息を如實に傳へてゐると思ふ。

彼はかくて御風氏の言の如く「苦痛のために、全體としての自己を破り亂すことはなく」己れの病苦を對象として、或は之を動力として、俳句を作り、和歌を詠じ、文章を草した。その遺作は彼の死後幾何ならずして俳壇に、歌壇に新しく輝しい黎明を齎したのであつた。子規の藝術は彼の「悟り」から生れたものであると同時に、一面彼の「さとり」は彼の性格に根ざすと共に、彼の藝術に對する熱心から得來つたものだといふ感じがする。

御風氏は子規の心境を指して「芭蕉などの到入したたましひの靜かな世界」と評してゐられる。これは一應肯ける言葉と思ふ。

第三節にあげられた絶筆三句は語釋の項で述べた如く、その大悟徹底の心境には肅然たらざるを得ない。病み衰へた人の手蹟は文字の亂れが著しいものであるが、この三句の文字の暢達さは眞に驚くべきものである。子規の內面性がこの筆の流動の中にさながらに象徵せられてゐる感じがする。

三句の成つた當時の有樣について高濱虛子氏の報告は興味深いものである。紙をも一人で支へきれなくなつた子規の衰弱の有樣が傷々しく眼に浮ぶ。默々として筆を投じたまゝ、息を引取るまで何事も言はなかつたといふところに一切を超脫し去つて自然の化に合流した心境が、自力に徹した大悟の心境がさながらに示されてゐるではないか。

三　備　考

1　指導研究

この文の主眼は病苦に屈せぬ子規の氣魄、その旺盛なる生活態度、その大悟の心境を傳へるにある。

之が指導に當つては先づ子規その人について豫備說話を行ひ、その一生、病氣、文學上の業蹟等について大たいの概念を與へておくことが必要であらう。少年の若々しい感受性はこの說話にかなりの反響を示すであらうと思ふ。

次に讀み、文意、構想等の作業が行はれる。

次に病苦についての具體的な說明が望ましい。子規の偉大さは、彼の病氣が言語に絕する苦痛に充たされたものであつたことを知る時、愈ゝその光輝を加へ、深い感銘を與へられるのである。それ故先づ生徒等に子規の病苦を追體驗させることが必要となつてくる。その爲には生徒ら各自の既往の病氣の經驗を想像せしめることが有效であらう。そしてその苦痛の經驗を手がかりとして參考(5)を讀み聞かせつゝ子規の病苦の如何なるものであつたかに想到せしめたい。特にその中の(八)の如きは子規が生前、他人に見せずに書いてゐる私記「仰臥漫錄」の一節であつて、その容態苦痛が赤裸々に訴へられて居り、餘りの傷ましさに先を讀むことが躊躇される程である。これは明治三十四年十月の狀態であつて、この狀態の馴致された過去四五年間の病牀生活と、この苦痛の更に募り行く後一年間とが想像されるのである。

以上の知識を與へた上で本文の深究に入る。

第一、二節に於ては彼が病苦にさいなまれつゝ到達した「さとり」が宗教等の他力によつて苦痛を回避するといふもの

ではなく、苦痛を滿喫しつゝある己れを客觀視し、その苦痛を味はつて行かうとする意力的な行き方であつたことを理解させたく思ふ。

次に相馬氏の文中「死の間際に至るまでも藝術に對する熱愛に終始することを得た點に子規その人の特異な面目が存する。」とある所を敷衍して、子規がかゝる傷ましい境涯に陷りながら、その青年時代に心を傾けた句作を最後まで續けたこと、更に明治三十一年頃から積極的に和歌革新に乘出し、その果敢にして透徹した評論と惻々として人に迫る實作とを以て歌壇に新しい時代を將來せしめたこと、又寫生文を創始して文壇に大きな刺戟と影響とを與へたこと、又彼が枕頭繪筆を執つて草花や庭園の風物を寫生して病苦を忘れたこと等を知らしめたい。

更に第三節に掲げられた絶筆三句を通じて最も直接に如實にその心境に觸れしめたい。十五、六歳位の少年にこの句の眞價を十分理解させることは或は困難かも知れないが、如上の子規の境涯を背景として幾度も讀み味ははせ、その筆蹟にこもる力を見出させたならば、必ず生徒の胸中に、把握しきれぬ大きな驚異と嚴肅感とを湧かせることが出來るに相違ない。引用された虚子の文章は、絶筆三句に表れたる子規の最期に於ける大悟の心境を窺ふべき意義深い記錄であると思ふ。

かくして結語に表れた御風氏の感銘を生徒等の胸に響かせたい。

2　參考

挿繪

子規の絶筆「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」。子規の筆蹟は理性的で竹を割つたやうな感がある。この筆蹟は平常の暢達さそのまゝで、死ぬる前日に書いたものとは思はれない。

參考文獻

(1)「苦しい時には苦しいといふより外に仕方もなき病苦談」の參考。

（八〇頁三行目に以下の文が引續いてゐる）

或は畫本を見て苦痛をまぎらかしたこともある。併し如何に面白い畫本でも毎日々々同じ物を繰返して見たのでは十日もたたぬうちに最早陳腐になつて再び苦痛をまぎらす種にもならない。（中略）。何よりも嬉しきは親切なる友達の看護してくれることであるが、それも屢ゝ出逢うては別に新しき話もないので病人も看護人も兩方が差合うては一はたゞ苦しみ、一は其苦しみを見て心に苦しむやうになる。去年頃迄は唯一の樂しみとして居つた飲食の欲も今は殆んど消え去つたのみならず、飲食其物が却つて身體を煩はして、それが爲に晝夜もがき苦しむことは近來珍しからぬ事實となつて來た。（中略）。大勢の人を集めて、之と室を共にすることも苦しみの種である。謠の聲、三味線の音も遙かの遠音を聞けばこそ面白けれ、枕許近くにては其音が頭に響き、甚しきは我が呼吸さへ他の呼吸に支配せられて非常に苦痛に感ずるやうになつてしまうた。畢竟自分と自分の周圍と調和することが甚だ困難になつて來たのである。痲痺劑の十分に効を奏した時は此調和が稍ゝ容易であるが、今は其痲痺劑が十分に効を奏することが出來なくなつた。余は實にかやうな境界に陷つてゐるのである。いつ見ても同じ病苦談、聞く人には馬鹿々々しくうるさいであらうが、苦しい時には苦しいといふより外に仕方もなき凡夫の病苦談「如何にして日を暮すべきか」「誰かこの苦を救うて呉れる者はあるまいか」情ある人我病床に來つて余に珍しき話など聞かさんとならば、謹んで余は爲に多少の苦を救はるゝ事を謝するであらう。余には珍しき話とは必ずしも俳句談に非ず、文學談に非ず、宗教、美術、理化、農藝、百般の話は知識なき余に取つて悉く興味を感ぜぬものはない。たゞ斷つておくのは、差向うて坐りながら何も話のない人である。（「病牀六尺」明治三十五年六月廿一日の記事）

(2)「人間一匹云々」の出所

人間一匹

右返上申候但時々幽靈となつて出られ得る樣以特別御取計可被下候也

明治三十四年月日

地水火風御中　　何がし

（「墨汁一滴」明治三十四年四月九日の記事）

(3)「精神の煩悶云々」の參考。

今朝起きると一封の手紙を受取つた。それは本郷の某氏より來たので余は知らぬ人である。其手紙の大略左の通りである。

拜啓昨日貴君の病牀六尺を讀み感ずる所あり左の數言を呈し候。

第一、かゝる場合には天帝又は如來とともにあることを信じて安んずべし。

第二、もし右信ずること能はずとならば人力の及ばざるところをさとりて、たゞ現狀に安んぜよ、現狀の進行に任ぜよ、痛みをして痛ましめよ、大化のなすがまゝに任ぜよ、天地萬物わが前に出沒隱現するに任ぜよ。

第三、もし右二者共に能はずとならば號泣せよ、煩悶せよ、困頓せよ、而して死に至らむのみ。

小生は嘗て瀕死の境にあり肉體の煩悶困頓を免れざりしも、右第二の工夫によりて精神の安靜を得たり。これ小生の宗教的救濟なりき。知らず貴君の苦痛を救濟し得るや否やを、敢て問ふ病間あらば乞ふ一考あれ。(以下略)

此親切なる且つ明瞭平易なる手紙は甚だ余の心を得たものであつて、余の考も殆ど此手紙の中に盡きてゐる。唯と余に在つては精神の煩悶といふのも、生死出離の大問題ではない、病氣が身體を衰弱せしめた爲であるか、脊髓系を侵された爲であるか、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのであつて、苦しい時には、何とも致し樣の無いわけである。併し生理的に煩悶するとても、其の煩悶を免れる手段は固より「現狀の進行に任せる」より外は無いのである。號泣し、煩悶して死に至るより仕方の無いのである。たとへ他人の苦が八分で自分の苦が十分であるとしても、他人も自分も一樣にあきらめるといふより外にあきらめ方はない。此の十分の苦が更に進んで十二分の苦痛を受くるやうになつたとしても矢張あきらめるより外はないのである。(「病牀六尺」明治三十五年六月二十三日の記事)

(4)　あきらめ以上、兆民居士の條參考。

(イ)　或人からあきらめるといふことに就いて質問が來た。死生の問題などはあきらめてしまへばそれでよいというたことと、又嘗て兆民居士を評して、あきらめる事を知つてゐるが、あきらめるより以上のことを知らぬと言つた事と撞著してゐるやうだが、どういふものかといふ質問である。

それは譬喩を以て說明するならば、こゝに一人の子供がある。其子供に養ひの爲に親が灸を据ゑてやるといふ。其場合に當つて子供は灸を据ゑるのはいやぢやといふので、泣いたり逃げたりするのはあきらめのつかんのである。若し又其子供が到底逃げるにも逃げられぬ場合だと思うて親の命ずる儘におとなしく灸を据ゑて貰ふ。是は已にあきらめたのである。併しながら、其子供が灸の痛さに堪へかれて、灸を据ゑる間は絕えず精神の上に苦悶を感ずるならば、それは僅にあきらめたのみであつて、あきらめるより以上の事は出來んのである。若し又其子供が親の命ずる儘におとなしく灸を据ゑさせるばかりでなく、灸を据ゑる間も何か書物でも見るとか自分でいたづら書きでもして居るとか、さういふ事をやつて居つて、灸の方を少しも苦にしないといふのは、あきらめるより以上の事をやつてゐるのである。兆民居士が一年有半を著した所などは死生の問題に就いてはあきらめがついて居つたやうに見えるが、あきらめがついた上で夫の天命を樂んでといふやうな樂しむ域には至らなかつたかと思ふ。居士が病氣になつて後頭りに義太夫を聞いて、義太夫語りの評をして居る處などは稍わかりかけたやうであるが、まだ十分にわからぬ處がある。居士をして二三年も病氣の境涯にあらしめたならば今少しは樂しみの境涯にはひる事が出來たかも知らぬ。病氣の境涯に處しては、病氣を樂しむといふ事にならなければ生きてゐても何の面白味もない。(「病牀六尺」明治三十五年七月二十六日の記事)

(ロ)　兆民居士の一年有半といふ書物世に出で候よし新聞の評にて材料も大方分り申候。居士は咽喉に穴一つあき候由吾等は腹背中臀ともいはず、蜂の巢の如く穴あき申候。一年有半の期限も大概は似より候ことと存候。乍併居士はまだ美といふ事少しも分らずそれだけ吾等に劣り可申候。理が分ればあきらめつき可申美が分れば樂み出來可申候。杏を買うて來て細君と共に食ふは樂みに相違なけれども、どこかに一點の理がひそみ居候。燒くが如き畫の暑さ去りて夕頭の花の白きに夕風そよぐ處何の理窟か候べき。(「仰臥漫錄」明治三十四年十月十五日の記事)

(ハ)　僕は子供の時から弱味噌の泣味噌と呼ばれて小學校に往ても度々泣かされてゐた。たとへば僕が壁にもたれてゐると右の方に並んでゐた友達がからかひ半分に僕を押して來る、左へよけようとすると左からも他の友が押してくる、僕はもうたまらなくなる、そこで其際足の指を蹈まれるとか横腹を稍ゝ强く突かれるといふ機會を得て直に泣き出すのである。そんな機會はなくても二三度押され

たらもう泣き出す。それを面白さに時々僕をいぢめる奴があつた。併し灸を据ゑる時は僕は逃げも泣きもせなんだ。然るに僕をいぢめるやうな強い奴には灸となると大騒ぎをして逃げたり泣いたりするのが多かつた。これはどつちがえらいのであらう。（「墨汁一滴」明治二十四年四月八日の記事）

(5)　子規晩年の病狀に就いての參考。

（イ）　此ごろはモルヒネを飲んでから寫生をやるのが何よりの樂しみとなつてゐる。けふは相變らず雨天で頭がもや〳〵してたまらん。朝はモルヒネを飲んで蝦夷菊を寫生した。一つの花は非常な失敗であつたが、次に畫いた花は稍ゝ成功してうれしかつた。午後になつて頭は愈々くしや〳〵としてたまらぬやうになり、終には餘りの苦しさに泣き叫ぶ程になつて來た。そこで服藥の時間は少くも八時間を隔てるといふ規定によると、まだ藥を飲む時刻には少し早いのであるが、餘り苦しいからとう〳〵二度目のモルヒネを飲んだのが三時半であつた。（「病牀六尺」明治三十五年八月六日の記事）

（ロ）　一日のうちに我痩足の先俄かに腫れ上りてブク〳〵とふくらみたるそのさま火箸の先に德利をつけたるが如し。醫者に問へば病人にはありがちの現象にて血の通ひの惡きなりといふ。兎に角に心持よきものに非ず。（同　九月十一日の記事）

（ハ）　十月二十六日　晴

朝　粥ニ牛乳カケテ三椀　佃煮　奈良漬

便通及繃帶取替

午　雞鍋　卵二ツ　飯一碗　味噌汁實ハ薩摩芋　柿三ツ　奈良漬

晩　雞肉タヽキ　サシミ　柿ナド

夜　澁茶　ビスケツト等

眠ラレズ

此頃ノ容體及ビ每日ノ例

病氣ハ表面ニサシタル變動ハナイガ次第ニ體ガ衰ヘテ行クコトハ爭ハレヌ。膿ノ出ル口ハ次第ニフエル、寢返リハ次第ニムツカシクナル、衰弱ノタメ何モスルノガイヤデ只ボンヤリト寐テ居ルヤウナコトガ多イ。

腸骨ノ側ニ新ニ膿ノ口ガ出來テ其近邊ガ痛ム、コレガ寐返リヲ困難ニスル原因ニナツテキル。右ヘ向クモ左ヘ向クモ仰向ニナルモイヂレニシテモ此痛所ヲ刺戟スル、咳ヲシテモコヽニヒビキ泣イテモコヽニヒビク。

繃帶ハ每日一度取換ヘル。コレハ律ノ役ナリ。尻ノサキ最痛ク僅ニ綿ヲ以テ拭フスラ、猶疼痛ヲ感ズル。背部ニモ痛キ箇所ガアル。ソレ故繃帶取換ハ余ニ取ツテモ律ニ取ツテモ每日ノ一大難事デアル。此際ニ便通アル例デ、都合四十分乃至一時間ヲ要スル。

肛門ノ開閉ガ尻ノ痛所ヲ刺戟スルノト腸ノ運動ガ左腸骨邊ノ痛所ヲ刺戟スルノトデ、便通ガ催サレタ時之ヲ猶豫スルノ力モナケレバ奥ノ方ニアル屎ヲリキミ出ス力モナイ。只其出ルニ任スルノデアルカラ日ニ幾度アルカモ知レヌ。從ツテ家人ハ暫時モ家ヲ離レルコトガ出來ヌノハ實ニ氣ノ毒ノ次第ダ。

睡眠ハ此頃善ク出來ル。併シ體ノ痛ムタメ夜中幾度トナク目ヲサマシテハ又眠ルワケダ。

齒齦カラ出ル膿ハ右ノ方モ左ノ方モ少シモ衰ヘヌ。每日幾度トナク綿デ拭ヒ取ルノデアルガ體ノ弱ツテキル日ハ十分ニ拭ヒ取ラズニ捨テヽ置クコトモアル。

物ヲ見テ時々目ガチカチカスルヤウニ痛ムノハ年來ノコトデアルガ、先日逆上以來愈ゝツヨクナツテ、新聞ナドヲ見ルト直ニ痛ンデ來テ、目ヲアケテ居ラレヌヤウニナツタ。ソレデ黒眼鏡ヲカケテ新聞ヲ讀ンデキル。

朝々湯婆ヲ入レル。熱出ヌ。小便ニハ黄色ノ交リ物アルコト多シ。

食事ハ相變ラズ唯一ノ樂シミデアルガ、モウ思フヤウニハ食ハレヌ。食フトスグ腸胃ガ變ナ運動ヲ起シテ少シハ痛ム。食ウタ者ハ少シモ消化セズニ肛門ヘ出ル。

サシミハ醬油ヲベタリトツケテソレヲ飯又ハ粥ノ上ニカブセテ食フ。

佃煮モ飯又ハ粥ノ上ニ少シヅヽ置イテ食フ。

齒ハ右ノ方ニテ嚙ム。左ノ方ハ痛クテ嚙メヌ。

朝起キテスグ新聞ヲ見ルコトヲヤメタ。目ヲイタハルノヂヤ。人ノ來ヌ時ハ新聞ヲ見ルノガ唯一ノヒマツブシヂヤ。

食前ニ必ズ葡萄酒（澁イノ）一杯飲ム。クレオソートハ毎日二號カプセルニテ六粒。（「仰臥漫錄」明治三十四年十月二十六日記事）

註　文中「律」とあるは子規の妹のこと。勝氣な女性で子規の看病を一人で受持つた。

補　材

子規の作品の中から、彼の張り切つた生活そのものを象徴するやうな句として、補材に用ひたのである。

句は、季は夏、季語は袷、切字は「かな」である。

句意は、初夏のさわやかな頃、袷の片肌をぬいで、矢場に立ち、漲り滿ちる滿身の力をこめて、強弓をギリ〳〵と引絞つて、將に矢をきつて放たうとする瞬間の、清爽な緊張感を句にしたものである。清爽雄渾な句であり、力にみちあふれた感がある。

この感じは、又子規生涯の奮鬪を象徴し、如何なる苦痛にもくづをれない彼の颯爽たる氣力の充滿をも象徴するかの如くに私には感じられる。勿論子規自身は左樣な心をこめたものではないが、讀者にさうした氣分をさそひかけるもののあることは、單に私だけが感じるのみではないであらう。

二　松　の　嵐

一　解　題

1　作　者

小澤蘆庵　ヲザハロアン　歌人。名は玄仲。享保八年（一三八三）に生れ、享和元年（一四六一）歿。享年七十九。尾張家の家老成瀬家の家臣の家に生れた。主家の留守役として早くから京都に住んだ。後致仕して、難波に移り、再び京都に戻つた。劍道に秀でてゐる蘆庵は武を以て立たうと志したこともあつた。京都に返つてから某公に仕へたが、これは三十五歳の時であつたと言はれてゐる。この頃冷泉爲村に和歌を學んだ。幾許もなく仕を辭して和歌の師匠となつた。天明八年太秦の地藏堂に移り住むこととなつた。彼の太秦生活は十四年間續き、歿したのはこの太秦の地藏堂であつた。蘆庵は眞淵等の擬古派や爲村等の堂上派の持つ弊所を退けて、新しい歌風「たゞこと派」を立てた。歌論「塵ひぢ」の成つたのは寛政二年蘆庵六十八歳の年である。これは太秦に轉居した翌々年で、蘆庵の歌が到るべき處に到つたのも太秦に移つてからのことであるといはれる。この頃から、伴蒿蹊・澄月・慈延と共に平安の四天王と稱され、名聲が一代に高くなつた。交遊としては上田秋成・伴蒿蹊などと親しく、香川景樹とは早くから交つてゐた。晩年には橘千蔭・本居宣長などとも親しかつた。

蘆庵の歌論は「たゞことうた」を主張して、深い心を平淡にうたふことを重んじた。この「たゞことうた」は古今集の序の見解から得てゐるのであつて、彼は古歌集中古今集を最も尊重した。その歌は平淡ではあるがやゝ陳套であつて、歌

論に比して劣つてゐる。蘆庵の歌論は誠實卽調を說いた景樹によつて更に發展してゐる點に歷史的價値が存する。

香川景樹　カガハカゲキ　歌人。姓は林、後、香川。名は初は純德、後、景樹と改む。桂園と號す。明和五年（二四二八）に生れ、天保十四年（二五〇三）歿。享年七十六。鳥取池田家の家臣林某の二男に生れた。少年時代から秀才の譽が高く、天明七年（二十歲）靑雲の志を懷いて京都へ出た。一時生活に窮したこともあつたが、公卿の家に仕へることになり、次いで當時二條派の宗匠家として京都の貴族歌壇の重鎭であつた香川景柄の門に入り、また、小澤蘆庵にも敎を受けた。やがて歌才を認められ、寬政九年（三十歲）香川家の養子となつて景樹と名乘り、德大寺家に仕へ、從五位下長門介に敍せられたが、文化元年（三十七歲）故あつて離緣になつた。香川家を去つた後も、一意歌道に進み、晩年には門人千餘人、京阪の歌界では比肩する者がなかつた。門下の主な人々には岡本保孝・木下孝文・熊谷直好・八田知紀等がある。

景樹の和歌の主張は調べにあるといふ。彼の意見は、誠實な感情の自然の發表であるといふ點に於て小澤蘆庵の影響を受けたことは爭はれない。たゞその上に出でて、しらべといふことを說いたのは大なる進步である。調べの說といふのは歌の內容たる思想と、その形式たる辭句との調和といふ事と、詞のつゞけがらの整ひといふ事との二つの意味を含んでゐる。この調べが歌の生命であるといふその見地から、情感に調子に優美を特色とした古今集の歌風を理想とし、紀貫之を歌の聖とした。

これは賀茂眞淵の萬葉崇拜に反抗したのと、一つはその歌論の主張と個人の趣味性とから來てゐると思はれる。景樹の歌風は淸新の感じに富んでゐるといふ點では蘆庵以上である。併し短所としては想の平凡と、なだらか過ぎて調子の弱々しくなつてゐる點とがあげられる。

桂園派の歌風は、景樹歿後も全盛で、明治時代の初頭までその勢力を持續した。明治の新派が起るに及んでも、舊派として歌壇の一隅に存續した。

大隈言道　オホクマコトミチ　歌人。本姓は淸原。寬政十年（二四五八）筑前福岡藥院抱安學橋に生れ、明治元年（二五二八）歿。享年七十一。舍人親王の後裔、大隅茂助の四男。早くより文事に志し、藩士二川相近に和歌、書道の外、繪畫・音樂・篆刻をも學んだ。歌は特に萬葉と古今とを究め、家集では山家集に親しんだ。言道が、歌の上で獨自の見を抱いたのは、三十五歲の頃であらう。天保七年（三十九歲）家を弟に讓つて隱棲した。歌に沒頭してゐた結果、家業が衰へて來たのと、專心歌に進まうと思ひ立つた爲である。當時の彼の生活は極めて貧しく、歿するまでそれが續いた。天保十一年、豐後の廣瀨淡窓の塾で、主として漢學を學んだ。安政四年（六十歲）難波に移つた。歌風を京阪の間に弘めようと思つたのと、歌集出版の機緣を見出さうとした爲であつた。彼は難波で歌の上の弟子であつた筑前藩の勘定奉行生田久繁の保護を受けて、十二年間を送つた。知友には中島廣足・八田知紀・萩原廣道・佐佐木弘綱・近藤芳樹・熊谷直好等があつた。彼は難波の三筆の一人と稱せられた。折々京都に遊んだり、又、月ケ瀨の梅や吉野の櫻などを觀賞した。安政五年（六十一歲）「戊午集」二卷を撰み、萬延元年（六十三歲）の時「今橋集」を撰んだ。文久元年（六十四歲）戊午・今橋二集から抄出した「草徑集」を刊行した。元治元年（六十七歲）中風症を發し、慶應三年（七十歲）鄕里の門人に促されて福岡に歸つた。

言道は古典に據るまいとして自然に古今集風の歌を作つた。その點に於て、彼は蘆庵・景樹の系統にある人である。作ばかりでなく、歌論「ひとりごち」を見ても彼が古今集派の人であることが分るのである。然しその中には又、獨自の論があり、彼はそれを作に移してゐる。彼は「自分は天保の今日只今生きてゐる。だから天保の今日只今の歌を詠まう」といつてゐるのは注目すべきである。彼の歌は着想の斬新奇拔にして、また洒落輕妙な事、觀察の精細な事など從來の歌人の着眼しなかつた點に出で、從來詠み出でなかつた境地を自由によみこなして、印象鮮明、生氣潑剌たるものがある。用語が新しく、好んで擬人法を用ひ老幼を多く詠む等、內容・形式に幾多の特色を有してゐる。

2　出典

蘆庵の歌　蘆庵の家集「六帖詠草」（校註國歌大系第十七卷所收）から採錄した。
六帖詠草　歌集六冊。「古今六帖」にならつて名づけられたもの。文化八年刊行。歌數二千首。小澤蘆庵翁全書（續日本歌學全書）・近代諸家集第三卷（校註國歌大系）・有朋堂文庫第四十五編等に所收。
景樹の歌　景樹の家集「桂園一枝」（校註國歌大系第十八卷所收）から採錄した。
桂園一枝　歌集。三卷。文政十一年成立。文政十三年刊行。香川景樹翁全集上卷（續日本歌學全書）・近代名家歌選（校註和歌叢書）・近代諸家集第四卷（校註國歌大系）・有朋堂文庫等に所收。
言道の歌　家集「草徑集」（校註國歌大系第十九卷所收）から採錄した。
草徑集　歌集。三卷。文久三年刊行。近世名家家集下卷（續日本歌學全書）・近代名家歌選（和歌叢書）・近代諸家集第五卷（校註國歌大系）等に收められてゐる。

3　主眼及び採擇の趣旨

六課の現代和歌と聯絡して、近世歌壇の主流をなした所謂桂園派の和歌を鑑賞し、その傾向及び史的意義を明かにしたい。いふまでもなく文藝的教材である。

二　解　釋

響き來る松の嵐にうづもれて絶間がちなる谷の水音

【松の嵐】　マツのアラシ　烈しい松風の音。松籟。山風が木高い松の梢に吹き當つて、澎湃たる響をたてるのをいふ。
【うづもれて】　〔うづもる〕　埋もる。物の下又は中に蔽はれる。
【絶間がち】　水音が途切れがちに聞えるをいふ。　〔がち〕　接尾語。他の語に添へて、多い意又はかたよる意を表す語。
澎湃たる松風のひびきに遮り蔽はれて谷川の音も途絶えがちに聞える、の意。

鑑賞批評

「谷水音幽」といふ詞書がある。この歌は蘆庵が洛西太秦に移り住んだ頃の作である。場所は太秦附近、或は嵐山のあたりであらうか。松の嵐といひ、谷の水音が、松籟にうづもれて途絶えがちに聞えるといひ、いかにも幽玄閑寂な境である。そして作者の生活も自らそこに浮び出てゐるやうに思はれる。深い心を平淡な言葉で表すといふ蘆庵の歌論を或程度まで實現した作であらう。たゞ一首として味ふ時、幾分材料的でその境に向つての情緒の移入がやゝ弱いやうにも思はれる。

人の世の富は草葉におく露の風をまつまの光なりけり

【風をまつまの光】　風の來るを待つ束の間のかゞやき。浮世の富のはかなさを喩へた語。「光」は「いきほひ」「威光」の意を寓する。　【なりけり】　であるわい。「けり」は詠嘆。
此の世の富などといふものは恰も草葉に置く露の如く、いつどうなるかあてにならぬものだ、の意。

鑑賞批評

「思ふことありて」といふ詞書がある。國歌大系の頭註によると、「此の歌は、寛政四年に蘆庵が大病をした時、門人たりし豪商三井一家が、誰も見舞に來なかつた。病癒えて此歌を添へ絶交狀を送り、先方で謝罪しに來たけれども許さなかつたといふ。」とある。

これが輕薄不德義な富豪に突きつけた歌であることを思ふと、一首生氣を帶び來るのが感ぜられる。

遠山は入日のなごりなほ見えて野は霧わたる秋の夕ぐれ

遠山の巔には入日の餘光がなほ殘つて居り、野べには夕霧が立ちわたつてゐる、秋の夕暮に出て見ると。

鑑賞批評

「秋晩」といふ詞書がある。秋の夕べの寂莫たる光景が、ありのまゝに描かれて居り、一首にこもる情緒も汲まれると思ふ。たゞ遠山と野とが幾分對立的になつて十分融合し切つてゐないやうに感ぜられ、それが一首の力を弱めてゐるかと思はれる。

大井川かへらぬ水にかげ見えて今年も咲ける山櫻かな

【大井川】オホヰガハ　正しくは、大堰川。保津川が嵐山に來て大堰川と稱し、更に桂に到つて桂川と云ふ。

【かへらぬ水】流れ去つて再びかへることのない水。

大堰川の、刻々と流れ去つて再びかへることのない流れに影を映じて今年も山櫻が咲いたわい。

鑑賞批評

「河上花」といふ詞書がある。嵐山を咲き埋むる櫻花が山裾をゆるく遶る大堰川の清流に映じた光景である。かへらぬ水と觀ずる時、その水に映る櫻花が一入美しく、たゞそれのみが背に變らぬ友と感ぜられた心持であらう。常なき水を背景として、櫻が感慨深く描き出されてゐる。「かへらぬ水に」と思想的の要素を加へたのが、心の深さを目指す作者の狙ひ所であらう。

むら山の高ね高ねをつたひ來て富士の裾野にかかる白雲

鑑賞批評

富士の、群山をぬきんづる姿を描き出さうとした歌で頗る巧みであるが、やゝ趣向が目立つやうに思はれる。白雲が山の高さを比較して歩いてゐるやうである。

照る月の影の散り來るここちして夜ゆく袖にたまる雪かな

【照る月の影】「影」とはこゝでは月光そのものをいふ。

【夜ゆく袖】夜道を歩いてゐる我が衣の袖。單純化の行屆いた句である。

月明りの夜道を行く我が衣の袖に折からちらつく雪がふりかゝつて、恰も月光が散り來る如き心地がする、の意。

鑑賞批評

「寒月」といふ詞書がある。「照る月の影の散り來るここちして」といふのが作者の會心の句であらう。感じが美化され、用語が磨かれて、古今集風の優美な世界を描き出してゐる。

鶯の鳴く一聲に忘れけり何處にか行く我が身なりけむ

途中、鶯の一聲に出てきた用事を失念してしまつた、といふのである。

鑑賞批評

著想が奇拔で、輕妙なユーモアが漂うてゐる。春風駘蕩たる田舍道に佇む作者の後姿がそこに見えるやうである。言道

の眞面目を遺憾なく發揮した作であらう。

行く人をゐなか童の見るばかり立ち竝びたるつくつくしかな

【つくつくし】土筆。單に、つくし、ともいふ。杉菜の地下莖から生ずる子囊群の莖。筆の形をなし、食用に供せられる。

土筆の竝び生えたさまを、田舍の子供等がつくねんと見馴れぬ人を見送る樣子に喩へた歌である。著想がこれ亦奇拔で立竝ぶ土筆が皆動き出しさうである。

いくばくのおとりまさりも見えぬ子の負へる負はるるあはれなるかな

何程の長幼の差も見えない子供が負うたり負はれたりしてゐるのを見るといとほしくあはれに思はれる、の意。

鑑賞批評

「嬰子」といふ詞書がある。田路の路傍に幼い子供が自分と餘り大きさの變らぬ弟妹を負うて遊んでゐる、よくあんな大きなものが負へたものだと思ひながら、よく見ると負ひ手と背中の子とが父母の面ざしを傳へてよく似てゐる。その有樣を見て何ともいへぬいとほしい氣持が湧いて詠んだのであらう。人なつこい人間味が溢れてゐる。

三　備　考

（一）蘆庵・景樹等は所謂京都派と稱せられ、江戸の眞淵一派と對立して江戸歌壇の半ばを背負ふ人々である。眞淵一派がますらをぶりの萬葉を宗とし人麿を歌聖とするに對し、蘆庵・景樹等は優雅な古今集を和歌の經典とし貫之を理想とする。從つてこの派の和歌を理解するには溯つてその淵源たる古今集の歌風を尋ね、他方眞淵一派の作と比較對照することが必要であらう。

（二）この派の和歌に往々見られる趣向的な傾向は之を指摘して生徒自身にその可否を判斷せしめた上、史的な觀點に立つて適當に指導を加へたい。

3　參　考

（一）三家に就いてその歌風を窺ふべき作を次に擧げよう。

○　　小澤蘆庵

花鳥をあやにおりはへ春のきる霞の衣いくへたつらむ

大井川月と花との臘夜にひとり霞まぬ浪の音かな

けふの日も入江かすみて行く舟の跡なき波に春ぞくれぬる

この夕秋來にけらし庭もせに露の玉しくよもぎふの宿

うしとてもいかゞはすべき心もて入りにし山の秋の夕暮

うづまさの深き林をひゞきくる風のとすごき秋の夕ぐれ

山風はやゝをさまりて立つ霧に林も見えぬ秋の夕ぐれ

山遠くたなびく雲にうつる日もやゝうすくなる秋の夕ぐれ

寂しさは住むやどからのならひかと立ち出づる野べも秋の夕ぐれ

月ひとりあめにかゝりてあらがれの土もとほれとてる光かな

たづがれのはるかにきこゆすめる夜の澤べの月や霜と見ゆらむ

夜をこめてわれよりさきに朝立ちし人のゆくへも見ゆる月影

吹きおろす嵐を寒みまだきより冬がまへする秋の山ざと
冬の日のほどなき空にいく度かけふもしぐれてくるゝ山かげ
さゝの葉にふりしく音の聞えぬは深くやなりしよはのしら雪
ひゞき來る松の嵐を待ちとりて軒ばにさわぐ山のしたしば
すなほなる心の道はみな人のかざらぬ常の言の葉に見ゆ

○

けふ見れば比良の遠山雪きえて霞のおくになりにけるかな
春日野に若菜をつめば我ながら昔の人のこころこそすれ
あまりにも春の日影のながければ暮るゝも待たで月は出にけり
大堰川早瀬をくだす筏士ものどかに見ゆる花のかげかな
いにしへの花のかげさへ見ゆるかな車やどりの春の夜の月
照る月の影にてみれば山ざくら枝うごくなりいまか散るらむ
大空のおなじ所にかすみつつゆくとも見えぬ春の日の影
うの花の露ふむ小野の山陰は浪にぬれ行くここちこそすれ
たちばなのなつかしき香に匂ふ夜はわが袖ならぬここちこそすれ
水無月の空にかさなる白雲の上に奇しき峯はふじのね
夏深み木がくれ多き山里の月の光はふけてなりけり
はつ霜はまだ置きなれぬ宵々の月に移ろふしらぎくの花
いづくより駒うちいれむさほ川のさゞれにうつる白菊の花
なびくだに涼しきものを夏川の玉藻を見れば花咲きにけり

香川景樹

こともなき野邊を出でても見つるかな鵙が鳴く音のあわたゞしさに
ふじのねを木の間木の間にかへりみて松の影ふむ浮島が原
澄む月の氷をたゝくここちして山澤水にくひな鳴くなり
秋風の寒き夕べを津の國のさひえの橋を渡りけるかな

○

こゝにもと人にいふ間にさ蕨のありかうしなふ春の野邊かな
あくがれて見てし都の花さへも夢にながるゝ淀の川ぶね
山里はつみとる人もひとりなし畠の土筆の春のたちがれ
妹が背にれぶるわらはのうつつなき手にさへめぐる風車かな
家にてはとかくいはれし木枕の高きひぎきもなき旅寢かな
行くまゝに家つゞきなる都路のいづこの程にひなび來ぬらむ
只ひとり夜ふけてゆけば行く月とわれとのものぞ廣き大路は
寂しさに手をのみくめる夕暮も小草は露の玉をもちけり
田の面より我が門さして來る人の近づかぬまに誰と知らばや
何事もえかゝぬ筆を少女どちとりあらそへるつくつくしかな
さかりなる一木の花の中つ枝の思ふところに出づる月かげ
花のごとつとに折られぬ月なれど歸る野べよりたぐひてぞくる
旅人の道ゆく笠のうへにさへあなづらはしくゐるあきつかな
さばかりの我が身じろぎに影失せてとなりの屏になれる鶯
つばくらめ親待ちかねて並べればわれも遲しと見る軒端かな

大隈言道

春深みおほれかぶらも諸共に花のたぐひになれるころかな
山べより歸るわが身を送り來てあくれば門を月もいりけり
いづくにか我が身來ぬると思ふらむ市にまろべるなだの蛤
人かよふ道のながては並松のならぶすがたも行きがほにして
しな高きことも願はず又の世はまた我が身にぞなりて來なまし

（二）眞淵派の歌を次に掲げる。

賀茂眞淵

○

男筑波も遠つ足尾も霞むなり嶺こし山こし春や來ぬらむ
見わたせば天の香具山うれび山あらそひたてる春霞かな
橘のかをれる宿の夕ぐれに二こゑ鳴きてゆくほとゝぎす
天の河見つゝしをれば白たへの吾が衣手に露ぞおきにける
秋の夜のほがら〳〵と天の原てる月影に鴈なきわたる
こほろぎの鳴くやあがたのわが宿に月かげ清しとふ人もがも
にほどりの葛飾早稲のにひしぼりくみつゝをれば月かたぶきぬ
信濃なるすがの荒野をとぶ鷲のつばさもたわにふく嵐かな

○

田安宗武

眞帆引きてよせ來る船に月照れり樂しくぞあらむその船人は
學ばでもあるべくあらば生れながら理にてませどそれ猶し學ぶ
匂ひさへ花さへ實さへ若葉さへ冬木のほども梅はことなる
さゞ波のひらの山べに花咲けば堅田に群れし鴈かへるなり

狩人も情しあればか女郎花しゞ咲く野邊をみつつ過ぎにき
武藏野を人は廣しとふ吾は唯尾花分け過ぐる道とし思ひき
東の山の紅葉ば夕日には、いよいよ紅くいつくしきかも
二つなき富士の高嶺のあやしかも甲斐にも在りとふ駿河にも在りとふ

○

耕取魚彦

秋父嶺ををちにみさけて久方の天ゆく月の照れる國原
父のみの父いまさずて五十年に妻あり子ありその妻子あり
六月のなかの十日の中ぞらにいともかしこき日のみ面かも
天の原ふきすさみける秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

三　水　郷

北原白秋

一　解　題

1　作　者

北原白秋　キタハラハクシウ　本名は隆吉。詩人・歌人。明治十八年一月福岡縣山門郡沖端村に生れた。中學傳習館を中途退學して、三十六年上京、早稻田大學文科に入學したが中途退學した。中學時代から詩歌を作り、三十七年初めて詩を雜誌「文庫」に發表し、間もなく新詩社に入り、四十二年雜誌「スバル」の同人となり、更に木下杢太郎氏等と雜誌「屋上庭園」を創刊した。同年處女詩集「邪宗門」を刊行して、絢爛で頽唐的な異國趣味の象徵的作風により詩壇の耳目を聳動し、四十四年幼時の追憶の中に異國的・享樂的な情調を盛つた抒情小曲集「思ひ出」を刊行して全詩壇の推賞を受け、更に雜誌「朱欒」を創刊した。短歌も當時盛に作り、大正二年處女歌集「桐の花」を刊行し、主觀的・抒情的な歌風によつて歌壇的地位を獲得した。三年「地上巡禮」、四年「アルス」を創刊した。七年童話雜誌「赤い鳥」に童謠を發表し「とんぼの眼玉」を第一聲として幾多の童謠集を續刊すると共に、小唄集も盛んに出版して、昭和期に於ける民謠勃興の機運を釀成する等、新天地に力をかたむける一方、詩歌にも依然として精進し、十年刊行の歌集「雀の卵」、十二年刊行の詩集「水墨集」等に於ては、枯淡な東洋的な境地を示し、「詩と音樂」「日光」「近代風景」等の雜誌を主宰して盛んに活躍した。

昭和に入つてからは稍沈默の形であつたが、七年には詩の季刊誌「新詩論」及び短歌の季刊誌「短歌民族」を發刊し、十年六月以後短歌雜誌「多磨」を主宰してゐる。著書には、詩集に「邪宗門」「思ひ出」「東京景物詩」「白金の獨樂」「水墨集」「海豹と雲」等、歌集に「桐の花」「雲母集」「雀の卵」「篁」「白南風」等、その他童謠集・民謠集・文集等すべて八十數種を數へる。

全集十八冊も出版され、その後の作品年纂「全貌」も既に第三輯を出した。

2　出　典

「白秋小品」所載の「生ひたちの記」を抄錄したもので、もとは抒情小曲集「思ひ出」の序文である。「白秋小品」は作者の散文集である。（白秋小品　一冊、大正五年十月阿蘭陀書房發行）

3　主眼及び採擇の趣旨

作者の少年時代を育んだ鄕里柳河に對するなつかしい追憶を書いた文である。作者の態度は著しく浪漫的であるが、而もその追憶を展開するに當つては實に精細な寫實を以てしてゐる。

本課の主眼は浪漫的な思鄕の念にあることはいふまでもないが、又一方かういふ浪漫的な內容でも的確な寫實的手法によつて初めて活現されるものであるといふことをも學ばしめたい。

本來文藝的教材であるが、鄕土に對する關心を促す點に於て國民的教材でもある。

二　解　釋

1　語　釋

【水鄕】　スヰキャウ　水邊の村。沼・池・河流などの多くある里。水邊にあつて水の景趣に富んだ地。

【私の鄕里柳河】　作者の鄕里は福岡縣山門郡沖端村である

が、徳川時代柳河藩以來の習慣で、沖端は柳河の一部と見做されてゐる。そして水郷柳河は單に山門郡柳河町だけではなく、その郊外から同郡の城内町・沖端村にかけての一帶の地を指してゐるのである。

【廢市】　ハイシ　すたれた町。荒廢した都市。柳河町は江戸時代に於ては柳河藩主立花家の居城がこゝにあつて繁榮してゐたが、明治維新の廢藩と共に昔日の面影を失つた。

【風物】　フウブツ　(一)風景。景色。眺めに入るもの。(二)季節々々のもの。こゝは(一)。

【南國的】　ナンゴクテキ　南方の國らしい。南國特有の、明るく暖かくのんびりした趣にいふ。

〔的〕　名詞の下に附して之を形容詞化又は副詞化し、その趣がある、又はその性質がある、意を表す。

【既に柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠の水には、日に日に廢れ行く舊い封建時代の白壁が、今猶懷かしい影を映す】　廢市挽歌の序曲が奏せられてゐる。いかにも廢市らしい印象的な光景である。

〔既に〕　はや。もはや。すんでのことに。

こゝでは、文法的に明確な用法ではないが、「柳河の街を貫通する……今猶懷かしい影を映す」にかゝつて一種の感慨を表す副詞と見るべきであらう。

〔溝渠〕　ホリワリ　「堀割」とも書く。地を堀つて水を通する所。ほり。みぞ。

柳河地方の堀割について「水郷の水を語る」に「川でなくて堀といふものが村中に幾筋もあつた。春に水を引入れて秋までの灌漑に堪へる水量を溜めるのだから、幅も廣く、深さも相當にあつた。最も廣い所は七八間の幅で、最も深い所は滿水期に三尋四尋はあつたやうに思ふ。この堀の特色は稻に必要な時期丈け滿々と水を湛へ、收穫期になると海へ餘り水を落して殆ど空割となる點である。夏の間は絶えず小さい樋口を通して川から水を補給してはゐるが、それは殆ど流れといふ形を成さず、夏の半ばには旱や黄濁りの溜水に過ぎなかつた。それは流るゝ川でなく、連續した溜池といふべきものであつた」とある。

〔封建時代の白壁〕　こゝでは舊幕時代の白壁、昔のまゝの俤を止めてゐる舊家の白壁、といふ程の意。

〔封建時代〕　ホウケンジダイ　封建制度の行はれた時代。我が國では、賴朝が勅許を得て諸國に守護地頭を置いてより明治維新の版籍奉還までをいふ。

【肥後路】　ヒゴヂ　南方、肥後に通ずる路。佐世保國道の一部。

〔肥後〕　西海道十二國の一。現熊本縣の地で、一市・十

二郡に分たれてゐる。

【久留米路】　クルメヂ　東北方、久留米に通ずる路。

〔久留米〕　現久留米市。鹿兒島本線の要驛。筑後川に臨み、筑紫平野東半の中心地として、米・菜種・櫨等の集散が盛に行はれ、足袋・紡績・織布等の工業も盛大である。久留米絣は附近一帶の廣範圍に亙り副業的に製織せられて市に集められる。徳川時代は有馬氏二十一萬石の舊城下であつた。人口九一、九二〇(昭和十年現在)

【佐賀】　サガ　現佐賀市。長崎本線の要驛。筑紫平野西半の中心地として、米其の他の農産物の集散が盛んである。人口五〇一五四(同右)鍋島氏三十六萬石の舊城下。

【筑後河】　チクゴガハ　九州第一の大河で、利根川を坂東太郎といふのに對して筑紫次郎の稱がある。主な水源が二つあつて、一は大山川と稱し、熊本縣阿蘇山の外輪山に發し、北流して日田盆地に出で、一は玖珠川と稱し、大分縣玖珠郡九重山に發し、西北流して森盆地を通過し日田盆地に出でて前者と合する。それより西流して福岡縣に入り、筑前・筑後の國境を流れて有明海に注ぐ。全長約一四〇粁。うち約一〇〇粁は舟楫の便があり、筑紫平野の殆ど全域を灌漑する。

【分岐】　ブンキ　ふたまたにわかれること。又幾筋かに分れることにもいふ。

【燻銀】　イブシギン　藁又は硫黄をいぶした煙で淡黑い色を附けて光澤を消した銀。

【人工的河水】　ジンコウテキカスヰ　航運・灌漑等の爲に人力で作つた河。運河。溝渠。堀割。

【隨處】　ズヰショ　到るところ。何處にも。

【菱】　ヒシ　柳葉菜科、ひし屬の一年生草本。本邦各地の沼池に自生し、根は泥中に在り、水中莖は長く伸びて水面に達し、梢頭に近く多數の葉を簇生する。葉は膨大して浮囊の役をなす葉柄を有し、やゝ菱狀三角形で鋸齒がある。夏日葉間に白い小花を開き、後兩棘ある硬い核果を結び、中に一つの種子を包む。種子は食用とする。

【蓮】　ハス　睡蓮科、はす屬の多年生草本。印度地方の原産。池沼・水田等に栽培され、地下莖は肥大して長く、明瞭な節を具へ、葉はその節から生じ、圓く楯狀で長い葉柄を以て高く水上に抽出する。葉色はやゝ白味を帶びた綠色。夏日花梗を抽き大なる美花を開く。花色は白もしくは淡紅。地下莖の肥大部を蓮根と稱し、種子と共に食用に供する。異名、れんげ、はちす。

【眞菰】　マコモ　禾本科、まこも屬の多年生草本。沼澤に自生し、春日宿根から新苗を生じ、高さ一——一・五米に達する。葉は互生・線狀披針形、中肋脈は裏面に突出し表面は溝をなす。秋日莖頂に三〇——六〇糎の穗を抽

き、圓錐花序をなして上部に雌花、下部に雄花を著ける。花色は淡紫色。葉を蓆に製し、種子・嫩芽を食用とする。異名かつみぐさ、ふししば、こも。

【河骨】　カウホネ　睡蓮科、はす屬の多年生草本。池沼・河流等の淺水に自生し根莖は肉質で太く横走し、水上に露出せる葉は一見里芋の葉に似て箭狀長楕圓形で厚く、一〇——三〇糎に及び、又水中に沈むものは軟く薄い。七八月頃太い花梗を水面に抽出して黄色・五瓣の一花を著生する。

【浮藻】　ウキモ　ここでは、浮萍類卽ち浮萍科に屬する小形の水生植物をさす。この類は明瞭な莖葉を生することなく、扁平な葉狀體をなして水面、時に水中を浮漂し、根は通常存するが、稀にこれを缺くものもある。根はあつてもこれを水底に下すことなく浮き漂ふので、一名根無草といふ。雌雄一家で、葉狀體の側部の凹窩中に、一箇又は二箇の雄花及び一個の雌花より成る小花序を生ずる。果實は胞果。世界で二十數種を產し、我が國には、うきくさ（狹義）、あをうきくさ・ひんじも等約六種がある。

【更紗模樣】　サラサモヤウ　人物・動物・花卉・線條等を幾何畫的に硬化して布の總面に現した模樣。

〔更紗〕　更紗模樣を染め出した綿布。もと、印度・暹羅等から渡來したが、現在は我が國に於ける重要な染色工業の一である。

【淡紫】　ウスムラサキ

【ウォーター・ヒヤシンス】　Water-hyacinth（英）和名、ほていあふひ、又は、ほていさう。雨久花科、ほていあふひ屬に屬する浮水性の多年生草本。葉は簇生し、卵圓形又は圓形で平滑、葉柄は膨大して內に空を含み、その狀が布袋の腹に似てゐるのでその名がある。夏日簇葉の間に三〇糎ばかりの花莖を抽き、淡青紫色を呈するやや大形の美花を穗狀花序に綴る。ブラジル地方の原產で、庭池などに栽培して觀賞される。

【旅籠屋】　ハタゴヤ　宿屋。旅館。

【廚】　クリヤ　食物調理所。臺所。勝手。「黑屋」の義といふ。煙に煤けるのでこの名がある。

【晒布】　サラシヌノ　晒して色を白くした麻布又は綿布。略して「さらし」ともいふ。

【水門】　スヰモン　河川・運河・貯水池等で水流を遮斷し水の流出入を調節する爲に設ける堰又は門扉等の構造物

【堰かれて】　セかれて　遮られて。ふさぎとめられて。

【酒つくる水となり】　作者の生家は酒造業で、この堀割の水を引いて使用したのである。

【汲水場】　クミヅ　柳河地方の方言。みづくみば。

「水鄕の水を語る」に「住民は各戶に洗場を持つてゐる。堀の岸に何段かの石垣若くは棧橋風な仕掛けをしてゐる。それをクミヅと稱へる。其所で人々は朝の顏を洗ひ口を嗽ぐ、その傍では米を磨いで附近を眞白に濁してゐる。畑から取つて來た菜を洗ふ、肴を料理して臟腑を流す、目を擧げて向う岸を見ると、何と麗々しく肥田子が浸してある。夕方には其所へ馬を引き入れて洗つてゐる。云々」とある。

【鶩】　アヒル　家鴨とも書く。雁鴨科、まがも屬、まがもの飼養變種。古く支那及びローマその他で馴養せられたもので、體は概して太く、首長く脚短く、翼は殆ど飛翔の用をなさない。我が國で普通に飼養されてゐるのは青首と稱する在來種で、その外、ルーアン・ペキン・ラナー等、肉用・卵用又は觀賞用に供する種々の品種が作出されてゐる。

【擾され】　ミダされ　ごちや〳〵にされて。亂雜にされて。「鶩の毛に擾され」とは、鶩が物に驚いて羽搏きをする時羽毛が拔けてそこらの水面を亂雜になすことをいふ。

【觀音講】　クワンノンカウ　(一)觀音經を講ずる法會。(二)觀世音を信仰するものの講中（組合）。こゝは(二)作者の鄕里には觀音信仰の風習があつて、その幼年時代、夏になると夜每觀音講の提燈をともす家が町々に一軒づつあつて、それは組を作つた沖端の處女達が受持つてともすことになつてゐたといふ。

【堰】　キビ　柳河地方の方言。せき。水を堰く爲、水路中又は流出口に設けた構造物。ゐせき。「堰を隔てて」とは一旦堰にせき止められた流れがその上を越して流れ出ることをいふ。

【沖の端の鹹川】　沖端川をさす。

〔沖の端〕　沖端村のこと。

〔鹹川〕　シホカハ　塩氣の多い川。河川の海に注ぐあたりは滿潮の時汐が逆流したりして河水が鹹いからいふ。

【たま〳〵】　(一)折よく。丁度そこに。(二)偶然。ひよつこり。ふと。(三)稀に。たまさか。ここは(三)。

【芝居見の水路】　芝居見物にゆく舟の通路。

【蛇を奔らせ】　堀割の水の面を蛇が勢よく泳ぎ渡ることを擬人的に言つたのである。

【變化多き少年の祕密】　成長期の極めて變化多き時代にある少年に特有な、人に語らぬ空想的な不安や恐怖、の意。

【水鄕柳河は、さながら水に浮いた灰色の柩である】　封建時代の古めかしい白壁が、溝渠の水にその影を落してゐる廢市は、作者にとつて嘗ては「少年の祕密」を育んだ鄕土である。思慕が切なれば切なる程、哀惜が深ければ深いほど、廢れゆく現實の姿をどうすることも出

來ない焦慮が烈しい。「水に浮いた灰色の柩」は、かくの如き作者の追憶を挽歌たらしめねばやまぬ契機を示す有力な譬喩である。

〔灰色の柩〕　ハヒイロのヒツギ　日に日に廢れゆく陰鬱さの中にある町を、哀惜をこめて譬へた語。

【刈株】　カリカブ　草木の刈り取られた後に殘る株。かりぐひ。かりばね。かつくひ。こゝは稻の株であらう。

【色もなく乾き盡くし】　雨や日にさらされて、どんよりとした色になつた刈株を憂鬱な氣持で「色もなく」といつたのである。

【斑紋】　ハンモン　まだらの模樣。

【怪しげな】　不思議な、樣子の變つた。

〔げ〕（「け」・（氣）の連濁）（接尾）　名詞・形容詞・動詞に添へて、その狀態・氣色を表す。

【高麗烏】　カウゲガラス　かささぎ（鵲）の柳河方言。

燕雀目、鴉科、かささぎ屬の鳥。頭上から下尾筒まで光澤ある黑色で、腰に灰白色の横帶があり、肩羽は純白で甚だ顯著である。翼の雨覆は綠色光澤を帶びた黑色。初列風切の外瓣はこれと同色、內瓣は白色で基部及び先端尾黑色。羽は黑色で美しい綠色光澤を有する。下面は喉から胸の上部までは黑色。それ以下は白色。嘴及び脚は黑色。ビルマ・支那・朝鮮・臺灣及び九州の一部（福岡・長崎兩縣の一部及び佐賀縣の南部）に分布する。

九州產の鵲は、秀吉の征韓役當時の移入にかゝるものと傳へられ、同地方では、かちがらす、とも呼ばれてゐる。たうがらす・てうせんがらす・まらうどがらす等の異名もある。

【股引】　モモヒキ　ズボンに似て足に密着するやうに作つた服。職人などは、半纏と共に紺木綿で作つたものをはくことが多い。又、メリヤス等で作つた同形の下著にもいふ。

【櫨】　ハジ・ハゼ　「黃櫨」とも書く。漆樹科、うるし屬の落葉喬木。高さ約七米に達し、葉は奇數・羽狀複葉で、光澤ある披針形の小葉から成り、小葉は殆ど無柄の全緣葉。秋日極めて美しく紅葉する。五六月頃黃綠色の小花を圓錐花序に綴る。雌雄雜家。果實は扁圓で小さく歪形をなし、木蠟を作る。本州中部以南に分布。異名――はぜのき・はじのき・はぜうるし・らふのき。

【卵色】　タマゴイロ　（一）鷄の卵殼の色。白茶色。（二）卵黃の色。薄黃色。こゝは（二）。

「卵色の梢」とは、薄黃色をした櫨の實が鈴生りに生つた梢のあたりがたそがれの中で薄黃色に見えることをいふ。

【展望の廣い平野】　見はらしの廣い平野。

柳河の四方約一〇粁は一の丘陵もなく、殊に西北、佐賀・肥前の方面は約二〇粁の平遠を望むことが出來る。

【陰鬱】　インウツ　陰氣で鬱陶しいこと。氣がむすぼれて晴々しないこと。

【幽かな「しゆぶた」の腹の閃にも、話に聞く生膽取の靑い眼つきを思ひ出し】

何よりも、神經の鋭敏な、神祕な世界に生きた著者の少年時代が示されてゐる一句である。

〔しゆぶた〕　原文には「しゆぶた（鮀の一種）」とある。「鮀」は「はえ」又は「はや」と訓み、地方によつて指す魚が異なるが、大體に於て、うぐひ・おひかは・かはむつ・ひがひ等、柳葉狀の淡水產小魚で、水の澄んだ流れに多い。

〔生膽取〕　イキギモトリ　夕闇の中に現れて、歸り遲れた子供の生膽を取るといふ恐しい人間。

昔は實際に、子供の生膽を取つて六神丸などを作つたこともあつたのであらう。長崎邊りでは、更に、異人に對する恐怖心も結びついたらしいが、作者は、むしろ支那風に考へてゐたといふ。又この生膽取の話は、作者の神經質的な子供心に深い恐怖を與へたといふ。「生膽」とは生きてゐる人間又は動物から取つた膽、（肝臟）で、切り取つて藥用とすれば特効があるといふ迷信がある。

【海邊の黑猫は、ほほけ果てた白い穗の限もなく戰いでゐる枯葦原の中に、じつと蹲つたまま、過ぎ行く冬の囁に、晝も猶耳傾けて死ぬるであらう】

これも作者の少年期の觀察であり夢であつたものが、恰も柳河の冬を象徵するかのやうに、思ひ浮べられてゐるのである。海邊に果しもなくつゞく白い穗の枯葦原を背景として、動かうともしない黑い猫の姿は、そのまゝ死の冬を、まして廢市柳河の冬を象徵してゐる一幅の繪畫である。

【ほほけ果てた】　すつかりほほけだつた。

〔ほゝける〕　穗・髮等の亂れて不揃になること。そゝける。けばだつ。

【戰いでゐる】　ソヨいでゐる　そよ〳〵と動いてゐる。

【枯葦原】　カレアシハラ　枯葦の一面に生えてゐる原。

〔葦〕　蘆とも書く。禾本科、よし屬の多年生草本。水邊に自生し、地下莖は長く横走する。莖は直生・剛强で竹に似た節を具へ、高さは一・五米內外。葉は披針形・鋭尖頭で、全形はすゝきに似、秋日莖頂に大きい穗を出して、圓錐花序をなす無數の灰白色の小花を著ける。異名――よし・はまをぎ・たにはぐさ。

【蹲つた】　ウズクマつた　しやがんだ。

【冬の囁】　フユのササヤキ　風の音や虫の音などを擬人的

に言つたもの。

【耳傾けて】　耳をすまして。

【麥が伸び、見渡す限りの平野に黃色い榮の花の毛氈が柔かな軟風に薰り初める頃、まだ見ぬ幸を求めるために、うら若い町の娘の一群は、笈摺に身を窶し、哀れな巡禮の姿となつて、初めて西國三十三番の札所を旅して歩く】

かなりありふれた場面ながら、いかにも春らしい情景を描出して、柳河の春の基調を出してゐる。隨つて、これを受けた「其の留守の間にも」といふ一句によつて、柳河の春の生活が生動して來る。

【麥】　ムギ　禾本科に屬する栽培植物。大麥・小麥・ライ麥・オート麥等の總稱。

【毛氈】　マウセン　毛と綿とを雜へて粗く織つた厚い織物種々の色に染める。

【軟風】　ナンプウ　(一)そよ〳〵と肌に心地よく感ずる程の風。(二)氣象學上では、風力の階級の一。七階級中の第二番で、風速は一・五――三・四秒米。こゝは(一)。

【まだ見ぬ幸】　柳河地方では、巡禮に出ると、早く緣づくといはれてゐたといふ。

【うら若い】　年が若い。「うら」は接頭語的用法であるが、一種の情趣を釀してゐる。

〔うら〕　(一)末。梢。(「本」の對)。(二)心。(「面」の對。)

【笈摺】　オヒズル　笈の摺りあたつて服の破れるのを防ぐ爲に巡禮者の著る單衣の袖無羽織。背に三枚の布片を繼ぎ合はせ、兩親のある者は中央白・左右赤、片親の者は中央赤・左右白、兩親のない者は全く白を用ひ、佛名・戒名・住所・姓名等を記す。

〔笈〕　行脚僧・修驗者等が佛具・衣服・食器等を入れて背に負ふ箱で、葛籠に似、四隅に脚があつて、開閉すべき戸を設けたもの。

【身を窶し】　ミをヤツし　見すぼらしい姿になつて。

【巡禮】　ジュンレイ　「順禮」とも書く。諸國を歷巡し、所在の神社・佛閣に詣でて禮拜すること。又、その人。

巡禮者は笈摺を著け、菅笠を戴き、脚絆・甲掛を著け、草鞋を穿き、御詠歌を歌つて途中の門戸に物を乞ふ。又「同行何人、奉順禮西國三十三所爲何國所名」などと記し、木・紙・眞鍮・銅などのお札を首にかけ寺院參詣の時、記念として柱・扉・壁等にうちつける。猶、沖端の娘達が巡禮に出る習慣について、原文には「旅して歩く」の下に「巡禮に出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、たまにおよめいりの資格としてどんな良家の娘にも必要である」とある。又作者の隨筆集「きよろろ篇」に「その頃の柳河の娘たちは、早いのは十五ぐらゐでお嫁に入つたが、そのお嫁入りの前、一度は處女の時代に華かな誓願の、さうした順禮の旅に出ねばならない町のならはしであつた」とある。

【西國三十三番の札所】　普通には近畿地方のものを指すがこゝでは、筑後三十三箇所の靈場を指すのであらう。

〔筑後三十三箇所〕　福岡縣三井郡高良內村高良山本地堂から順廻し、上妻郡鹿子尾村靈巖寺に到るその行程八十餘粁。

〔三十三番の札所〕　觀世音菩薩の靈像を安置する三十三箇所の佛堂。諸地方にあるが、西國三十三番の札所（近畿地方）が最も古く且有名である。

三十三といふ數は觀世音菩薩が三十三身を示現して衆生を濟度するといふ法華經の說に基づく。觀音禮拜の思想の盛になると共に、觀音靈場の巡拜が漸く行はれるに至り、鳥羽天皇の頃には既に三十三の順番も定まり、平安朝の末頃には上下共にこの巡拜が盛に行はれた。德川時代には阪東・秩父等の三十三所も定められ、その他各地方にも行はれるに至つた。

〔札所〕　フダショ　三十三箇所の觀音又は八十八箇所の大師などの巡拜者が、參詣の證としてお札を受け、又は納める靈場。

【飾屋】　カザリヤ　金屬で簪・金具など、裝飾となる細かい物を作る職人。

【鼈甲緣】　ベツカフブチ　鼈甲、卽ち玳瑁の背甲で作つた緣。

「玳瑁」は、龜鼈目、蠑龜科、たいまい屬の爬蟲類。その背甲はほゞ心臟形をなし、中央板は五枚、側板は八枚あつて周圍に二十五枚の緣板を繞らし、板は覆瓦狀に重り合つてゐる。色は淡黃の地に黑色の雲形斑紋がある。腹甲は黃黑色で十三枚の板から成る。太平洋の東部熱帶地方の海に分布し、我が國では多く臺灣・琉球・小笠原島の近海に產する。背甲は古來鼈甲と稱して珍重され、その表面の薄層を剝ぎ合せて所謂鼈甲細工（櫛・笄・眼鏡緣等）を作る。

【怪しい金象眼の愁にちんかちと槌を鳴らし】

不思議な、うれはしげな容子で、槌をちんかちと鳴らしながら金象眼の面に細工を加へて居り、の意。

「怪しい金象眼の愁に」といふ表現は獨合點の嫌ひがあり、無理な語法であるが、この文の作られた明治四十年頃は詩壇に於ける象徵詩全盛の時代であり、白秋はこの時代思潮を呼吸して名を成した詩人であるから、こゝは多分佛蘭西印象派あたりの手法に學んで、己れの文章に感覺的色彩を豐富にしようとする意圖から試みた手法な

のであらう。

「怪しい」「愁」は共に飾屋の爺の容子から感得した白秋の主觀であらうが、穿鑿すれば必ずしも實感に卽したものではなく、右に述べたやうに感覺的色彩を豐富にしようとしてこの二語を並べ据ゑたものかと思はれる。

「金象眼」も必ずしも實際の記憶に卽したものではあるまい。「金」は當時の作者の光明禮讃思想から來たものであらう。「金象眼」といふ言葉は何となく感覺的で作者は當時かうした言葉を使ひ度かつたのではないかと推測せられる。

猶「金象眼」の語義に就いては次の項に說明する如くであるが、こゝにいふ「金象眼」は未成品であり「ちんかちと槌を鳴らし」は金屬面に彫刻をしてゐる音であらう。

〔金象眼〕　キンザウガン

〔象眼〕「象嵌」とも書く。金工作品の一。金屬面に模樣を彫刻し、これに金・銀・赤銅などを嵌め込む金工術。又、その作品。象眼面と他の面とが同一平面にあるのを平象眼、象眼面が他よりも高いのを高象眼といふ。又模樣を切り拔いて空漏にし、これに金銀を嵌め込み、表裏とも模樣を表した切嵌（きりばめ）といふのがある。

〔槌〕　ツチ　物を叩く用具。頭部は圓柱體をなし、その横に柄をつけたもので手に持つて使用する。木製（さいづも）と金屬性（金づち）とある。こゝは金鎚であらう。

【薄葉鐵職人】　ブリキショクニン　ブリキを材料として種種の細工をするを業とする人。鍼力屋。

「ブリキ」はオランダ語 Blik の轉訛。「鍼力」「鐵葉」とも書く。薄鐵鈑に錫鍍金（すずめっき）を施したもので、屋根葺及び種々の容器等の材料として使用される。

【じりじり】　脂肪分などの燒ける音の擬聲語。

【封蠟】　フウラウ　物の封じ目や罐詰の栓部等に塗る蠟狀物質。

但し、作者は恐らく「白鑞（はんだ）」の思ひ違ひであつたらうといつてゐる。

「白鑞」は、鉛と錫の合金で、融解點が低く、ブリキトタン等の金屬の接合劑として用ひられる。

【黃色い支那服の商人】　以前は支那人の行商人が反物・小間物等をかついで內地の田舍を賣り步いたものである。悠長なのろ〳〵とした彼らの樣子が人々の目に奇異に感ぜられたものであつた。

【生溫かい】　ナマアタタかい　容貌・言語・擧動等がきび〳〵してゐないこと。のろい。てぬるい。

〔生〕　ナマ　（一）或語に冠して多くの時を經てゐない、の意を表す。（二）或語に冠して、うはべ、かりそめ、の意を表す。（三）或語に冠して、未熟、やゝ、などの意を表す。

【戶毎に】　トゴトに　一軒一軒。

【街道】　カイダウ　國中の往來を通じ宿驛などのあつた大道。今の國道・縣道等がこれに當る。往還ともいふ。又單に大きな道のことにもいふ。

古くは海濱を通ずる公路を海道といつたが、東海道が最も重要な道路となつてから、一般に公路を海道といひ、次いで街道の字を當てるやうになつた。

【木蠟】　モクラフ　「櫨蠟」「日本蠟」「蠟」などともいふ。櫨の實から採取した脂肪。蠟燭・マッチ等の製造及び器具の艶出し等に用ひられる。

櫨の實を紛末としたものを蒸して壓搾してこれを生蠟とし、更にこれを熔融して、夾雜物を沈降させ、適量の灰汁を混じ、少量づつ冷水に落す。これを二十日間程日光で漂白し、更に熔融して夾雜物をとり、適當の箱型に入れて固まらせる。

【ならして】

〔ならす〕　（一）平らかにする。高低・凹凸のないやうにする。（二）大小・多少を合してその中を取る。平均する。こゝは（一）。

【蒼白く光り】　畑に干された木蠟のにぶいつやをいふ。

【蓆張り】　ムシロバり　蓆で張り廻すこと。

「蓆張りの圓天井」とは、丸太で骨組を作り、天井や周圍を蓆で圓く張りめぐらした急ごしらへの小屋をいふ。こゝで旅興行の芝居などがかかるのである。

【馬車】　バシヤ　乘用又は貨物運搬の爲馬で牽引する車。こゝでは乘合馬車。

乘用馬車は、明治初期に出現し、最初は專ら個人用のものであつたが、後には各地に乘合馬車が設けられ鐵道・乘合自動車等の便が開けるまで、國縣道の交通を支配した。乘合馬車は客を呼び、又は危險を警戒する爲に一種の喇叭を吹き鳴らした。

【喇叭】　ラツパ　管樂器の一。多く眞鍮で作る。

【大麥】　オホムギ　禾本科、おほむぎ屬の一年生又は二年生草本。莖は高さ約九〇糎に達し、管狀をなして明瞭な節を有する。葉は細長く平行脈を有し、下部は鞘狀をなして莖を包む。五月頃花を抽き、長さ六——九糎の花穗を綴る。穎果は六條に排列し、通常長芒がある。我が國到る所の畑地に栽培せられる。重要な農作物であつて、果は食用に供せられ、稈は帽子其の他麥稈細工の原料に用ひられる。

【からし】　柳河地方の方言。あぶらな。十字科、あぶらな屬の一二年生草本。

【芥子】　ケシ　罌粟とも書く。罌粟科、けし屬の一年生草本。高さ約一米。初夏莖頂に單立して大きい圓形狀の四瓣花を開く。花色は紅・紫・白等種々。蕾の時は二枚の綠色の萼片があるが開花と共に落花する。未熟の果實の乳汁から阿片を製する。

【萼】　ウテナ　がく。一箇の花を構成する花葉中の最外輪をなす花葉で、雌雄蕊を保護する器官。鱗片狀・爪狀・毛狀等で普通綠色をなし、早落性のものと宿存性のものとがある。

【蠶豆】　ソラマメ　荳科、そらまめ屬の一年生草本。高さ約一米に達し、莖は中空・方形。葉は一――三對の長橢圓形小葉から成る羽狀複葉で質軟である。三四月頃葉腋に短い總狀花序をなして蝶形で白地に紫黑色の斑紋のある花を綴る。莢果は長橢圓形・革質で直生又は斜上性。食用に供せられる。

【まぎれ行く】　心が移つてゆく。

【まだ夏には早い五月の水路に、杉の葉の飾を取付け始めた大きな三神丸の一部を、ふと學校歸りに發見した沖の端の子供の喜は何に譬へよう】

夏に近づくにつれて少年達の心には申し合はしたやうに潑剌としたものがきざし始める。折も折、舟舞臺の裝ひを始めたのを見出して、彼等は躍り上つて喜ぶのだ。

歌舞伎そのものの面白味は分らなくとも、冬にあき、春にあぐんだ子供等には、この夏らしい行事がどんなにかうれしかつたに違ひない。

〔三神丸〕　サンジンマル　水天宮の祭禮の船である。作者の話によれば、沖端の水天宮には祇園社と稻荷社とが併祀してあるからの名であらうといふ。作者の少年時代には全部で六艘出たといふ。

【艫】　トモ　船の後方。船尾。

【化粧部屋】　ケシヤウベヤ　化粧する爲の部屋。

【昔ながらの】　昔のまゝの。

〔ながら〕　こゝでは、名詞に添へて之を副詞化し「そのまま」の意を表す。

【舟舞臺】　フナブタイ　こゝでは三神丸の舞臺のこと。

〔舞臺〕　(一)能樂又は演劇などで正面に一段と高く設けられた演技場。(二)すべて伎倆を試みる場所。こゝは(一)。

【隈なくかざし】　一面に飾りつけ。すみずみまで飾りつけ。

〔かざす〕　(一)花・枝・造花などを髮又は冠に挿し飾る。(二)上に飾りつける。

【水天宮】　スヰテングウ　こゝでは、沖端の水天宮。水天宮は各地にあつて、祭神に就いても諸說あるが、何れも舟航、治水の守護神として水神を祭る。

【粋】　イキ　あかぬけのしてゐること。風采のさつぱりとしてゐること。瀟洒。すゐ。

【紺】　コン　藍の濃いもの。

【法被】　ハッピ　「法被(はふひ)」の音便。(一)禪院で椅子を覆ふ布。(二)もと武家で、仲間に家の紋などを染めつけて著せた表衣。今一般に、職人などがこれを用ひる。しるしばんてん。こゝは(二)。

【若い衆】　ワカいシュ　(一)年若い男子。青年。(二)商家などの使用人。こゝは(一)。

【幕間】　マクアヒ　芝居等で一の演技と次の演技との間。

【囃子】　ハヤシ　諸種の演技の拍子をとり、又は情緒を添へる爲に奏する音樂。笛・太鼓・鼓・三味線・鉦等の樂器が用ひられる。能樂囃子・歌舞伎囃子・神樂囃子・祭禮囃子・馬鹿囃子等がある。

【歌舞伎の外題】　カブキのゲダイ　歌舞伎の標題。

〔歌舞伎〕　科白劇と樂劇と舞踊とを巧みに綜合した日本獨特の民衆劇の一形態。國劇發達史上、能・狂言に次ぎ操淨瑠璃にほゞ並行し、新派劇に先行するもので、慶長以來三百年の歷史を有し、特に江戸時代の市民文化の表現として注意される。起源は慶長年間出雲阿國の創めた女歌舞伎で、その禁止後、若衆歌舞伎、野郎歌舞伎が順次に現れ、寛政時代に最も隆盛を極めたが、明治中期以後、內部的・外部的の種々の因由により次第に凋落しつつある。

〔外題〕　こゝでは淨瑠璃・狂言・脚本の標題・藝題。

【歎を盡くして】　クワンをツくして　たのしみの限りを味はつて。

【別れるものの】　別れるものながら。

【頽廢の趣】　タイハイのオモムキ　物事のくづれ衰へた樣子。

【ゆかしい】　何となく心がその方へ惹きつけられるさま。何となくしたはしい。知り度く心もとない。

【螢】　ホタル　鞘翅目、螢科に屬する昆蟲。體は長橢圓形で、頭部の大部分は前胸內に隱れ、尾端の腹面に發光器を有する。我が國で最も普通なのは、げんじぼたる(本州・九州產)へいけぼたる(北海道・本州・四國・九州・琉球產)で、其の外、おはぼたる、べにぼたる等多數の種類がある。

尙螢の光はルシフェリンといふ發光物質が酸素中で酸化することによつて發する。

【鵜の鳥】　ウのトリ　鵜に同じ。全蹼目、鸕鷀(うみう)科に屬するうみう(海鵜)及び、かはう(河鵜)の總稱。頸長く、顏と喉の皮膚は裸出し、嘴は長からず、尾は楔狀。羽色

は金屬光澤を帶びた黑色で、生殖期には頭頸部に白色の飾羽を生ずる。嘴は尖端著しく鉤曲し、兩側に溝がある。廣く我が國の海岸・湖沼附近等に群棲し、よく水を潜つて魚を捕へるので、古くから鵜飼と稱して川獵に用ひられる。

【穉い時】　ヲサナいトキ　幼少の時。

【子守唄】　コモリウタ　子供の守をする時の唄。

各國共に童謠又は民謠として存する。その旋律が多く單純で、且、哀傷、寂寥の感に富むのは、夜子供を眠らせようとするやうな場合に唄はれることが多いからである。

【おびえながら】　おそれ驚きながら。

【乳母】　ウバ　母に代つて子供に乳を呑ませ、又、育てる女。めのと。おんば。

【好奇心に顫へた】　好奇心の爲に、じつとして居れなかつた。

〔好奇心〕　カウキシン　新奇又は未知の事物に對して之を穿鑿し、探知しようとする本能。

【馬鈴薯】　バレイショ・ジヤガイモ　茄科、なす屬の多年生草本。莖は高さ六〇——九〇糎。葉は大小六——七對の小葉から成る羽狀複葉。夏日梢上に花梗を抽き茄の花に似た白又は碧紫色を呈した多數の花を開く。實を結ぶことは稀で、地下の塊莖で繁殖する。塊莖は澱粉に富み食用に供せられる。もと南洋諸島中の Jacatra 島より渡來したのでこの名がある。

【街の小舟は云々】

螢を見に溯るのである。今ではそれ程でもなくなつたが、作者の少年時代には、柳河から八粁餘り上流の中山附近は螢で賑つたといふ。柳河では殆ど各戸に舟があつて、行きには流水を溯り、還りには定紋のついた提燈を舟につけて轉寢をしながら漕がずに流れ下るのだといふ。

【矢部川】　ヤベガハ　福岡縣八女郡矢部村の矢部山に源を發し、西流して大淵村・里木町等を經、福島町附近に於て筑紫平野に出で、瀨高町を過ぎて有明海に注ぐ。その一分流は柳河町を過ぎ、沖端川となつて海に注ぐ。筑紫平野に於て、筑後川に次ぐ一流域をなしてゐる。螢と納涼で名高い。

【甘酸つぱい燐光の息する度に】　甘酸つぱいやうな感じのする青白い燐光のやうな螢の光の明滅する度に。

作者の官能的な感受性を示す言葉である。

〔燐光〕　リンクワウ　(一)黃燐を空氣中に放置する時に發する光。(二)或物質が光線・輻射線・放射線等に一旦曝された後、暫時自ら光を發する現象。金剛石・方解石・螢石等は燐光を放つ。(三)一般に黃燐の發する光に似た光をいふ。こゝは(三)。

【青々と眼にしみる螢籠】

螢の青い光に、ひときは青々と照らし出された螢籠の色が目を刺戟して沁み入るやうに感ずるのである。

【假寢の夢を時たまに閃かしながら】　うたゝねの夢の中へ青い螢の光が時々さし入るやうに感じることをいつたのであらう。繰り返して說明すると、

〔青々と眼にしみる螢籠に、美しい假寢の夢を時たまに閃かしながら〕

青々と光る螢籠で、轉寢の夢を時たま閃かしながら卽ち、籠に入れて持ち歸る螢の光が轉寢の夢の中に時たまさし入れるやうに感じながら、の意。

但し、實際は、螢の息づきに伴なつて籠の中が急に明るくなるのが、夢うつゝで舟中に寢てゐる人の瞳に時たま映る有樣を美化していつたのであらう。

かういふ表現は從來の日本文脈には無かつたものであつて、新しく取入れられた歐文脈の手法なのである。作者の文にはかういふ異國趣味の手法がなか〳〵多い。然し右の如きは日本語としては幾分言葉を働かせ過ぎた嫌ひがあるかも知れない。

〔假寢〕　カリネ　(一)うたゝね。(二)たびね。こゝは(一)。

【夜をこめて】　夜通し。

【霖雨】　リンウ　ながあめ。

〔霖〕　ながあめ。

【しなだれ】　(一)しなつて垂れ下る。(二)力なげによりかかる。(三)甘え、媚びた姿態をして寄り添ふ。こゝは(一)。

【ものの卵】　恐らく半翅目に屬する水棲昆蟲の卵等をさしてゐるのであらう。

【潴水】　タマリミヅ　溜つて流れずにゐる水。水たまり。

〔潴〕　チヨ　みづたまり。

【むじな藻】　茅膏菜科、むじなも屬の多年生草本。食蟲植物の一。池沼・水田等に浮游して生活する。根がなく、六——八枚の半圓形の葉が莖に輪生し、微蟲が觸れれば閉合して之を消化し、吸收する。夏日、葉腋に有梗・淡綠色の小五瓣花を開く。

【柳河の夏はかうして總べての心を重く暗く腐らしたあと、池のあたりに鬼百合の赤い閃を先立てて、燒くが如き暑熱を注ぎかける】

擬人法が、印象的な効果を擧げてゐる。

舟舞臺・螢と、少年の心を浮き立たせた後には、又憂鬱がやつてくる。前奏として霖雨が重苦しい氣分を漲ら

せる。それから愈〻夏の威力が動き出す。「池のあたりに鬼百合の赤い閃を先立てて」といへば、いかにも無氣味な恐しい夏の暴威が凄い形を表して來るかのやうに感ぜられる。

〔腐らした〕　こゝでは、重苦しくした、陰鬱にした、沈滯させた、の意。

〔鬼百合〕　オニユリ　百合科、ゆり屬の多年生草本。地下に徑三——九糎の球狀鱗莖を有し、鱗片は白又は淡黃色の長楕圓狀披針形をなす。春期、鱗莖から紫黑色で白綿毛を布く莖を抽き、高さ一米餘に達する。葉は狹長で互生し、葉腋に球芽を生ずる。夏日、赤黃で暗紫色の斑點を有する大輪の六瓣花を開き、花片は反卷する。鱗莖を食用とする。

〔閃〕　ヒラメキ　鬼百合の花の鮮明な色彩を譬へていふ。

【日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠は水涸れて悪臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りつゝ吠え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮒の頭は苦しさうに泡を立て始める】

南國の盛夏らしい苦熱がよく描かれてゐる。あらゆる官能が炎熱に苦しみ、喘いでゐる有樣が、作者獨特の筆致で精寫せられてゐる。

〔羽蟻〕　ハアリ　蟻類（膜翅目、蟻科に屬する昆蟲の總稱）の雄蟻及び雌蟻（何れも有翅）をいふ。但し普通に羽蟻といへば多く雄蟻である。

蟻は社會的集團生活を營み、同一種の蟻の中にはそれぞれ形態と仕事とを異にする階級がある。卽ち性的に完全な雌蟻（女王）及び雄蟻と、性的に不完全な職蟻（働蟻）とがその主なものである。雌蟻及び雄蟻は一般に有翅で平素は巢中に潜み、勞働に從事しない。我々が普通見るのは職蟻であつて、翅を有せず、營巢・保育・狩獵等に從事する。初夏になると巢中には多數の雌雄の羽蟻が生じ、一定の氣象狀態（主として、晴天で靜穩の日）の下に、巢を離れて空中を群飛し、交尾を行ふ。我々が羽蟻を見るのはこの時であつて、而も巢の近接した同一種の蟻は、殆ど一齊に交尾を行ふから、夥しい數を見るのが普通である。交尾後間もなく雄蟻は死に、受精した雌蟻は自ら翅を取り去つて產卵する。

〔朝鮮薊〕　テウセンアザミ　菊科、てうせんあざみ屬の多年生草本。高さ一・五——二米に達し、葉は稍軟質で大きく、羽狀に深裂し、或は緣邊に刺尖齒を有し、上面は綠色、下面は白綿毛を密布する。夏日、莖頂に紫色大形の頭狀花を著け、各花は管狀花冠を有し茶褐色の冠毛を具へる。花序を包む總苞は卵形、肉質で刺がない。

〔後退り〕　アトシザリ・アトジサリ

〔蛙〕　カヘル　無尾目に屬する兩棲類の總稱。冷血・卵生で、皮膚に鱗又は毛を有せず、幼生は有尾の蝌斗（おたまじやくし）で、水中に鰓呼吸を營み、成體は尾を失ひ、體短く四肢强大。趾端に吸盤又は爪を具へ、齒は有するものと有しないものとがある。多く水邊生活を營む。ひきがへる・あまがへる・あかがへる・とのさまがへる・あをがへる・かじかがへる・うしがへる・ぬまがへる等種類が多い。

〔鮒〕　フナ　眞內顎目、鯉科、ふな屬の淡水魚。口部に鬚を缺き、喉頭齒が一列（鯉は三列）である點等で鯉と區別される。變種多く、普通には、ぎんぶな・きんぶなに大別する。金魚はその飼養變種である。

【登記所】　トウキショ　登記事務を取扱ふ官署。區裁判所又はその出張所。

〔登記〕　一定の事項を公簿に記載し、權利關係その他の事實を公示して取引の安全を保護する制度。不動產登記・船舶登記・商業登記等その種類が多い。

【鷄頭】　ケイトウ　莧（ひゆ）科、けいとう屬の一年生草本。高さ約九〇糎に達し、莖は無毛・平滑で、葉は長楕圓形で先端鋭く尖り、全緣である。花期は秋で、花軸は通常上端が帶化して鷄冠狀を呈し、その中部以下の面に多數の小花を著ける。花は兩性、赤・黃・白色などで、五萼片・五雄蕊・一雌蕊を有する。

【澁柿を搗く酒屋の杵の音】　澁を取つて酒桶の內側に塗るのである。

〔酒屋〕　サカヤ　酒を釀造し、又は賣るのを營業とする家。又、その人。こゝは酒を釀造する家。

〔杵〕　キネ　米・麥・豆又は餅等を臼に入れて搗く用具。堅い木材で作る。

【爽さ】　サワヤカさ　淸々しい快いこと。氣分の晴れ〴〵しいこと。さつぱりとした氣分。

【しのばせる】　思ひやらせる。想像させる。

【祇園會】　ギヲンエ　祇園の祭禮。

最も有名なのは京都八坂神社の祭禮であるが、各地の八坂神社、又は須賀神社の祭禮をもいふ。

〔祇園〕　素盞嗚尊、八王子宮（天照大神の五男三女）稻田姫を併せ祀る社。

【線香】　センカウ　薰香の一種。諸種の香粉を練り固めて線狀にしたものを陰干にして作る。

【菜種油】　カラシアブラ（原文振假名）

柳河地方の方言。「なたねあぶら」「たねあぶら」に同じ。あぶらなの種子から搾取した油。黃褐色で機械用・燈用とし、精製した淡黃色のものは白絞油（しらしめ）と稱し、食用

燈用に供する。

【パラフィン蠟燭】　パラフィンを材料として作つた蠟燭。但し、こゝでは、櫨の果實から搾取した木蠟を材料として取つた蠟燭のことであらう。

〔パラフィン〕　Paraffin（英）「石蠟」ともいふ。石油乾溜の成生物の一。白色半透明の固體。地蠟として天然にも產する。蠟燭・マッチ等の製造に用ひられる。

【提燈の繪を描く義太夫の師匠】

「思ひ出」の序文に「今は銀行となつたが、もとはやはり姻戚の阿波の藍玉屋の生鼠壁（なまこかべ）の隣に越太夫といふ義太夫の師匠が何時も氣輕な肩肌ぬぎの婆さんと差向ひで、大きな大きな提燈を張り代へながら、極彩色で牡丹に唐獅子や櫻のちらしなどをよく描いてゐた云々」とある。

〔義太夫〕　ギダイフ　義太夫節。古淨瑠璃の各流及び說經・祭文等、貞享・元祿期のあらゆる音曲を集大成し、井上播磨掾が創めた播磨地を根幹として竹本義太夫の編出した一流で、自らは當流淨瑠璃と號した。義太夫の始めたものであるから後世義太夫節又は單に義太夫と稱するに至つた。

〔師匠〕　シシヤウ　（一）學問・技藝等を敎授する人。先生。（二）遊藝を敎へる人。こゝは（二）。

【物のあはれ】　世の中の、しみじみと胸に沁みて感ぜられるさまざまの情緒。戀愛感情、無常感、寂寥感等。こゝでは主として寂寥感を指してゐるのであらう。

【思ひ知る】　心に沁みてさとる。

【秋祭】　アキマツリ　秋の豐穰を祝ふ祭。概ね鎭守の祭禮として行はれる。

【市民】　町の住民。

【溝泥】　ドブドロ　溝の中に溜つてゐる泥。

【浚ひ盡くされる】　サラひツくされる　すつかり掻き退けて捨て去られる。

【水落ち】　ミヅオち　堰を閉して流れを斷つこと。

【季節の華】　キセツのハナ　その季節として最もはなゞしいもの、の意。

【前觸】　マヘブレ　前以て告げ知らせること。

【異樣】　イヤウ　普通とことかはつたさま。

【道化の服裝】　ダウケのフクサウ　滑稽な身なり。

〔道化〕　（一）人のをかしみを催す戲れの言語や動作。おどけ。滑稽。（二）「道化形」の略。歌舞伎で滑稽な業をする役。道化役者。

【拍子木】　ヒヤウシギ　二つ打ち合はせて鳴らす小柱形の木材に樫・欅などを用ひる。多くは合圖・夜廻りなどに用ひられる。

【披露】　ヒロウ　（一）文書などをひらいて見せること。（二）公に發表すること。廣告。ひろめ。こゝは（二）。

【彼我の家庭を擧げて云々】

柳河の各町にも、沖端にも鎭守がいくつかづつあつて秋祭が日を違へて順次に行はれる。そして祭り日の部落には外の部落の人達が饗應になりに出かけるといふ風にして、部落相互に相往來するのである。

【團欒】　ダンラン　親密な同志の樂しい會合。まどゐ。

〔欒〕　まどか。まろらか。

【懇親】　コンシン　むつみあふこと。親睦。

【無禮講】　ブレイカウ　貴賤・上下の差別なく禮儀をぬきにして催す酒宴。

【朱欒】　ザボン　Zamboa（葡）の轉訛。ジャボンともいふ。芸香科（ヘンルウダ）、みかん屬の常綠喬木。高さ三米餘に達し、外形みかんに似てゐるが、葉は卵狀長楕圓形で闊大である。初夏楕葉間に白色の大形の花を開く。果實は冬期熟して黃色を呈し、直徑一五——一八糎に及び、外皮厚く甘酸味があり、柑橘類中最も大形で、內部は白色乃至薄紫色を呈する。四國・九州の南部及び臺灣に分布する。

【獨樂】　コマ　小兒の玩具の一種。通常、厚く圓い材の中心に直角に軸棒を貫き、それに紐を捲いて投げ飛ばして廻すもの。種類が多い。

【浮かれ歩く】　一杯機嫌で足どり輕く歩を運ぶこと。

【祭の後の寂しさは又格別である。野は火のやうな櫨紅葉に百舌鳥がたゞ鳴きしきるばかり】

苦しい夏の後に來る秋祭のうれしさは格別であつたがその祭も終ると、後にはもう冬の寂靜があるのみで、言ひやうもない佗しさに襲はれる。火のやうに赤い櫨紅葉も、消えんとする燈火の最後の一輝きのやうに、あはれにもはかない一時の色にすぎない。鳴きしきる百舌鳥の聲も亦去り行くものを悼む挽歌に外ならぬ。

【格別】　とりわけ。べつだん。

〔百舌鳥〕　モズ　百舌・鵙とも書く。燕雀目、鵙科、もず屬の鳥。頭上及び後頸は栗色で眼先から耳羽にかけて太い黑條がある。頸以下の背面は灰鼠色に赤褐色を帶び翼の風切羽は黑褐色で中央に白色翼斑があり、尾羽は灰褐色で緣及び先端白色。下面の喉及び腹は白色、その他は赤褐色。嘴は蒼黑、脚は黑褐。雌は背面赤味を帶び、顏の黑條も赤褐色を呈する。性勇猛で、昆蟲・爬蟲・小禽等を捕食し、その一部を樹枝にかける奇習がある。これをもずの早贄（はやにえ）といふ。本邦北部・支那北部・朝鮮等で蕃殖し、冬期は南下して南支那に至る。秋期本邦各地の原野・田圃等に出現して、一種特有の鋭い鳴聲を發する。

ちごもず・あかもず・おほもず等種類が頗る多く、廣義にはこれらを總括して「もず」といふ。

〔鳴きしきるばかり〕　しきりに啼く、續けざまに啼くばかりである。「ばかり」で切つて、後を省いたのは餘韻をひゞかせる爲の用意であらう。

【漂浪うて】　サスラうて　さまよひ歩いて。流浪して。

【傀儡師】　クグツシ・クワイライシ

〔傀儡〕（木偶）を唄に合せて舞はせる人形廻し。

平安中期の頃、「くぐつ」と稱する漂浪民は、傀儡を弄して歌舞を巧みにし、狩獵を事とし、集團的放浪生活を營んだ。初めはその業にも男女の別が無かつたが後、男は木偶を舞はし、女が歌ひ、更に女は歌舞の妓となり、一種の遊女となつた。これらの漂浪民が江戸時代に至つて變化したものが傀儡師の名で呼ばれた。人形を箱に入れて諸國を歩き、一種の門付藝として、胸にかけた箱の上で人形を舞はし、手品めいた事などをしてみせる。俗に「人形廻し」ともいふ。

【生白い】　ナマジロい　青味を帶びて白い。

〔生〕（接頭）（一）或語に冠して、多く時を經ぬ意を表す。（二）或語に冠して、「うはべ」「かりそめ」の意を表す。（三）或語に冠して、「未熟」「やや」などの意を表す。こゝでは（三）から出て、青味を帶びて氣味惡い、の意味を表す。

2　文の構成

第一節　初―九三頁八行　水に浮いた灰白の柩、水鄉柳河

第二節　九三頁九行―九四頁七行　陰鬱な光に被はれた柳河の冬

第三節　九四頁八行―九五頁一一行　かなしくなつかしい柳河の春

第四節　九五頁一二頁―九八頁七行　ゆかしく又暑熱の烈しい柳河の夏

第五節　九八頁八行―終　しんみりと寂しく暮れて行く柳河の秋

3　文意

追憶に浮ぶ水鄉柳河の四季折々の風物及び生活。

4　鑑賞批評

「思ひ出」は詩人としての作者の名を高からしめた詩集であつたが、それに序せられた本文も亦、作者の詩人的素質を印象せしめた記念的文字であつた。

廢れゆくものに對する愛惜は既に詩である。そしてそれが自己を生み、自己を育んでくれた鄉土である時に、その愛惜は限りなく深い。今、作者の描いてゐる柳河の追憶はまさにその適例である。而もその愛惜に燃えてゐる作者は、感受性の異常に濃やかな詩人である。水鄉柳河の南國的な風物と生活とが、作者のあらゆる官能を通じて、驚くべく絢爛に濃艶に芳烈に描寫せられつゝ、そこに限りない哀惜の情緒を横溢させてゐる。そしてこれには新しい西洋文脈の手法が取入れられ、作者一流の異國情調乃至異國趣味が漂うてゐるのが感ぜられる。鄉土文學として極めて特色の多いものであり、傑出した作の一つである。

三　備　考

1　指導研究

（一）　追憶の感情そのものが官能的であり、隨つてその表現が官能的に多彩であることが、生徒の理解を困難ならしめるであらう。殊に作者の異常に鋭い神經と感受性とは生徒の理解を一層困難ならしめるに違ひない。

併しそれは一讀か二讀の印象に過ぎない。更に反復熟讀を重ねてゆくにつれて、さういふ異常的・刺戟的なものの底にその基調をなしてゐる極めて一般的・含蓄的な感情に接する。このたしかな基調に立つてのみ、あの絢爛・多彩な異常性が理解せられる。隨つて學習の指導は、先づ囚はれ易い異常的な刺戟から脱却して、一般的・平常的な基調を見出させることに始まらなくてはならぬであらう。それが爲には特別な方策があるわけでもなければ、手段が存するわけでもない。

やはり度數多く讀ませることである。そして異常なものが平凡になり、刺戟的な文字が親熟的なものに感じられるやうになることによつて、さういふものの底に動いてゐる基調的なものが見出されて來る。これが指導の第一階梯でなければならぬ。

（二）作者の感情に於ける基調的なものが基調的なものとして理解せられて來ると、最初に異常的・病的刺戟に感ぜられたものも、それが表面的・一時的な官能の興奮ではなくて、非常に深い內面的・生活的な根源を有するものであることが理解せられて來る。かくて畢竟、旅行者の觀察する鄕土文學ではなくして、生活者の體驗に成つたそれであることが判斷せられて來る。これが指導の第二段階でなくてはならぬ。

（三）更に敍述問題として考へねばならぬのは、柳河方言が、柳河生活は勿論その他の風物を描く上にも非常に効果的であるといふことである。併しこんな點にまで注目する生徒は、學習の力の進んだ部類の生徒であるから、それを中心に一般の問題に擴張すれば、自然に學習が指導せられるであらう。

（四）更に作文問題として考へねばならぬことは、この文章が著しく官能的であり、絢爛・多彩な異常性に富んでゐることが頭の進んだ生徒を飛躍的な模倣に導く懸念のあることである。この文のかゝる異常性は作者の天稟に基づく獨自性であることを十分理解させて、表現の絢爛に眩惑させられて、虎を描いて狗に類する、の危險に陷らないやうに指導上の配慮が行はれねばならぬと思ふ。

2　參考

川路柳虹氏の「現代詩人の文章」を「日本現代文章講座」（厚生閣發行）中から左に引用しよう。

凡そ最も詩人的な、そして詩的な修辭に富み、達意な輝かしい散文をかく人として北原白秋位ユニックな存在もない。かつて小曲集「思ひ出」の序文はその當時一つのセンセーションを起さしめたが、それは感覺的表現の萬華鏡ともいふべき色彩的文章であつた。然り、彼の文章の特質は音樂的であるより色彩的だ。が、又彼の文章位一つの格調をもつものもない。彼はその格調の波に乘らなければ散文が書けないやうである。そしてそれは現在において著しく平靜にもなり、枯淡にもなつてゐるが、その底にあるロマンテックな表出をやはり否定出來ない。故に彼は「純散文型」の人と最も對蹠的なる一つの歌人的タイプに屬する。彼は散文を律調化する技能を性格的にもつてゐる。（音樂化といふのとは違ふ。）彼は小說を描かんとしても描寫する場合、その飛躍する文章の調子を恐らく停めえないであらう。彼の詩は「邪宗門」の昔から「海豹と雲」の最近迄に幾變化してゐるが、その性格としての大きい感情的要素は決して變つてゐない。彼はニュアンセーな文章を書くよりも明るく色彩鮮明な格律を持つ文章に終始する。その比喩も語彙の豐富も詩の場合と共通だが、彼は知性的側面に於て深く透入する努力をむしろ表現の感情的、格律的要素にかへてゐるかに見える。が何にしてもその小品隨筆にある香氣をもつ文體を否定出來ない。文章から云へば初期の奇異な感覺的比喩の多い文章より最近のものの方がはるかに老熟した大きさを見せてゐると思ふ。

補材

晝ながら幽かに光る螢ひとつ孟宗の籔を出でて消えたり

白秋の第三歌集「雀の卵」の中に收められてゐる。「雀の卵」は白秋の藝術が一轉期を劃した時代で從來の絢爛多彩の風から深まつて東洋的な幽玄閑寂の歌境に進んだのである。この一首の如きはその代表的な作品であり、言ふべからざる漂渺の趣を把へてゐる。

一三　山上の靈氣

松本亦太郎

一　解題

1　作者

松本亦太郎　マツモトマタタラウ　心理學者。慶應元年九月群馬縣高崎市に生る。明治二十六年帝國大學文科大學哲學科を卒業し、更に大學院に進み、二十九年アメリカのエール大學に入り、ドクトルーオヴーフィロソフィの學位を受け、更に獨逸のライプチッヒ大學に學び、歸朝後（三十二年）文學博士の學位を得た。東京高等師範學校教授兼東京女子高等師範學校教授・東京帝國大學講師に歴任し、三十九年京都帝國大學文科大學の創設に當り、同大學教授となつて赴任し、京都市立繪畫專門學校長・京都美術工藝學校長をも兼ねた。大正二年東京帝國大學教授となり、同十五年停年となつて退職。在職中大正七年及び十三年の二回歐米に派遣された。現在帝國學士院會員である。專門の心理學の外に、美術に造詣深く、又隨筆家として令名がある。著書には隨筆「渡り鳥日記」の外、「心理學講話」「諸民族の藝術」「繪畫鑑賞の心理」「素質の心理」等がある。

2　出典

隨筆「渡り鳥日記」中の一章である。「渡り鳥日記」は「渡り鳥の生活」外十五篇から成り、本文はその第十一篇に當る。「山水の心」の中の第二「山上の氣分」（1、超人の境、本文一〇三頁マデ　2、雲中如來の現象、一〇四頁以下）の全文である。（「渡り鳥日記」一冊、大正六年一月　實業之日本社發行）

3　主眼及び採擇の趣旨

雲中如來の現象を中心として山上に於ける靈的な美感を傳へようとするに在る。

民俗的信仰ともいふべき雲中如來現象を取扱つた點に於て文化的教材であると共に、之を審美的に見ようとする態度及び冴えた描寫に於て異色ある文藝的教材である。

前課に次いで現代文を配列した。前課が詩人の感覺的な作であつたのに對して、本課の明晰な理知的な文章は鮮かな對照の妙を示すであらう。

二　解釋

1　語釋

【靈氣】　レイキ　不思議にたふとい氣。

【氣分】　キブン　（一）體の生理的狀態などに伴なふ漠然とした感情。きもち。心もち。（二）感じ。おもむき。（三）氣質。氣性。こゝは（一）。

更に心理學的にいへば氣分（mood）とは、特に分明した原因なくして、我々の有する感情狀態一般をいひ、情緒（emotion 特殊の事物を知覺又は想起した場合に起る感情的興奮とそれに伴なふ身體的變化の經過所謂喜怒・哀樂）に比べてその經過が緩慢で持續性があり、强度も概して弱く、屢〻情緒の名殘として存する。氣質や健康狀態などに影響されることが多い。

【生存感覺】　セイゾンカンカク　自己の身體が如何なる存在狀態にあるかの感覺。卽ち「一般感覺」であつて、副次的には味覺・嗅覺・觸覺等もこれに與る。これらの感覺に伴なふ感情は主として所謂氣分となつて表れる。

【感覺】　Sensation 心理學上、（一）廣義には感情（feeling）をも含めて、すべて內外の刺戟によつて直接に惹起された意識內容。（二）狹義には感情と對立し刺戟そのものの性質に歸せられる意識の客觀的內容。例へば光線・音響・化學品等によつて惹起されるものと見られる色（視覺）音（聽覺）香（嗅覺）などは感覺で、その色の美しさとか香の快さとかは、主觀的內容として感情に屬する。こゝは（二）。

「一般感覺」は有機感覺・普通感覺・生活感覺ともいひ飢渴の感、呼吸の難易の感、緊張・疲勞の感、壓迫・解放の感、或は惡感・眩暈・嘔氣などはこれに屬し、又爽快・不快の一般感情に伴なつて、身體的存在狀態を知る最も有力な材料となるのである。

【山上では、氣壓・溫氣の低下及び空氣の純潔化の爲に……羽化登仙などと形容される氣分を生ずる】

科學者らしい明晰な筆致の中に豐かな詩味を漂はしてゐる。

【氣壓】　キアツ　大氣の壓力のこと。通常水銀氣壓計の水銀柱の高さで測る故に、その大小を表すに「高」「低」の語を用ひ、數量的にはその高さを粍で表す。海面上に於ける氣壓は平均凡そ七六〇粍で、これを一氣壓と名づけ氣壓の單位とする。

或地點の氣壓は、その地點から大氣の限界までの間に存在する空氣層の重みによつて起るものである。よつて山又は上空に昇るに隨つて空氣層の厚みが減ずるから氣壓も減小する理である。この減小率は高さに比例するものではなく、ラプラスの發見によつて「高さが等差級數で增加するに隨つて氣壓は等比級數で減小する」ことが知られてゐる。

【溫度】　ヲンド　(一)冷溫感覺の度合。(二)寒暖計を用ひて數量的に表した冷溫の度合。こゝは(二)であるが特に氣溫のこと。

〔氣溫〕　空氣は太陽から來る輻射卽ち日射を直接吸收して熱せられることは極めて少く、主として地面又は海面が日射を受けて熱せられ、その熱の傳導によつて下層の空氣が溫められるのである。故に下層の空氣は上層の空氣より溫度が高く、地上より上層に至るに隨つて氣溫の遞減する割合は、大體に於て百米につき攝氏一度位である。山地に於ける氣溫の遞下は、氣溫の本源である地面との關係があるからこれとは多少差異があり、又地形によつても異なるものであるが、略高さに正比例し、百米につき約〇・六度の遞減率と見られてゐる。卽ち高さを一七〇米增す毎に氣溫は約一度減ずる。

【空氣】　クウキ　地球を包む大氣の下層部分を構成し、地球を凡そ一二〇粁の厚さでとりまいてゐる無色・透明の氣體。主として窒素及び酸素の混合氣體で、前者は全容積の約五分の四を、後者は約五分の一を占める。尙この外にもアルゴン・ヘリウム・ネオン・クリプトン・キセノン等の稀瓦斯類元素及び無水炭酸水蒸氣等を含有してゐる。

空氣中には無數の細塵が浮游してゐる。その數は土地によつて大差があるが、都會地に於ては殊に甚しく

海上に於ては割合に少い。併し地上一——四粁邊に至ると細塵の數も著しく減じ、所謂「澄んだ空氣」となる。卽ち「空氣の純潔化」である。

【純潔化】　ジユンケツクワ　雜り氣なく淸淨になること。

【肺臟】　ハイザウ　人及び空氣呼吸をなす脊椎動物の呼吸器官の主部。人の肺臟は一對の實質性囊狀器官で、左右の胸腔を充たし、氣道を以て外界に連る。

體內を環流して汚れた血液は心臟から肺動脈を經て肺臟內の毛細血管に入り、氣道より導入された空氣と觸れて、酸素の攝取、炭酸瓦斯の放出を行ひ、淸淨な動脈血となつて心臟に送られる。

【心臟】　シンザウ　人及び脊椎動物・節足動物・軟體動物その他に於ける血行系の中樞器官。人の心臟は心囊に包まれて胸腔內に存する拳大の中空筋性臟器で、外形は概ね圓錐形をなし、その基底は後上右方に、その尖端は前下左方に向ひ、ほゞ兩肺の間に位してゐる。心底に近く冠狀溝があつて、心臟を上下の二部、卽ち心房と心室とに分つ。心房及び心室はそれ〴〵房中隔及び室中隔によつて左右に分れ、各側の房と室とは房室口（靜脈口）を以て相通ずる。

右心房は上半身から上空靜脈を、下半身から下空靜脈を受け、全身を環流して汚れた靜脈血は、この兩者を通じて右心房に注ぎ、更に靜脈口を經て右心室に入る。右心室は動脈口を以て肺動脈に連り、該動脈によつて靜脈血を肺臟へ送る。この血液は肺臟內の毛細血管に導かれ、淨化されて動脈血となり、肺靜脈を通じて再び心臟に還る。左心房は左右二條の肺靜脈によつてこの動脈血を受け、靜脈口を經て、左心室に送る。左心室は動脈口を以て大動脈に連り、これを通じて動脈血を全身に送り出すのである。以上のポンプ作用は自動能力による心臟筋肉の收縮によつて起り、これを心臟の搏動といふ。

【皮膚】　ヒフ　人及び動物に於て、體軀の外界に對する全表面を被覆する層狀器官。主として身體の保護に任じ、又感覺・排泄・呼吸等の副作用をも兼ねる。人の皮膚は表皮・眞皮・皮下組織の三層から成り、所謂皮膚感覺を掌る神經末端器が分布せられ、又、表皮の變形である毛髮及び爪、排泄作用を營む皮腺等を具へ、尙、多數の血管が通じてゐる。身體保護以外、人の皮膚の作用として最も注目すべきは感覺作用である。俗に視・聽・味・嗅・觸を五感とし、觸覺を皮膚の感覺とするが、皮膚で起るのは觸覺だけではなく、通常壓覺・冷覺・溫覺・痛覺の四種を併せて皮膚感覺といふ。これらは皮膚の上・中・下三層の中にそれ〴〵入り込んでゐる多數の知覺神經の